茨城県教育財団文化財調査報告第29集

水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1

奥山B遺跡
奥山下根遺跡

昭和60年3月

図書
60年2月15日 受領
筑波大学歴史・人類学系

財団法人 茨城県教育財団

210.231
Mi 64
(NK)
寄贈
歴史・人類学系
平成 年 月 日

茨城県教育財団文化財調査報告第29集

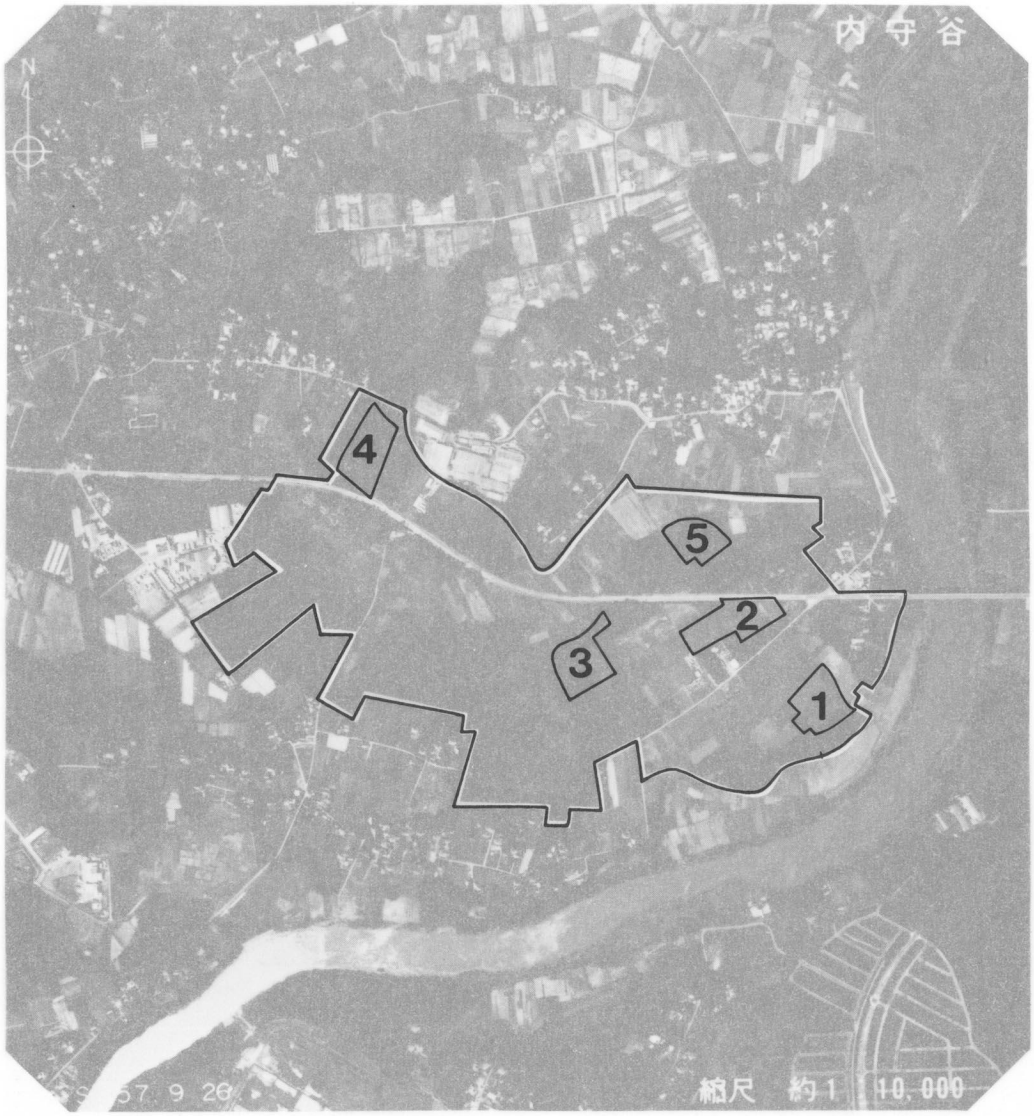
水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1

奥山（おくやま）B遺跡
奥山下根（おくやましたね）遺跡

昭和60年3月

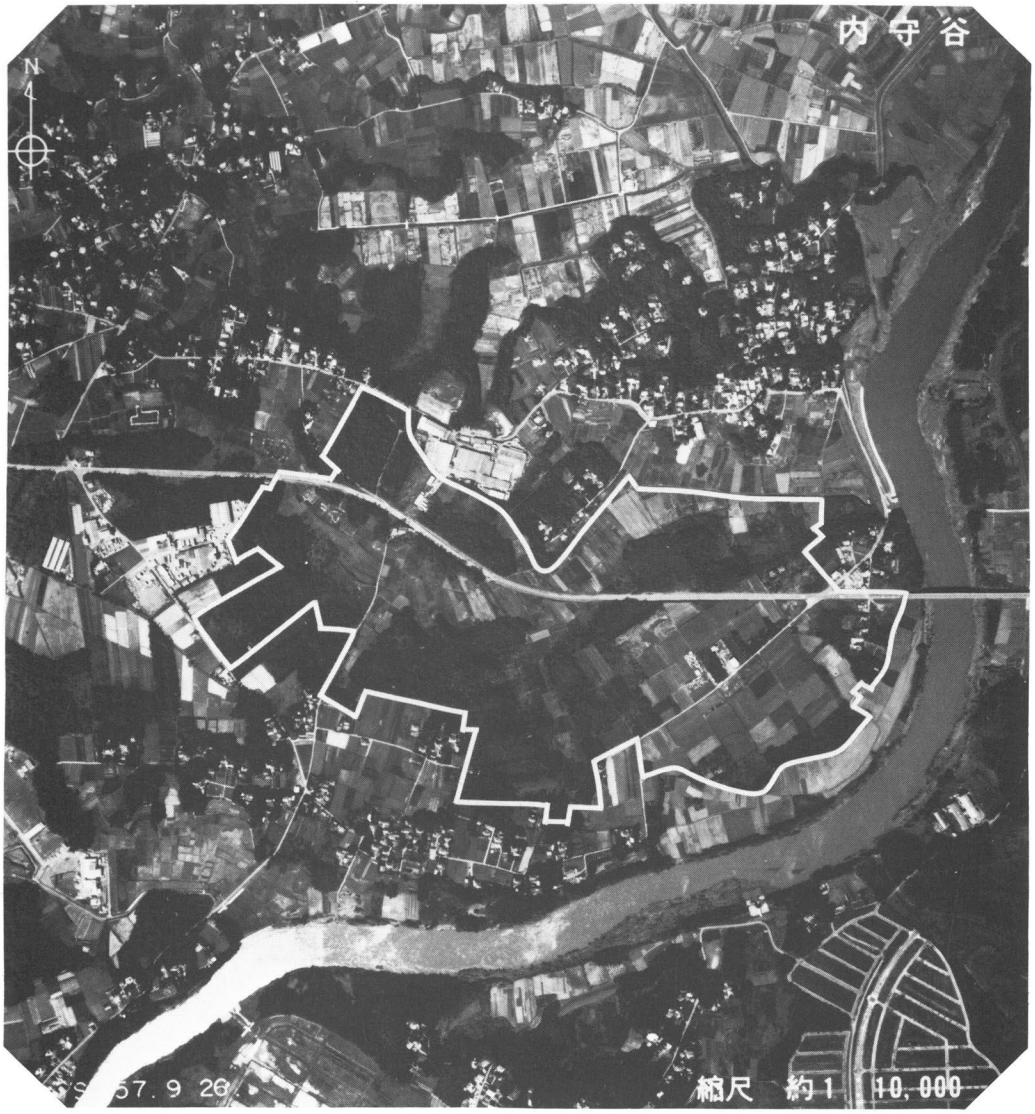
財団法人 茨城県教育財団

96605127



内守谷地区遺跡遠景

1……奥山A遺跡
2……奥山B遺跡
3……奥山C遺跡
4……西原遺跡
5……奥山下根遺跡



内守谷地区遺跡遠景

1……奥山A遺跡
2……奥山B遺跡
3……奥山C遺跡
4……西原遺跡
5……奥山下根遺跡

序

住宅・都市整備公団により，水海道市の南部地域に「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業」が進められておりますが，その事業地内には，いくつかの埋蔵文化財包蔵地が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び，昭和58年４月から埋蔵文化財発掘調査を実施し，今日に至っております。

この報告書は，昭和58年度に発掘調査を実施した奥山Ｂ遺跡，奥山下根遺跡の調査成果を集録したものであります。本書が，より多くの方々に研究の資料としてはもとより，教育・文化の向上のために御活用いただけるよう希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である住宅・都市整備公団をはじめ茨城県教育委員会，水海道市教育委員会等関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただいたことに，衷心より感謝の意を表します。

昭和60年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹　内　藤　男

例　　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和58年度に発掘調査を実施した水海道市内守谷町に所在する奥山Ｂ遺跡，奥山下根遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　奥山Ｂ遺跡，奥山下根遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		大金新一 竹内藤男	～昭和58年11月 昭和58年12月～
副理事長		古橋靖 川又友三郎	～昭和58年７月 昭和58年７月～
常務理事		綿引一夫	
事務局長		小林洋	
調査課長		寺内寛 青木義夫	～昭和59年３月 昭和59年４月～
企画管理班	班長	今村信夫 市毛洋一	～昭和59年３月 昭和59年４月～
	主任調査員 主事 〃 〃	加藤雅美 鈴木三郎 海老沢一夫 大増根徹	
調査第一班	班長 主任調査員 調査員	石井毅 堀川計三 高村勇	昭和58年度 昭和58年度調査 昭和58年度調査，昭和59年度整理・執筆
整理班長		渡辺千秋	昭和59年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，高村勇が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成及び発掘調査に際して，遺跡内の地質及び石器の材質鑑定については，茨城県教育研修センター研究主事（現上郷高等学校教頭）蜂須紀夫氏，出土土器については，日本考古学研究所研究員新井和之氏の御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第３章第１節の２の記載方法の項を参照されたい。

6　発掘調査及び整理等に際して御指導・御協力を賜った関係機関，各位に深く感謝の意を表します。

目　　次

序
例言
目次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査方法……1
　　1　地区設定……1
　　2　基本層序の検討……2
　　3　遺構確認……4
　　4　遺構調査……4
第２章　位置と環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
第３章　奥山Ｂ遺跡……11
　第１節　遺跡の概要と記載方法……11
　　1　遺跡の概要……11
　　2　遺構・遺物の記載方法……11
　第２節　調査経過……15
　第３節　トレンチによる土層観察……15
　第４節　出土遺物……19
　第５節　まとめ……24
第４章　奥山下根遺跡……25
　第１節　遺跡の概要……25
　第２節　調査経過……25
　第３節　遺構と遺物……28
　　1　竪穴住居跡……28
　　2　土壙……35
　　3　炉穴……50
　　4　遺構に伴わない出土遺物……70
　　(1)　土器類について……70

(2)　石器類について……128
第4節　まとめ……159
1　竪穴住居跡について……159
2　土壙について……160
3　炉穴について……162
4　出土遺物について……168
終章　むすび……173

挿　図　目　次

第１章　調査経緯

第 1 図　調査区名称図…… 2

第 2 図　奥山Ｂ遺跡土層柱状図…… 2

第 3 図　奥山下根遺跡台地部（$C2b_7$）
低地部（$B4d_3$）土層柱状図 …… 3

第２章　位置と環境

第 4 図　奥山Ｂ・奥山下根遺跡周辺の地形及び遺跡位置図…… 8

第 5 図　内守谷地区遺跡位置図…… 9

第３章　奥山Ｂ遺跡

第 6 図　奥山Ｂ遺跡調査区配置図…… 10

第 7 図　トレンチ断面図(1)…… 16

第 8 図　トレンチ断面図(2)…… 17

第 9 図　トレンチ断面図(3)…… 18

第 10 図　遺構外出土土器拓影図…… 20

第 11 図　遺構外出土土器拓影図…… 21

第 12 図　遺構外出土土器拓影図…… 22

第 13 図　石器実測図…… 23

第４章　奥山下根遺跡

第 14 図　奥山下根遺跡地形図…… 26

第 15 図　奥山下根遺跡遺構配置図…… 27

第 16 図　第 1 号住居跡実測図…… 29

第 17 図　第 1 号住居跡出土土器
実測図…… 30

第 18 図　第 1 号住居跡出土土器
拓影図…… 31

第 19 図　第 2 号住居跡実測図…… 33

第 20 図　第 2 号住居跡出土土器
実測図…… 34

第 21 図　第 2 号住居跡出土土器
拓影図…… 34

第 22 図　第 2 号土壙出土土器拓影図…… 35

第 23 図　第 3 号土壙出土土器拓影図…… 36

第 24 図　第24号土壙出土土器拓影図…… 37

第 25 図　第34号土壙出土土器拓影図…… 38

第 26 図　土壙実測図(1)…… 39

第 27 図　土壙実測図(2)…… 40

第 28 図　土壙実測図(3)…… 41

第 29 図　土壙実測図(4)…… 42

第 30 図　土壙実測図(5)…… 43

第 31 図　土壙実測図(6)…… 44

第 32 図　土壙実測図(7)…… 45

第 33 図　土壙出土土器拓影図…… 46

第 34 図　土壙出土土器拓影図…… 47

第 35 図　第 1 炉穴群実測図…… 51

第 36 図　第 1 炉穴群出土土器実測図…… 53

第 37 図　第 1 炉穴群出土土器拓影図(1)…… 54

第 38 図　第 1 炉穴群出土土器拓影図(2)…… 55

第 39 図　第 1 炉穴群出土土器拓影図(3)…… 56

第 40 図　第22・41号炉穴出土土器
拓影図…… 57

第 41 図　第 2 炉穴群実測図…… 58

第 42 図　第 2 炉穴群出土土器実測図…… 59

第 43 図　第 2 炉穴群出土土器拓影図…… 60

第 44 図　第42号炉穴出土土器実測図…… 62

第 45 図　第42号炉穴出土土器拓影図…… 62

第 46 図　第57号炉穴出土土器拓影図…… 63

第 47 図　第43号炉穴出土土器拓影図…… 63

第 48 図　第 8 号炉穴出土土器拓影図…… 63

第 49 図　第 9 号炉穴出土土器拓影図…… 64

第 50 図　炉穴実測図(1)…… 65
第 51 図　第20号炉穴出土土器拓影図…… 66
第 52 図　第45号炉穴出土土器拓影図…… 67
第 53 図　炉穴実測図(2)…… 68
第 54 図　遺構外出土土器実測図(1)…… 71
第 55 図　遺構外出土土器実測図(2)…… 72
第 56 図　遺構外出土土器実測図(3)…… 74
第 57 図　遺構外出土土器実測図(4)…… 75
第 58 図　遺構外出土土器拓影図(1)…… 78
第 59 図　遺構外出土土器拓影図(2)…… 79
第 60 図　遺構外出土土器拓影図(3)…… 80
第 61 図　遺構外出土土器拓影図(4)…… 81
第 62 図　遺構外出土土器拓影図(5)…… 82
第 63 図　遺構外出土土器拓影図(6)…… 83
第 64 図　遺構外出土土器拓影図(7)…… 84
第 65 図　遺構外出土土器拓影図(8)…… 85
第 66 図　遺構外出土土器拓影図(9)…… 86
第 67 図　遺構外出土土器拓影図(10)…… 87
第 68 図　遺構外出土土器拓影図(11)…… 88
第 69 図　遺構外出土土器拓影図(12)…… 89
第 70 図　遺構外出土土器拓影図(13)…… 90
第 71 図　遺構外出土土器拓影図(14)…… 92
第 72 図　遺構外出土土器拓影図(15)…… 93
第 73 図　遺構外出土土器拓影図(16)…… 94
第 74 図　遺構外出土土器拓影図(17)…… 95
第 75 図　遺構外出土土器拓影図(18)…… 96
第 76 図　遺構外出土土器拓影図(19)…… 97
第 77 図　遺構外出土土器拓影図(20)…… 98
第 78 図　遺構外出土土器拓影図(21)…… 99
第 79 図　遺構外出土土器拓影図(22)…… 100
第 80 図　遺構外出土土器拓影図(23)…… 101
第 81 図　遺構外出土土器拓影図(24)…… 102
第 82 図　遺構外出土土器拓影図(25)…… 103
第 83 図　遺構外出土土器拓影図(26)…… 104
第 84 図　遺構外出土土器拓影図(27)…… 106
第 85 図　遺構外出土土器拓影図(28)…… 107
第 86 図　遺構外出土土器拓影図(29)…… 108
第 87 図　遺構外出土土器拓影図(30)…… 109
第 88 図　遺構外出土土器拓影図(31)…… 110
第 89 図　遺構外出土土器拓影図(32)…… 111
第 90 図　遺構外出土土器拓影図(33)…… 112
第 91 図　遺構外出土土器拓影図(34)…… 113
第 92 図　遺構外出土土器拓影図(35)…… 114
第 93 図　遺構外出土土器拓影図(36)…… 115
第 94 図　遺構外出土土器拓影図(37)…… 116
第 95 図　遺構外出土土器拓影図(38)…… 118
第 96 図　遺構外出土土器拓影図(39)…… 119
第 97 図　遺構外出土土器拓影図(40)…… 120
第 98 図　遺構外出土土器拓影図(41)…… 121
第 99 図　遺構外出土土器拓影図(42)…… 122
第100図　遺構外出土土器拓影図(43)…… 123
第101図　遺構外出土土器拓影図(44)…… 124
第102図　遺構外出土土器拓影図(45)…… 125
第103図　土製品・土器片錘・土製円板
実測図…… 126
第104図　石器の個数…… 128
第105図　石器実測図(1)…… 129
第106図　石器実測図(2)…… 130
第107図　石器実測図(3)…… 131
第108図　石器実測図(4)…… 132
第109図　石器実測図(5)…… 133
第110図　石器実測図(6)…… 134
第111図　石器実測図(7)…… 135
第112図　石器実測図(8)…… 136

第113図　石器実測図(9)…… 139
第114図　石器実測図(10)…… 140
第115図　石器実測図(11)…… 141
第116図　石器実測図(12)…… 142
第117図　石器実測図(13)…… 143
第118図　石器実測図(14)…… 144
第119図　石器実測図(15)…… 145
第120図　石器実測図(16)…… 146
第121図　石器実測図(17)…… 147
第122図　石器実測図(18)…… 148
第123図　石器実測図(19)…… 149
第124図　土壙の類別割合…… 161
第125図　土壙の長径方向…… 161
第126図　土壙の規模分類…… 162
第127図　奥山下根遺跡炉穴の規模
分類…… 163
第128図　西下宿遺跡炉穴配置図…… 164
第129図　西下宿遺跡炉穴の規模分類…… 164
第130図　炉穴の長径方向…… 166
第131図　炉穴の等高線に対する
長径角度…… 166
第132図　各遺跡における炉穴の
規模比較…… 167
第133図　石器の類別割合…… 170
第134図　石質による分類…… 170
第135図　石器類の石質分類…… 171

写真図版目次

奥山Ｂ遺跡

ＰＬ１　調査前全景，伐開作業，伐開後全景

ＰＬ２　作業風景，テストピット土層断面（B3b$_3$）

ＰＬ３　遺跡全景（W→・Ｅ→）

ＰＬ４　石器

奥山下根遺跡

ＰＬ１　遺跡遠景（NW→・NE→），調査前全景

ＰＬ２　グリット発掘，調査風景

ＰＬ３　雪かき作業，遺跡全景

ＰＬ４　台地部・低地部テストピット土層断面，低地部トレンチ土層断面

ＰＬ５　第１号住居跡，第１号住居跡遺物出土状況

ＰＬ６　第２号住居跡，第２号住居跡遺物出土状況

ＰＬ７　第２号住居跡炭化材出土状況　第２号住居跡遺物出土状況

ＰＬ８　第１～４・６・７・10・12号土壙

ＰＬ９　第15～19・23～25号土壙

ＰＬ10　第26～32号土壙

ＰＬ11　第33～34・37～38・46・48号土壙

ＰＬ12　第49～53号土壙，第１炉穴群　第21～22号炉穴

ＰＬ13　第22・40～41・56号炉穴，第２炉穴群

ＰＬ14　第２炉穴群，第42～44号炉穴

ＰＬ15　第57～58・８～９号炉穴

ＰＬ16　第11・36・39・45・55号炉穴

ＰＬ17　遺物出土状況及び出土遺物

ＰＬ18　出土遺物

ＰＬ19　出土遺物

ＰＬ20　奥山Ｂ遺跡・奥山下根遺跡全景

ＰＬ21　土器(1)

ＰＬ22　土器(2)

ＰＬ23　土器(3)

ＰＬ24　押型文土器(1)

ＰＬ25　押型文土器(2)

ＰＬ26　押型文土器(3)

ＰＬ27　尖底土器

ＰＬ28　土製品・土器片錘・土製円板

ＰＬ29　石器(1)

ＰＬ30　石器(2)

ＰＬ31　石器(3)

ＰＬ32　石器(4)

ＰＬ33　石器(5)

ＰＬ34　石器(6)

ＰＬ35　石器(7)

ＰＬ36　石器(8)

ＰＬ37　石器(9)

ＰＬ38　石器(10)

ＰＬ39　石器(11)

ＰＬ40　石器(12)

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

日本住宅公団は，昭和41年から茨城県取手(とりで)市と下館(しもだて)市を結ぶ「関東鉄道常総線」の沿線に沿い，常総ニュータウンの建設に着手した。この開発は，首都圏の人口や産業の集中を緩和するとともに，膨大な住宅用地の需要に応え，良好な居住環境を備えた住宅用地の供給と，周辺都市との有機的な結合をめざした調和ある新しい町づくりを目指しているものである。

この一連の開発計画の一つとして，茨城県水海道(みつかいどう)市内守谷(うちもりや)町を中心とした「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業」が打ち出された。

この開発に先立って，昭和56年２月，日本住宅公団は，茨城県教育委員会に開発地域内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会を行い，茨城県教育委員会は，それに対し開発地域内の分布調査が必要である旨を回答した。

なお，日本住宅公団と宅地開発公団は，昭和56年10月に統合し，新たに「住宅・都市整備公団」として発足したが，従来の契約によって生じた権利義務はそのまま新公団に継承されることになった。

昭和57年５月，住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に対して，開発地域内の分布調査の依頼があり，茨城県教育委員会は，57年12月に試掘による確認調査を実施した。その結果，開発地域内に５か所の埋蔵文化財包蔵地が確認され，この取り扱いについて，昭和58年１月，茨城県教育委員会，水海道市教育委員会及び，住宅・都市整備公団の三者が協議を行った結果，現状保存は困難であると判断し，記録保存の措置を講ずることとなった。

茨城県教育財団は，茨城県教育委員会の照会により，住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し，昭和58年４月から２か年の計画で発掘調査を実施することとし，昭和58年度に奥山(おくやま)Ｂ遺跡，奥山下根(おくやましたね)遺跡の発掘調査を実施，残る３遺跡（奥山Ａ遺跡，奥山Ｃ遺跡，西原(にしはら)遺跡）については，昭和59年度に発掘調査を進めている。

なお，発掘調査は，当教育財団本部調査課第１班が担当した。

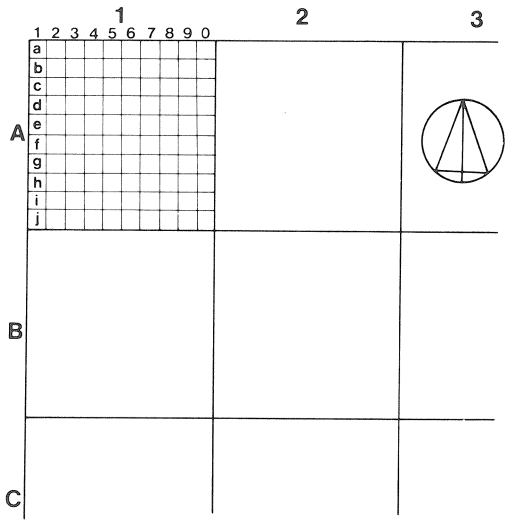
第２節　調査方法

１　調査区設定

調査区設定は，日本平面直角座標系・第IX系座標を使用した。奥山Ｂ遺跡はＸ軸(南北)－2,400ｍ，Ｙ軸（東西）＋12,400ｍの交点，奥山下根遺跡はＸ軸－2,200ｍ，Ｙ軸＋12,400ｍの交点をそ

れぞれ基準にし，この点から東西・南北に各々40mずつ平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。

大調査区の名称は，北から南へ「A」，「B」，「C」……，西から東へ「1」，「2」，「3」……と大文字を付し，「A1区」，「B2区」，「C3区」のように呼称した。この大調査区を4m四方の小調査区（グリットと呼称）に100分割し，北から南へ「a」，「b」，「c」……「j」，西から東へ「$_1$」，「$_2$」，「$_3$」……「$_9$」，「$_0$」と小文字を付した。小調査区の名称は，大調査区の名称と合せた4文字で表記し，「A1b$_2$区」，「B2e$_8$区」のように呼称した。

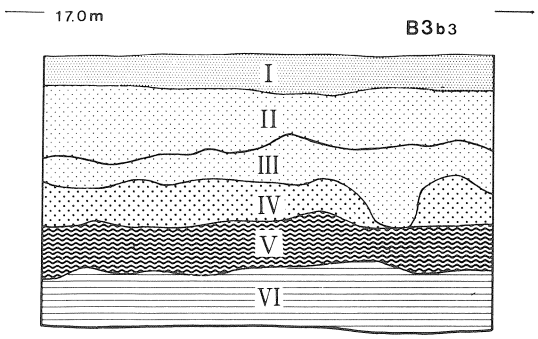


第1図　調査区名称図

2　基本層序の検討

(1)　奥山B遺跡

遺跡は比較的平坦で，高低差は1mほどである。基本層序（第2図）は，I層が表土で，畑地として利用された耕作土であり15～20cmほどの厚さである。この層は東側でいく分厚くなり30cmぐらいの所もある。II層以下は関東ローム層である。遺構確認はII層上部で行った。このII層とIII層はソフトロームであり，両層合わせて50cmほどの厚さである。なお，III層の下層部はIV層にくい込んでいる部分もある。IV層は硬く締まったローム層である。V層はブラックバンドと呼ばれている層でIV層同様硬く締まっており，火山活動が弱まった時期に堆積したことがうかがえる。VI層以下は黄褐色のハードローム層である。



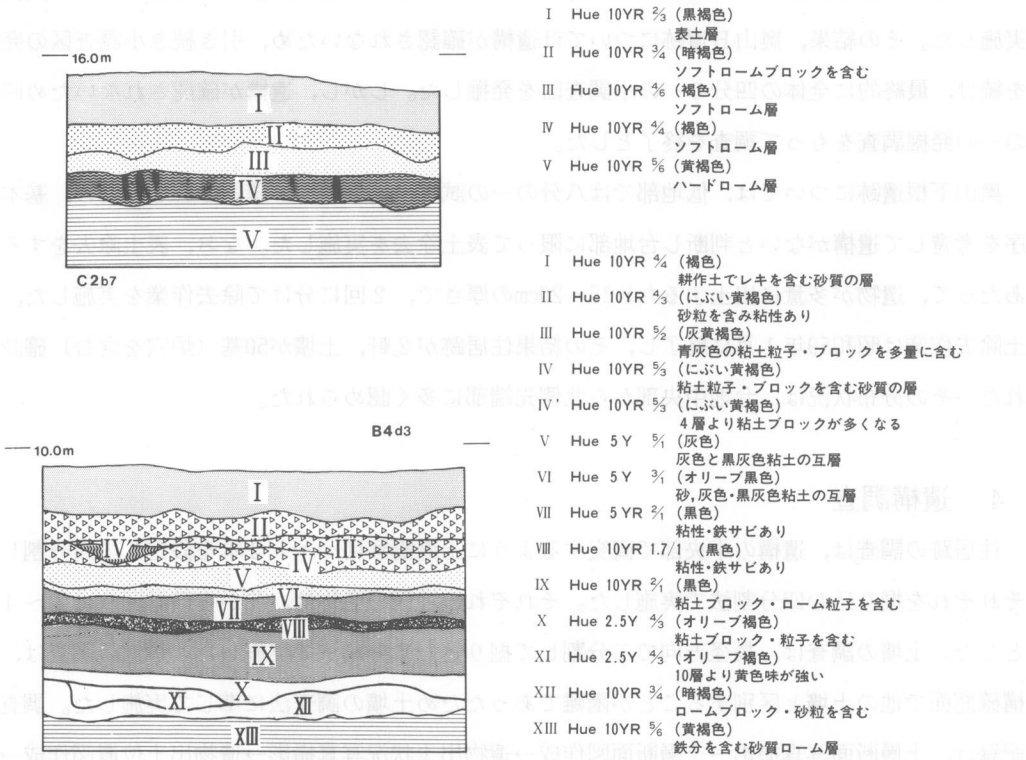
I　Hue 10YR 3/4（暗褐色）
耕作土
II　Hue 10YR 4/6（褐色）
ハードロームブロックを含むローム質の層
III　Hue 10YR 4/4（褐色）
ハードロームブロックを多く含む
IV　Hue 2.5Y 4/3（オリーブ褐色）
かたく締まった層
V　Hue 2.5Y 4/2（暗灰黄色）
ハードローム層，BB
VI　Hue 10YR 5/6（黄褐色）
ハードロームブロックを含みかたい

第2図　奥山B遺跡土層柱状図

(2) 奥山下根遺跡

当遺跡は，台地部から低地部まで広がっていたため，二か所で土層観察を実施した。

台地部の基本層序（第３図）は，Ⅰ層は表土で山林のため木の根による攪乱が多い。Ⅱ層は暗褐色土層で，ソフトロームブロックを含む締まりのない軟弱な土層である。出土遺物の大半はⅠ層下部からⅡ層にかけて出土したものである。Ⅲ～Ⅳ層はソフトロームであり，Ⅳ層はブラックバンドと呼ばれる層である。なお，遺構確認はⅢ層上面で行った。Ⅳ層のブラックバンドは，奥山Ｂ遺跡のⅤ層と同一の層であると推察される。Ⅴ層以下はハードローム層である。



第３図　奥山下根遺跡台地部（C2b$_7$）低地部（B4d$_3$）土層柱状図

低地部の基本層序（第３図）は，Ⅰ層が表土で，砂質の層である。この表土層以下Ⅵ層まで砂の混入が多くみられ，堆積時は水面下であったことがうかがえる。Ⅲ層は，５～15cmの層で，粘土ブロックや同粒子を多量に含んでいる。Ⅳ層も同じような層であるが，Ⅲ層よりも砂を多く含んでいる。Ⅴ～Ⅵ層は粘土層である。Ⅴ～Ⅵ層を細分すると14層以上に分けることができるが，色調の違いにより２層に大別した。両層とも色の違う粘土及び砂が交互に堆積した互層から成っており，静水と流水の現象を繰り返したことがうかがえる。Ⅶ～Ⅸ層はよく締まった黒色土で60～70cmの厚さである。地元の人はこの黒色土層をケドと呼んでおり，おそらく植物が腐植して

できたものと考えられる。掘っている時は独特の臭いであった。X～XI層は，粘土質の層である。XII層で初めてローム質の層となり，XIII層は完全なローム層である。ただ，両層とも砂を少量含んでおり，当時から低湿地であった可能性が高い。台地部の土層との関連をみると，現在までに2m以上の土砂等が堆積していることが理解できる。また，台地部のIII層に対応すると考えられる層は，XIII層以下のローム層と思われる。

3　遺構確認

2遺跡とも遺構確認は，調査面積の八分の一にあたる小調査区を発掘する方法により，試掘を実施した。その結果，奥山B遺跡については遺構が確認されないため，引き続き小調査区の発掘を続け，最終的に全体の四分の一の小調査区を発掘した。しかし，遺構が確認されないため四分の一の発掘調査をもって調査を終了とした。

奥山下根遺跡については，低地部では八分の一の試掘の結果遺構が確認されないため，基本層序を考慮して遺構がないと判断し台地部に限って表土除去を実施した。なお，表土除去をするにあたって，遺物が多量に出土するため15～20cmの厚さで，2回に分けて除去作業を実施した。表土除去作業は昭和59年1月に終了し，その結果住居跡が2軒，土壙が50基（炉穴を含む）確認された。その分布状況は，台地中央部から北側先端部に多く認められた。

4　遺構調査

住居跡の調査は，遺構の中央部で直交するように土層観察用ベルト2本を設定して四分割し，それぞれを掘り込む四分割法で実施した。それぞれの地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。土壙の調査は，長径方向で二分割して掘り込む二分割法で実施した。炉穴の調査は，遺構確認面で他の土壙と区別することが困難であったため土壙の調査法に準じて実施した。調査の記録は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面（完掘）写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

なお，遺構番号は，遺構ごとにそれぞれ調査順に付していった。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

奥山B遺跡は，茨城県水海道市内守谷町字奥山5,751番地ほか13筆に所在し，調査対象面積は，12,724m²である。また奥山下根遺跡は，茨城県水海道市内守谷町字奥山下根5,869番地ほか3筆に所在し調査対象面積は6,973m²である。この両遺跡は，間に小山（こやま）～菅生（すがお）～小絹線を挟んで道路北側に奥山下根遺跡，南側に奥山B遺跡が所在しているが，本来は同一台地上に存在する遺跡であるので，地理的，歴史的環境はまとめて述べることにする。

両遺跡の所在する水海道市は，関東平野の中央部，茨城県の南西部に位置している。市域は，南北に長く東西に狭く，大部分は鬼怒川，小貝川のもたらした沖積地の上に広がっている。北は石下町，東は谷田部町，谷和原村，西は岩井市，南は守谷町と利根川を挟んで，千葉県野田市の各市町村と接している。市の中央部を鬼怒川が蛇行しながら南流し，東側の谷田部町，谷和原村との境には，小貝川が同じように蛇行しながら南流している。南部では鬼怒川と小貝川が接近し，両河川の間はわずか1kmほどの地域もある。鬼怒川は，江戸時代（寛永年間）に猿島・北相馬台地を開削して現在の流路がつくられ利根川に注ぐようにしたもので，以前は内守谷地区で大きく東に向きを変え，小貝川に流れ込んでいたものである。

両遺跡の所在する水海道市の南端部は，猿島台地と北相馬台地の接点部にあたる。遺跡の東側1,4kmには，国道125号線が走り，それと平行するように関東鉄道常総線が通っている。また，遺跡の南東2.5kmには，常磐自動車道の谷和原インターチェンジが開設され，最近ますます交通の便がよくなり，急激に開発の進んできている地域である。

関東鉄道小絹駅の西1.2kmの所で，鬼怒川が大きく西に迂廻（うかい）するが，この鬼怒川を挟んで東側が谷和原村小絹地区，西側が水海道市内守谷地区である。両遺跡は，鬼怒川が大きく迂廻する北側の台地上に位置している。この台地は，中央部に鬼怒川から西に向かって比較的大きな谷津が入り，北と南に二分されており，なお，小支谷によって浸食を受けて舌状台地状になっている。現在これらの谷津は，水田として利用されているが，河川改修以前は氾濫源であったらしく，度々水没していたものと考えられる。

奥山下根遺跡は，南側の谷津に舌状に張り出した台地の先端部から斜面にかけて所在し，標高は高い所で16m，低い所で10mほどである。現況は，山林であり，水田との比高は高い所で8mほどである。奥山B遺跡は，奥山下根遺跡の南方150mに所在し，台地のほぼ中央部に位置している。標高は，17mほどでほぼ平坦な地形であり，現況は畑である。

第２節　歴史的環境

鬼怒川流域の台地には，古代の人々の生活舞台となっていた多くの遺跡が存在する。また，その流域は，近世まで川を利用した水運の盛んなところでもあった。水海道市には，昭和52年の時点で32か所の遺跡が確認されている。今回，発掘調査を実施した二遺跡は，それ以後確認された遺跡で，分布調査が進むにしたがって，遺跡の数は，さらに増加するものと思われる。ここで奥山Ｂ遺跡・奥山下根遺跡を中心として隣接市町村に所在する主な遺跡を，時代ごとに記載すると次のとおりである。

縄文時代の遺跡として，水海道市では，坂手貝置遺跡（６），坂手日之王神遺跡（11），内守谷館ノ台遺跡（12），谷和原村では，西下宿遺跡（19），大谷津Ａ遺跡（20），大谷津Ｂ遺跡（21），筒戸Ａ遺跡（22），筒戸Ｂ遺跡（23），等が知られている。早期に属する遺跡としては，西下宿遺跡があり，住居跡状遺構１軒・炉穴24基が検出され茅山式期の土器片の出土が報告されている。[1] 前期の遺跡としては，坂手日之王神遺跡がある。この遺跡はまだ，発掘調査は行われていないが，土器片の出土や住居跡の落ち込み等が確認されている。[2] 中期の遺跡としては，坂手貝置遺跡[3]や内守谷館ノ台遺跡[4]，大谷津Ａ遺跡[5]，大谷津Ｂ遺跡[6]，筒戸Ａ遺跡[7]，筒戸Ｂ遺跡[8]，等がある。上記の谷和原村の各遺跡は，調査が実施され，多くの遺構，遺物が検出され，多くは，その全容が報告されている。後期の遺跡としては，内守谷館ノ台遺跡がある。この遺跡からは，中期から後期にかけての遺物が出土している。[9]

弥生時代の遺跡は，今のところ水海道市では確認されていない。ただ，市内内守谷町の長ノ入地内で弥生式土器片が出土する地点があるということであるが，まだ正式には報告されていない。

古墳時代になると遺跡数も多くなり，主な遺跡として，水海道市では，大塚戸篠山古墳群(30)，七ツ塚古墳群（２），内守谷本郷遺跡（13）等がある。大塚戸篠山古墳群は前方後円墳３基，円墳28基が存在していたといわれていたが，水海道市教育委員会が昭和50年３月に調査した結果，前方後円墳４基，円墳22基しか確認できなかった。その中の数基の古墳については調査が行われ，それぞれ内部主体として箱式石棺が発見され，石棺内からは各種玉類・鉄鏃等が検出された。[10] 七ツ塚古墳群は前方後円墳１基・円墳６基から構成されており，昭和35年に調査が行われた。主体部は墳麓に構築されたものが多く，粘土槨，竪穴式石室，箱式石棺と多様である。[11] 内守谷本郷遺跡は，昭和47年表土削平工事の際発見された遺跡で，土師器，須恵器，土錘，砥石等が出土した。出土土器から古墳時代中期以後の集落跡と考えられるが，発掘調査は実施されていない。この外，集落跡として岩井市の馬立遺跡（５），水海道市の内守谷向地遺跡（14）や，守谷町の大木遺跡等が知られている。

古墳時代以降の集落跡としては，岩井市の船戸(ふなど)遺跡[12]（4）がある。この遺跡は丸木舟が出土したことで知られている。平安時代後半では水海道市及び周辺地域においては，平将門に関連する史跡や伝承地が数多く存在している。

中世の史跡としては，水海道市内には，大塚戸城跡（7），菅生城跡（15）があり，ともに城館跡である。

以上のように，奥山B遺跡及び奥山下根遺跡付近の猿島・北相馬台地上には，原始，古代，中世の遺跡が多く所在し，各時代にわたって生活が営まれていたことがうかがえる。

※遺跡名の（　）内の数字は，第4図の図中番号である。

奥山B・奥山下根遺跡周辺の遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	遺跡の時代					図中番号	遺跡名	遺跡の時代				
		先土器	縄文	弥生	古墳	その他			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
1	権現塚古墳				○		16	茶畑古墳				○	
2	七ツ塚古墳群				○		17	堂坂畑貝塚		○			
3	豊岡古墳				○		18	浅間山貝塚		○			
4	船戸遺跡					○	19	西下宿遺跡		○			
5	馬立遺跡				○		20	大谷津B遺跡		○			
6	坂手貝置遺跡		○				21	大谷津A遺跡		○			
7	大塚戸城跡					○	22	筒戸A遺跡		○			
8	菅生古谷遺跡		○				23	筒戸B遺跡		○			
9	坂手剣崎古墳				○		24	大木遺跡				○	
10	坂手萱場貝塚		○				25	西原遺跡	昭和59年度調査予定				
11	坂手日之王神遺跡		○				26	奥山C遺跡	昭和59年度調査予定				
12	内守谷館ノ台遺跡		○				27	奥山A遺跡	昭和59年度調査予定				
13	内守谷本郷遺跡		○		○		28	奥山B遺跡	当遺跡				
14	内守谷向地遺跡		○		○		29	奥山下根遺跡	当遺跡				
15	菅生城跡					○	30	大塚戸篠山古墳群				○	

注

(1)　茨城県教育財団『年報1』昭和56年　『年報3』昭和58年

(2)(3)(4)(9)(11)水海道市史編さん委員会『水海道市史』（上巻）昭和58年

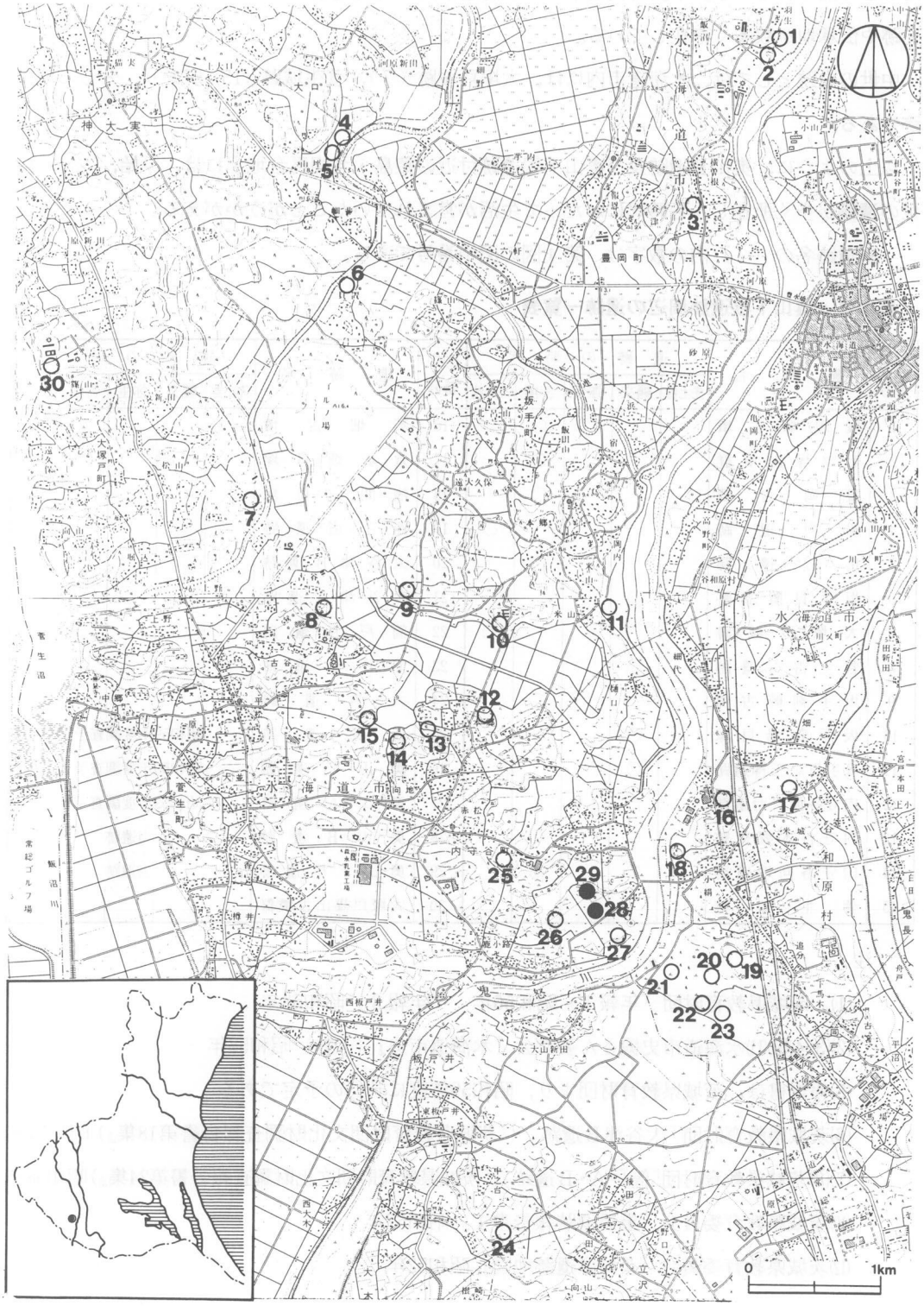
(5)報告書は，茨城県教育財団より，昭和59年度に刊行の予定である

(6)茨城県教育財団「大谷津B遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第18集』）昭和57年

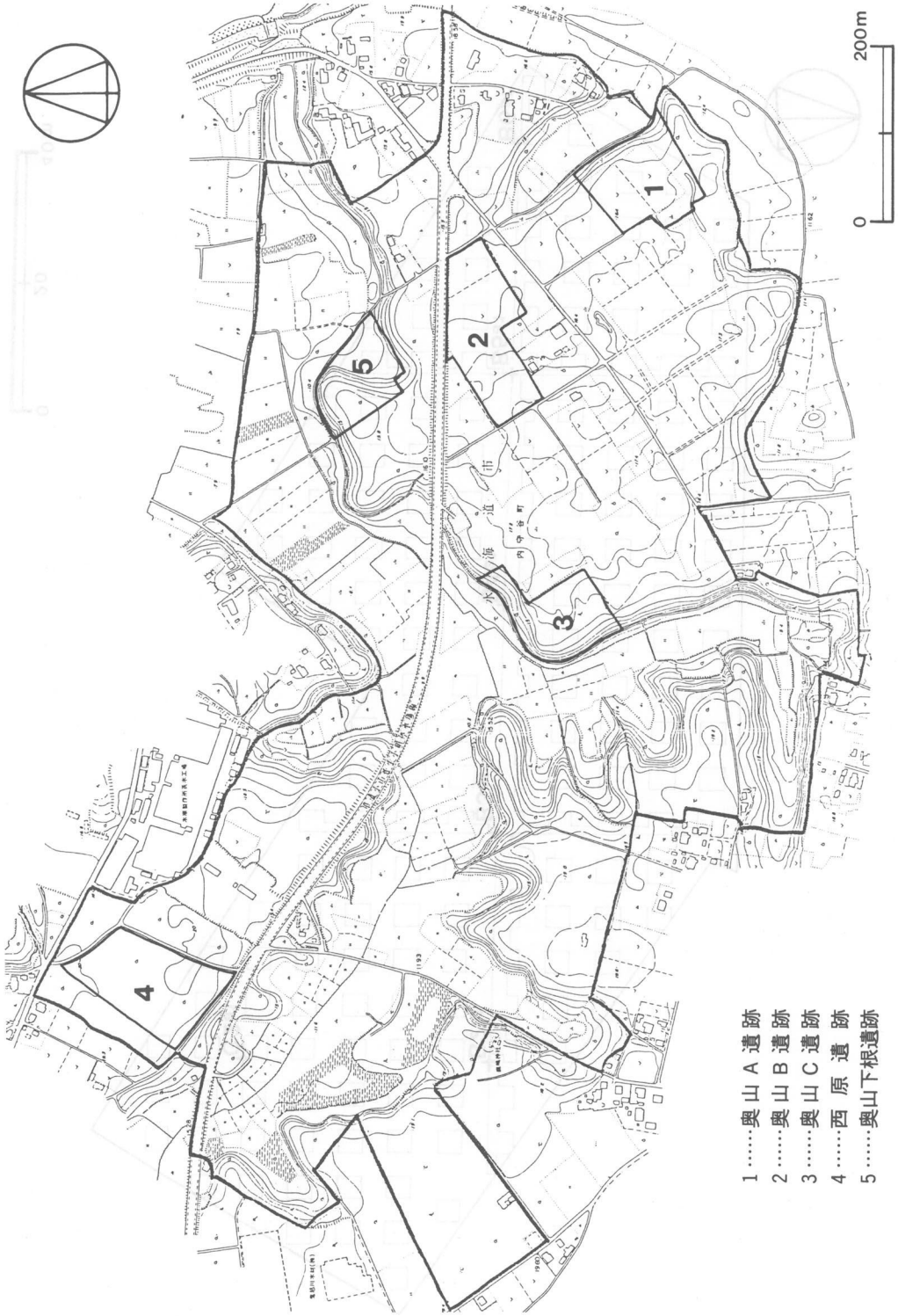
(7)(8)茨城県教育財団「筒戸A・B遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第24集』）昭和58年

(10)茨城県教育委員会『重要遺跡報告書1』昭和57年

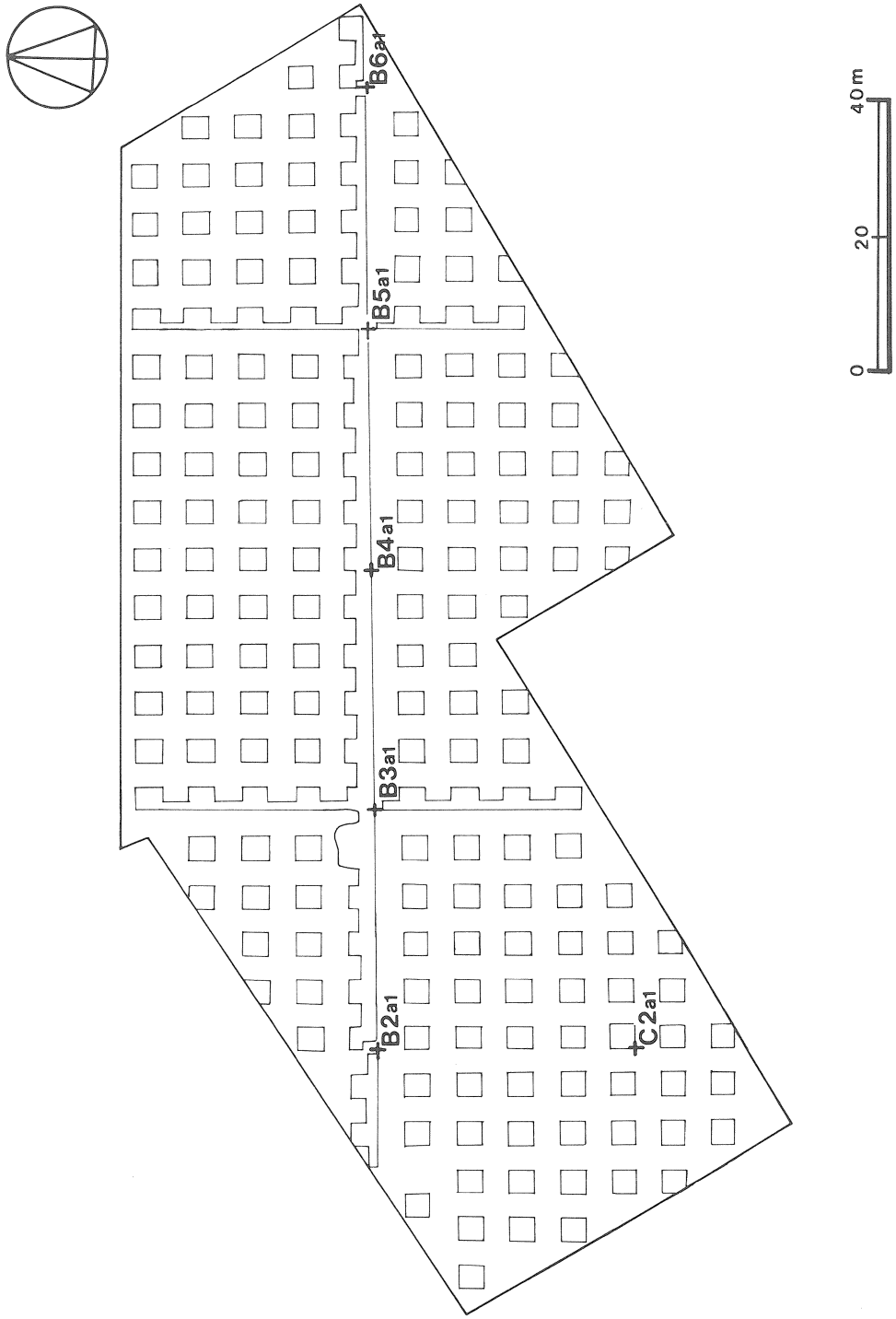
(12)茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』昭和52年



第４図　奥山Ｂ・奥山下根遺跡周辺の地形及び遺跡位置図



第5図　内守谷地区遺跡位置図



第６図　奥山Ｂ遺跡調査区配置図

第3章　奥山B遺跡

第1節　遺跡の概要と記載方法

1　遺跡の概要

当遺跡は，昭和58年8月から10月にかけて調査を実施した遺跡で，同一台地上の北方150mには奥山下根遺跡が隣接している。

当遺跡の表土除去作業は調査面積が広大なことや調査期間等から，重機導入を考え，その前調査としてトレンチを三本設定し試掘を行った。その結果遺構は全く検出されず，しかも出土遺物は土器片70数点であった。したがって，遺構の存在は希薄なため，重機による全面表土除去を取りやめ，遺跡の全面積の四分の一に当たる小調査区を手掘りによって慎重に掘り進めたが，やはり，遺構を確認することができず，これをもって当遺跡の調査を終了した。

遺物は，北側中央部付近からわずかに土器片が出土した。時期的には縄文時代早期のものと考えられる。これは北側に位置する奥山下根遺跡の出土遺物と同時期のものである。

2　記載方法

本書で使用した遺構・遺物の記載方法は，次のとおりである。

(1)　使用記号

遺構

名称	住居跡	土　壙	ピット
記号	ＳＩ	ＳＫ	Ｐ

遺物

名称	土器	土製品	拓本土器	石器
記号	Ｐ	ＤＰ	ＴＰ	Ｑ

(2)　遺構・遺物実測図中の表示

＝炉跡・炉床　**＝焼土**　**＝朱彩土器**

(3)　土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調は，「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用し，Hue 10YRを基準に次のように分類した。また，土層中に含まれている含有物も分類し，記号化した。

なお，攪乱をうけた部分は土層断面図の中に「攪乱」と記入した。

番号	土色名	色相	明度/彩度	記号	含有物
1	暗褐色	7.5YR 10YR	3/3　3/4 〃　〃	a	ローム粒子を含む
2	褐色	7.5YR 10YR	4/3　4/4　4/6 4/4　4/6	b	ロームブロックを含む

3	黒　褐　色	10YR	2/2　2/3 3/1　3/2	c	焼土粒子を含む
4	黄　褐　色	10YR	5/6　5/8	d	焼土ブロックを含む
5	黒　　色	7.5YR 10YR	1.7/1　2/1 〃　〃	e	炭化粒子を含む
6	赤　褐　色	2.5YR 5YR	4/6　4/8 〃　〃	f	炭化物(材)を含む
7	暗赤褐色	2.5YR 5YR	3/3　3/4　3/6 〃　〃　〃	g	ローム質の層
8	明赤褐色	2.5YR 5YR	5/6　5/8 〃　〃	h	ローム質の層＋ハードロームブロック
9	赤　　色	10R	4/6　4/8	i	ハードロームブロックを含む
10	にぶい黄褐色	10YR	4/3　5/3　5/4	j	黒色土を含む
11	にぶい赤褐色	2.5YR 5YR	4/4 〃	k	焼土層
12	明　褐　色	7.5YR	5/6	l	焼土粒子＋焼土ブロック

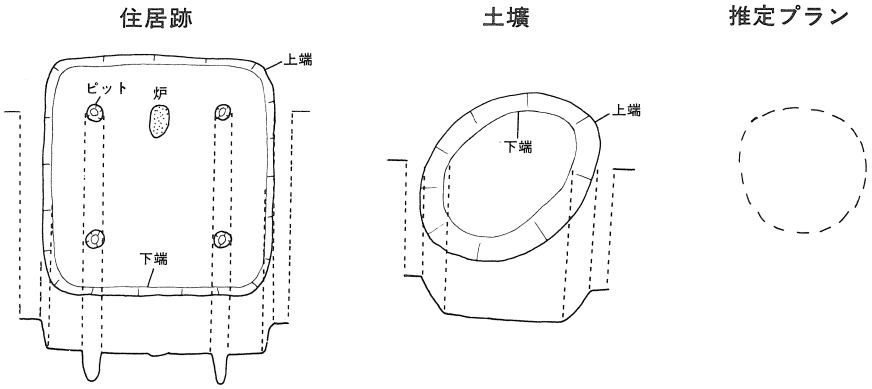
※粒子は径２㎜未満のもの，ブロックは径２㎜以上のものとした。

’……少量含む。(面積割合で４％以下)

” ……多量含む。(面積割合で26％以上)

含有物については，一文字で表現できない時はａｄのように二文字で表した。

(4)　遺構実測図の作成方法と掲載方法



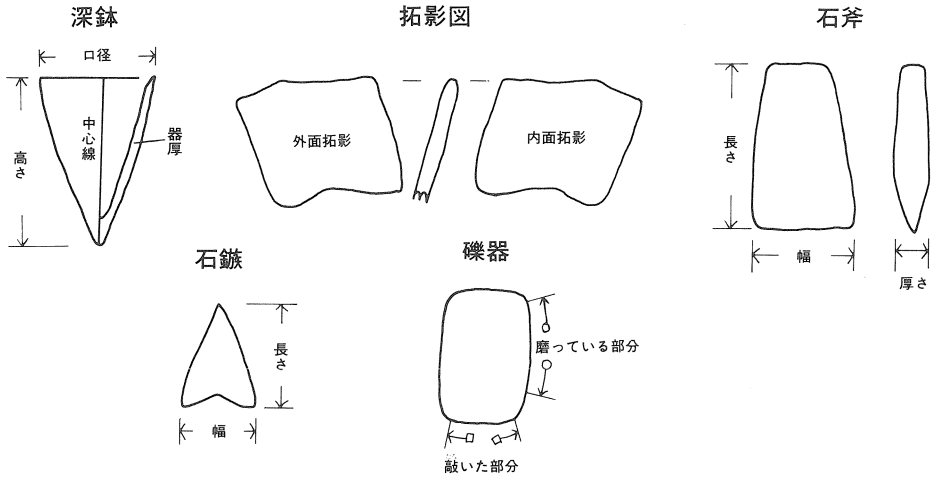
○住居跡は縮尺二十分の一の原図をトレースして版組し，それをさらに三分の一に縮尺して掲載した。

○土壙及び炉穴は縮尺二十分の一の原図をトレースして版組し，それをさらに三分の一に縮尺して掲載した。

○水系レベルは，同一の場合に限り一つの記載で表し，それ以外は個々に表示した。単位はmである。

○実測図は遺構番号順に掲載するように努めたが，土壙と炉穴を分類して掲載したために必ずしも通し番号順にはなっていない。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法



○土器の実測は，中心線を挟んで左二分の一に外面，右二分の一に内面及び断面を図示した。

○土器拓影図は，右側に断面を図示した。また，表裏二面を掲載したものについては断面を中央に配し，左側を外面，右側を内面とした。

○遺物の版組は，四分の一あるいは三分の一に縮尺したものを掲載の基準としたが，大きさによりそれ以外の縮尺を使用して掲載した図版もある。

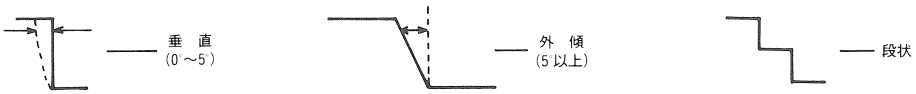
(6) 表の見方について

土壙・炉穴一覧表

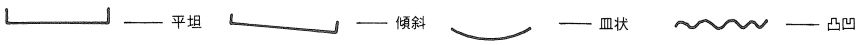
土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				

○長径は掘込面における長軸線の長さ，短径は長軸に直交する最大幅の長さ，深さは底面最深部から掘込面までの垂線の長さを計測した。単位は，長径，短径についてはmで，深さについてはcmで表示した。重複する遺構については現存する長さを測り（　）をつけた。

○壁面は，底面からの立ち上がっている状態によって，次のとおり表記した。



○底面の形状は，次のとおり分類し表記した。



○覆土は，自然堆積の場合N，人為的堆積の場合A，攪乱の場合Kとした。

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
		A B C			

○番号は実測図中の番号である。

○法量は，A－口径，B－器高，C－底径を示し，単位はcmである。なお，復元推定値は，(　)を付した。

○備考は土器の完存率や出土地点を記した。

石器一覧表

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量(g)	石　質	備　考

○出土地点は，出土した遺構あるいは小調査区名を記した。

○幅や厚さは，それぞれの最大値を記し，(　) を付した数値は欠損石器の計測値である。

○備考は，図版番号を記した。

第2節　調査経過

8月下旬　遺跡内の上物除去を行い，調査区を設定した。その後，東西に一本，南北に二本のトレンチを試掘した。その結果，数片の遺物が出土したが，遺構を確認することはできなかった。表土の除去については遺構の確認状況，表土層の状況等によっては，重機の導入も考えていたが，上記の理由で調査区全体の表土を除去する必要性がなくなった。試掘の方法をトレンチ発掘から，小調査区（グリット）発掘に変え慎重に手掘りで表土を除去しながら遺構の確認を行うことにした。

9月上旬　調査面積の八分の一にあたる小調査区の発掘調査を開始した。畑で表土が30cmほどと比較的浅かったこともあり，作業は順調に進行した。

9月中旬　発掘調査が進行しても，相変わらず遺構を確認することはできなかった。

9月下旬　八分の一にあたる調査区の発掘調査が終了し，引き続き四分の一にあたる調査区の発掘調査に入った。A3区～A4区からごく少量の遺物が出土した。

10月上旬　前月からの作業を進めながら，8月に試掘したトレンチの断面図を作成した。また，遺跡内の土層を調査するためテストピットを設定し掘り込んだ。

10月中旬　全体の四分の一にあたる調査区の発掘調査を終了した。結局，遺構は確認されず，遺物は，ビニール袋（31cm×21cm）で10袋ほどの出土であった。

10月下旬　遺跡内の清掃作業を行い，完掘写真を10月25日に撮影した。これをもって当遺跡の発掘調査を終了した。

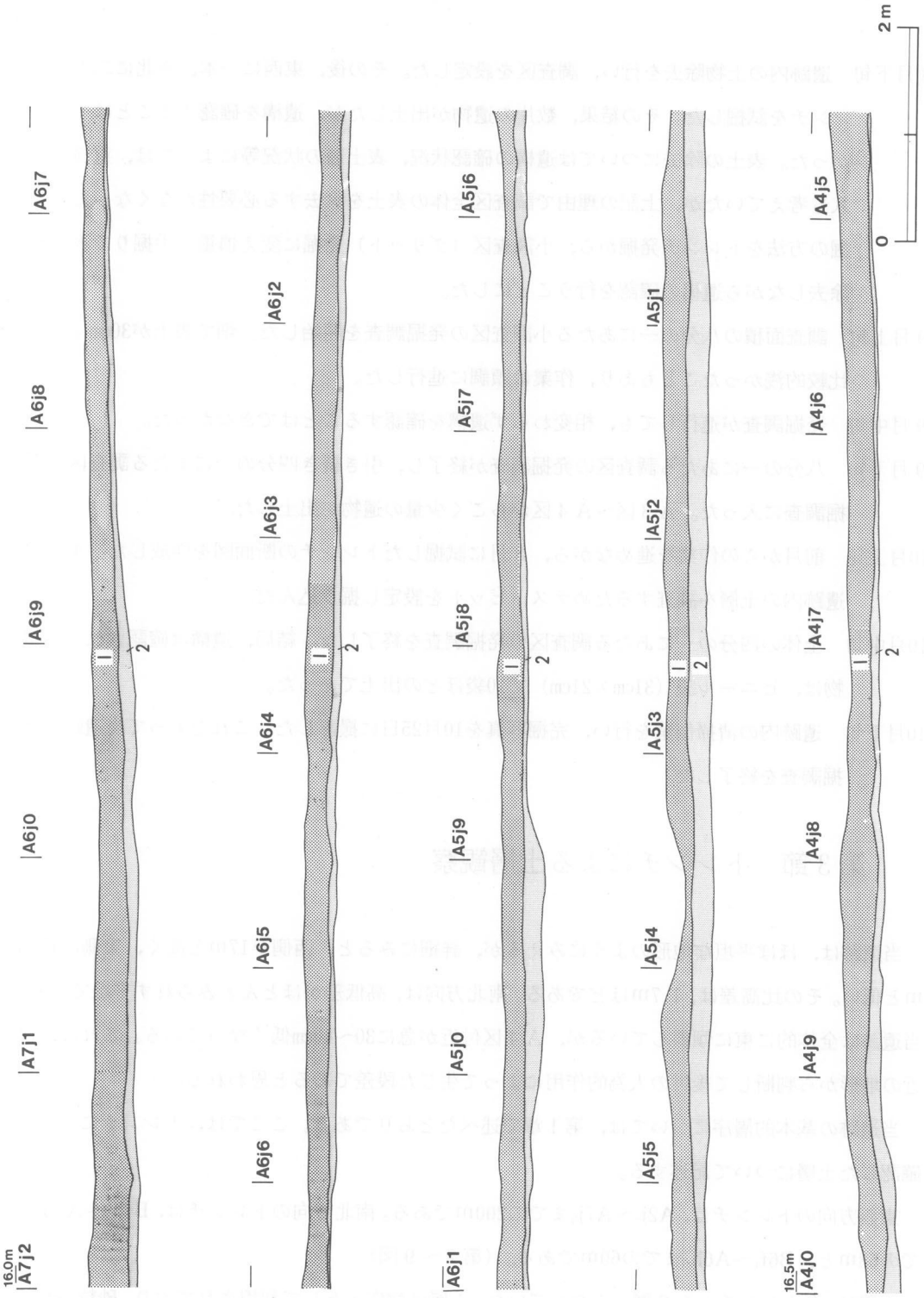
第3節　トレンチによる土層観察

当遺跡は，ほぼ平坦な地形のようにみえるが，詳細にみると，西側が17mと高く，東側は15.3mと低い。その比高差は，1.7mほどである。南北方向は，高低差がほとんどみられず平坦である。当遺跡は全体的に東に傾斜しているが，A4区付近が急に30～40cm低くなっている。これは，付近の地形から判断して後世の人為的作用によって生じた段差であると思われる。

当遺跡の基本的層序については，第1章で述べたとおりである。ここでは，トレンチによって確認した土層について記述する。

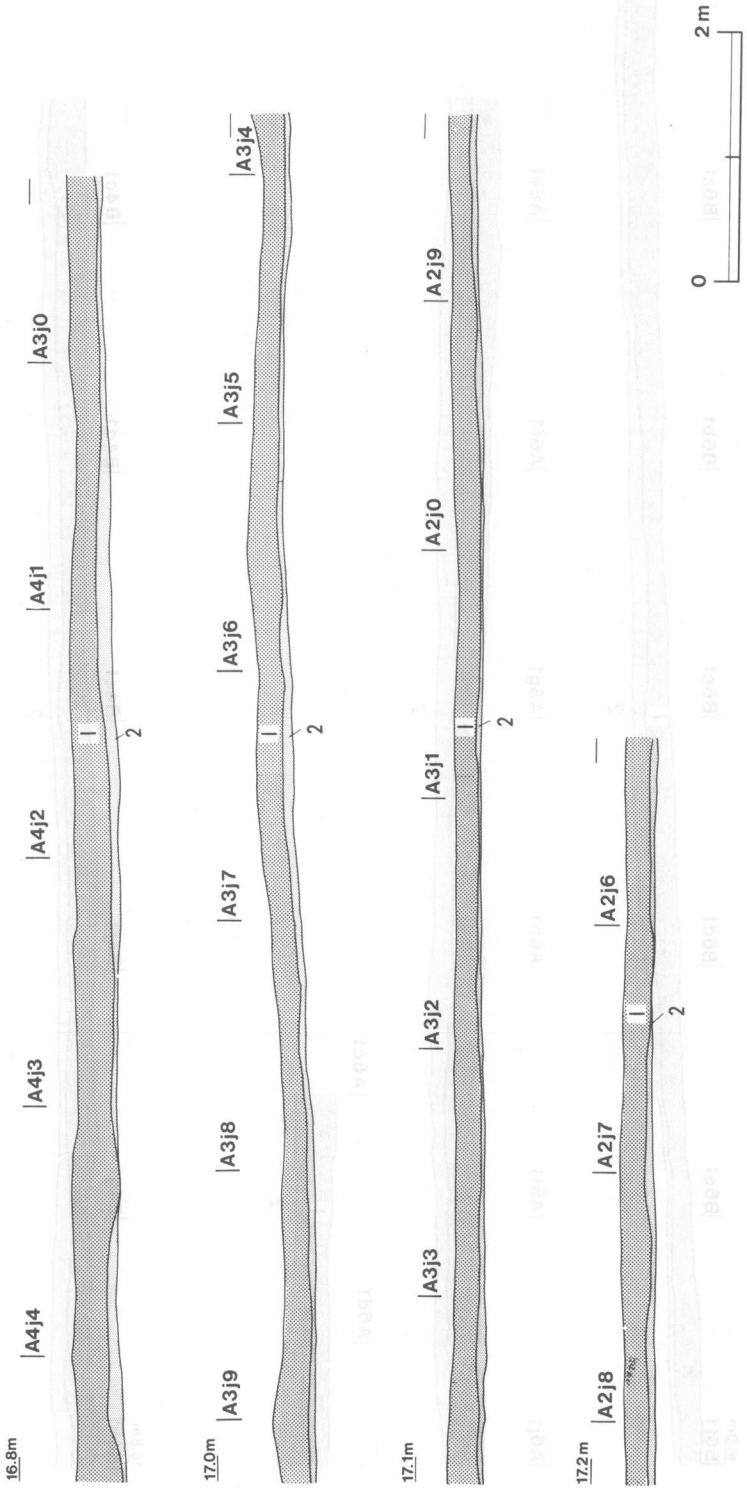
東西方向のトレンチは，$A2j_6$～$A7j_3$までの200mである。南北方向のトレンチは，$B4h_1$～$A4b_1$までの68mと，$B6f_1$～$A6b_1$までの60mである。（第7～9図）

土層は，各トレンチとも2層からなっていた。1層は耕作土として利用されており，砂粒やロー

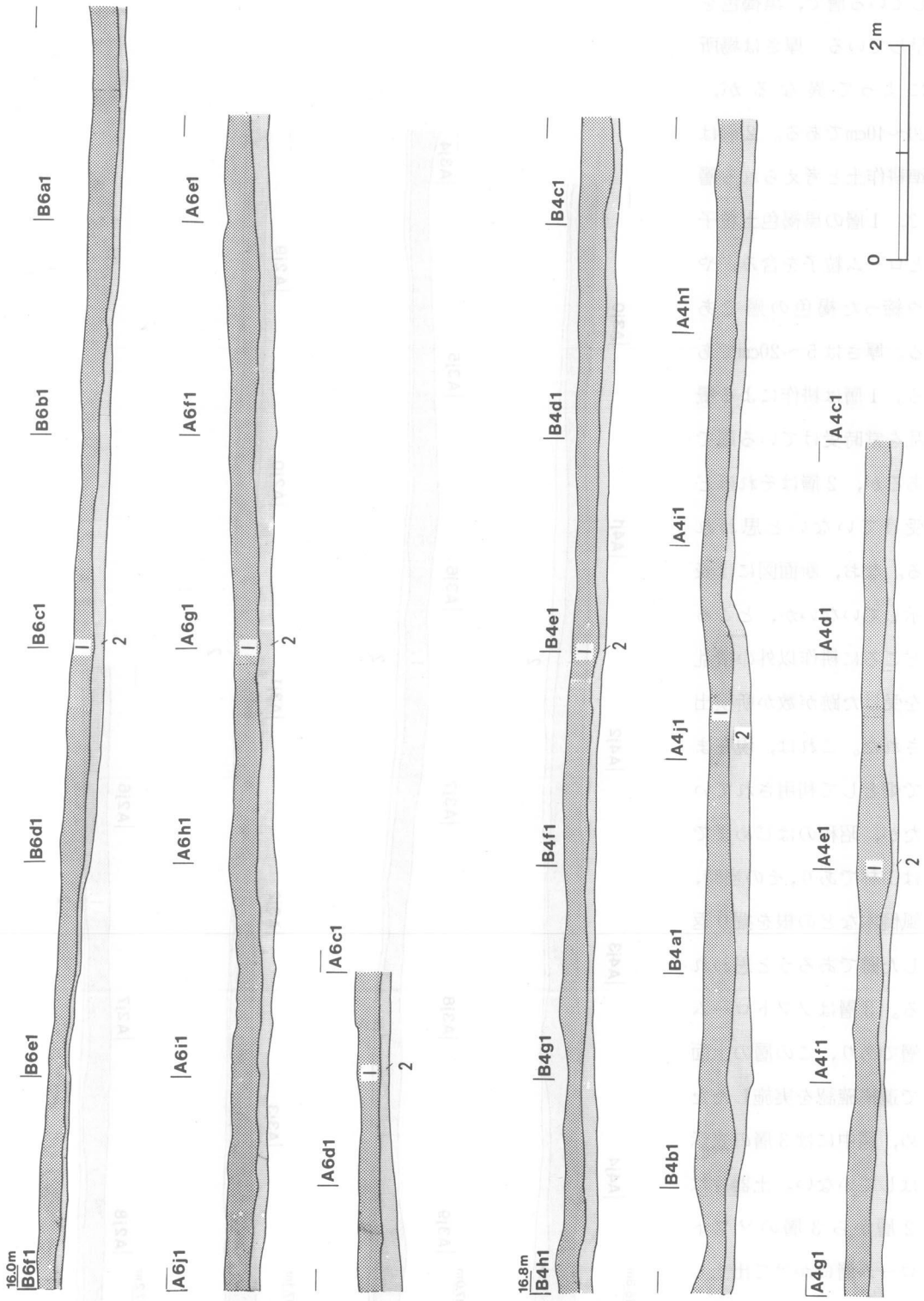


第７図　トレンチ断面図 (1)

ム粒子を含み，サラサラしている層で，黒褐色を呈している。厚さは場所によって異なるが，20～40cmである。2層は準耕作土と考えられる層で，1層の黒褐色土粒子とローム粒子を含み，やや締った褐色の層である。厚さは5～20cmである。1層は耕作による攪乱を常時受けている層であるが，2層はそれほど受けていないと思われる。なお，断面図には表示していないが，ところどころに耕作以外の攪乱を受けた跡が数か所検出された。これは，現在まで畑として利用されていたが，昭和のはじめまでは山林であり，その当時，風倒木などの根を掘り返した跡であろうと思われる。3層はソフトローム層であり，この層の上面で遺構確認を実施したため，図中には3層の表示はしていない。土器片は2層から3層のソフトローム層にかけて出土した。出土状況は，遺跡全



第8図　トレンチ断面図(2)



第９図　トレンチ断面図(3)

体から平均的に出土しているのではなく，Ａ３区～Ａ４区にかけての地区からごく少量出土した程度であり，他の地区からはほとんど出土していない。

このように１，２層が遺跡全面に堆積しており，耕作による攪乱以外はそれほどの攪乱もなく比較的良好な堆積状況であった。これらの層は全体的に東あるいは南東方向に傾斜しており，その結果，遺跡東側の１，２層の厚さは，西側より厚くなっている。なお，地山（３層）も同様の傾斜をしていることが確認できた。当遺跡の南東部には小さな谷津があり(第５図参照)，この谷津に向って遺跡全体が傾斜していたものと思われる。以上の点が，トレンチによる土層観察によって判明した。

第４節　出土遺物

当遺跡からは，縄文時代早期中葉から後葉にかけての土器片が主に出土した。これらの遺物は，小調査区の発掘中に出土したものがほとんどで，他に表面採集で得られたものも少量ある。出土した土器は，小破片が多く，完形になるものは１点もなかった。土器の分類は，文様や整形技法によって次のように分類した。

第Ⅰ群土器　微隆起線文を有する土器群である。(第10図TP196～255)

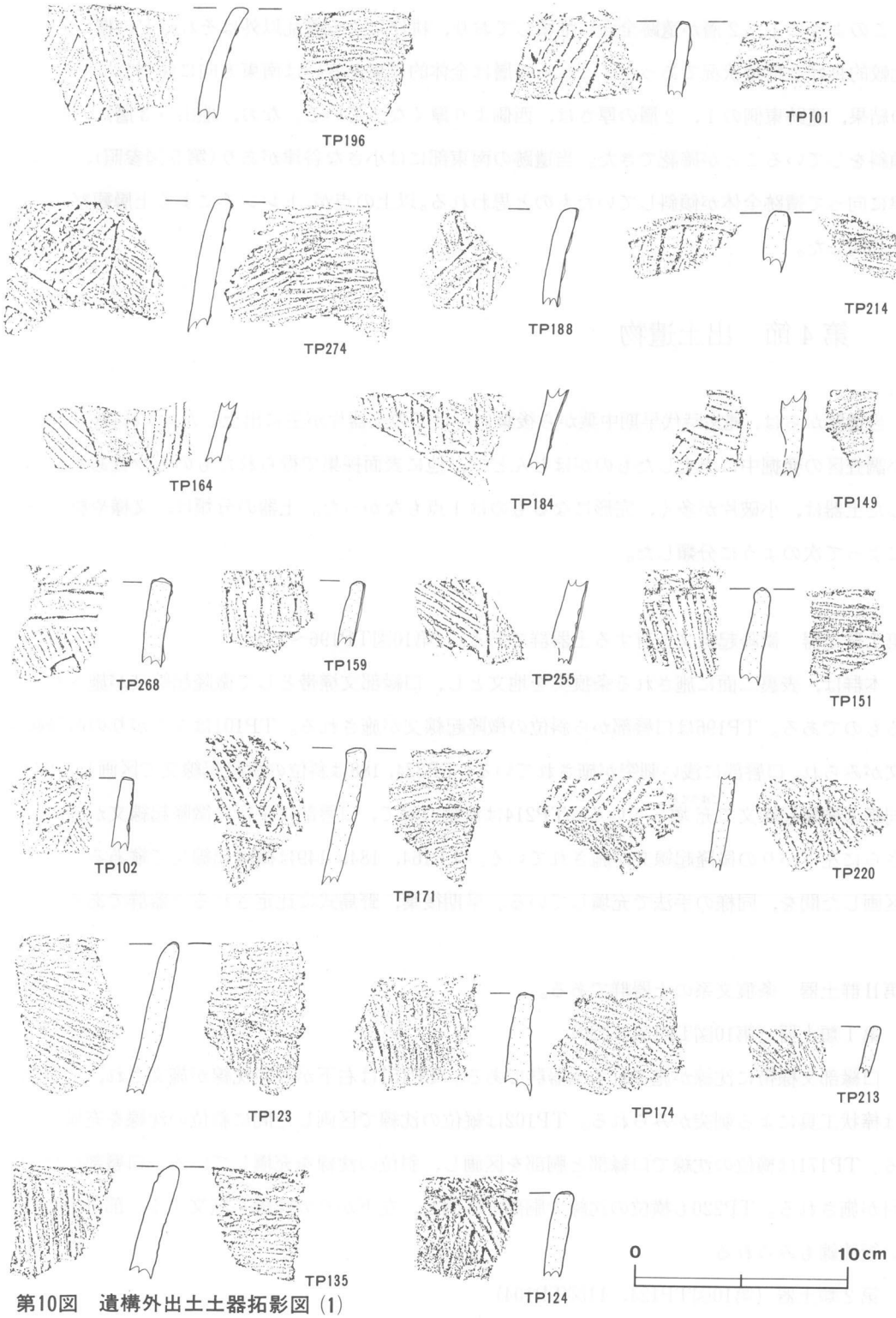
本群は，表裏二面に施される条痕文を地文とし，口縁部文様帯として微隆起線文が施されているものである。TP196は口唇部から斜位の微隆起線文が施される。TP101は左下がりの微隆起線文がみられ，口唇部に浅い刺突が施されている。TP274，188は斜位の微隆起線文で区画した間を，同様の微隆起線文で充塡(じゅうてん)している。TP214は波状口縁で，口唇部に平行に微隆起線文が施され，さらに左下がりの微隆起線文が施されている。TP164，184，149は微隆起線文で縦あるいは横に区画した間を，同様の手法で充塡している。早期後葉，野島式に比定される土器群である。

第Ⅱ群土器　条痕文系の土器群である。

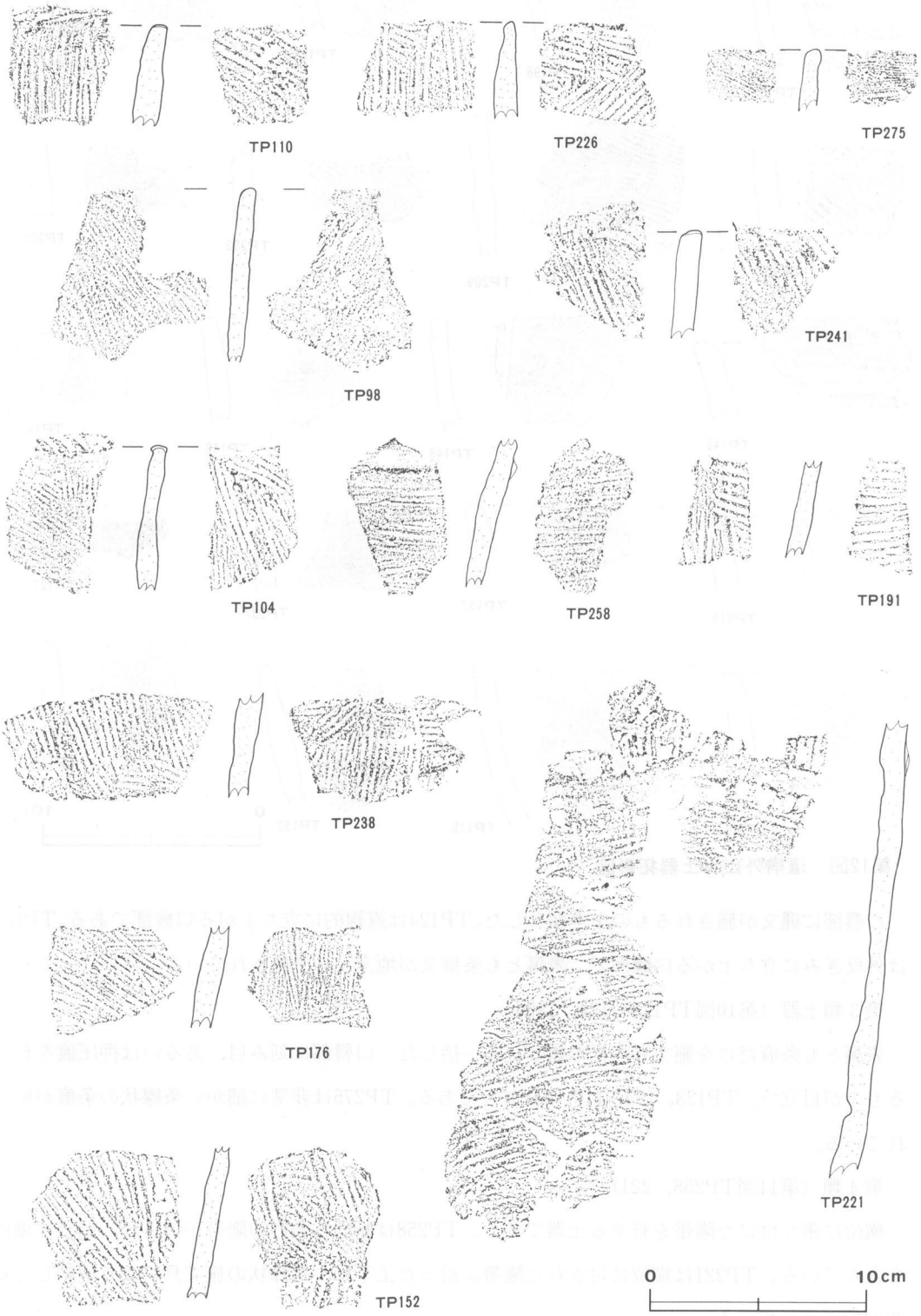
第１類土器（第10図TP151～220）

口縁部文様帯に沈線が施される土器群である。TP151は右下がりの沈線が施文され，口唇部には棒状工具による刺突がみられる。TP102は縦位の沈線で区画した間に斜位の沈線を充塡している。TP171は横位の沈線で口縁部と胴部を区画し，斜位の沈線を充塡している。口唇部には刻み目が施される。TP220も横位の沈線で胴部と区画し，左下がりの沈線を施文する。部分的に横位の短沈線もみられる。

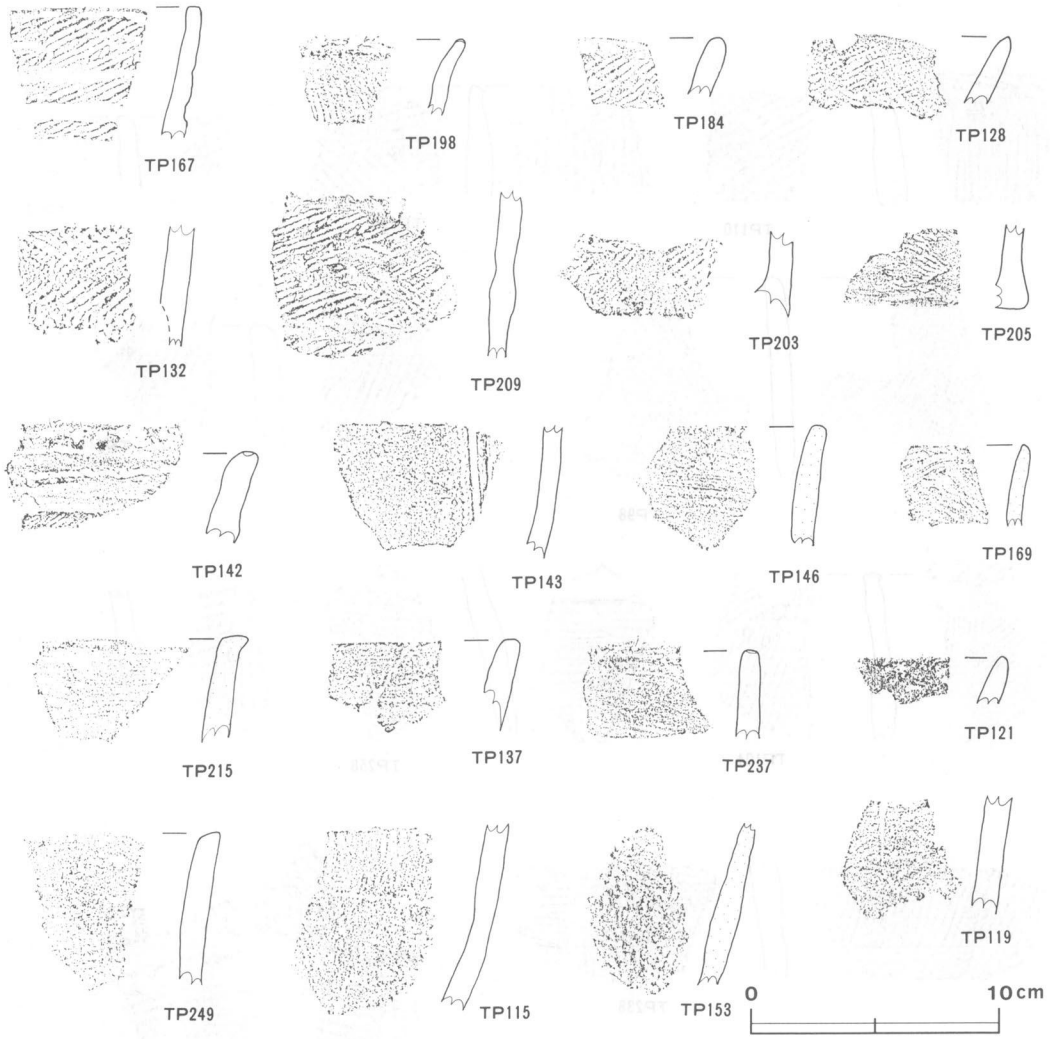
第２類土器（第10図TP124，11図TP104）



第10図　遺構外出土土器拓影図（1）



第11図　遺構外出土土器拓影図 (2)



第12図　遺構外出土土器拓影図（3）

口唇部に縄文が施されるものを本類とした。TP124は直線的に立ち上がる口縁部である。TP104は外反ぎみに立ち上がる口縁部で，表裏とも条痕文が地文として施されている。

第３類土器（第10図TP123～124，11図）

表裏とも条痕だけを施すものを本類として一括した。口唇部に刻み目，あるいは押圧痕を有するものが目立つ。TP123，174，110，241などである。TP275は非常に細かい条線状の条痕が施されている。

第４類（第11図TP258，221）

横位に張り付けた隆帯を有する土器である。TP258は断面三角形の隆帯が付され，胎土に繊維を含んでいる。TP221は横位に付された隆帯に沿った上下に，角棒状の施文具により連続して刺突が加えられている。

第Ⅲ群土器　縄文を有する土器群である。(第12図TP167～143)

TP167はヘラ状の工具で横の方向にナデている。TP128，203はＳ字状結節文を有する。TP198は口唇部に刻み目をもち，やや外反している。TP203，205は底部片で平底を呈すると思われる。TP142は横位に，143は縦位に縄文圧痕が施されている。

第Ⅳ群土器　無文土器を一括した。(第12図TP146～119)

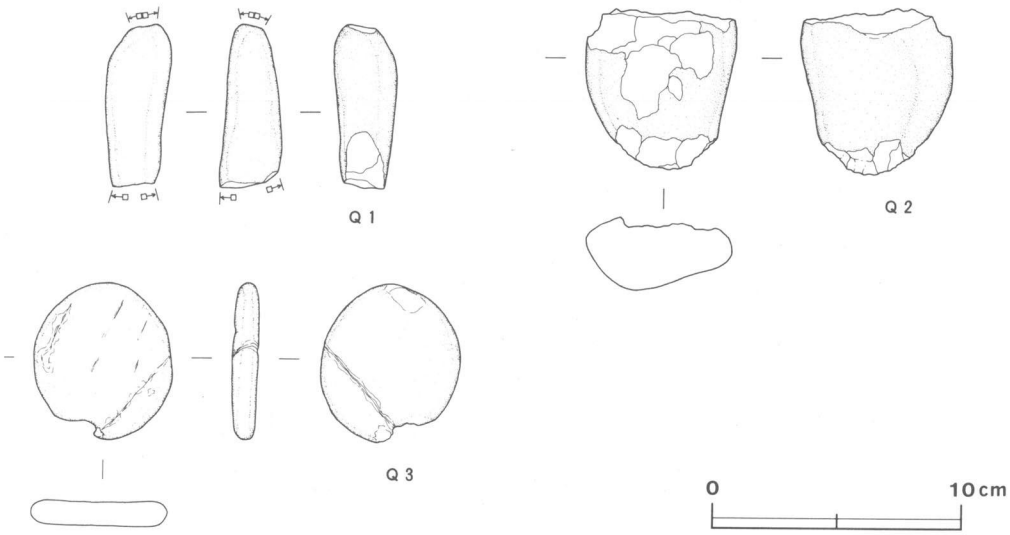
TP146，169，215は条痕文を思わせる整形痕を残す土器で，ともに胎土に繊維を含んでいる。TP237は口唇部に細かい刻み目を有している。TP249は内ソギ状の口縁を呈する土器で，三戸式に比定されるものである。TP115は胴下半部と思われ，胎土に繊維を含んでいる。

石器（第13図）

石器は極めて少量で，次の３点が出土しただけである。

奥山Ｂ　石器一覧表

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Ｑ１	敲石	A3i$_2$	6.4	2.5	2.4	56	砂岩	
Ｑ３	砥石	A4d$_9$	6.3	5.5	1.0	55	流紋岩	
Ｑ２	礫器	A2j$_9$	6.3	6.1	2.9	150	砂岩	



第13図　石器実測図

第5節　まとめ

当遺跡の全体の四分の一にあたる調査区を手掘りによるグリット発掘によって慎重に調査を進めたが，遺構は，確認することができなかった。遺物は，当遺跡の北側に所在する奥山下根遺跡に近いＡ３区からＡ４区にかけての調査区から縄文土器片が少量出土している。これらの出土遺物は，次章で報告する奥山下根遺跡出土の遺物と同時期の縄文時代早期後葉に属する条痕文系の土器群が主である。他に縄文時代前期に属する土器片も出土している。石器類は敲石・砥石・礫器が各１点出土している他は，自然礫が少量出土しただけである。

以上のように，当遺跡からは縄文人の生活がうかがえる住居跡や土壙などの遺構を確認することはできなかった。また少量の土器片が出土しているが，縄文人の生活行動範囲は獲物を求めてかなり広いものと思われるので，近くの特定の遺跡に結びつけて，関係づけることは困難かと思われる。

当遺跡の周辺には，北方150mに奥山下根遺跡，西方300mには奥山Ｃ遺跡があり，さらに，西北西方１kmには西原遺跡がある。なお，鬼怒川を挟んで対岸の台地上には西下宿遺跡が所在している。このように当遺跡の周辺には，同時期の遺構，遺物が検出されている遺跡がいくつか所在している。

したがって，当遺跡はこれらの遺跡と密接な関連をもちながら存在したものと考えられる。ただ，当遺跡からは住居跡等が検出されていないことから，居住地域としてではなく，縄文人の生活行動範囲の一地域であったと解釈するのが妥当であると思われる。

第4章　奥山下根遺跡

第1節　遺跡の概要

当遺跡は，水海道市内守谷町に所在し，奥山B遺跡の北側150mに位置している。面積は，6973㎡で，台地部と低地部に分かれている。発掘調査は昭和58年4月から開始し，59年3月末日に終了した。

調査の結果，縄文時代の土壙37基，炉穴19基と古墳時代の住居跡2軒を検出した。これらの遺構は，ほとんどが台地縁辺部から斜面部にかけて検出された。なかでも，炉穴は台地の端部から斜面部にかけて比較的多く検出された。また，2軒の住居跡は，台地の西側に片寄って検出された。この2軒の住居跡の位置から推察して，古墳時代の遺構は，遺跡の西側に延びている可能性も考えられる。遺跡内の出土遺物については，縄文時代早期から前期までのものが主で，中期以降の遺物もごく少量出土している。

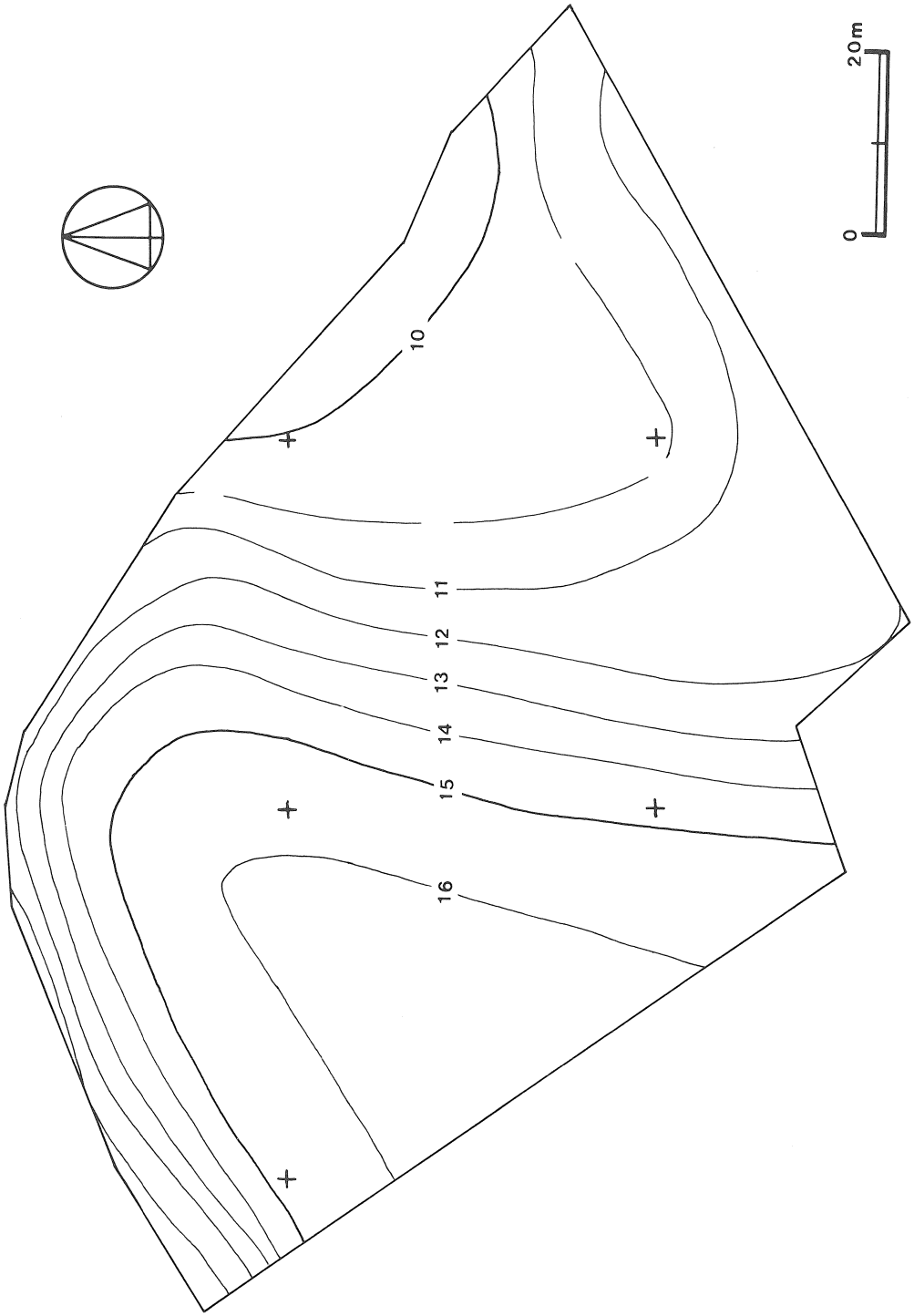
低地部は，台地部において古墳時代の住居跡が検出されているので，古墳時代の木製品等が出土することも予想されたため，トレンチを三本設定し，調査を実施した。調査は，現地表面から約2mの深さまで掘り下げたが，台地部から流入したとみられる縄文時代早期の土器片がごく少量出土したほかは，遺構・遺物とも確認できなかった。しかし，トレンチを掘り下げた結果，低地部全面に，厚さ10～30cmの粘土層が堆積していることが明らかになった。粘土は，静水の状態で堆積すると言われていることから考えると，もとは，池や沼であったことが推定できる。粘土層の堆積時期については，明確にすることはできなかった。

第2節　調査経過

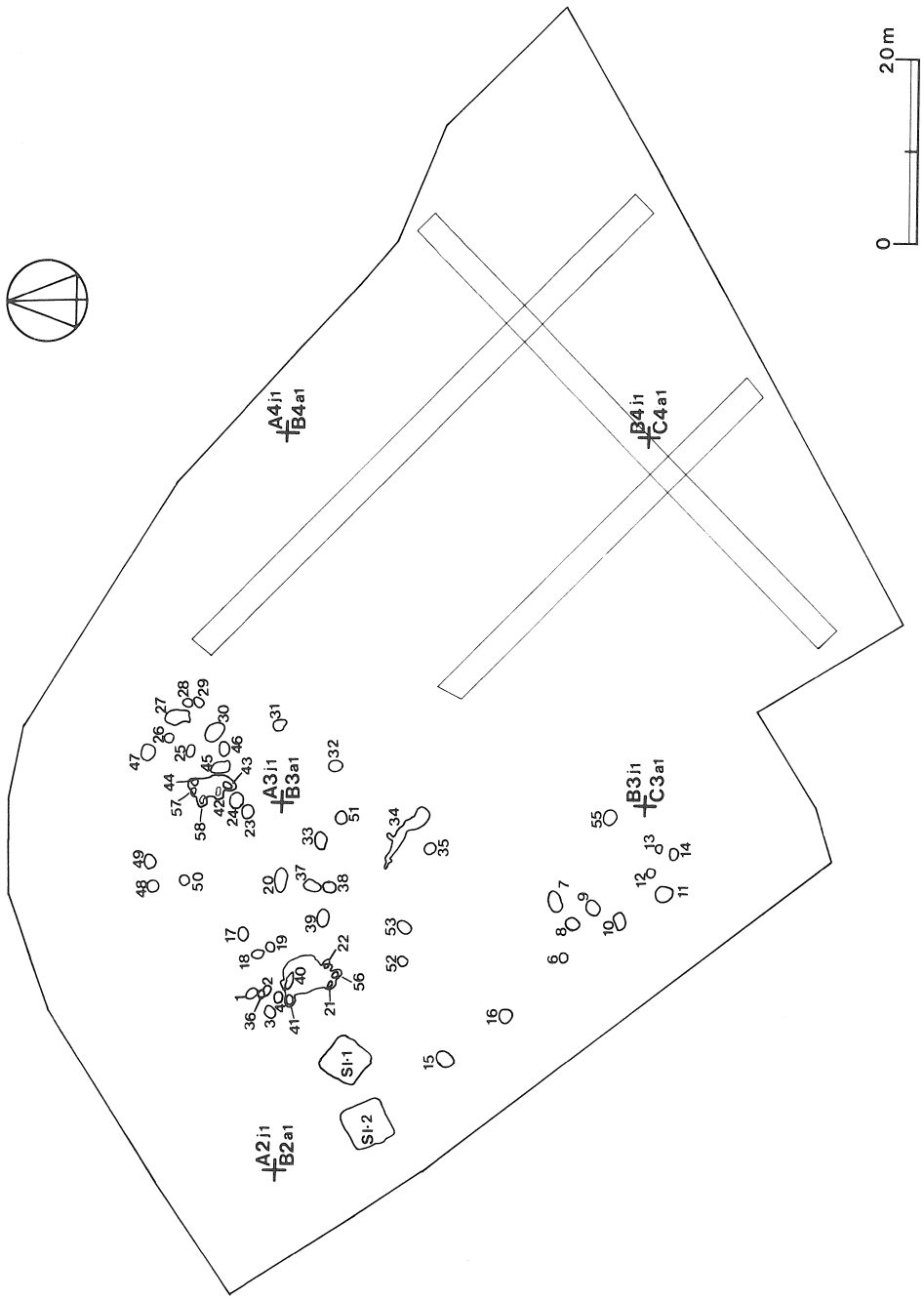
4　月　下旬に，遺跡のエリア確認を茨城県教育委員会，住宅・都市整備公団，及び茨城県教育財団の各担当者立ち合いで実施した。遺跡の現況は，草木がおい茂り，まったく見通しがきかない状態であった。

5　月　上旬に，遺跡の遠景写真を撮影し，中旬から遺跡内の伐開作業を開始し，下旬に終了した。

6　月　3日，遺跡内において，開係者及び現場作業員参加のもとに，鍬入れ式を挙行した。翌日から調査区の試掘を開始した。試掘は低地部から台地部への順序で進め，下旬に終了した。その結果，低地部には遺構がないことが判明し，調査は台地部（2500㎡）を主に行うことにした。



第14図　奥山下根遺跡内地形図



第15図　奥山下根遺跡遺構配置図

7　　月　台地部の表土除去作業を，手掘りにより進めた。

8　　月　表土除去を進めながら，出土遺物の取り上げも開始した。多くの土器片，礫等が出土した。

9　　月　表土除去作業を継続した。これまでの調査では遺構を確認することはできなかったが，上旬になって，住居跡2軒を確認した。

9月中旬　奥山B遺跡調査のため，当遺跡の調査を9月中旬から10月末まで，一時中断した。

11　　月　表土除去作業及び遺物の取り上げを再開した。遺物の取り上げは，それぞれの位置や標高等の記録を取りながら収納する方法をとった。

12　　月　奥山A遺跡（昭和59年度調査予定）の試掘を実施するため，1日から当遺跡の調査を中断した。

昭和59年

1　　月　奥山下根遺跡の調査を再開した。遺構確認の段階にはいり，調査は順調に進むかにみえたが，中旬から下旬にかけ大雪が降り，以後の調査は極めて困難をきたした。

2　　月　上旬から，住居跡及び土壙の調査を開始した。前月までに，住居跡2軒，住居跡状の落ち込み1か所，土壙50数基が確認されていたが，調査を進めていくと，住居跡状の落ち込みは，いくつかの炉穴が集中している炉穴群であることが判明した。

3　　月　前月に引き続き各遺構の調査を行い，15日に遺跡の航空写真撮影，17日に現地説明会を実施し，23日に当遺跡のすべての調査を完了した。

第3節　遺構と遺物

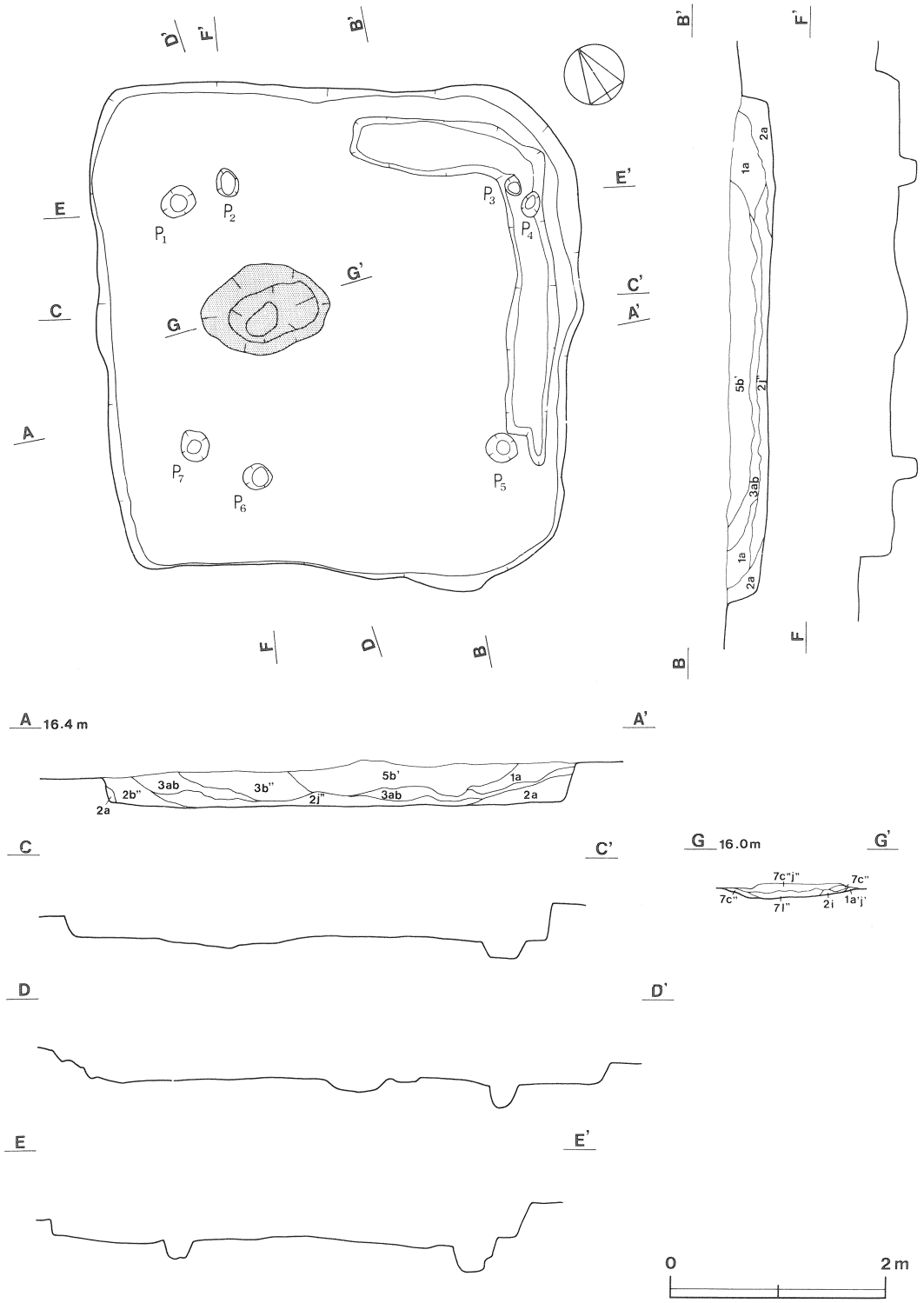
1　竪穴住居跡

第1号住居跡（第16図）

本跡は，奥山下根遺跡の西側，B2b$_4$区を中心に位置しており，西側4mには第2号住居跡が隣接している。

平面形は隅丸方形であり，規模は4.5m×4.5mである。主軸方向は，N－58°－Wを指している。隅丸方形を呈するものの，北面及び南西のコーナー部は，他のコーナー部と比較すると丸みが少なく掘り込まれている。

壁高は，南東側が30～35cm，他は14～25cmであり，特に，北西コーナー部あたりが最も浅く14cmである。壁面は外傾して立ち上がるが，南西部の壁は木の根による攪乱を一部受けている。壁溝は検出されないが，南東壁から北東壁に沿って溝状の落ち込みが認められる。溝状の落ち込みは，上幅35～50cm・下幅23～45・深さは15～20cmである。ここから遺物の出土はなく，底面はロー



第16図　第1号住居跡実測図

ムで締まっている。

床面はほぼ平坦で，中央部付近，特に炉跡周辺は硬く締まっている。しかし，壁近くは軟弱である。炉は住居跡の中央から西側に寄って位置し，長径1.2m・短径0.85mの楕円形を呈し，床面を20cmぐらい掘りくぼめた地床炉で，その全面に焼土の堆積がみられる。柱穴は，7か所検出されている。このうちのP_2・P_4・P_5・P_7の4か所は，径25cm・深さ15～20cmで，ほぼ同径・同深度であり，その配置からも主柱穴と考えられる。

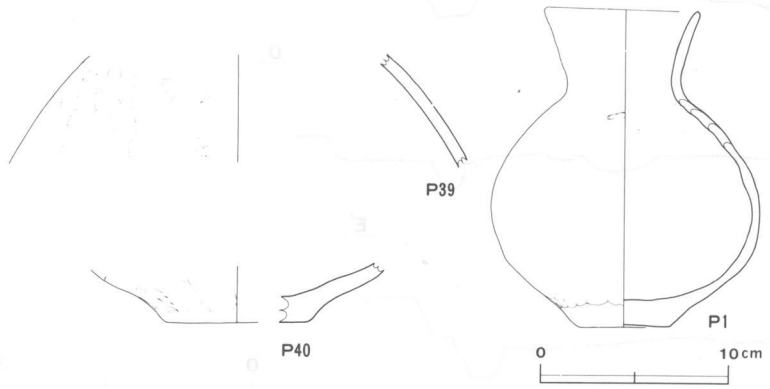
覆土は自然堆積で，大きく3層に分けられる。1層は黒色土で，以下黒褐色土と続いている。中間の黒褐色土層にだけ焼土粒子が混入している。

遺物は，縄文土器片と土師器片等が合わせて466点出土している。本跡に伴うと考えられる土師器は少量で，炉の北側30cmの床面に横転した状態で出土した壺形土器と，炉に近接した床面上から出土した刷毛目整形の土師器片だけである。縄文土器片の出土状況をみると，四方の壁に沿った覆土中から検出されているものが多い。また，土器片の断面も磨滅していることなどから，縄文土器片は，本跡が埋没する過程で流入したものと考えられる。

出土土器（第17・18図）

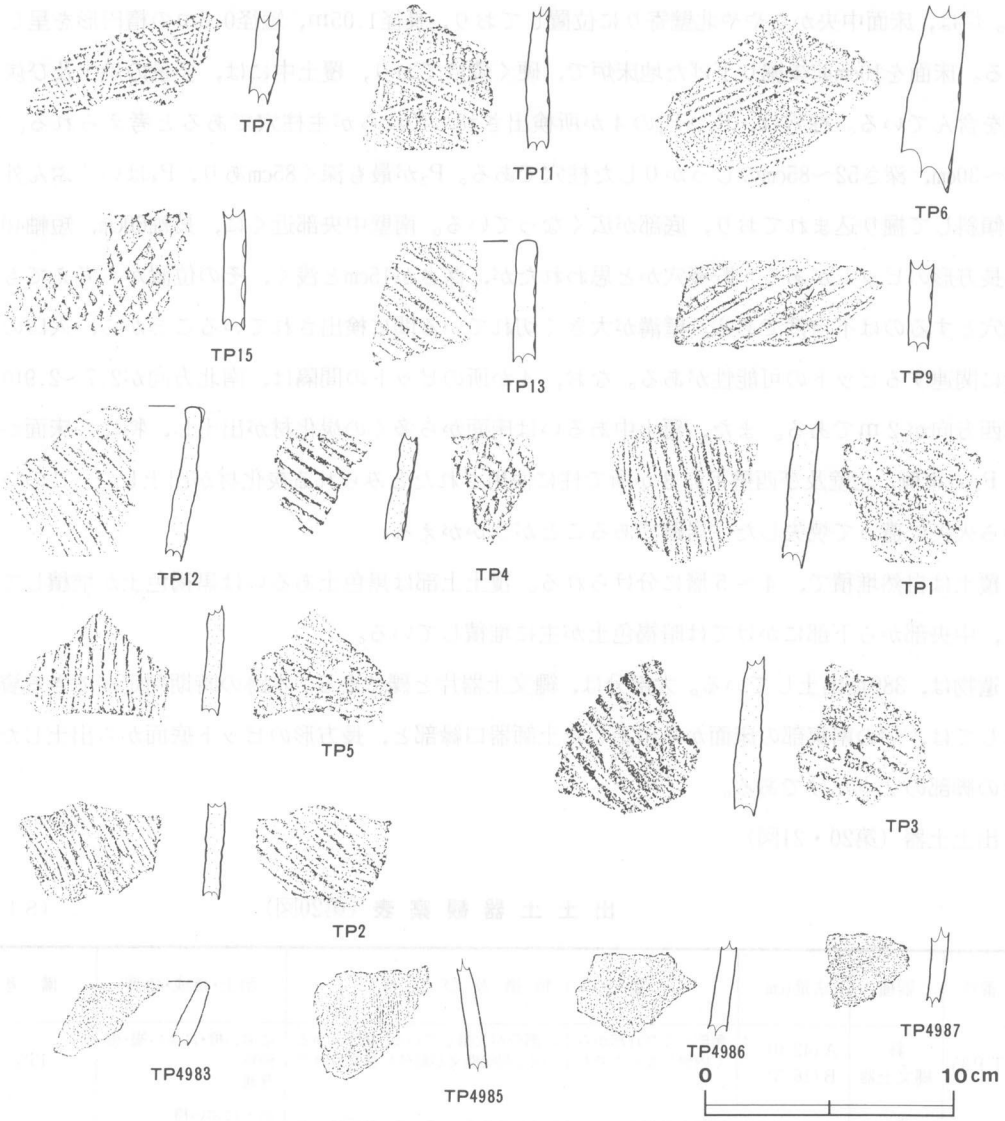
出土土器観察表　（SI－1）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P39	壺 土師器	B(5.7)	刷毛目整形が全面に施され，一部に縦方向のヘラナデがみられる。	にぶい橙 砂粒・スコリア 良好	10%
P40	壺 土師器	B(3.2) C(7.4)	内・外面とも雑なヘラケズリである。	にぶい赤褐 砂粒・スコリア 良好	10%
P1	小型壺 土師器	A8.45 B17.1 C4.7	口縁部は頸部から直線的に外傾して立ち上がっている。最大径を胴部中位に有し，ゆるやかな弧をえがいて，底部に続いている。平底で，内部に輪積痕が残されている。	明赤褐・橙 砂粒・砂礫（石英） 軟弱	70%



等17図　第1号住居跡出土土器実測図

第18図は，１号住居跡から出土した土器片の拓影図である。TP7・11・６は，斜交沈線による格子目状の文様が施されている。TP15は，太い沈線により網目状の文様が施されている。TP12は条痕文が施されている土器で，胎土には繊維を含んでいる。TP ６は，５本一組の沈線により文様が施されている。TP13・９は，斜行する太い沈線文が施されている。TP ４も同様であるが，胎土に繊維を含んでいる。TP ２・１・５・３は，条痕文の土器である。TP4983・4985・4986・4987は土師器片で，住居跡床面から出土し，住居跡が古墳時代のいつ頃のものであるかを判断する上で，参考になった資料である。これら４点には，刷毛目整形痕が残り，古墳時代前期に属するものと思われる。



第18図　第1号住居跡出土土器拓影図

第２号住居跡（第19図）

本跡は，当遺跡の西端に位置し，B2c_2区を中心に確認された住居跡である。第１号住居跡が東側４ｍに隣接している。

平面形は隅丸方形であり，規模は4.7m×4.7mである。主軸方向は，N－28°－Wである。

壁は大変良好な状態で残っており，ほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がっている。深さは各壁とも45～65cmであるが，特に南側のコーナー部が最も深く65cmである。壁溝は，断続的に検出されている。すなわち，北壁及び西壁の一部にみられ，南壁の東半分からは検出されていない。壁溝の規模は，上幅10～20cm・下幅５～10cm・深さ５～10cmである。

床面は，傾斜もなく平坦で，全体的に軟らかである。ただ，炉の周辺部だけは硬く締まっている。炉は，床面中央からやや北壁寄りに位置しており，長径1.05m，短径0.6mの楕円形を呈している。床面を10cm前後掘り下げた地床炉で，硬く焼けており，覆土中には，多量の焼土及び炭化物を含んでいる。柱穴は，P_1～P_4の４か所検出され，これらが主柱穴であると考えられる。径25～30cm，深さ52～85cmのしっかりした柱穴である。P_2が最も深く85cmあり，P_4はいくぶん外側に傾斜して掘り込まれており，底部が広くなっている。南壁中央部近くに，長軸60cm，短軸40cmの長方形のピットがある。貯蔵穴かと思われたが，深さが15cmと浅く，その位置から考えても貯蔵穴とするのは不自然である。壁溝が大きく切れている間に検出されていることから，入口の施設に関連するピットの可能性がある。なお，４か所のピットの間隔は，南北方向が2.7～2.9m，東西方向が２ｍである。また，覆土中あるいは床面から多くの炭化材が出土し，特に，床面からはP_4の東側，北壁及び西壁下の３か所で柱に使用されたとみられる炭化材が出土した。このことから火災に遭って焼失した住居跡であることがうかがえる。

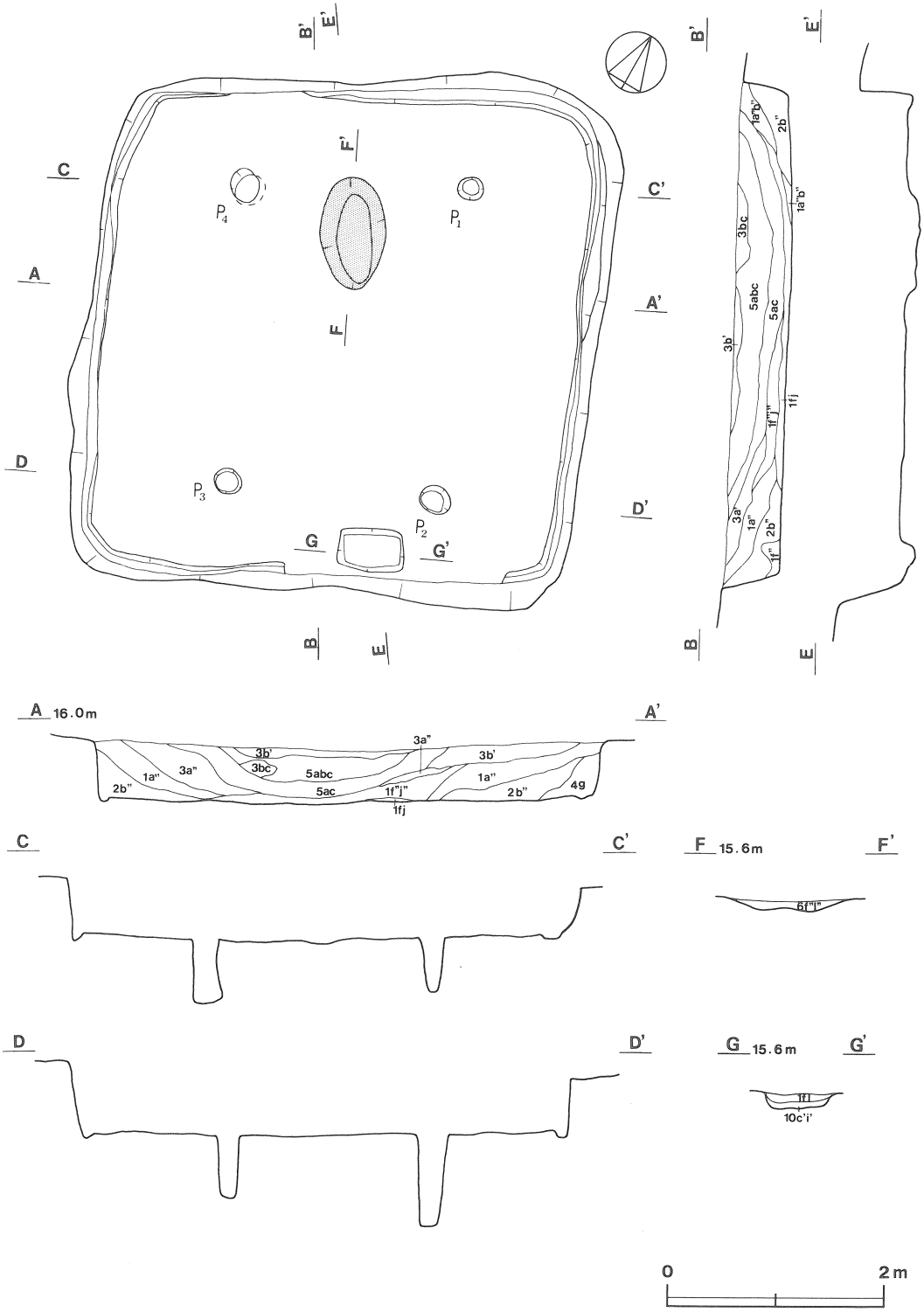
覆土は自然堆積で，４～５層に分けられる。覆土上部は黒色土あるいは黒褐色土が堆積しており，中央部から下部にかけては暗褐色土が主に堆積している。

遺物は，389点出土している。大部分は，縄文土器片と礫である。本跡の時期判定ができる資料としては，炉の南東部の床面から出土した土師器口縁部と，長方形のピット底面から出土した器台の脚部の２点だけである。

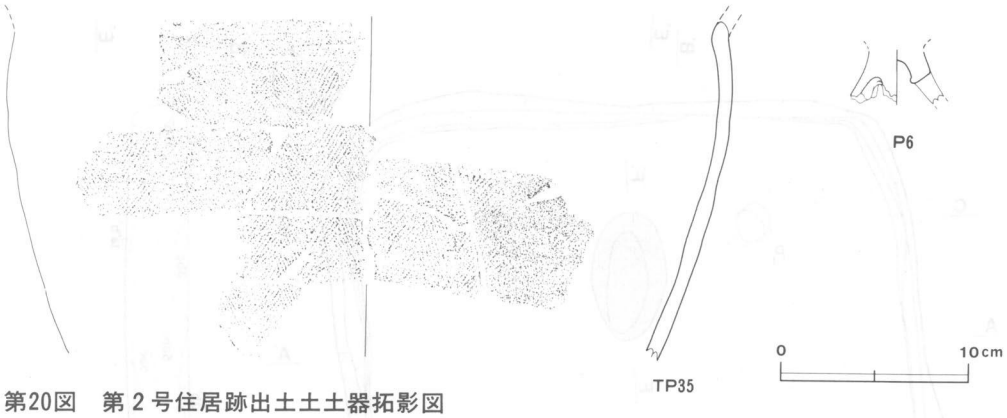
出土土器（第20・21図）

出土土器観察表（第20図）　（ＳＩ－2）

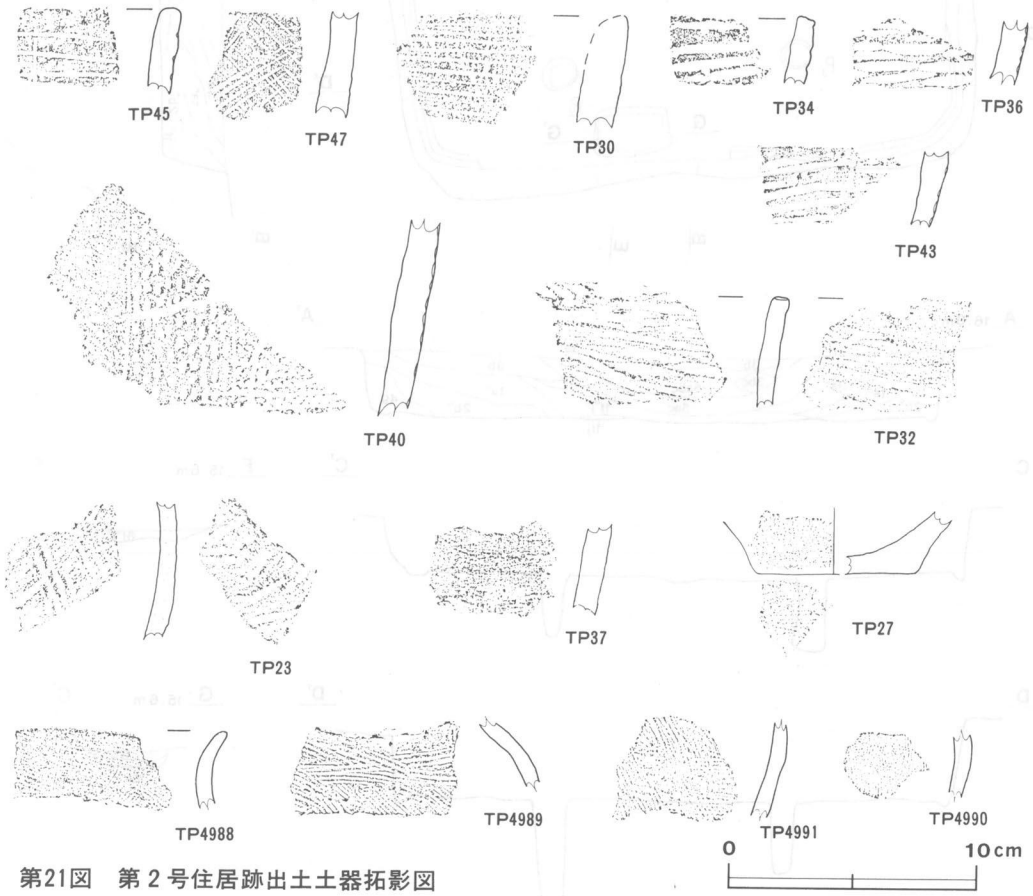
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
ＴＰ35	鉢 縄文土器	A(42.0) B(16.3)	頸部のくびれ部から上の部分が欠損している。胴部はゆるく内彎しながら立ち上がる。羽状縄文が縦位に施文されている。	にぶい橙・にぶい褐・橙 砂粒 普通	15%
Ｐ６	器台 土師器	B(2.4)	脚部上半部であり，３か所に孔を有している。外面はヘラナデで，赤彩痕が残っている。	赤・にぶい橙 砂粒・砂礫・スコリア 良	20%



第19図　第2号住居跡実測図



第20図　第２号住居跡出土土器拓影図



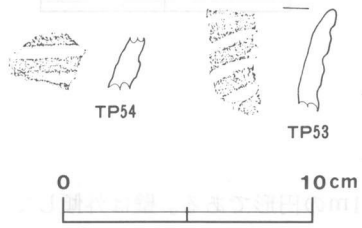
第21図　第２号住居跡出土土器拓影図

第21図は，２号住居跡から出土した土器片の拓影図である。TP45は，横走する３本の沈線とそれに直交する１本の沈線が施されている。TP30は，横走する平行沈線文がみられ，器厚は厚い。

TP34・36・43は，口縁に平行する太めの沈線を施したものである。TP40は，沈線で区画した間に棒状工具による刺突文が充塡されている。TP32は，口唇部に刻みがあり，条痕文を地文とする土器で，浅く太い沈線が施文されている。TP23は，条痕文だけで，胎土に繊維を含んでいる。TP37は，無文の土器である。TP27は，平底の底部で，底面には条痕文が残っている。TP4988・4989・4991・4990は，土師器である。4点とも刷毛目整形痕がよく残り，焼成は良好である。

2　土壙

当遺跡では，37基の土壙が検出されている。土壙の形状等に特徴のみられるものは文章で記述し，その他のものは一覧表に掲載した。なお，各土壙の遺構番号が連続していないのは，掘り込み以前に土壙と炉穴の区別が困難であったため，土壙と炉穴を同じ通し番号で調査したためである。



第22図　第2号土壙出土土器拓影図

第2号土壙（第26図）

本跡はA2j_5区に位置し，36号土壙と重複している。平面形は，長径0.8m・短径0.92mの楕円形を呈している。長径方向はN－44°－Wで，深さは8cmである。壁は外傾して立ち上がり，北西側が第36号土壙に切られている。この第36号土壙の方が，本跡よりも新しい。底面は平坦である。覆土は自然堆積で，少量の焼土粒子を含有している。遺物は，縄文土器片が13点出土している。

出土土器（第22図）

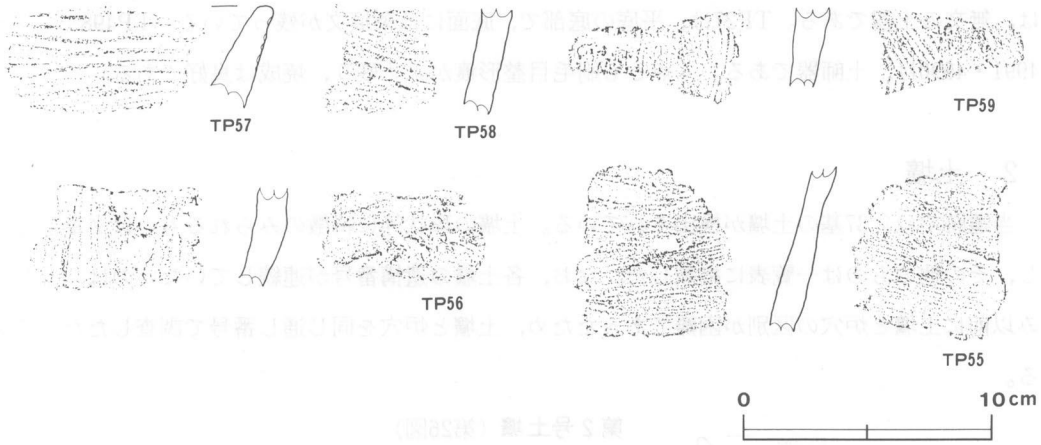
TP53は口縁部で，左下がりの太い沈線が施文されている。TP54も同様の沈線が，横位に施されている。

第3号土壙（第26図）

本跡は，A2j_5区に位置している。平面形は，長径1.4m・短径1.11mの楕円形を呈している。長径方向は，N－65°－Eである。深さは最も深い南東部で32cmあり，北西部はやや浅くなっている。これは底面が傾斜しているためではなく，ローム面が北西方向に傾斜していることによるものである。底面は凹凸がみられるが，良く締まっている。覆土は自然堆積で，上層中央部に多量の焼土が堆積している。この焼土は，遺構を確認する段階で検出されていたので，炉穴ではないかと考えていたが，掘り込みを開始すると焼土が底面からかなり高い位置に堆積していることが判明し，土壙としてとりあつかった。遺物は，縄文土器片と礫が合わせて17点出土している。

出土土器（第23図）

TP57・58・59・56・55とも，条痕文系の土器である。TP56は，角棒状の工具による刺突文が施されている。TP55は，非常に細かい条痕文が施されている。



第23図　第３号土壙出土土器拓影図

第19号土壙（第28図）

本跡は，A2j_7区を中心に位置している。平面形は，直径約1.1mの円形である。壁は外傾して立ち上がり，深さは59cmである。当遺跡で検出された土壙の中では，最も深い土壙である。底面はわずかに凹凸がみられるが，ほぼ平坦である。壁•底面ともロームで，非常に硬く締まっている。覆土は褐色土が２層に堆積しており，ローム粒子やブロックを含んでいる。遺物は，検出されていない。

第24号土壙（第28図）

本跡は，A3j_1区を中心に位置している。平面形は，直径1.65mの円形である。壁は，外傾して立ち上がっている。深さは，浅い部分で14cm，深い部分で30cmである。これは，底面が２段に掘り込まれているためで，南西側が深くなっており，土器片等はこの部分からの出土が多い。覆土に焼土粒子や炭化物を含んでいるため，炉穴の可能性もあったが，後に検出された第２炉穴群が北東１mに隣接しており，底面に炉床も検出されなかったことから土壙と判断した。覆土中の焼土粒子等は，炉穴群周辺の土砂や焼土粒子が流入したものと考えられる。遺物は，底面や覆土中から縄文土器片が17点出土している。

出土土器（第24図）

TP296は，口唇部に丸棒状の工具による押圧痕を有している。TP294は，条痕文が施された土器である。TP293は，沈線文系の土器であるが，いわゆる「沈線文」ではなく，ヘラ状の工具で

削ったような痕跡が残っている。TP295・292は，ともに幅広の沈線文が横位，あるいは斜位に施されている。

第24図　第24号土壙出土土器拓影図

第30号土壙（第29図）

本跡は，A3i_2区を中心に位置している。平面形は，長径2.52m・短径1.62mの楕円形を呈している。長径・短径とも当遺跡の土壙では最大級のものである。長径方向は，N—48°—Wである。確認面が東側に傾斜していたため，深さは西側が42cmと深く，東側は32cmと浅い。壁は，外傾して立ち上がっている。底面はやや凹凸がみられ，北西部及び南東部の壁下には，不定形の浅い落ち込みがみられる。覆土は自然堆積で，2～3層に分けられる。覆土上部には，焼土粒子を含む層がみられる。遺物は，検出されていない。

第34号土壙（第30図）

本跡は，B2c_0区を中心に位置している。調査を開始したところ，掘り込みが斜めに深く伸びており，通常の二分割法による調査が困難なため，遺構の南西側を確認面から切断する方法で調査を実施した。このため，遺構平面の一部は計測できなかった。

開口部の平面形は，長径3.25m・短径1.65mの不整楕円形である。開口部から北西方向に向けて4mほどは，階段状に徐々に深く掘り込まれており，それより奥はほぼ水平に掘られている。水平に掘られている部分の底面の深さは，確認面から1.7m前後である。開口部から掘り込まれている部分の断面形は，階段状の部分及び水平部分ともに円形を呈しており，直径は広い所で0.8m，狭い所で0.4mである。開口部から最奥部までの長さは，7.8mである。覆土は，開口部から流入して堆積した状況を示しており，黒褐色土が主である。水平に掘られている部分の覆土には，ローム粒子やロームブロックが多量に含まれている層がみられるが，これは上部の壁が落下した時に混入したものと思われる。遺物は，開口部付近の覆土から縄文土器片と礫等合わせて45点出土している。

出土土器（第25図）

TP312は浅い沈線が不規則に施され胎土に繊維を含んでいる。TP311は，表裏に条痕文が施さ

れ，胎土に繊維を含んでいる。TP310は，３本以上の沈線を横位に施し，上部が円形刺突文で充塡されている。

第25図　第34号土壙出土土器拓影図

土壙出土遺物（第33・34図）

第１号土壙

TP49・50・52・51・48とも，条痕文が施されている土器片である。TP51には，３本の低い隆線が付されている。

第４号土壙

TP76は，表裏とも条痕文が施されている土器片で，胎土には，繊維が含まれていない。

第７号土壙

TP279は，比較的太い沈線が縦位に施文されている。TP278は，表裏とも条痕文がみられる。TP277は，縄文が施文されている。TP276は，貝殻腹縁文が施文された土器片である。

第15号土壙

TP283は，深鉢形のミニチュア土器で，貝殻腹縁文が不規則に施されている。底部は，尖底を呈しているものと思われる。

第16号土壙

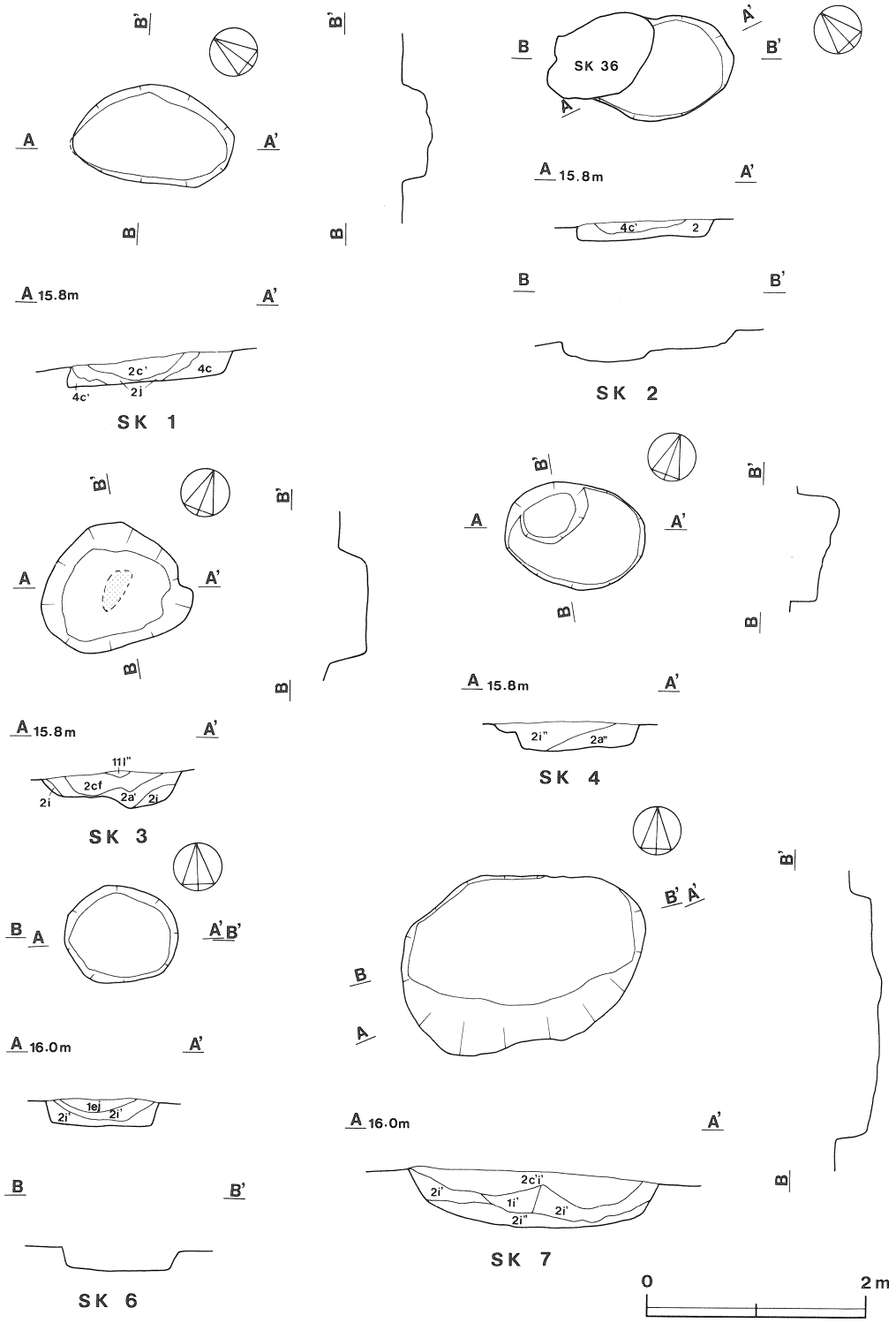
TP285は，沈線文系の土器片で，比較的広い沈線が斜位に施文されている。沈線の間隔は狭い。TP284は，縄文が施文されている。

第23号土壙

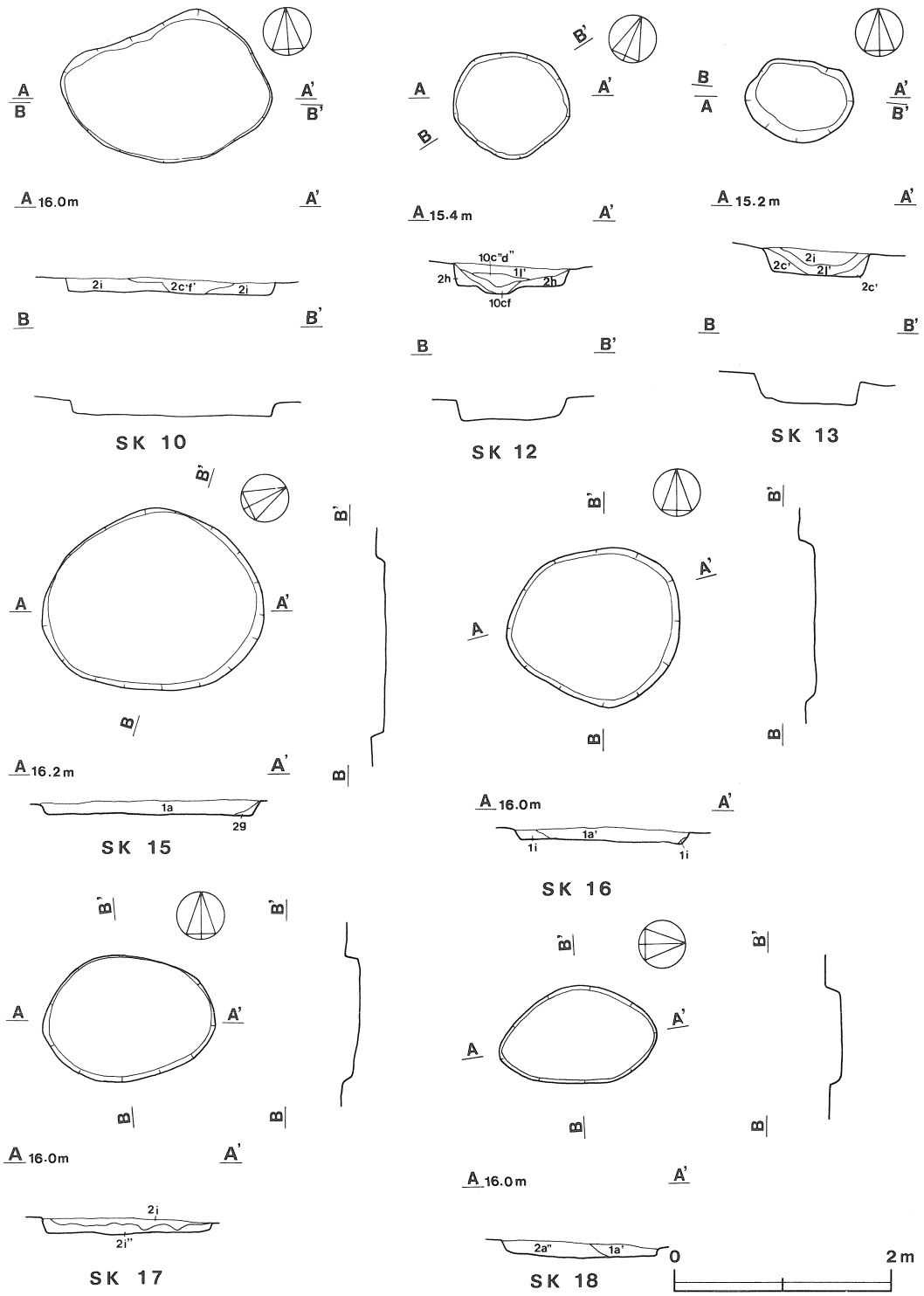
TP290は，口唇部に棒状工具による浅い押圧痕がみられ，以下胴部にかけて細い縄文が施されている。TP291は，条痕文を地文とし，一条の隆帯が横位に付されている。

第32号土壙

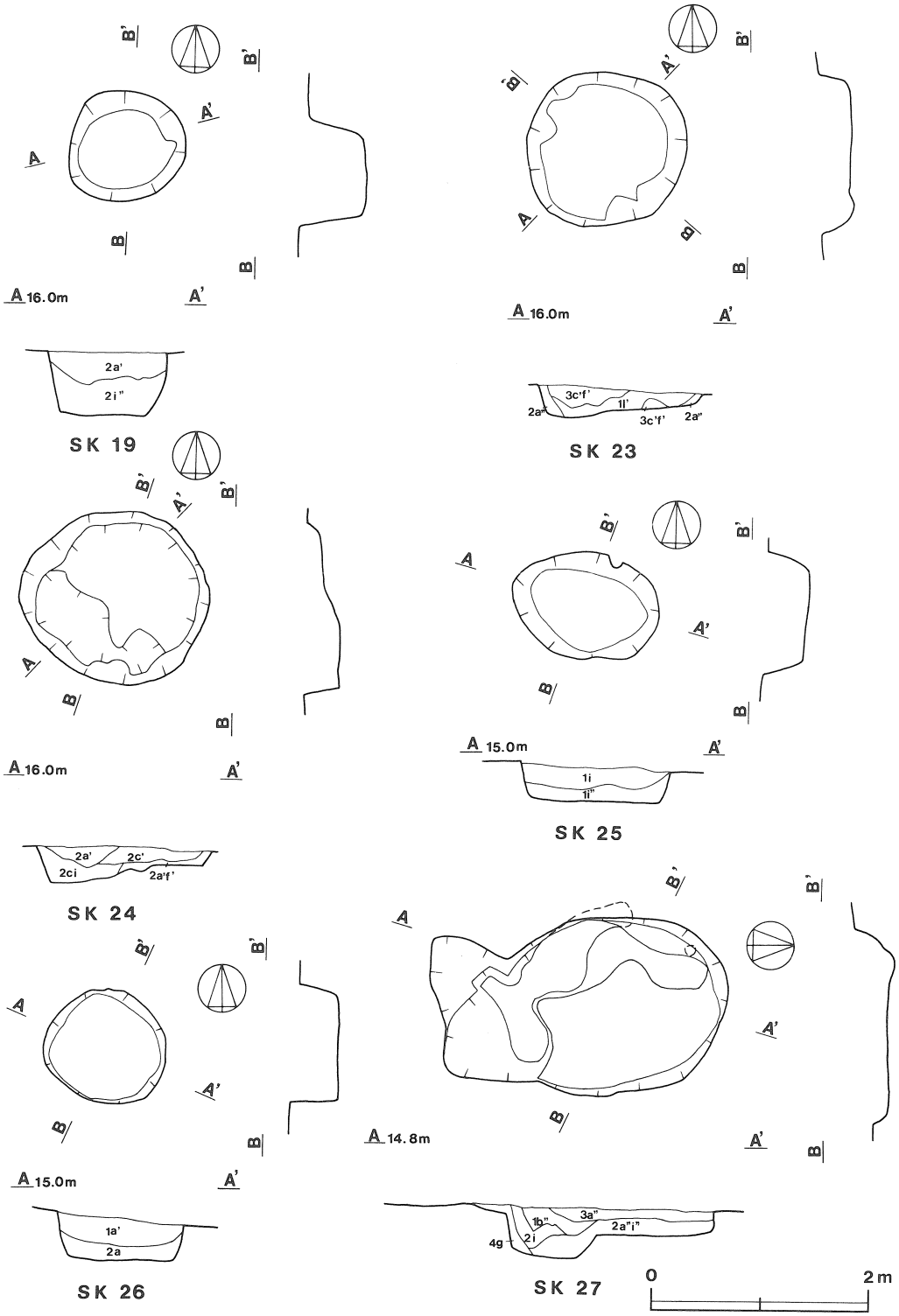
TP300・298は，沈線文を有している土器片である。比較的太い沈線が，斜位に施され，左下がり，右下がりの順で施文されている。TP299は，条痕文を有している土器片で，胎土には繊維を含んでいる。TP302は，結節文が横位に施文されている。


SK 36
A 15.8m
4c'
2
2c'
4c
2j
4c'
SK 1
SK 2
A 15.8m
2i"
2a"
SK 4
11i"
2cf
2a'
2j
2i
SK 3
A 16.0m
1ej
2i'
2i'
SK 6
A 16.0m
2c'i'
2i'
1i'
2i'
2i"
SK 7
0
2m

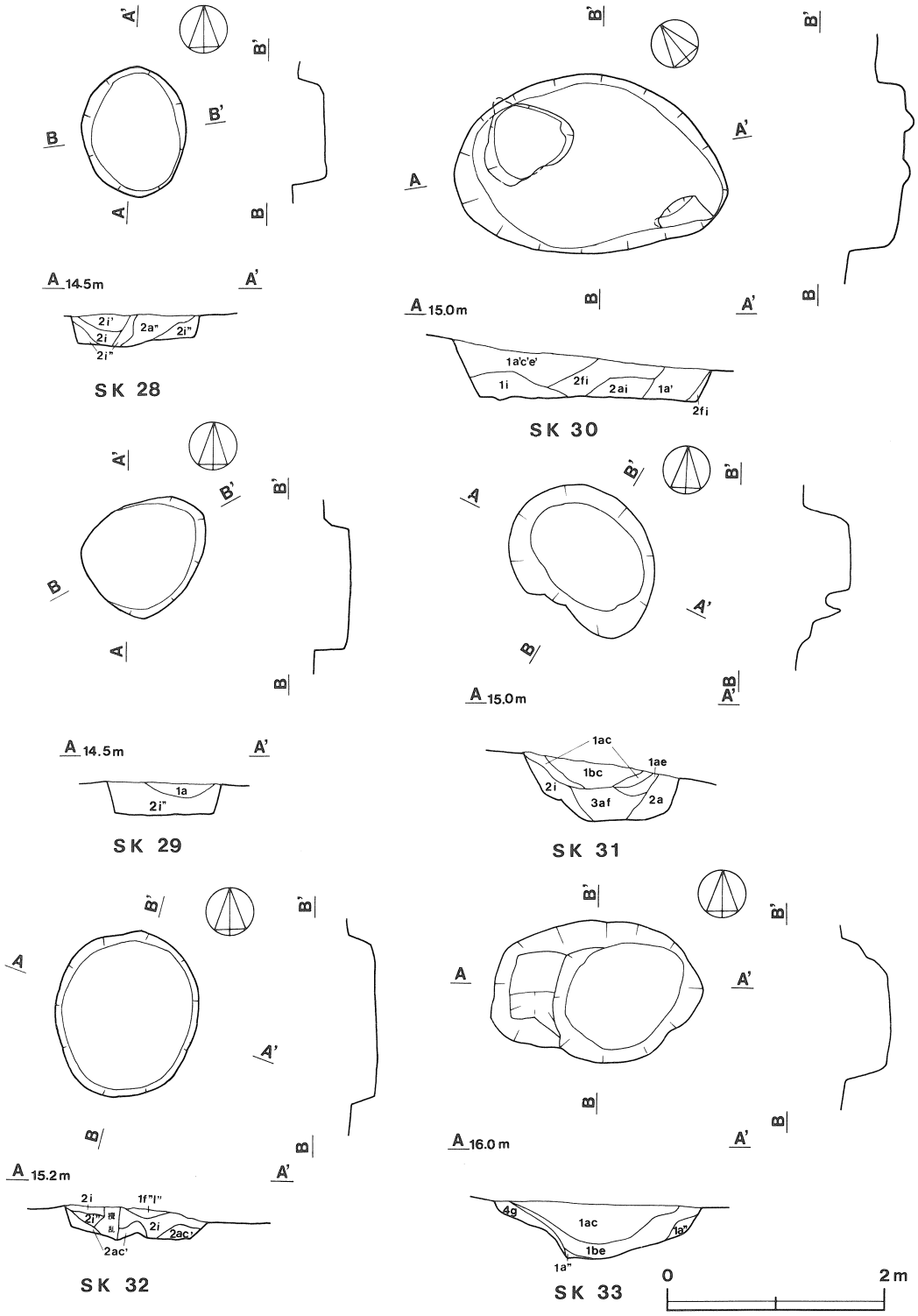
第26図　土壙実測図(1)


A 16.0m
2i
2c·f'
2i
SK 10
A 15.4m
10c"d"
1i'
2h
2h
10cf
SK 12
A 15.2m
2i
2c'
2i'
2c'
SK 13
A 16.2m
1a
29
SK 15
A 16.0m
1a'
1i
1i
SK 16
A 16.0m
2i
2i"
SK 17
A 16.0m
2a"
1a'
SK 18
0
2m

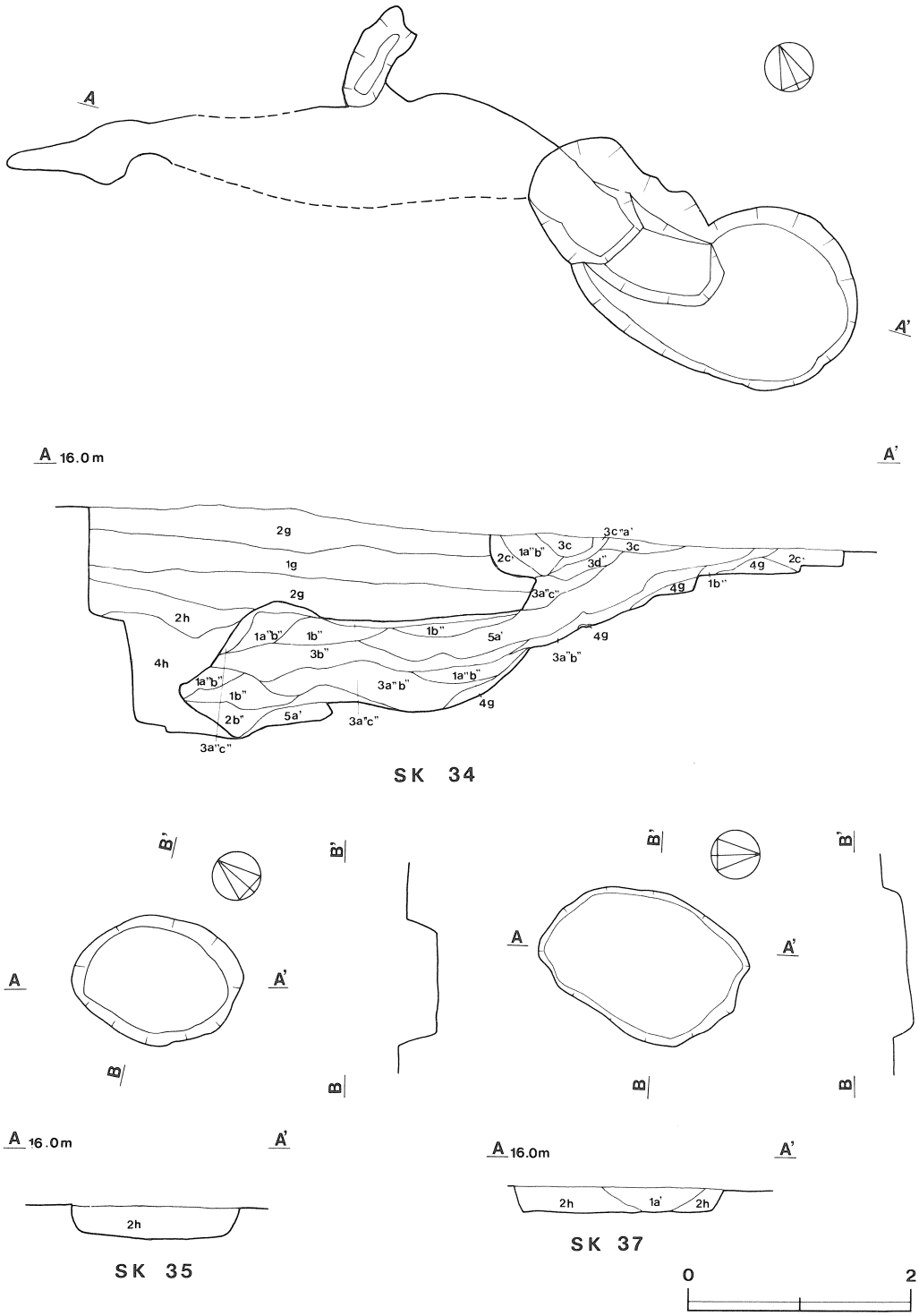
第27図　土壙実測図(2)


A 16.0m
A'
2a'
2i"
SK 19
A 16.0m
A'
3c'f'
1l'
2a'
3c'f'
2a"
SK 23
A 16.0m
A'
A 15.0m
A'
1i
1i"
SK 25
2a'
2c'
2ci
2a'f'
SK 24
A 15.0m
A'
1a'
2a
SK 26
A 14.8m
A'
3a"
1b"
2a"i"
2i
4g
SK 27
0
2m

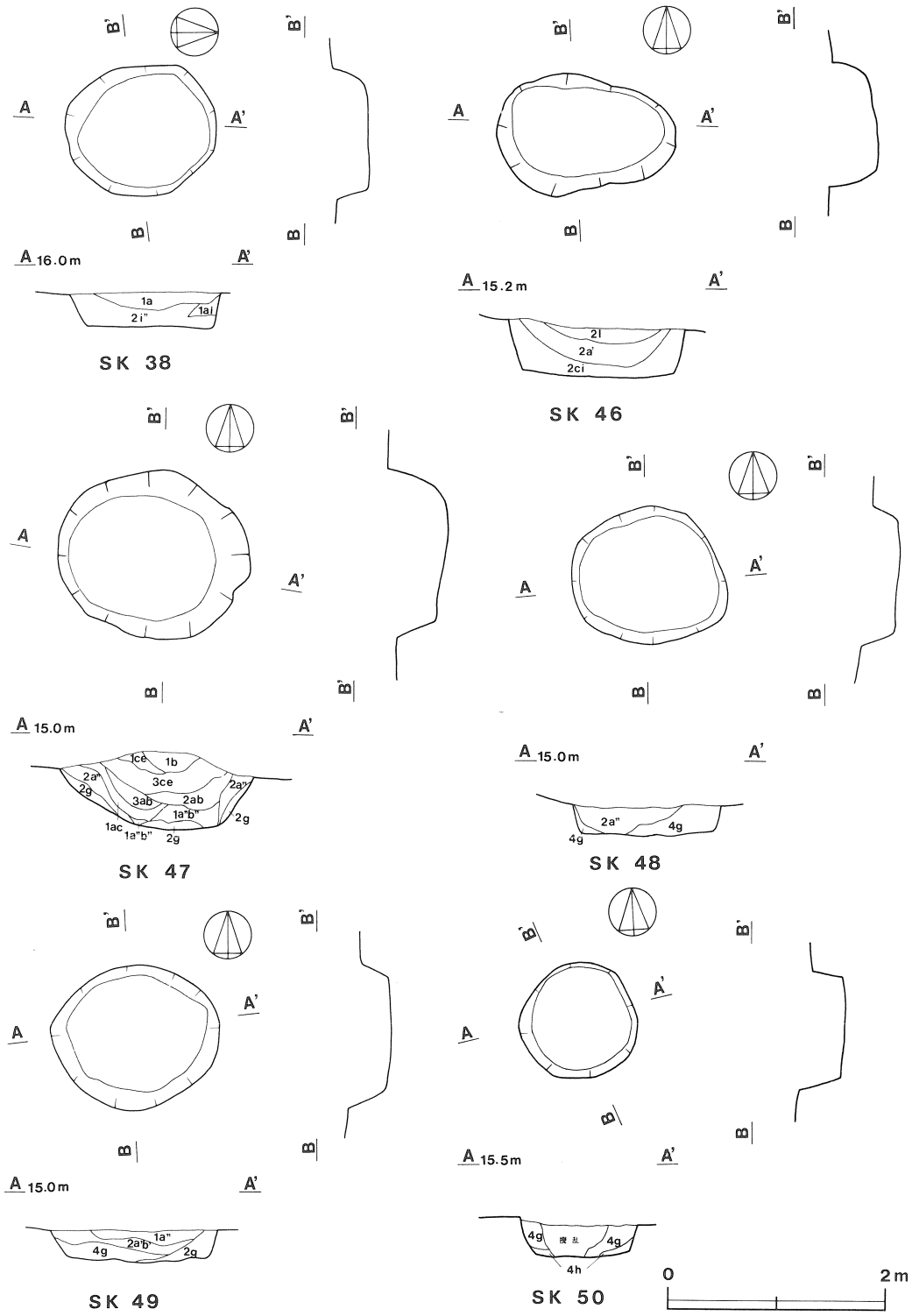
第28図　土壙実測図(3)


A 14.5m
2i'
2a"
2i"
2i
2i"
SK 28
A 15.0m
1a'c'e'
1i
2fi
2ai
1a'
2fi
SK 30
A 14.5m
1a
2i"
SK 29
A 15.0m
1ac
1ae
1bc
2i
3af
2a
SK 31
A 15.2m
2i
1f"l"
2i'
2i
2ac'
2ac'
SK 32
A 16.0m
4g
1ac
1a"
1be
1a"
SK 33
0
2m

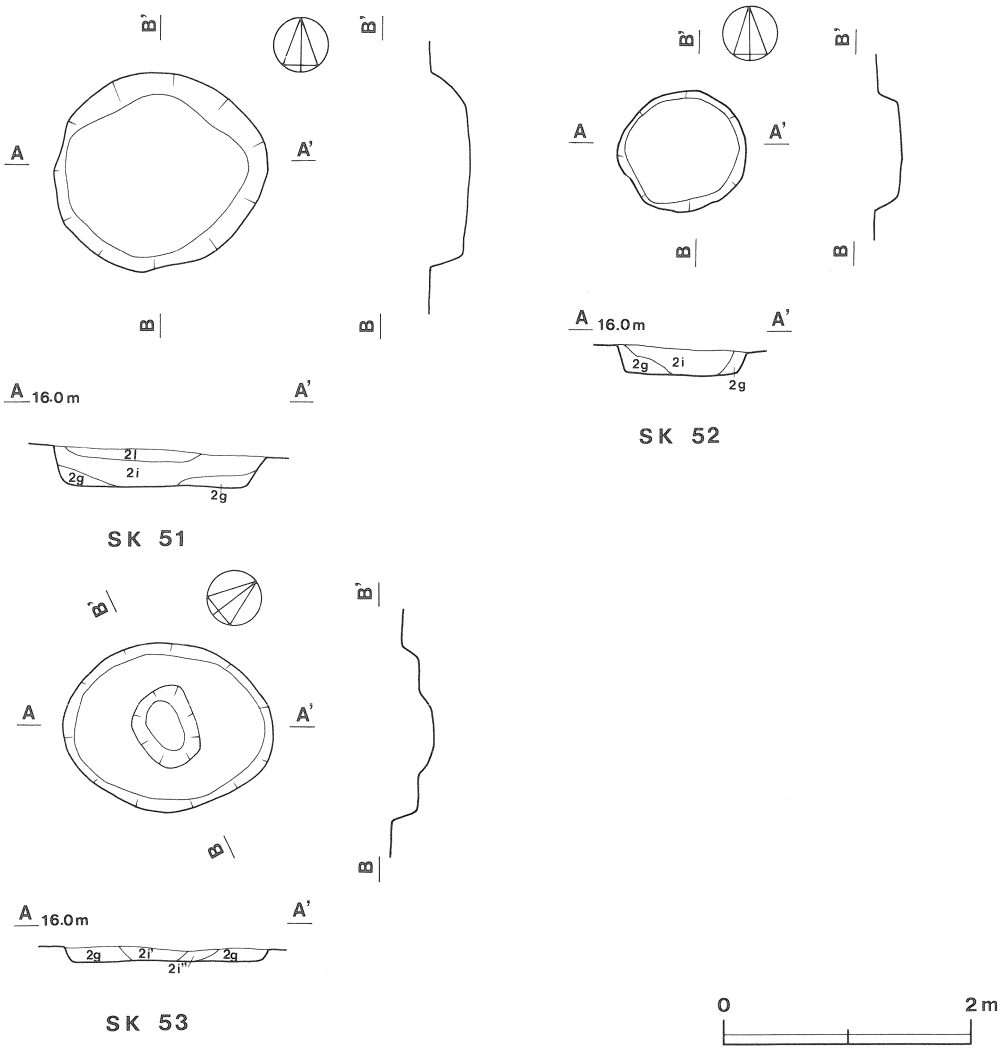
第29図　土壙実測図(4)


A
A'
A 16.0m
A'
2g
1g
2g
2h
4h
1a"b"
1b"
3b"
1b"
5a'
3a"c"
3c"a'
3c
3c
2c'
1a"b"
3d"
4g
2c'
1b"
4g
3a"b"
1a"b"
1b"
2b"
5a'
3a"c"
3a"b"
1a"b"
4g
4g
3a"c"
SK 34
B'
B'
A
A'
B
B
A 16.0m
A'
2h
SK 35
B'
B'
A
A'
B
B
A 16.0m
A'
2h
1a'
2h
SK 37
0
2

第30図　土壙実測図(5)


A 16.0m
1a
1ai
2i"
SK 38
A 15.2m
2l
2a'
2ci
SK 46
A 15.0m
1ce
1b
2a"
2g
3ce
2a"
3ab
2ab
1a"b"
2g
1ac
1a"b"
2g
SK 47
A 15.0m
2a"
4g
4g
SK 48
A 15.0m
1a"
2a'b
4g
2g
SK 49
A 15.5m
4g
撹乱
4g
4h
SK 50
0
2m

第31図　土壙実測図(6)



第32図　土壙実測図(7)

第33号土壙

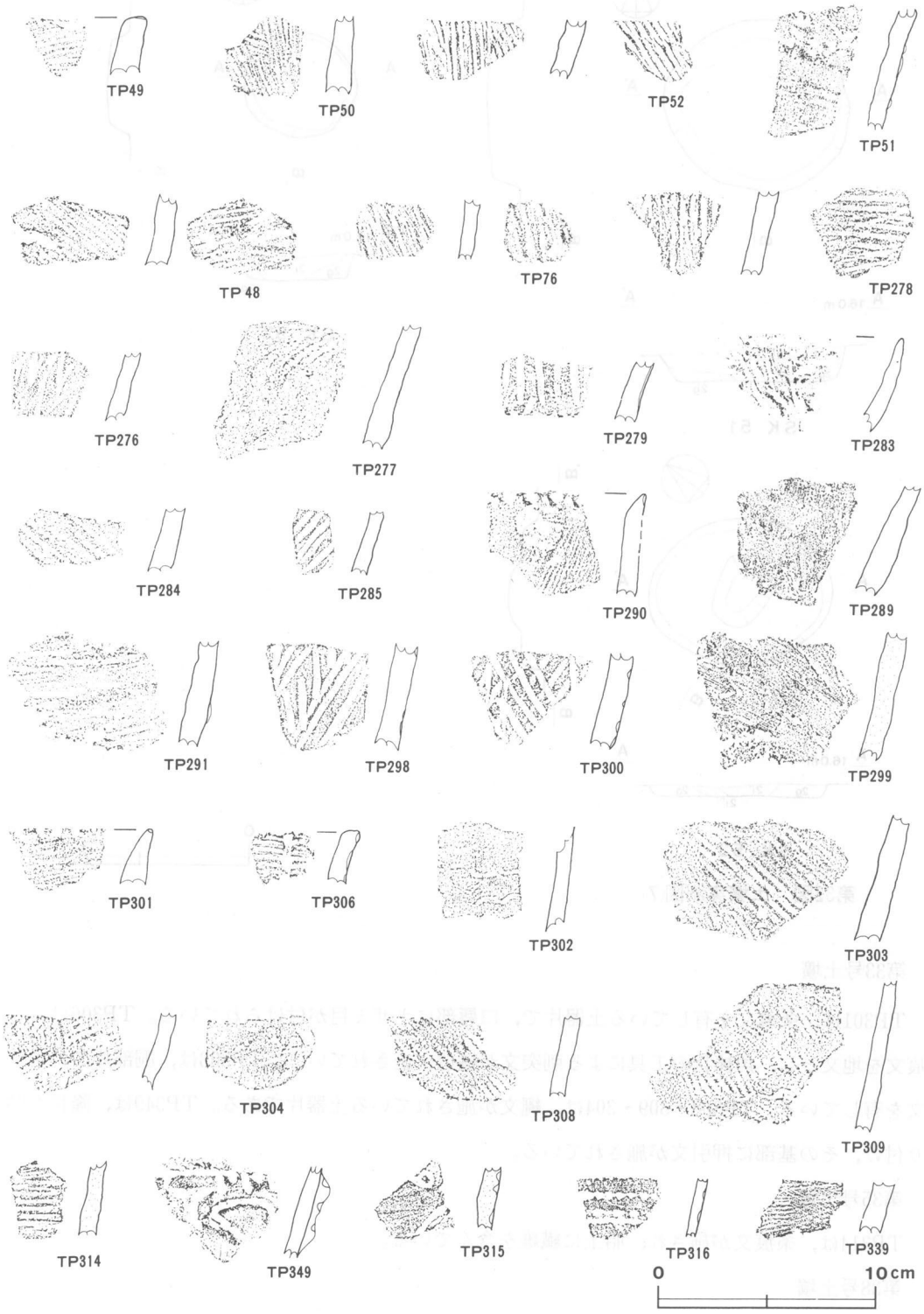
TP301は，条痕文を有している土器片で，口唇部にキザミ目が付けられている。TP306は，条痕文を地文とし，角棒状の工具による刺突文が縦位に施されている。TP303は，胴部片で，条痕文を有している。TP308・309・304は，縄文が施されている土器片である。TP349は，隆帯を貼り付け，その基部に押引文が施されている。

第35号土壙

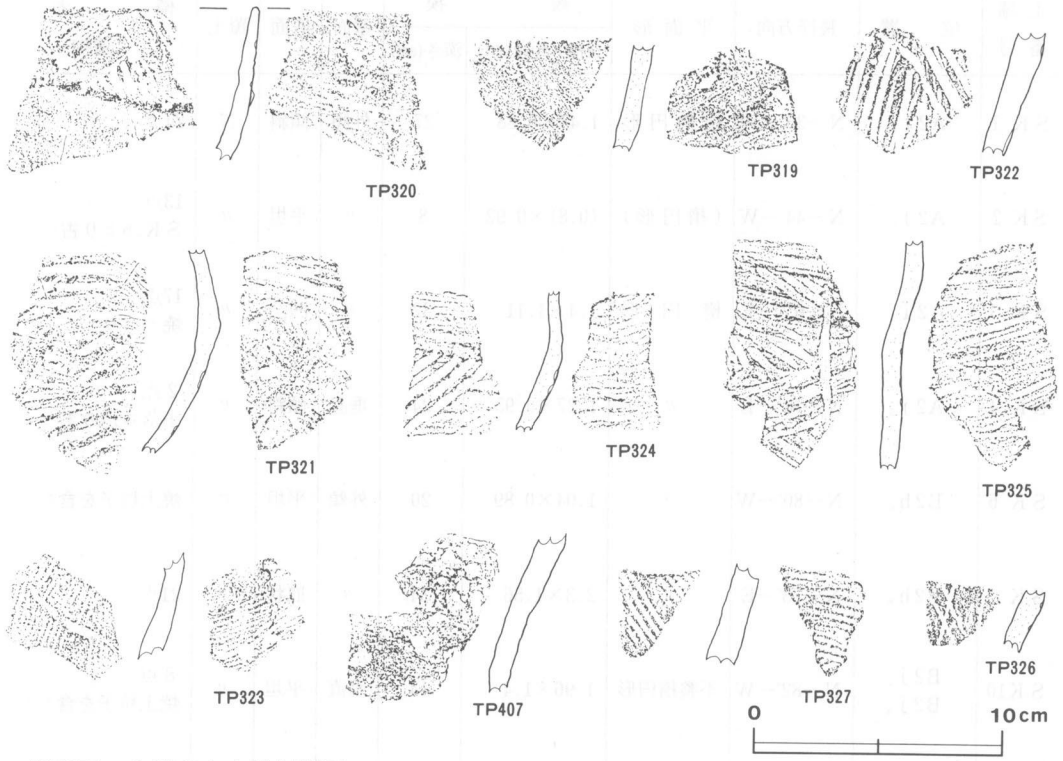
TP314は，条痕文が施され，胎土に繊維を含んでいる。

第38号土壙

TP339は，細い沈線が密集して施文されている。TP315は，沈線と竹管による刺突文が施され



第33図　土壙出土土器拓影図



第34図　土壙出土土器拓影図

ている。TP316は，連続刺突文が横位に施され，それが一部で沈線状になっている。

第46号土壙

TP320は，条痕文を地文とし，横位に付く隆帯で口縁部文様体が区画されている。区画内には，沈線と円形刺突文が施されている。TP319は，間隔の狭い条痕文が施され，胎土に繊維を含んでいる。

第48号土壙

TP321・325・324は，条痕文を地文とし，その上に沈線が施されている。TP407には，不規則な刺突文がみられる。TP323は，表面に縄文が，裏面には条痕文が施文されている。

第52号土壙

TP327は，表裏とも条痕文が施されているが，表面はより鮮明な条痕文である。TP326は，斜位の沈線が施文され，胎土に繊維を含んでいる。

土 壙 一 覧 表 ①

土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
SK 1	A2 i_5	N−36°−W	長楕円形	1.48×0.88	27	外傾	傾斜	N	24点
SK 2	A2 j_5	N−44°−W	(楕円形)	(0.8)×0.92	8	〃	平坦	〃	13点 SK36より古い
SK 3	A2 i_5	N−65°−E	楕円形	1.4×1.11	32	〃	凹凸	〃	17点 焼土あり
SK 4	A2 j_5	N−70°−E	〃	1.27×0.95	24	垂直	傾斜	〃	2点 小落ち込みあり
SK 6	B2 h_6	N−80°−W	〃	1.04×0.89	20	外傾	平坦	〃	焼土粒子を含む
SK 7	B2 h_8	N−73°−E	〃	2.3×1.56	34	〃	皿状	〃	21点
SK10	B2 j_7 B2 j_8	N−82°−W	不整楕円形	1.96×1.4	14	垂直	平坦	〃	8点 焼土粒子を含む
SK12	C2 a_9	N−65°−E	楕円形	1.08×0.97	20	外傾	〃	〃	焼土粒子を含む
SK13	C2 a_9	N−90°	〃	1.0×0.75	24	〃	傾斜	〃	焼土粒子を含む
SK15	B2 e_3 B2 e_4	N−29°−E	〃	2.05×1.64	12	〃	平坦	〃	20点
SK16	B2 g_5		不整円形	1.61×1.46	13	〃	〃	〃	13点
SK17	A2 h_7 A2 i_7	N−90°	楕円形	1.59×1.16	14	〃	〃	〃	
SK18	A2 i_6	N−8°−W	長楕円形	1.46×0.91	13	垂直	〃	〃	
SK19	A2 i_6 A2 i_7		円形	1.11×1.06	59	外傾	〃	〃	
SK23	A2 i_0 A2 j_0		〃	1.55×1.48	31	〃	〃	〃	8点
SK24	A2 i_0 A3 i_1	N−85°−W	楕円形	1.72×1.59	14 〜 30	〃	傾斜	〃	焼土粒子含む 17点

土 壙 一 覧 表 ②

土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
SK25	A3h_2	N−74°−W	楕円形	1.38×1.01	39	外傾	傾斜	N	
SK26	A3h_2 A3i_2		円形	1.13×1.03	44	垂直	平坦	〃	土層不明
SK27	A3g_3 A3h_3	N−13°−W	長楕円形	2.68×1.63	9 〜 35	外傾	凹凸	〃	2点
SK28	A3h_3	N−3°−E	楕円形	1.17×0.97	32	〃	平坦	〃	
SK29	A3h_3	N−30°−E	〃	1.2×1.0	29	垂直	〃	〃	
SK30	A3h_2・h_3 A3i_2・i_3	N−48°−W	長楕円形	2.52×1.62	32 〜 42	外傾	傾斜	〃	焼土粒子を含む
SK31	A3j_2・j_3 B3a_3	N−32°−W	楕円形	1.51×1.22	11 〜 45	段状	平坦	〃	7点 焼土粒子を含む
SK32	B3b_1 B3b_2	N−14°−E	〃	1.53×1.31	24	外傾	〃	〃	焼土・炭化物を含む 47点
SK33	B2a_9・a_0 B2b_9・b_0	N−89°−W	不整楕円形	1.82×1.31	22 〜 44	〃	皿状	〃	23点 焼土粒子を含む
SK34	B2c_9・c_0 B2d_9・d_0 B2e_0	N−54°−W	不定形	3.25×1.65	170	段状	傾斜	〃	45点 地下式壙に類似
SK35	B2d_9 B2e_9	N−34°−W	楕円形	1.5×1.25	34	外傾	平坦	〃	6点
SK37	B2a_8 B2b_8	N−31°−E	〃	1.79×1.26	21	〃	〃	〃	2点
SK38	B2b_8	N−1°−E	〃	1.39×1.21	30	〃	〃	〃	9点
SK46	A3i_2	N−89°−W	長楕円形	1.63×1.07	45	〃	〃	〃	14 焼土粒子を含む
SK47	A3g_2	N−80°−W	楕円形	1.79×1.55	54	〃	皿状	〃	焼土粒子を含む
SK48	A2f_8	N−72°−W	〃	1.49×1.26	31	〃	平坦	〃	12点

土 壙 一 覧 表 ③

土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
SK49	A2f$_9$	N—83°—E	楕円形	1.56×1.32	34	外傾	平坦	N	3点
SK50	A2g$_8$		円形	1.05×1.05	36	〃	〃	K	
SK51	B2c$_9$		不整円形	1.7×1.55	31	〃	〃	N	焼土粒子含む 2点
SK52	B2d$_6$		円形	1.02×0.97	21	〃	〃	〃	16点
SK53	B2d$_8$	N—33°—E	楕円形	1.67×1.34	19	〃	〃	〃	6点 中央部にくぼみあり

3 炉穴

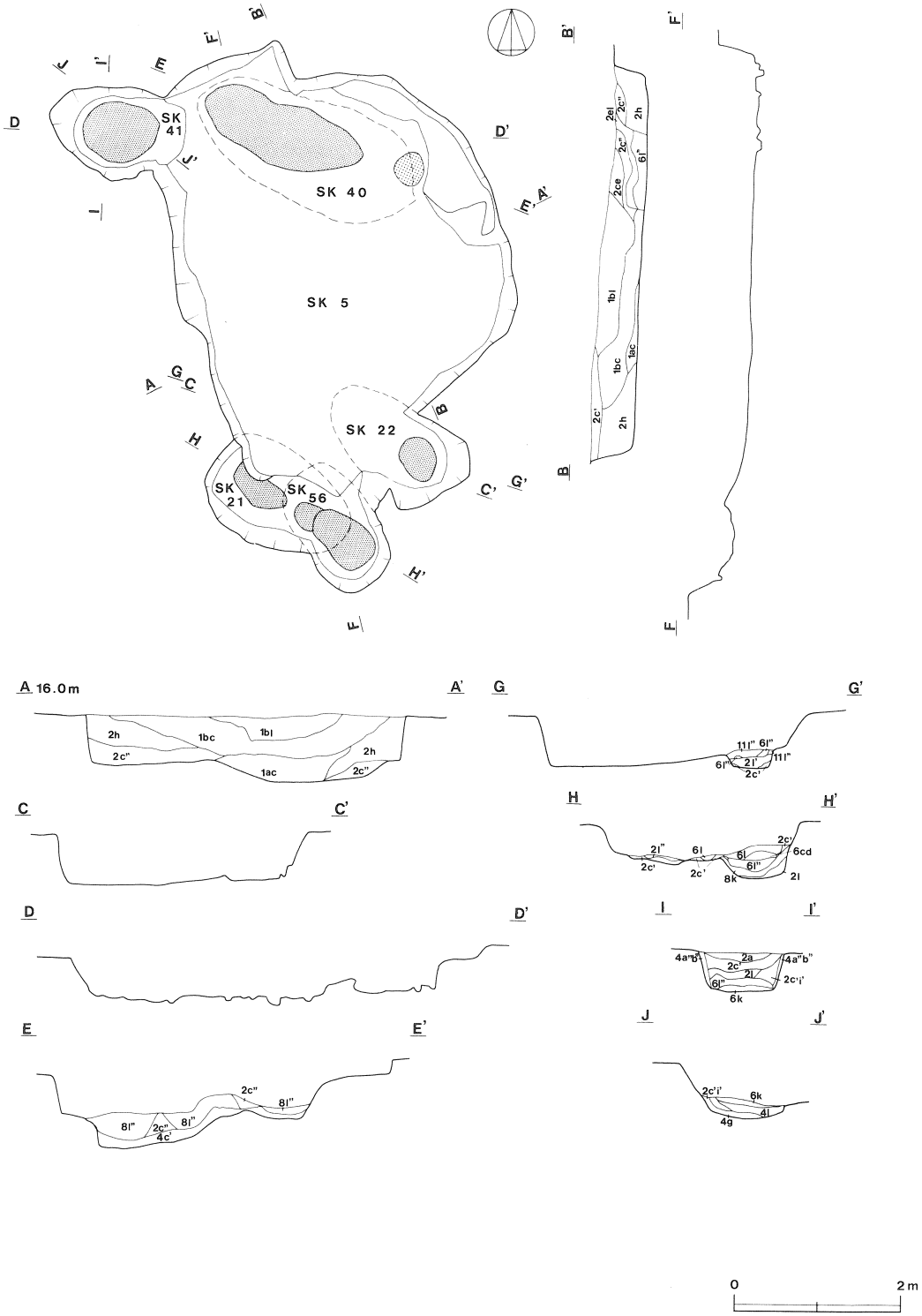
当遺跡で調査された炉穴は，19基である。このうち独立した炉穴は9基で，残る10基は2か所の炉穴群の中に含まれ，それぞれ5基の炉穴で構成されている。

第1炉穴群（第35図）

本跡は，A2j$_5$・A2j$_6$・B2a$_6$の3調査区にかけて確認された炉穴群である。本群には，第40号・41号炉穴と第21・22・56号炉穴の5基が集中している。遺構確認の段階では，A2j$_6$区に暗褐色土の落ち込みが認められただけで，炉穴に伴うような焼土粒子は認められなかった。しかし，調査を進めていくと第40号炉穴の焼土が検出され，ほとんど同時に，第21・22号炉穴が検出された。さらに，第40号炉穴を調査中に第41号炉穴が検出され，第21号炉穴を調査中には，第56号炉穴が検出された。炉穴群としての平面形は不定形で，北に第40・41号炉穴，南に第21・22・56号炉穴が構築されている。なお，本稿では，炉穴の立ち上がり部を炉壁，炉穴の底面部を炉穴底面，火の焚かれたと思われる掘り込み部を炉床と呼称した。

第21号炉穴は，第56号炉穴と重複しており，平面形は長径1.8m・短径1.2mの楕円形であると推定される。長径方向はN—59°—Wで，炉穴底面までの深さは43cmである。壁は，南側から西側にかけて残っており，外傾して立ち上がっている。炉床は，北西に寄った位置に検出され，平面形は75cm×35cmの楕円形で，深さは5～10cmである。炉床はあまり焼けておらず，軟らかである。遺物は，出土していない。

第56号炉穴は，第21号炉穴と重複しており，平面形は推定長径1.6m・同短径0.92mの楕円形を呈するものと思われる。長径方向は，N—34°—Wである。壁は，南側二分の一が残っており，外傾して立ち上がっている。炉穴底面は，第21号炉穴と重複していることもあり，残っている部分は少ない。炉穴底面までの深さは45cmである。炉床は，ロームを鍋底状に掘り下げたもので，内部



第35図　第1炉穴群実測図

には多量の焼土が堆積している。また，炉床は硬く焼けており，長い間使用されたと思われる。遺物は，出土していない。

第22号炉穴は，第56号炉穴の東に隣接して位置している。本跡の長径は1.6m（推定長），短径は1.0mである。長径方向は，N—55°—Wである。壁は，外傾して立ち上がっている。足場は，ロームで硬く締まっている。炉床は，ロームを鍋底状に約20cm掘り下げたもので，確認面からの深さは，65cmである。炉床内部には，焼土の堆積がみられたが，炉床自体はそれほど焼けておらず，長期間使用されたとは考えられない。遺物は，覆土から7点の縄文土器片が出土している。

第40号炉穴は，本群の北側に位置しており，平面形は長径2.89m・短径1.21mの長楕円形を呈している。長径方向は，N—65°—Wである。本群中では，最大規模の炉穴である。壁は，北側だけ検出されたが，外傾して立ち上がっている。東西側及び南側は各炉穴共通の炉穴底面とみられる平坦部につながっていて，はっきりした壁は検出されなかった。焼土は北西に寄って検出され，2×0.75mの範囲に堆積している。炉床はロームを30cm掘り下げたもので，ローム面まで赤く焼けており極めて長期間使用されたことがうかがえる。炉床内部は北西側が最も深く，炉穴底面から40cmあり，南東側ほど浅くなっている。この浅い部分が，炉穴底面として使われたものと考えられる。遺物は，出土していない。

第41号炉穴は，第40号炉穴の西側に検出され，平面形は長径1.66m・短径1.13mの楕円形を呈している。長径方向は，N—80°—Wである。壁は，東側を除いて確認でき，急角度で立ち上がっている。焼土は，やや西に寄って検出され，長径0.95m・短径0.75mの範囲内に堆積している。炉床は，ロームを22cm掘り下げてあり，赤く焼け極めて硬く締まっている。内部はほとんどが焼土で，長期間使用された様相を呈している。第40号炉穴が東側に隣接して検出されているが，重複は認められない。遺物は覆土から縄文土器片が4点出土している。

本炉穴群は，以上のように北側に2基，南側に3基の炉穴が単独あるいは重複して検出されている。この北側と南側の二つのグループ間には，2m×3mぐらいの炉穴のない部分があり，ここは，ロームあるいは焼土粒子等の混入した褐色土が硬く締って堆積しており，各炉穴に共通の炉穴底面として使われたものと考えられる。各炉穴の新旧関係は明確ではないが，出土遺物等からみて南側の3基が北側の2基よりもやや新しいと考えられる。

第1炉穴群出土土器（第36・37・38・39図）

出土土器観察表　（第1炉穴群）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P41	深鉢 縄文土器	B(18.3)	胴部の屈曲部に隆帯を付し，口縁部文様帯を区画している。ゆるく外反する口縁部には，刺突文と沈線文が施文され，口唇部には刻み目が見られる。	にぶい赤褐・褐灰 砂粒・長石 普通	20%

第36図　第1炉穴群出土土器実測図

第37・38・39図は，第1炉穴群から出土した土器片の拓影図である。TP79は，斜行沈線文が施され器厚は非常に厚い。TP91は，沈線で幾何学的な文様を区画し，区画内には沈線が充塡されている。TP473は，横走する沈線文だけで構成されている。TP92は，シャープで太い沈線が斜位に施されている。TP64・77・60は，屈曲部に断面三角形の隆帯を付し，胴部と口縁部を区画した条痕文系の土器で，沈線文と円形刺突文で文様帯がうめられている。隆帯の頂部にはキザミ目が入っている。TP82は，横位及び縦位の隆帯で文様帯を区画し，間に角ばった施文具による連続した刺突文が充塡されている。TP83は，擦痕文を施した後に連続した角形の刺突文を付している。TP86は，内ソギ状口縁の土器で，口縁部文様帯と胴部を横位の隆帯で区画している。文様帯内部は，円形刺突文を中心にして放射状に角形の連続刺突文が施文されている。TP81は，口縁部文様帯に半截竹管による円形の沈線文と角棒状の工具による縦位の刺突文が施文されている。口唇部は平縁で，キザミ目が入っている。TP94は，口唇部にキザミ目があり，横位の微隆起線で口縁部無文帯と胴部が区画されている。微隆起線の下部には，斜位の沈線が施文されている。TP85は，器面調整時の擦痕文のみられる土器で，口唇部にキザミ目を有している。TP72は，条痕文だけの土器で，口唇部に棒状工具の押圧痕が施されている。TP93は貝殻背圧痕文が2か所に施されている。TP75・62・65は，条痕文が施され，横位の隆帯を付している。TP62・65の隆帯には，丸棒状の工具による押圧痕が施文されている。3点とも胎土に繊維を含んでいる。TP67・69・68は条痕文だけがみられる土器片である。条痕の方向は不規則で，斜位に施されるものが多い。胎土には，繊維を含

第37図　第1炉穴群出土土器拓影図（1）

第38図　第1炉穴群出土土器拓影図 (2)

第39図　第1炉穴群出土土器拓影図 (3)

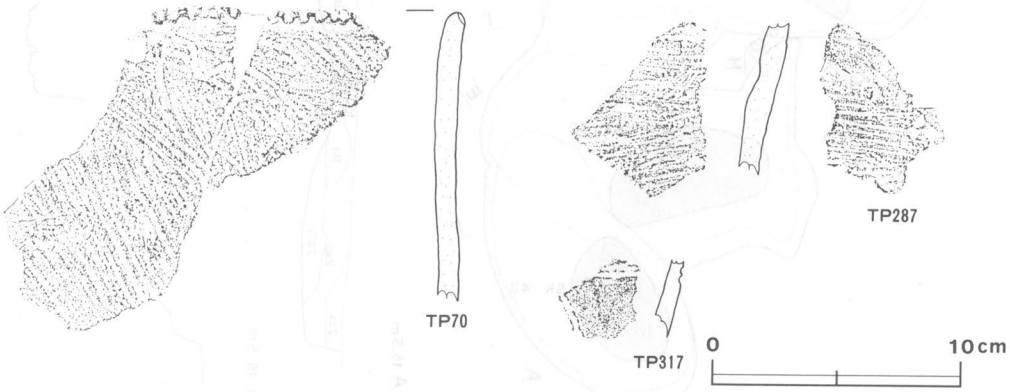
んでいる。

第22号炉穴出土土器（第40図）

TP70は，条痕文が施文されている口縁部片で，口唇部外側に連続した棒状工具の押圧が施されている。胎土には，繊維を含んでいる。TP287も条痕文が施されているが，TP70よりも間隔が密である。

第41号炉穴出土土器（第40図）

TP317は，横位及び斜位の沈線文が施されている。

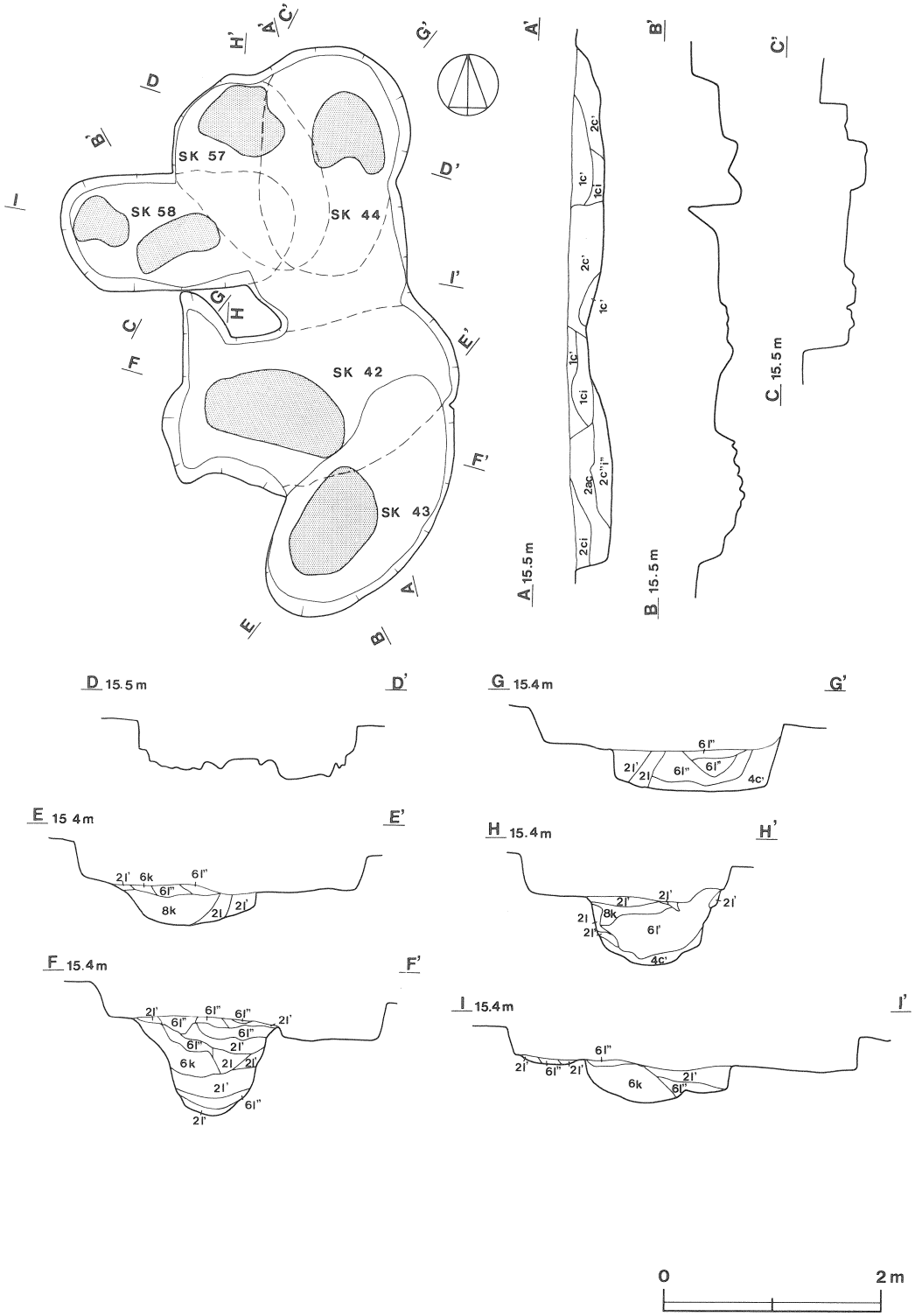


第40図　第22・41号炉穴出土土器拓影図（TP70・287-22号炉穴 TP317-41号炉穴）

第2炉穴群（第41図）

本群は $A3h_1$・$A3i_1$区を中心に確認された炉穴群である。第42・43・44・57・58号炉穴の5基で本群を構成している。本群も第1炉穴群と同じように，各炉穴が北側と南側に分かれて位置しており，北側には第44・57・58号炉穴が，南側には第42・43号炉穴が構築され全体の形状は，南北に長い不定形である。

第42号炉穴は，第43号炉穴と重複しており，第43号炉穴に本跡の一部が切られている。平面形は，長径2.75m・短径1.34mの長楕円形を呈していたものと考えられる。長径方向は，N－68°－Eである。壁は，東側と西側の一部が残っており，両壁とも外傾して立ち上がっている。炉穴底面は，焼土粒子を少量含んだロームで，硬く締まっている。確認面から炉穴底面までの深さは30cmである。焼土は，西側に寄って検出され，焼土の下が掘り込まれて炉床がつくられている。本跡の炉床は，掘り込みが非常に深い点と，掘り込み内に炉床と思われる層が2層検出された点が他の炉穴ではみられない特徴である。炉床の掘り込みは，炉穴底面から90cmの深さまで掘り込まれており，これは他の炉穴と比べて2～3倍も深いものである。比較的深い第57号炉穴でも55cmであり，本跡は57号より35cmも深いことがわかる。これほどの深さを有していると，日常の煮たきをする場としては極めて不便であったと思われ，他に特別な用途があったのではないかと考えら

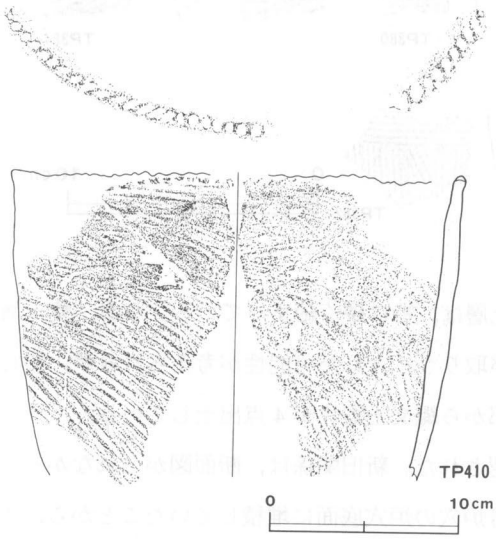


第41図　第2炉穴群実測図

れる。しかし，何のために，あるいはどのように使用されたかは，不明である。2層の炉床は，炉穴底面から85cmと55cmの深さの部分に検出されている。より深い下部の炉床は，ロームが赤褐色に変色し硬く焼けている。周囲のロームも熱を受けて褐色に変色してくずれやすくなっており，かなり頻繁に使われたことがうかがえる。上部の炉床は，下部の炉床よりさらに硬く締まっており，より長期間使用されたものと考えられる。上部の炉床の覆土からは，条痕文系の土器片が10点以上出土している。

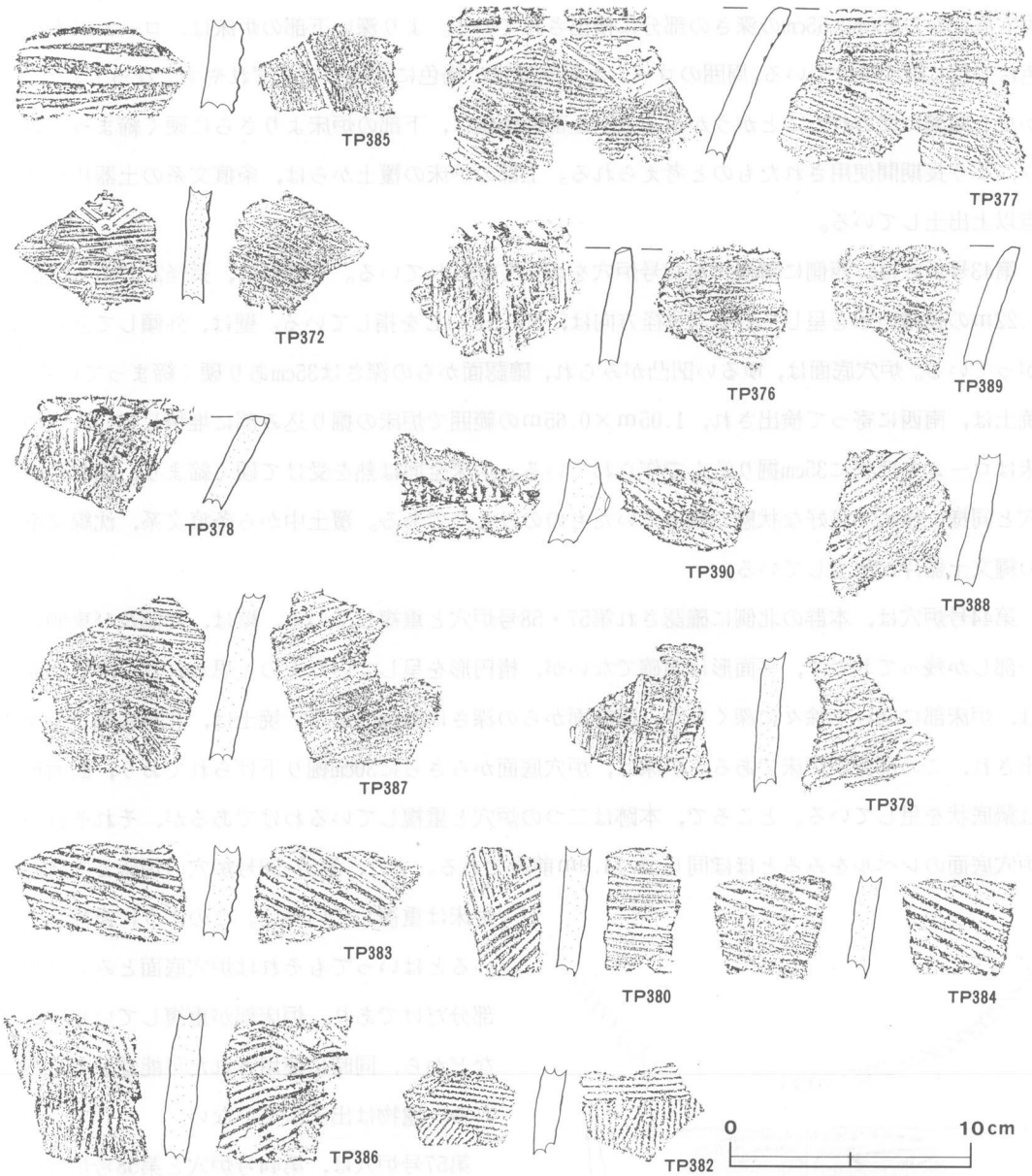
第43号炉穴は，西側に隣接する42号炉穴を切って作られている。平面形は，長径2.47m・短径1.22mの長楕円形を呈している。長径方向は，N－31°－Eを指している。壁は，外傾して立ち上がっている。炉穴底面は，ゆるい凹凸がみられ，確認面からの深さは35cmあり硬く締まっている。焼土は，南西に寄って検出され，1.05m×0.65mの範囲で炉床の掘り込み部に堆積している。炉床はロームを皿状に35cm掘り込んで作られている。炉床全面は熱を受けて硬く締まり，第42号炉穴と同様，極めて良好な状態で残っていたもののひとつである。覆土中から条痕文系，沈線文系の縄文土器片が出土している。

第44号炉穴は，本群の北側に確認され第57・58号炉穴と重複している。壁は，北側及び東側の一部しか残っておらず，平面形は明確でないが，楕円形を呈していたものと思われる。炉穴底面は，炉床部に向けて徐々に深くなり，確認面からの深さは31cmである。焼土は，北東に寄って検出され，この部分が炉床である。炉床は，炉穴底面からさらに30cm掘り下げられており，断面形は鍋底状を呈している。ところで，本跡は二つの炉穴と重複しているわけであるが，それぞれの炉穴底面のレベルをみるとほぼ同じで，14.9m前後である。また，第57・58号炉穴の炉床と本跡の炉床は重複していない。このように重複しているとはいってもそれは炉穴底面とみられる部分だけであり，炉床部が重複していない点などから，同時に使用された可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第42図　第2炉穴群出土土器実測図

第57号炉穴は，第44号炉穴と第58号炉穴の間に確認された。壁は，北西側の一部が残っているだけで，他は，重複のため残っていない。平面形や規模なども，計測不可能である。炉穴底面は，かなり凹凸がみられ，確認面から足場までの深さは35cmである。炉床は，北壁直下から掘り込まれ，足場からの深さは，55cmと比較的深いものである。内部には，焼



第43図　第２炉穴群出土土器拓影図

土が堆積しており，３層に分けられる。中央の焼土層は，特に硬く締まっている。なお，焼土層の一部が北壁までのびているので，北壁側に煙道が取りつけられた可能性が考えられるが，形状を検出することはできなかった。遺物は，炉床内部から縄文土器片が４点出土している。

第58号炉穴は，第57号炉穴の南西に重複して確認された。新旧関係は，断面図がとれなかったため明確にできないが，第58号炉穴の焼土が第57号炉穴の炉穴底面に堆積していたことから，本跡のほうが新しいと思われる。平面形は楕円形を呈していたことが推定されるが，東側の壁が残っ

ていないため断定はできない。確認された範囲での長径は1.7m，短径は1.07mである。長径方向は，N—90°である。壁は外傾して立ち上がっている。炉穴底面は平坦であるが，全体的に東側に緩く傾斜している。炉穴底面の深さは，35～40cmである。焼土は西壁直下とやや中央よりの2か所に検出され，中央寄りの焼土堆積部が炉床である。炉床は，縦0.8m・横0.35mの長方形を呈しており，深さは35cmである。炉床内部は，極めてよく焼けており，特に，6K層はそのほとんどが焼土ブロックである。西壁直下の焼土堆積部は，長径0.5mの不定形の範囲に堆積しており，深さは4～5cmである。熱を受けて硬くなった層も検出されない。本跡の形状から考えて，煙道部が西側にあったと推定されるため，それに関連する焼土かと思われる。遺物は，出土していない。

以上の5基の炉穴で構成されているのが第2炉穴群である。本群は，遺構確認の段階では第43号及び44号炉穴上部に少量の焼土粒子が見られるだけで，2基の炉穴が重複しているようにみえたが，調査の結果，他に3基の炉穴が重複していた。覆土は，焼土粒子を含む褐色土が主であり，遺物も土器片や礫が出土しているが，ほとんど覆土からの出土であり，炉穴の新旧関係を判断できる出土状況ではなかった。42号炉穴からは，覆土中から条痕文系の土器片が出土しているが，やはり各炉穴の新旧関係を決定できるものではない。検出された炉床の残存状況や位置関係，あるいは覆土から出土した土器片等から推定すると，まず，北側の3基が最初に作られ，その後に南側の2基が作られたものと推定される。南側の2基については，新旧関係が明確で，第43号炉穴のプランが，第42号炉穴の炉床を切っており，第43号炉穴の方が新しい。北側の3基では，第44・57号炉穴がほぼ同時期のもので，その後第58号炉穴が増設されたものと推定される。以上のように推定ではあるが，北から南に向け，順に拡大されて本群が形成されたものと考えられる。

第2炉穴群出土土器（第42・43図）

出土土器観察表（第42図）　（第2炉穴群）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
TP410	深鉢 縄文土器	A(25.0) B(16.5)	胴部は直線的に立ち上がり，口唇部でわずかに外反している。口唇部に押圧痕を有する。内外面とも条痕文が施文されている。胎土に繊維を含んでいる。	にぶい橙 砂粒・スコリア 良好	15%

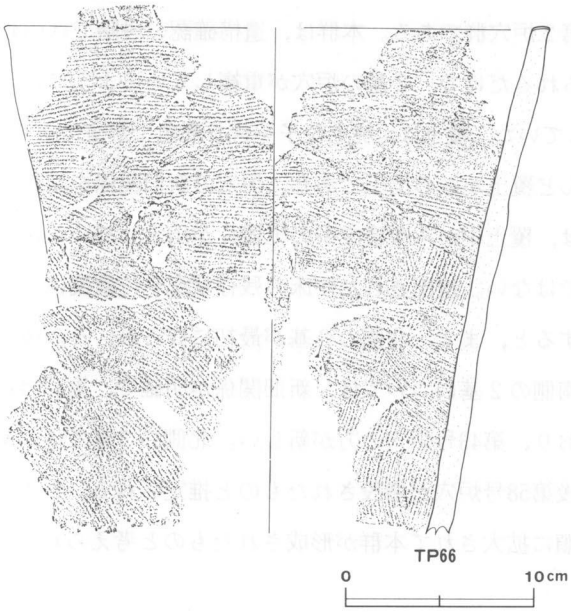
第43図は，第2炉穴群から出土した土器片の拓影図である。TP385は，太さの違う2種類の横走する沈線文が施され，裏面にも斜位の沈線が1本みられる。TP377・372は，沈線による幾何学的な文様で区画され，沈線の交点には，円形刺突文が施されている。TP376は，擦痕状の痕跡が残り，口唇部には，棒状工具による圧痕が施されている。TP389は，整形痕が残るだけの無文の土器である。TP378は，口唇部が平坦に削られ，角棒状工具による深めの刺突文が回っている。TP390は，横位に付けた隆帯の頂部にキザミ目が入っている。TP388・387・379・383・380・384・386・382は，条痕文を施した土器片である。条痕文の方向は，横位，縦位，斜位，とさまざまであり，

規則性はみられない。

第42号炉穴出土土器（第44・45図）

出土土器観察表（第44図）　(42号炉穴)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
TP66	深鉢 縄文土器	A (29.2) B (26.9)	胴部は直線的に立ち上がり，ゆるく外反しながら口縁部にいたる。口唇部は角頭状を呈し，刻み目を有している。内外面に条痕文が施されている。	にぶい橙・褐灰・にぶい褐 砂粒 やや軟弱	25%

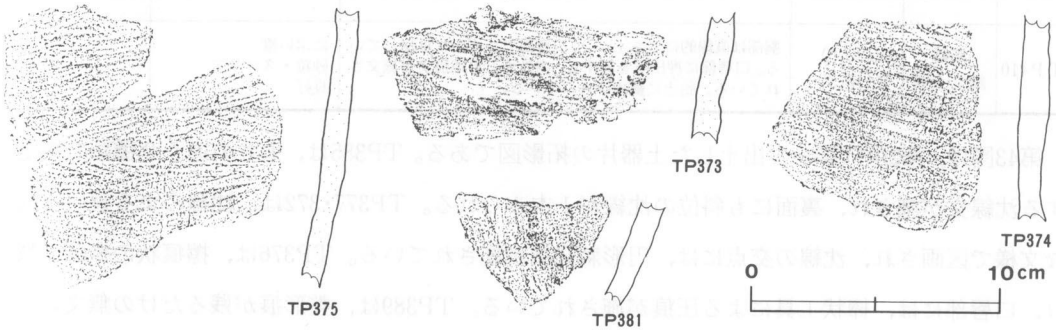


第44図　第42号炉穴出土土器実測図

第45図は，42号炉穴から出土した土器片の拓影図である。TP375は，細い条痕文が施され，胎土には，繊維を含んでいる。TP373も，同様の条痕文が施文されている。TP374・381もまた条痕文がみられるが，胎土には繊維を含んでいない。

第43号炉穴出土土器（第47図）

TP395は，沈線で幾何学的な文様に区画され，その内部には，沈線が充填されている。TP391にも同様の文様がみられ，TP395と同一個体の可能性が考えられる。TP404は，太く浅い沈線が横位に施されている。TP400・401・398・394・406・396は表裏に条痕文が



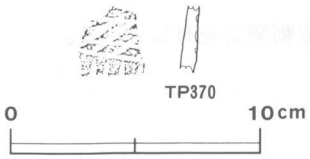
第45図　第42号炉穴出土土器拓影図

施されている。TP400・396は，細い条痕文であるが，TP401・398の表面，TP394の表面は，比較的太い条痕文が施されている。TP409は，条痕文を地文とし，斜位の沈線が施されている。口

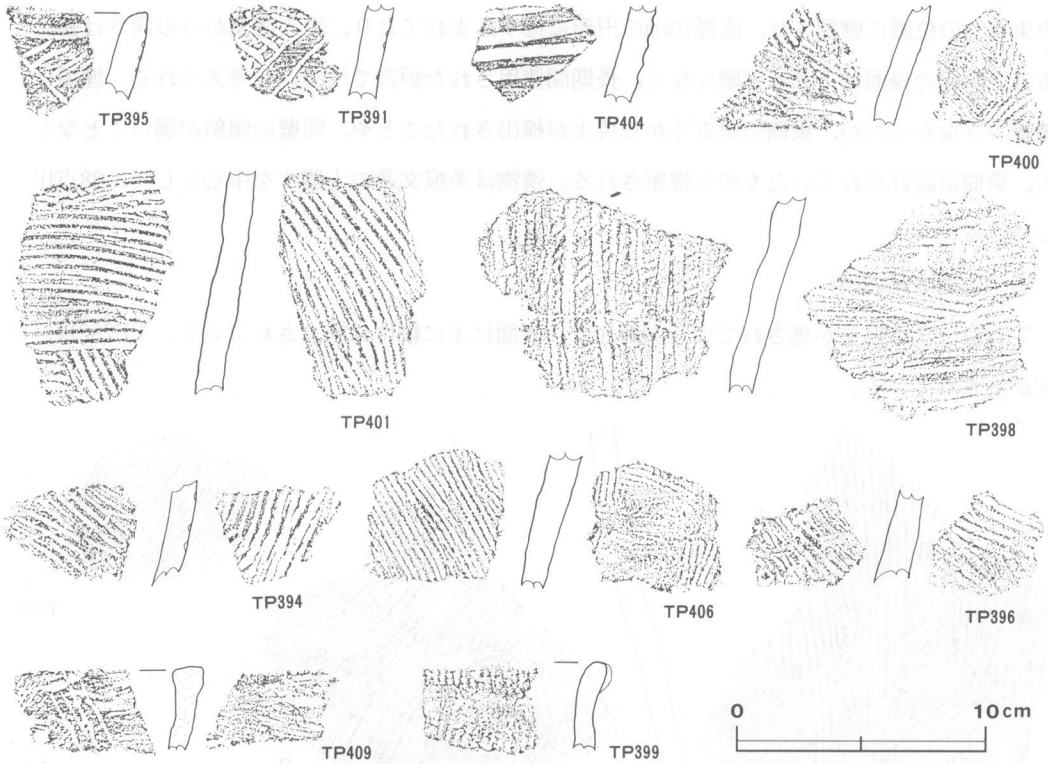
唇部はヘラで削ったような平縁であり，胎土に繊維を含んでいる。TP399は，緩やかに外反する口縁部で，その先端に折り返し状の隆帯が付され，隆帯とその下部に縄文が施文されている。

第57号炉穴出土土器（第46図）

TP370は，沈線による格子目文が施文されている。



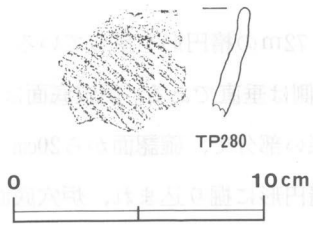
第46図　第57号炉穴出土土器拓影図



第47図　第43号炉穴出土土器拓影図

第８号炉穴（第50図）

本跡は，B2i$_7$区を中心に位置している。平面形は，長径1.55m・短径1.32mの楕円形を呈している。長径方向は，N－15°－Eである。壁は，外傾して立ち上がり，炉穴底面までの深さは25cmである。炉穴底面から炉床の掘り込みにかけては，緩やかに傾斜している。焼土は，直径85cm前後の不整円形に堆積しており，中央部で20cmの厚さがある。6K層が炉床部と思われ，大部分が焼土ブロックと焼土粒子である。周囲も硬く焼けており，残存状況は良好である。遺物は，条痕文系の土器片を主に14点出土している。



第48図　第8号炉穴出土土器拓影図

出土土器（第48図）

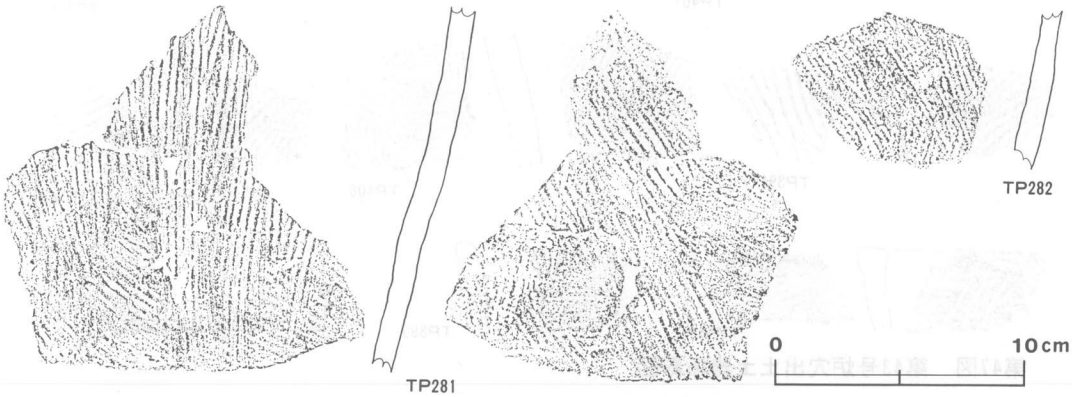
TP280は，条痕文が施されている土器片で，口唇部直下に浅い円形刺突文を有している。

第9号炉穴（第50図）

本跡は，B2i_8区を中心に位置している。平面形は，長径1.73m・短径1.54mの楕円形を呈している。長径方向は，N－70°－Eである。壁は，外傾して立ち上がるが，東側はやや緩やかである。炉穴底面は炉床に向かって緩く傾斜しており，確認面からの深さは40～50cmである。炉床は，やや東寄りの位置に確認され，直径70cmの円形に掘り込まれており，炉穴底面からの深さは10cmである。炉床の表面はそれほど硬くなく，長期間使用された炉穴ではないと考えられる。煙道は，確認できなかったが，東側の壁近くから焼土が検出されたことや，同壁の傾斜が弱いことなどから，東側に設けられていたものと推定される。遺物は条痕文系の土器片を中心として，28点出土している。

出土土器（第49図）

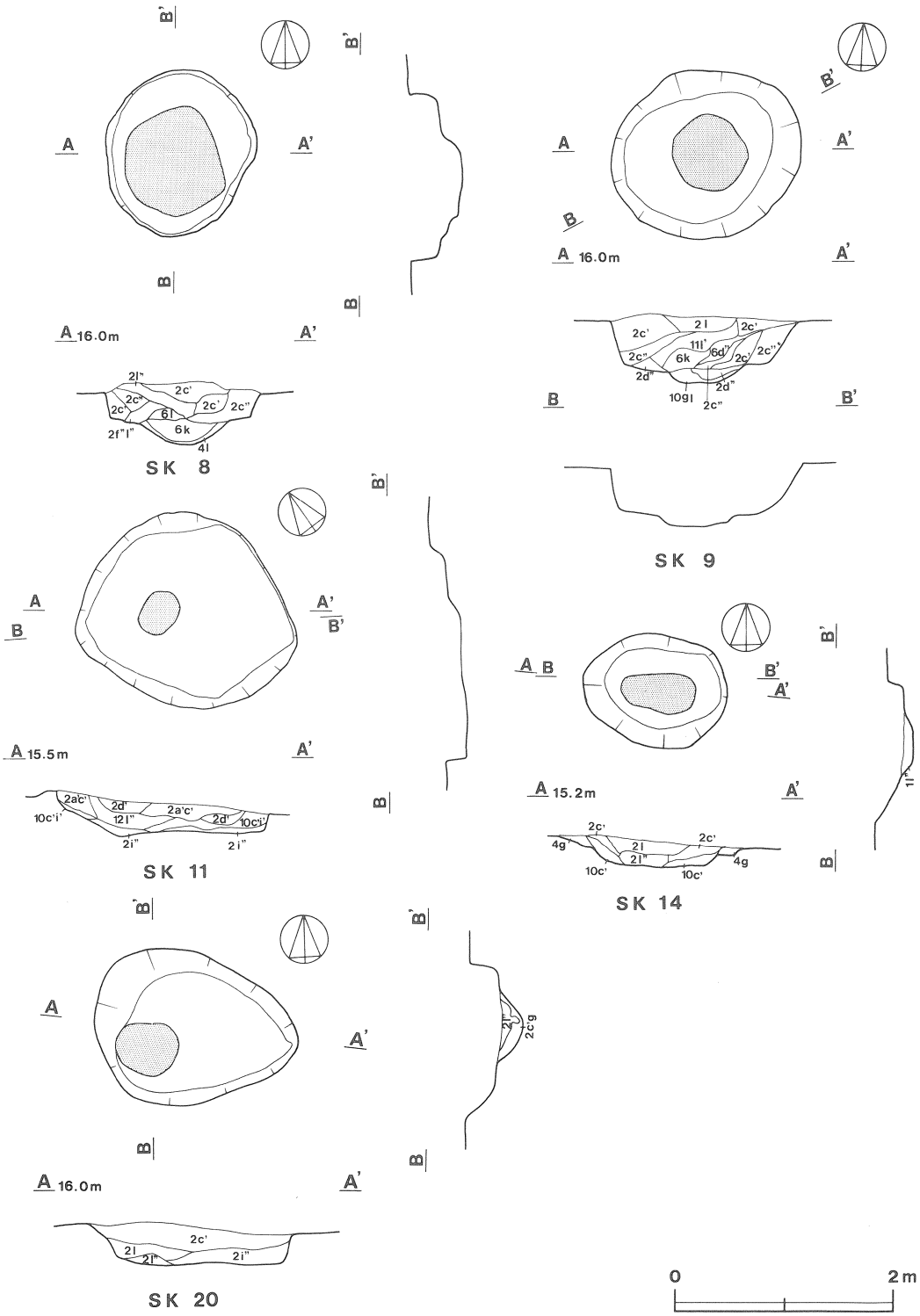
TP281は，条痕文が施されている胴部片で，表面は主に縦位に施文されている。TP282は，縄文が施されている。



第49図　第9号炉穴出土土器拓影図

第11号炉穴（第50図）

本跡は，C2a_8区に位置している。平面形は，長径2.03m・短径1.72mの楕円形を呈している。長径方向は，N－33°－Wである。壁は，外傾して立ち上がるが，東側は垂直である。炉穴底面は，南東側が最も深くなり，北西側は階段状に浅くなっている。最も深い部分で，確認面から20cmである。炉床は，平面プランと比較すると小規模で，40cm×32cmの楕円形に掘り込まれ，炉穴底面からの深さは7cmである。炉床はそれほど焼けておらず，掘り込みも浅いものであることから，長期間使用された炉穴ではないと思われる。煙道に関しては，北西壁側の覆土の状態と，炉穴底面が北西壁に近づくほど浅くなることから，北西壁付近に作られていたことがうかがえる。遺物



第50図　炉穴実測図(1)

は，縄文土器片と礫が合わせて４点出土している。

第14号炉穴（第50図）

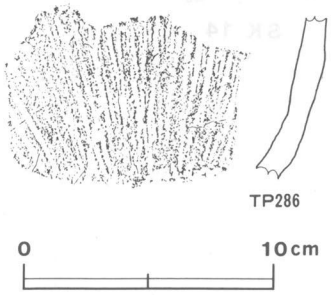
本跡は，C2a_9区に位置している。平面形は，長径1.34m・短径1.04mの楕円形を呈している。長径方向は，N－85°－Wである。壁は，外傾して立ち上がるが，東側の壁は他の壁よりも急角度に立ち上っている。炉穴底面は，平坦で締まりがなく，軟らかである。確認面から炉穴底面までの深さは15cmである。焼土は，長径70cm・短径35cmの楕円形の範囲に検出されている。焼土の厚さは，１～２cmである。炉床は，焼土層の下から検出され，平面形は，焼土の堆積範囲と同様で長径70cm・短径35cmの楕円形である。炉床は，皿状に掘り込まれているが，深さは８cmと浅いものである。この炉床は，締まりもなく，また，熱を受け赤色に変化した焼土層も認められないことから，使用された期間は短い間であったと考えられる。遺物は，出土していない。

第20号炉穴（第50図）

本跡は，B2a_8区を中心に位置している。平面形は，長径1.89m・短径1.39mの楕円形を呈している。長径方向は，N－82°－Wである。壁は，外傾して立ち上がるが，西側はロームと覆土の境がはっきりせず，掘り過ぎたきらいもある。炉穴底面は東に向って緩く傾斜し，確認面からの深さは27cmである。焼土は，極端に西に寄った位置に検出され，直径50cm前後の円形の範囲に堆積していた。炉床は，皿状に20cm掘り下げて作られている。内部には，焼土粒子や焼土ブロックが多量に堆積しており，よく利用された炉穴かと思われたが，炉床は軟らかく，それほど焼けた形跡も認められなかった。遺物は，条痕文系の土器片を中心に，14点出土している。

出土土器（第51図）

TP286は，底部に近い胴部片で，縦位の条痕文が施文されている。



第51図　第20号炉穴出土土器拓影図

第36号炉穴（第53図）

本跡は，A2j_5区に位置し，第２号土壙と重複している。平面形は，長径1.03m・短径0.69mの楕円形を呈している。長径方向は，N－75°－Wである。壁は外傾して立ち上がり，炉穴底面は平坦であり，確認面からの深さは15cmである。炉床は東に寄って検出され，皿状に６cm掘り込んで作られている。掘り込みは浅いが，内部は極めて硬く焼けており，炉床周辺のロームまで赤褐色に変化しているのが確認できた。当遺跡で検出された炉穴の中では，規模の小さいものであるが，良好な遺存状態を保っていた遺構

である。なお，第２号土壙と重複しており，本跡のプランが土壙底面を切っていることから，本跡の方が新しいことがわかる。しかし，遺構確認の段階では，本跡の落ち込みは認められず，第２号土壙の調査を進めているうちに検出されたものである。通常，重複している場合は，新しい遺構の方が確認しやすいのであるが，本跡に関しては逆であった。遺物は，出土していない。

第39号炉穴（第53図）

本跡は，$B2b_7$区を中心に位置している。平面形は，長径1.79m・短径1.29mの楕円形を呈している。長径方向は，N－65°－Wである。壁は，全体的に外傾して立ち上がるが，東側の壁は西側より急角度で立ち上がっている。炉穴底面は，全体的に軟らかである。炉穴底面には，焼土粒子が全面に認められた。確認面から炉穴底面までの深さは25cmである。炉床は，北西側に寄って検出され，炉床は，直径40cmの円形に掘り込まれ，断面は，鍋底状を呈している。内部には，焼土粒子及び焼土ブロックを，多量に含む褐色土が堆積していたが，炉床はそれほど焼けた状態ではなかった。なお，炉床の深さは，炉穴底面から15cmである。遺物は，覆土から縄文土器片11点が出土している。

第45号炉穴（第53図）

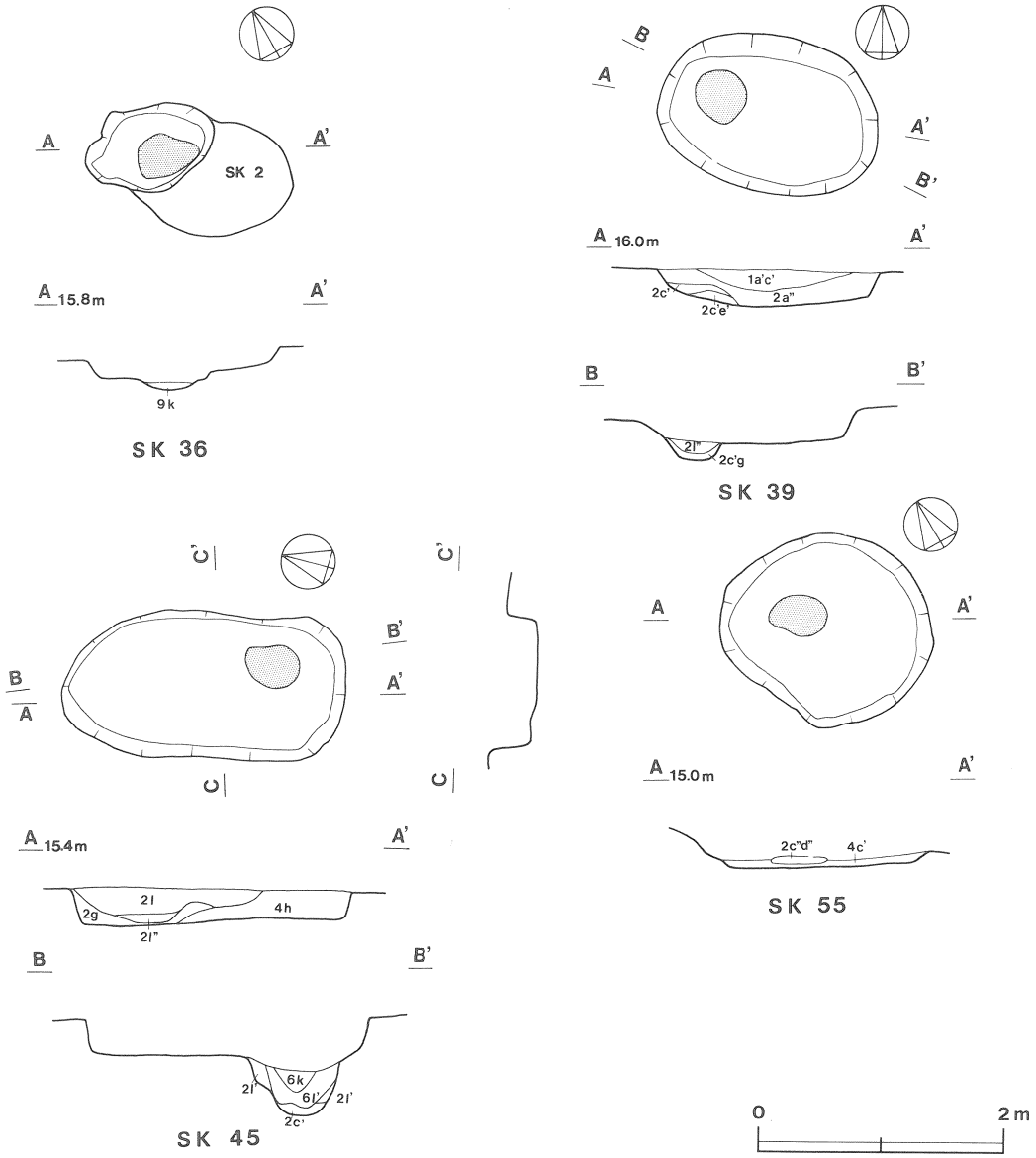
本跡は，第２炉穴群の東側，$A3i_1$区を中心に位置している。平面形は，長径2.3m・短径1.19mの長楕円形を呈している。長径方向は，N－15°－Wであり，西側に隣接する第２炉穴群とほぼ平行して確認された。壁は，外傾して立ち上がるが，東側の壁は直立ぎみに立ち上がっている。西側の壁は明確でなく，第２炉穴群の壁と重複するかと思われたが，最終的には，単独の炉穴としてとらえることができた。炉穴底面はロームからなり，平坦で，硬く締まっている。確認面からの深さは30cmである。炉床は，炉穴底面から長径45cm・短径35cmの楕円形に掘り込まれ，深さは40cmである。炉床内部は焼土等が３層に堆積しており，特に，１層目にあたる6K層は，極めて硬く締まっている。また，炉床周辺のロームが赤褐色に変化しているのが確認でき，本跡が長期間使用された遺構であることがうかがえる。遺物は，覆土から縄文土器片が11点出土している。

第52図　第45号炉穴出土土器拓影図

出土土器（第52図）

TP397は表裏とも条痕文を有する土器片で

ある。TP318も同様の土器であるが，表面の荒れがひどい。胎土に繊維を含んでいる。



第53図　炉穴実測図(2)

炉穴一覧表①

土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
SK 8	B2i$_7$ B2h$_7$	N−15°−E	楕円形	1.55×1.32	25	外傾	皿状	N	14点 炉床は良好
SK 9	B2i$_8$ B2i$_7$	N−70°−E	〃	1.73×1.54	40〜50	〃	平坦	〃	28点
SK11	C2a$_8$	N−33°−W	〃	2.03×1.72	14〜20	垂直	傾斜	〃	4点
SK14	C2a$_9$	N−85°−W	〃	1.34×1.04	15	外傾	平坦	〃	
SK20	A2j$_8$・j$_9$ B2a$_8$・a$_9$	N−82°−W	〃	1.89×1.39	27	〃	傾斜	〃	14点
SK21	B2b$_5$ B2b$_6$	N−59°−W	(楕円形)	(1.8)×(1.2)	43	〃	平坦	〃	SK56と重複 第1炉穴群
SK22	B2b$_6$	N−55°−W	(楕円形)	0.9×1.0 (現存)	44	〃	〃	〃	7点 第1炉穴群
SK36	A2j$_5$	N−75°−W	楕円形	1.03×0.69	15	〃	〃	〃	SK2を切っている
SK39	B2b$_7$ B2b$_8$	N−63°−W	〃	1.79×1.29	25	〃	〃	〃	11点
SK40	B2a$_5$ B2a$_6$	N−65°−W	長楕円形	2.89×1.21	50	〃	〃	〃	第1炉穴群
SK41	B2a$_5$	N−80°−W	楕円形	1.66×1.13	47	〃	〃	〃	4点 炉床は良好 第2炉穴群
SK42	A3h$_1$ A3i$_1$	N−68°−E	長楕円形	2.75×1.34	30	〃	〃	〃	260点 炉床は良好 第2炉穴群
SK43	A3i$_1$	N−31°−E	〃	2.47×1.22	35	〃	〃	〃	第2炉穴群
SK44	A3h$_1$	(N-8°-E)	(楕円形)	不明	31	〃	〃	〃	SK57と重複 第2炉穴群
SK45	A3i$_1$ A3i$_2$	N−15°−W	長楕円形	2.3×1.19	30	垂直	〃	〃	11点
SK55	B2i$_0$ B2j$_0$	N−60°−W	楕円形	1.71×1.59	7	外傾	〃	〃	木の根のカクランあり

炉 穴 一 覧 表 ②

土壙番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	覆土	備考(出土遺物)
SK56	B2b_6	N—34°—W	(楕円形)	(1.6)×(0.92)	45	外傾	皿状	N	SK21と重複 第1炉穴群
SK57	A3h_1	(N-33°-W)	(楕円形)	不明	35	〃	平坦	〃	第2炉穴群
SK58	A3h_1	N—90°	(楕円形)	(1.7)×1.07	35〜40	〃	傾斜	〃	第2炉穴群

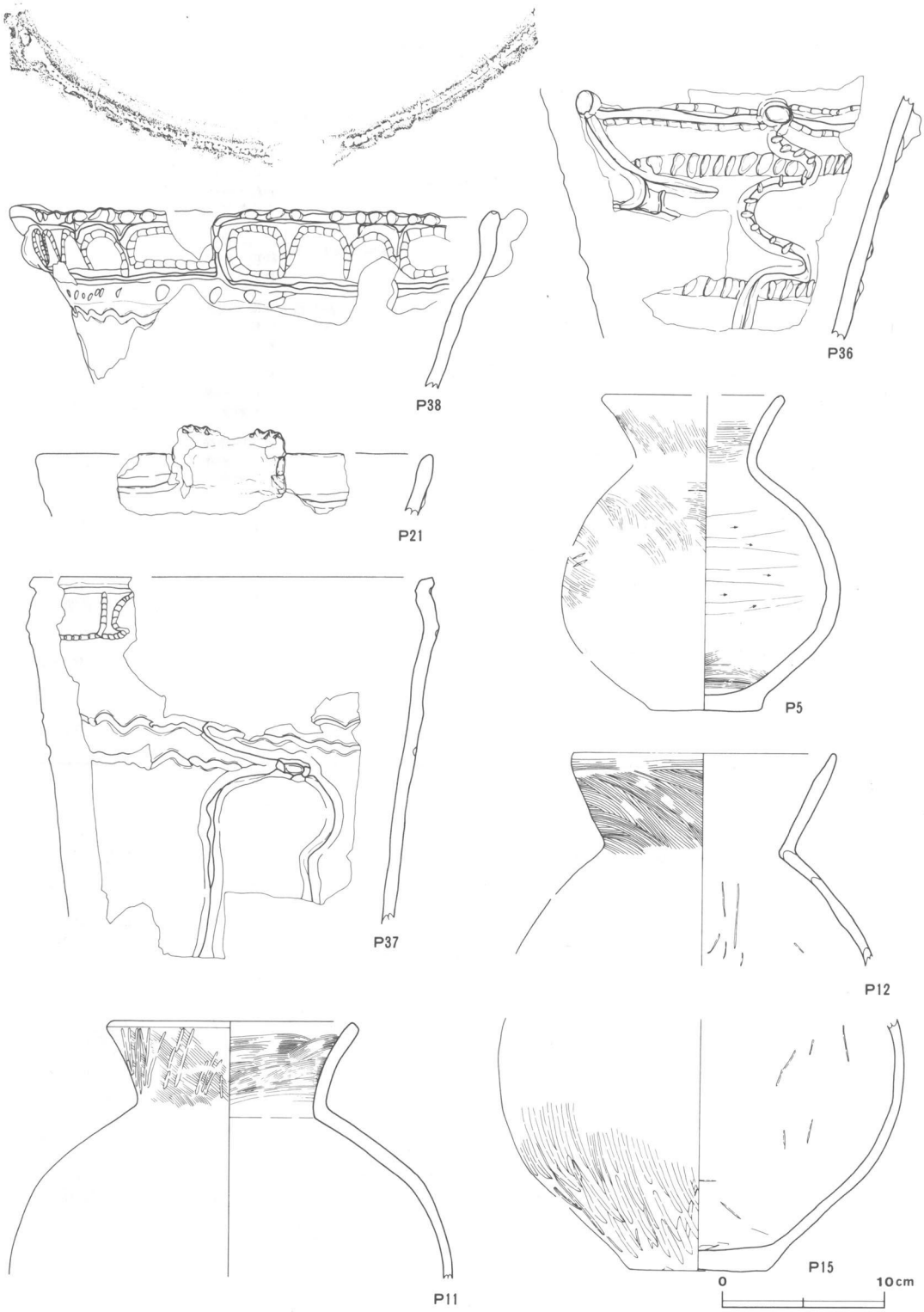
4 遺構に伴わない出土遺物

(1) 土器類について

当遺跡からは，縄文式土器及び土師式土器が出土している。これらの遺物のうち，実測できたものは観察表で説明し，拓本だけのものは文様等から次のように分類した。

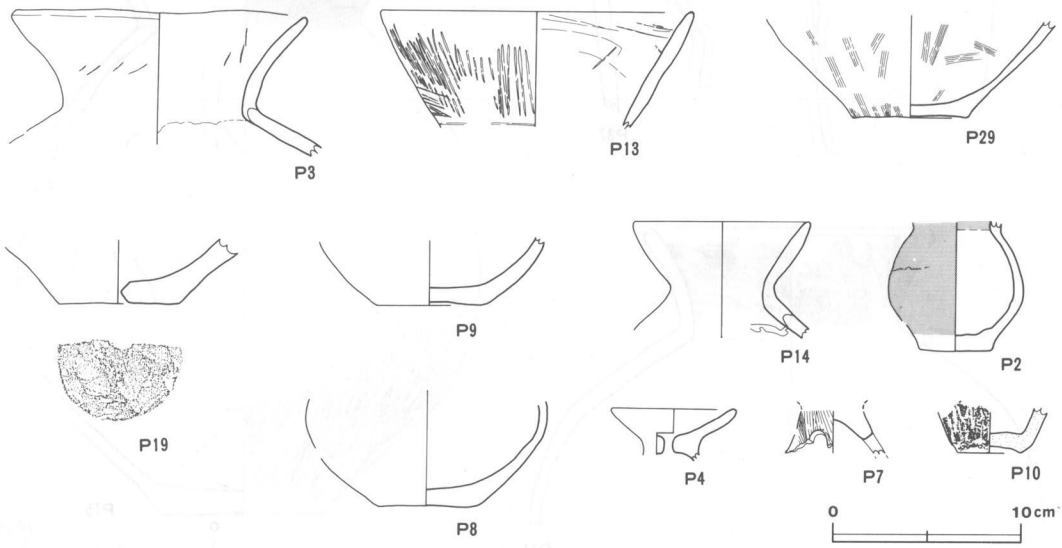
出 土 土 器 観 察 表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P38	深鉢 縄文土器	A(30.3) B(11.1)	平縁の深鉢形土器で，口縁部はゆるく内反して立ち上がる。連続刺突文，沈線文が施文されている。	橙 砂粒・砂礫 普通	B3a_1・b_1 口縁部40%
P36	深鉢 縄文土器	B(15.5)	直線的に立ち上がる胴部で，横位及び弧状の隆帯を付し，隆帯の上下や隆帯上に刺突文，押圧痕文が施文されている。	明赤褐 砂礫 良好	B3b_1 35%
P21	深鉢 縄文土器	A(24.5) B(5.0)	把手を有する口縁部で，把手部の先端に押圧と刺突が交互に施され，胎土には金雲母が含まれている。	にぶい橙 スコリア・砂粒 良好	B3a_1 5%
P37	深鉢 縄文土器	A(24.7) B(23.6)	胴部は直線的に立ち上がり，口唇部近くでわずかに内彎したあと，外反する。横位の蛇行沈線，連続刺突文，屈曲する隆帯が施されている。	にぶい橙 砂粒・礫 普通	B3a_1・b_1・b_2 20%
P5	壺 土師器	A(11.4) B19.7 C7.0	底部は平底で，胴部は器壁を薄くしながら内彎ぎみに立ち上がる。胴部最大径は，中位やや下部にある。口縁部は外反して開いている。外部は刷毛目整形，胴部内面はヘラケズリ。	橙・にぶい橙 砂粒・砂礫 やや軟弱	A2j_7 50%
P12	壺 土師器	A8.2 B(13.2)	胴部は内彎ぎみに立ち上がって頸部に至り，口縁部は直線的に立ち上がっている。口唇部は横ナデ，口縁部外面は刷毛目整形。	にぶい橙・橙 砂粒・砂擲 軟弱	A2j_7 20%
P11	壺 土師器	A15.0 B(15.8)	口縁部はゆるく外反しながら立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出している。口唇部は横ナデ。口縁部内外面は刷毛目整形。胴部はヘラナデ。	明赤褐・にぶい橙 砂粒・砂礫 軟弱	A2j_7 20%
P15	壺 土師器	B(15.7) C8.5	底部は平底で，胴部は内彎ぎみに，弧状に立ち上がる。外面は，ヘラケズリ後縦方向のヘラナデ。内面はヘラケズリ。	橙・明赤褐 砂粒・砂礫 軟弱	A2j_7 20%
P3	壺 土師器	A15.7 B(7.2)	口縁部片である。口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は横ナデ。外面はヘラミガキ。内面はヘラケズリ。	にぶい橙・橙 砂粒・砂礫（石英） 普通	B2b_6 口縁部80%
P13	壺 土師器	A8.4 B(6.2)	直線的に立ち上がる口縁部で，外面は縦方向のヘラナデ，内面は横方向のヘラケズリ。	にぶい橙・橙 砂粒 軟弱	A2j_7 口縁部30%



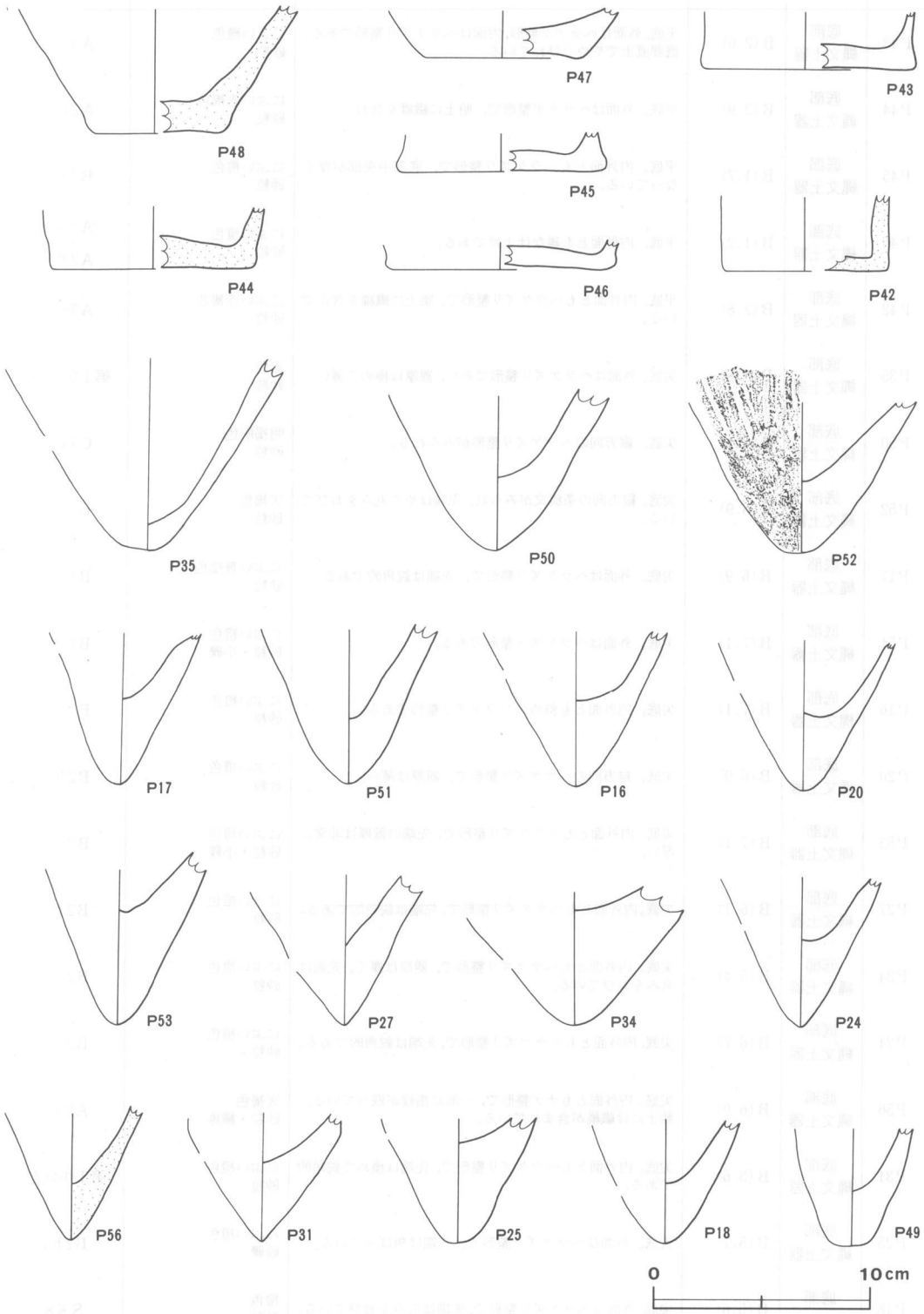
第54図　遺構外出土土器実測図(1)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P29	底部 土師器	B(5.0) C6.1	わずかな上げ底を呈する底部である。胴部は内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。内外面ともヘラケズリ。	黒褐・にぶい灰 砂粒・スコリア 普通	C2a$_{6}$ 底部のみ
P19	底部 土師器	B(3.0) C(6.6)	平底の底部片である。中央部には焼成以前に開けられた穿孔を有している。内外面ともヘラケズリ。	にぶい橙 砂粒・スコリア 良好	C2a$_{6}$ 底部のみ
P9	底部 土師器	B(3.5) C5.8	平底の底部片である。胴部は内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。内外面ともヘラケズリ。	明赤褐・にぶい褐 砂粒・砂礫(石英) やや軟弱	A2j$_{7}$
P14	小型壺 土師器	A4.75 B(6.2)	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。頸部に輪積痕を残す。内外面ともヘラケズリ。	にぶい橙 砂粒・砂礫 軟弱	A2j$_{7}$ 10%
P2	小型壺 土師器	B(6.8) C3.8	底部は平底を呈し，胴部は内彎ぎみに立ち上がり，胴部最大径は，中位にある。内面横ナデ，外面ヘラナデ。外面及び口縁部内面は赤彩されている。	赤褐・浅黄橙 砂粒 軟弱	B2b$_{6}$ 60%
P8	小型壺 土師器	B(5.7) C5.5	底部は平底を呈し，胴部は内彎ぎみに大きく外方に立ち上がる。外面ヘラミガキ。内面ヘラナデ。	橙 砂粒・砂礫 やや軟弱	A2i$_{7}$・j$_{7}$ 20%
P4	器台 土師器	受部径6.8 B(2.5)	受部は内彎ぎみに大きく外方に立ち上がる。外面はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	赤・明赤褐 砂粒・砂礫 やや軟弱	B2b$_{1}$ 受部90%
P7	器台 土師器	B(2.3)	器台の脚部片で，外反ぎみに下方へ開く。3孔を有している。外面は，斜位の刷毛目整形。内面ヘラナデ。	赤・褐灰 砂粒 やや軟弱	B2e$_{7}$ 10%
P10	手捏土器 縄文土器	B(2.5) C3.4	手捏土器の底部片である。底部は上げ底状を呈している。雑な条痕文が施文され，胎土に繊維を含んでいる。	にぶい橙・橙 砂粒 普通	B2c$_{6}$ 底部のみ
P48	底部 縄文土器	B(5.7)	平底。内外面ともヘラケズリ整形である。胎土に繊維を含む。	明赤褐色 繊維含む	B2e$_{8}$
P47	底部 縄文土器	B(2.7)	平底。内外面ともヘラケズリ整形である。	にぶい橙色 砂粒	A2j$_{7}$



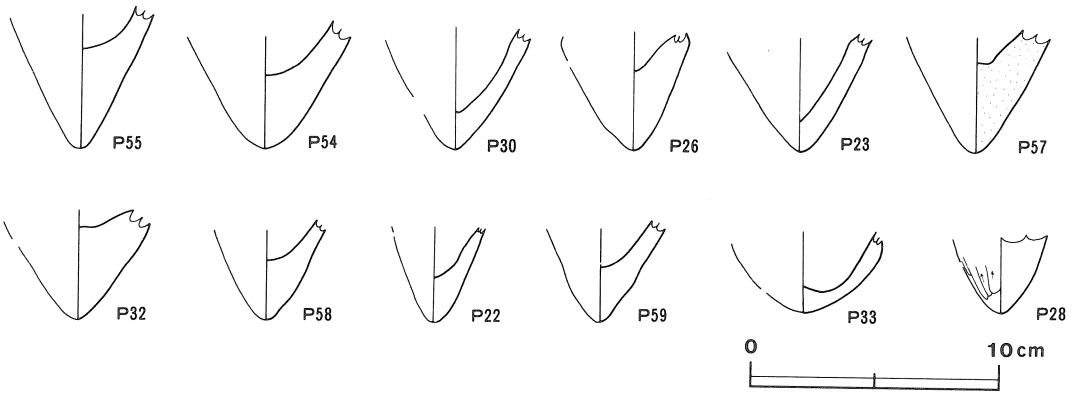
第55図　遺構外出土土器実測図(2)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P43	底部 縄文土器	B(2.6)	平底。外面はヘラナデ整形，内面はヘラケズリ整形である。底部直上でややくびれている。	にぶい橙色 砂粒	A3j$_{1}$
P44	底部 縄文土器	B(2.9)	平底。外面はヘラナデ整形で，胎土に繊維を含む。	にぶい赤褐色 砂粒	A2h$_{9}$
P45	底部 縄文土器	B(1.7)	平底。内外面ともヘラケズリ整形で，底部中央部が厚くなっている。	にぶい橙色 砂粒	B2f$_{0}$
P46	底部 縄文土器	B(1.2)	平底。内外面とも雑な仕上げである。	にぶい橙色 砂粒	A2g$_{0}$ ＋ A2g$_{1}$
P42	底部 縄文土器	B(2.8)	平底。内外面ともヘラケズリ整形で，胎土に繊維を含んでいる。	にぶい赤褐色 砂粒	A3h$_{1}$
P35	底部 縄文土器	B(8.8)	尖底。外面はヘラケズリ整形であり，器厚は極めて薄い。	赤色 砂粒	第1炉穴群
P50	底部 縄文土器	B(7.1)	尖底。縦方向のヘラケズリ整形がみられる。	明褐灰色 砂粒	C2a$_{8}$
P52	底部 縄文土器	B(6.9)	尖底。縦方向の条痕文がみられ，先端はやや丸みをおびている。	灰褐色 砂粒	B2i$_{6}$
P17	底部 縄文土器	B(6.9)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は鋭角的である。	にぶい黄橙色 砂粒	B2b$_{9}$
P51	底部 縄文土器	B(7.1)	尖底。外面はヘラケズリ整形である。	にぶい橙色 砂粒・小礫	B2h$_{9}$
P16	底部 縄文土器	B(7.1)	尖底。内外面とも斜めのヘラケズリ整形である。	にぶい橙色 砂粒	B2b$_{2}$
P20	底部 縄文土器	B(6.9)	尖底。縦方向のヘラケズリ整形で，器厚は薄い。	にぶい橙色 砂粒	B2b$_{5}$
P53	底部 縄文土器	B(7.1)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形で，先端の器厚は非常に厚い。	にぶい橙色 砂粒・小礫	B2j$_{6}$
P27	底部 縄文土器	B(6.1)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形で，先端は鋭角的である。	にぶい橙色 砂粒	B2c$_{5}$
P34	底部 縄文土器	B(5.4)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形で，器厚は厚く，先端は丸みをおびている。	にぶい橙色 砂粒	B2c$_{8}$
P24	底部 縄文土器	B(6.7)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形で，先端は鋭角的である。	にぶい橙色 砂粒	B2d$_{9}$
P56	底部 縄文土器	B(6.0)	尖底。内外面ともナデ整形で，一部に指紋が残っている。胎土には繊維が含まれている。	灰褐色 砂粒・繊維	A2i$_{6}$
P31	底部 縄文土器	B(5.6)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形で，先端は極めて鋭角的である。	にぶい橙色 砂粒	第1炉穴群
P25	底部 縄文土器	B(5.7)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は角ばっている。	にぶい橙色 砂礫	B2b$_{4}$
P18	底部 縄文土器	B(5.6)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は丸みをおびている。	橙色 砂粒	SK8



第56図　遺構外出土土器実測図(3)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
P49	底部 縄文土器	B(5.4)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は角ばっている。	にぶい橙色 砂粒	B2i$_5$
P55	底部 縄文土器	B(5.3)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端の器厚は厚い。	にぶい橙色 砂粒	B2g$_6$
P54	底部 縄文土器	B(4.5)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は丸みをおびている。	にぶい橙色 砂礫	B2e$_7$
P30	底部 縄文土器	B(4.4)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，器壁は薄い。	にぶい橙色 砂粒	A3h$_5$
P26	底部 縄文土器	B(4.7)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形である。	橙色 砂粒	B2d$_6$
P23	底部 縄文土器	B(4.5)	尖底。内外面はヘラケズリ整形で，器厚は極めて薄い。	明赤褐色 砂粒	C2b$_8$
P57	底部 縄文土器	B(4.6)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，胎土に繊維が含まれている。	にぶい橙色 砂粒 繊維（少）	B2g$_4$
P32	底部 縄文土器	B(4.0)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端はやや丸みをおびている。	橙色 砂粒	SK9
P58	底部 縄文土器	B(3.7)	尖底。内外面とも縦方向のヘラケズリ整形である。	にぶい橙色 砂粒	B2g$_9$
P22	底部 縄文土器	B(3.7)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，器厚は薄い。	にぶい褐色 砂粒	B2a$_7$
P59	底部 縄文土器	B(3.8)	尖底。内外面ともヘラケズリ整形である。	にぶい橙色 砂粒	B2h$_0$
P33	底部 縄文土器	B(3.0)	尖底。外面はヘラケズリ整形で，先端は非常に丸みが強い。	にぶい橙色 砂粒	第1炉穴群
P28	底部 縄文土器	B(3.6)	尖底。外面は上方へのヘラケズリ整形が施されている。	橙色 砂粒	B2d$_3$



第57図　遺構外出土土器実測図(4)

土器の分類

Ⅰ群　撚糸文系の土器群

Ⅱ群　沈線文系の土器群

1類　格子目文が主体に施されている土器

2類　平行沈線文が主体に施されている土器

3類　太目の短沈線が施されている土器

a種　横位の沈線が施されている土器

b種　斜位の沈線が施されている土器

4類　太目の平行沈線が施されている土器

a種　横位の沈線が施されている土器

b種　斜位の沈線が施されている土器

5類　刺突文が主体に施されている土器

a種　爪形文が施されている土器

b種　棒状工具による刺突文が施されている土器

6類　貝殻文が主体に施されている土器

7類　Ⅱ群に属する底部

Ⅲ群　押型文の土器群

1類　山形文が施されている土器

2類　山形文と楕円文が施されている土器

3類　楕円文が施されている土器

Ⅳ群　条痕文系の土器群

1類　微隆起線文が施されている土器

2類　沈線文と竹管刺突文が施されている土器

3類　刺突文が主体に施されている土器

4類　沈線文が主体に施されている土器

a種　沈線文と刺突文が施されている土器

b種　太い半截竹管による沈線文を主体とする土器

5類　貝殻文が施されている土器

a種　貝殻腹縁文が施されている土器

b種　貝殻背圧痕文が施されている土器

6類　隆帯を主な文様とする土器

a種　横位の隆帯を主体とする土器

b種　縦位の隆帯を主体とする土器

7類　条痕文だけが施されている土器

a種　細い条痕文が主体に施されている土器

b種　太い条痕文が主体に施されている土器

8類　IV群に属する底部

V群　無文の土器群

1類　輪積み痕を残している土器

2類　キザミ目や押圧痕が施されている土器

3類　無文土器を一括

VI群　縄文を有する土器群

VII群　前期後葉に属し貝殻腹縁文が施されている土器群

VIII群　前期以後の土器

I群の土器（第99図）

TP2729・2198・2497・3181・1678の5点は，外反する口縁部で，口唇部は厚手である。TP1243・2251は，口唇部がやや薄くなり，口縁部の外反は，前述の5点より緩やかである。

II群の土器

1類（第58，59図 TP534～2941）

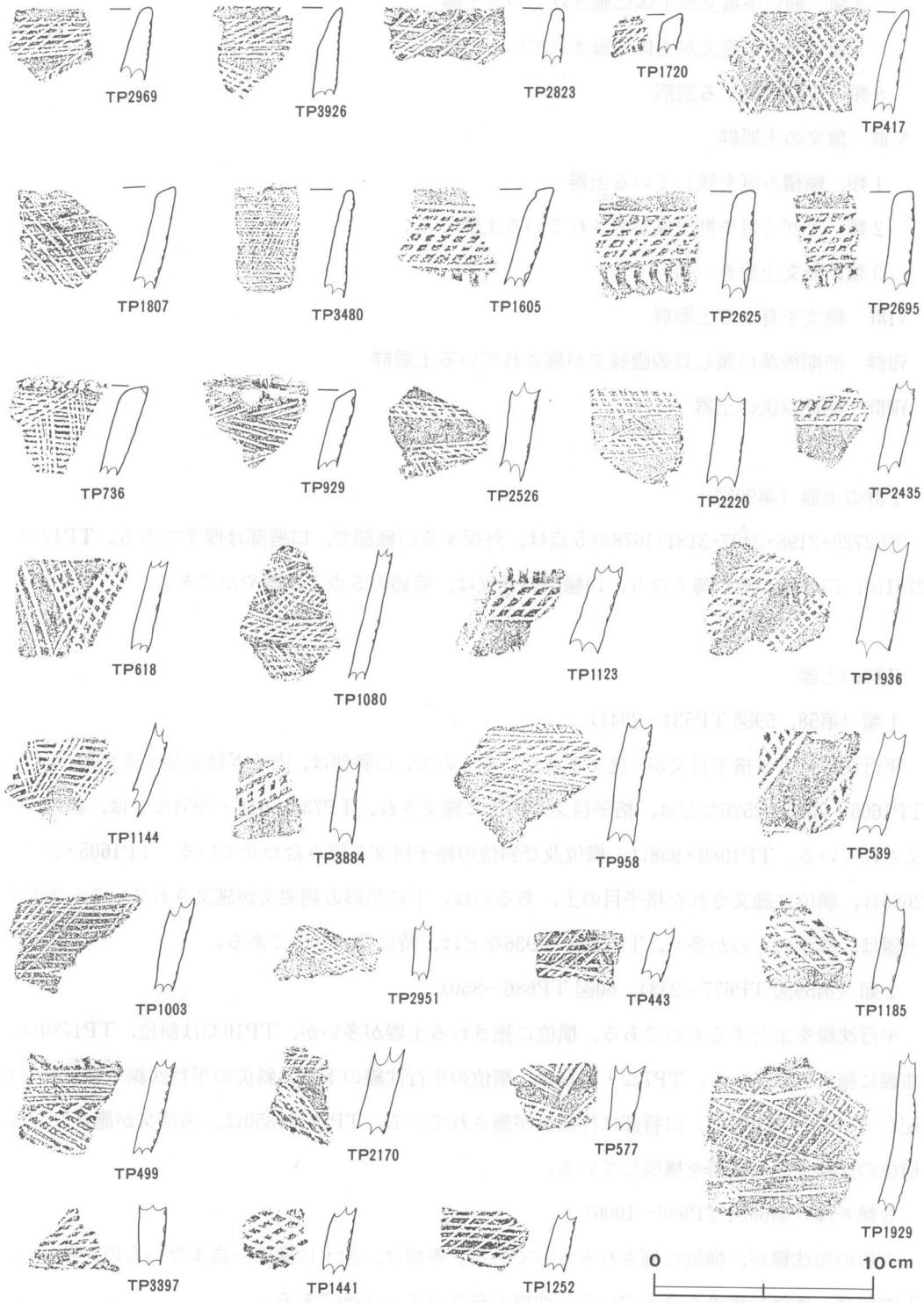
平行沈線による格子目文が，施文されているもので，口唇部は，内そぎ状を呈する土器が多い。TP1605・2695・2526などは，格子目文が横位に施文され，TP736・618・2951などは，斜位に施文されている。TP1080・958は，横位及び斜位の格子目文を組み合わせている。TP1605・2625・2695は，横位に施文された格子目の上，あるいは，下に爪形の刺突文が施文されている。本類の土器は，厚手のものが多く，TP2220・1936などは，特に厚いものである。

2類（第59図 TP677～2334，60図 TP686～850）

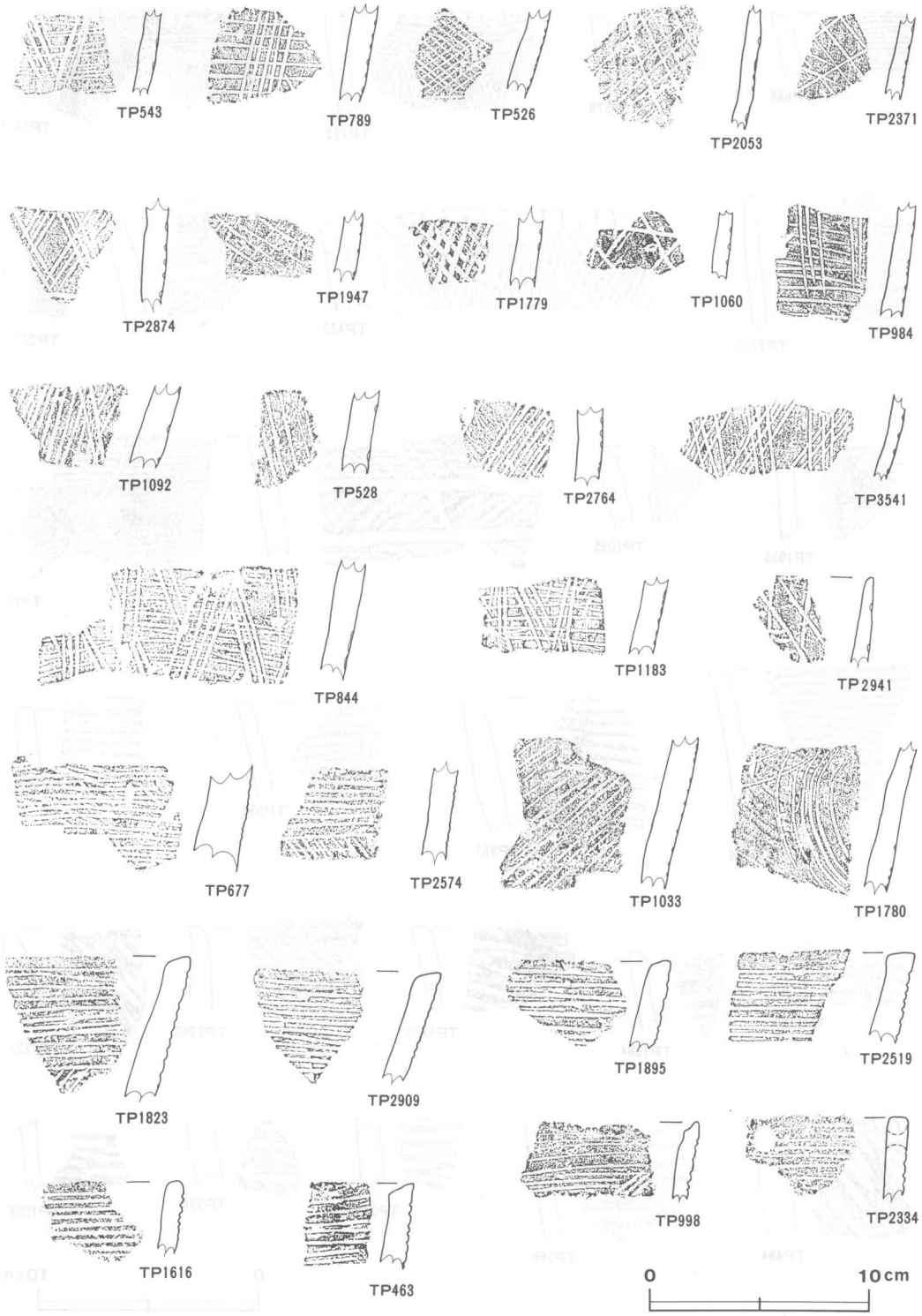
平行沈線を主とするものである。横位に施される土器が多いが，TP1033は斜位，TP1780は，曲線に施文されている。TP722・3414は，横位の平行沈線の下部に斜位の平行沈線や格子目文を配している。TP472は，口唇部に押圧痕が施されている。TP2712・850は，条痕文が施された後，横位の沈線で，文様帯を構成している。

3類a種（第60図 TP996～1006）

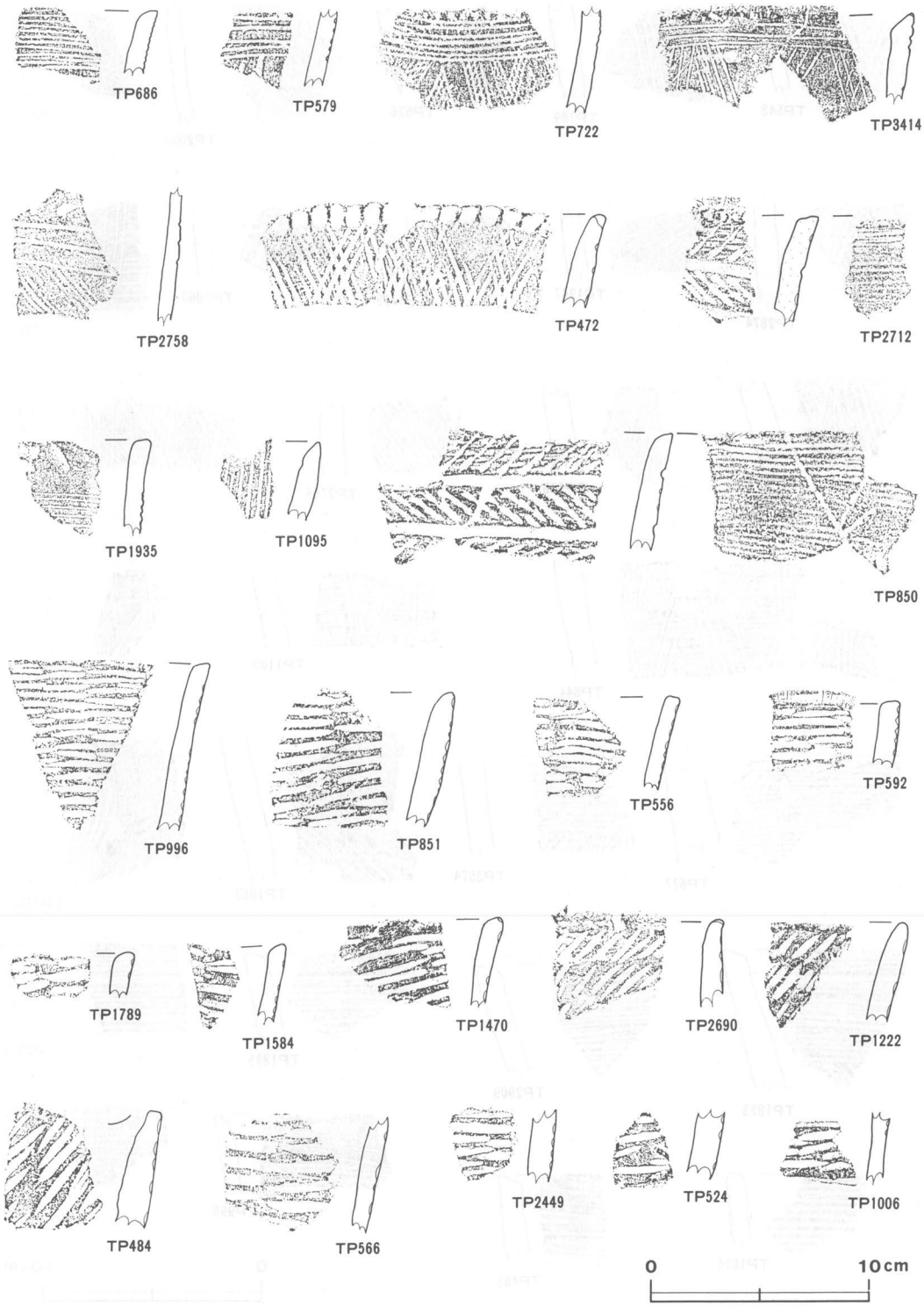
太目の短沈線が，横位に施されるものである。本類は，胎土に繊維を含まないものが多いが，TP851は，例外で繊維を含んでいる。沈線の長さは1～3cmである。



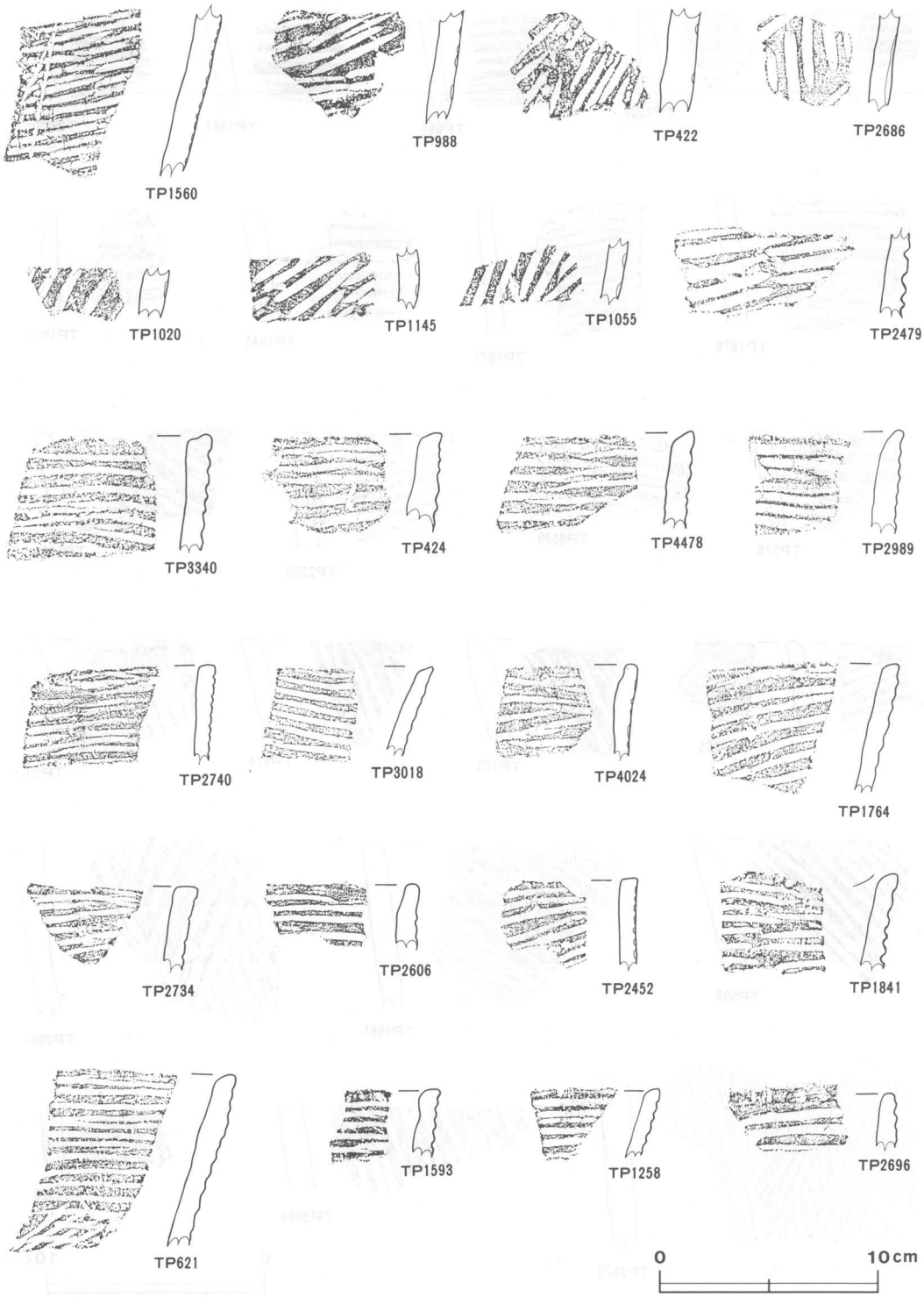
第58図　遺構外出土土器拓影図(1)



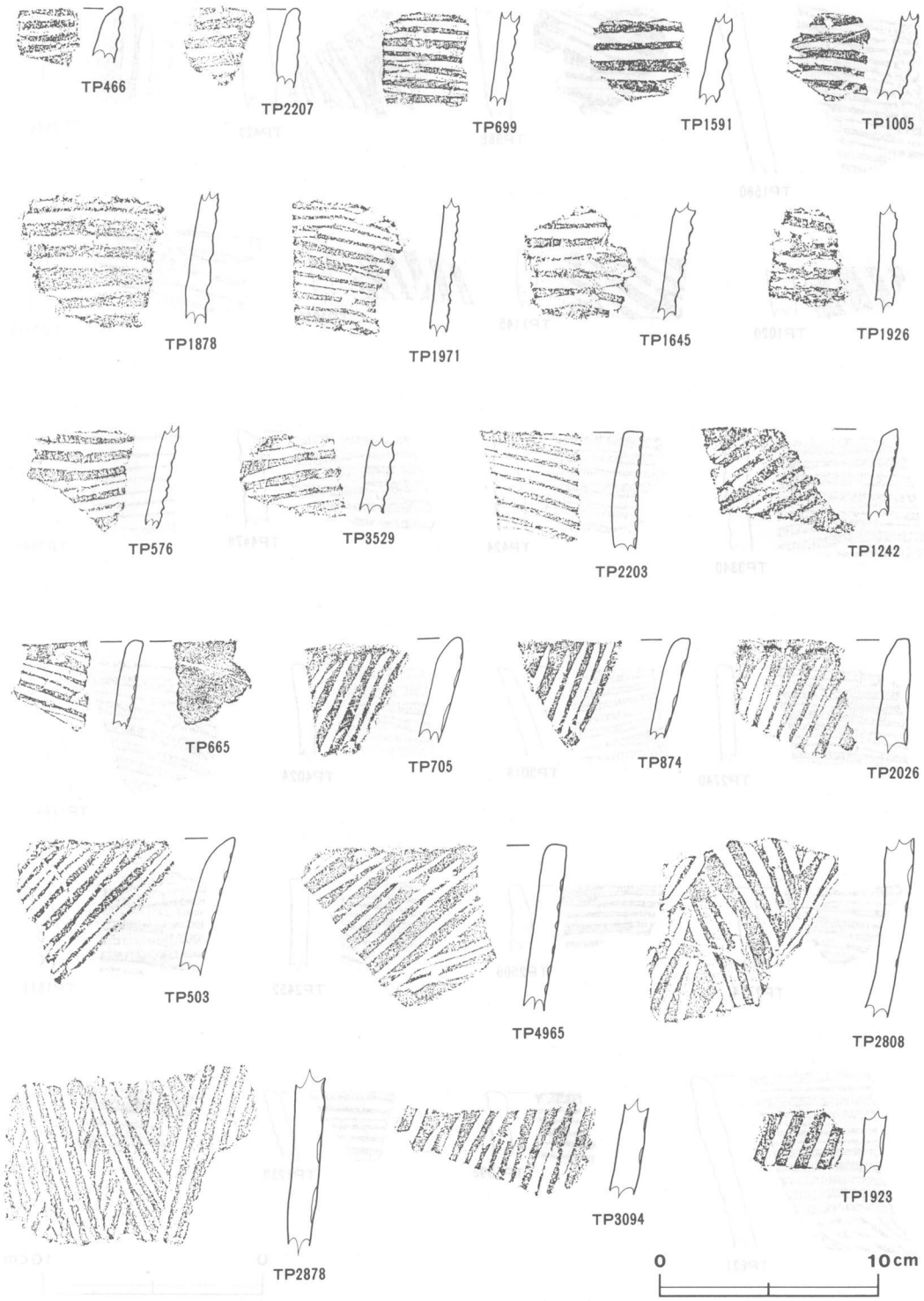
第59図　遺構外出土土器拓影図(2)



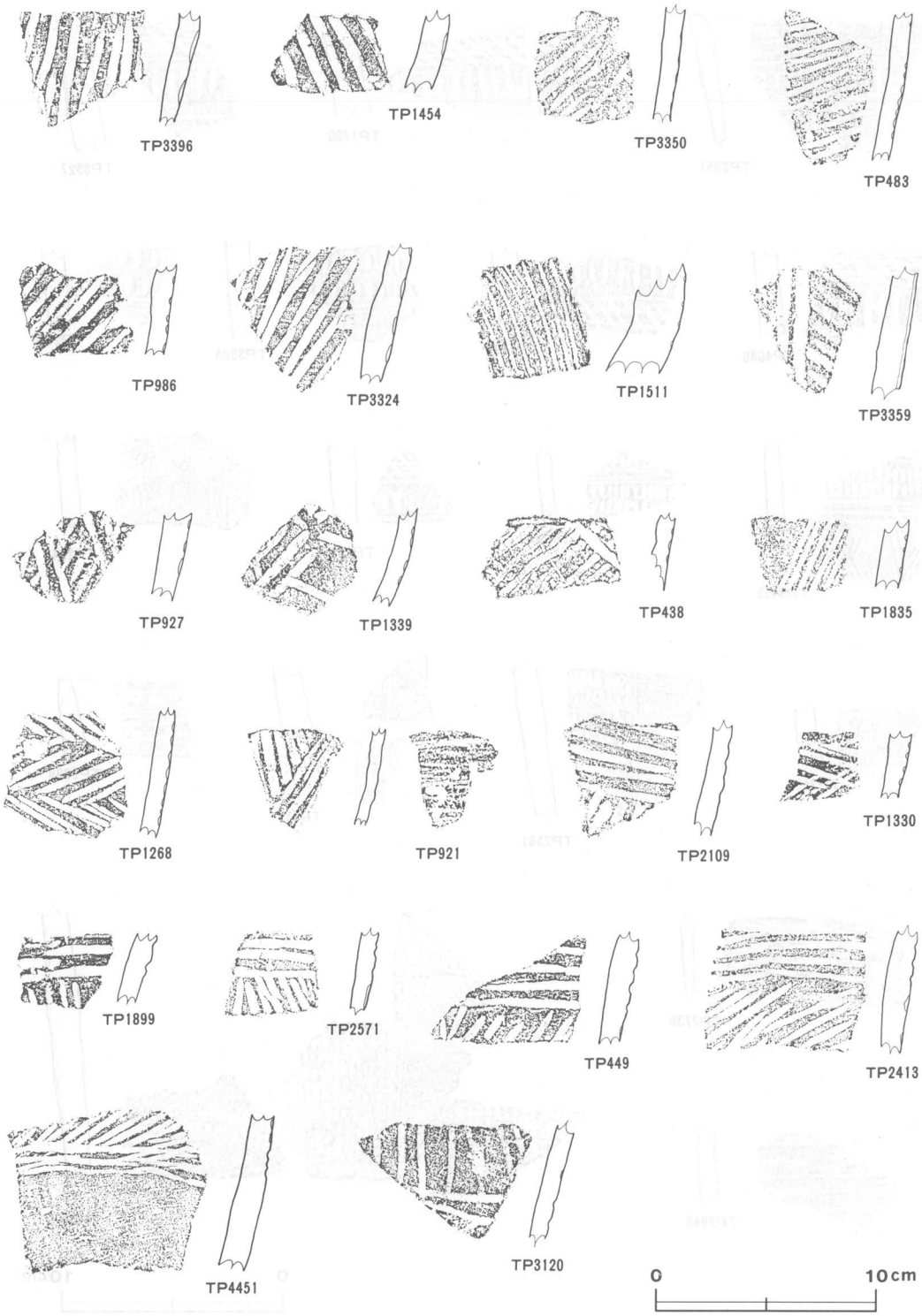
第60図　遺構外出土土器拓影図(3)



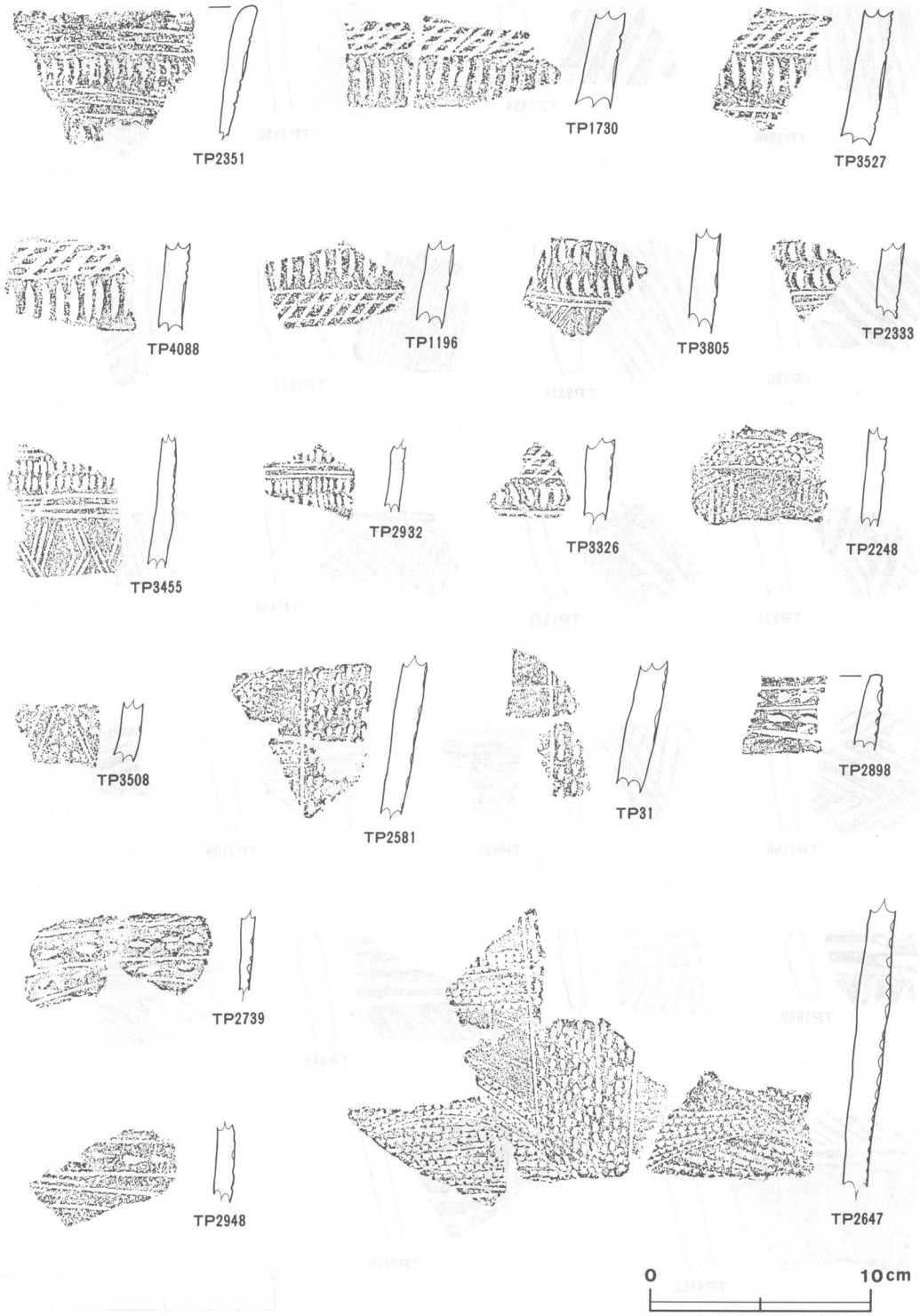
第61図　遺構外出土土器拓影図(4)



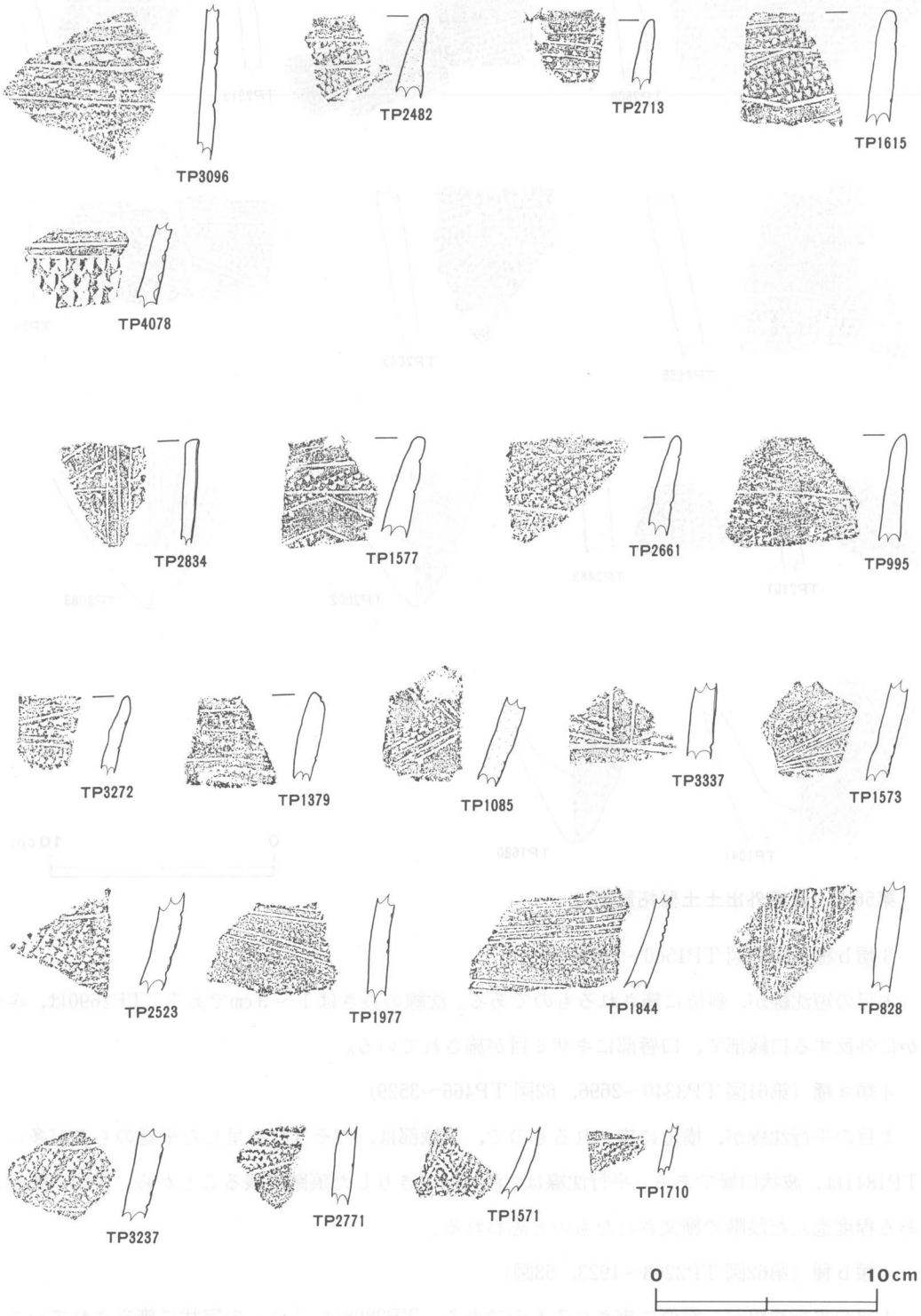
第62図　遺構外出土土器拓影図(5)



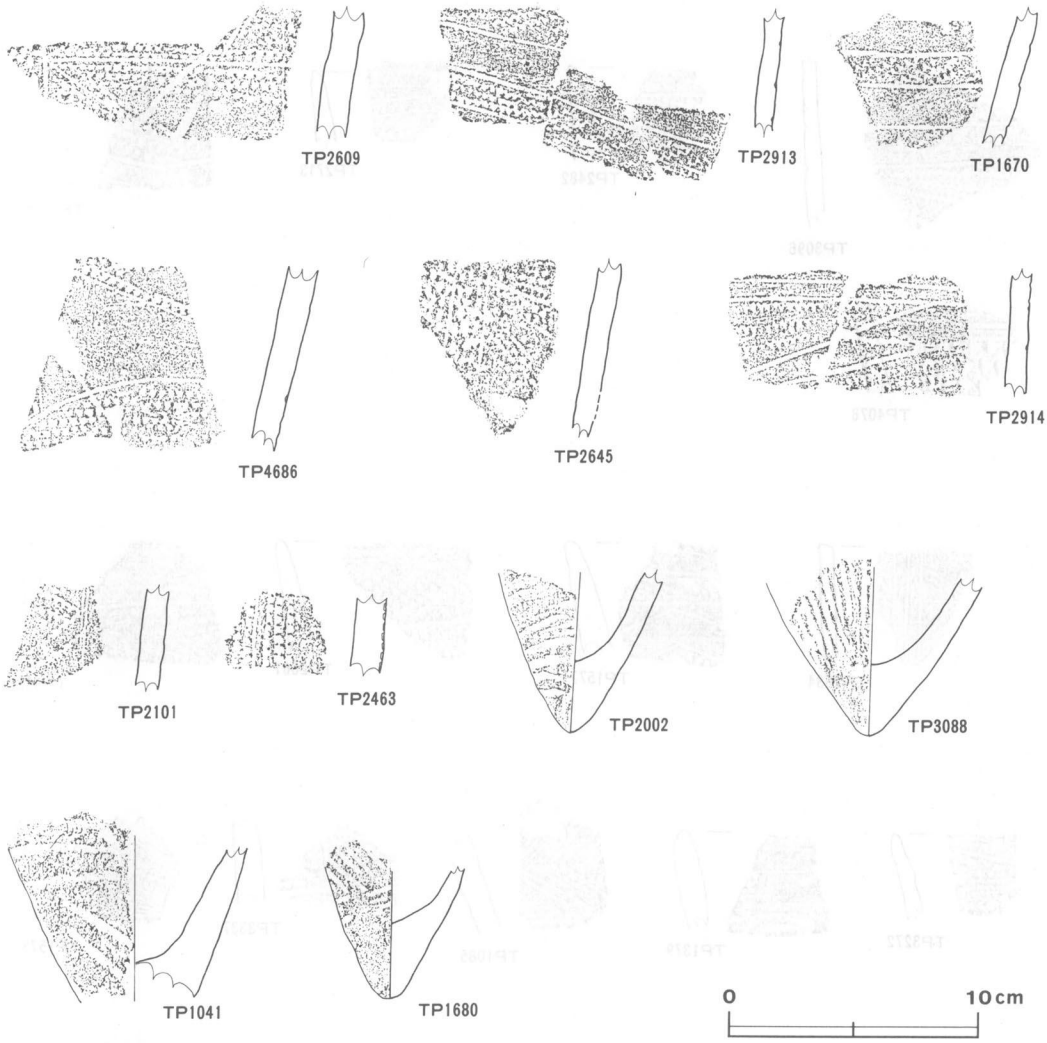
第63図　遺構外出土土器拓影図(6)



第64図　遺構外出土土器拓影図(7)



第65図　遺構外出土土器拓影図(8)



第66図　遺構外出土土器拓影図(9)

3類b種（第61図 TP1560～2479）

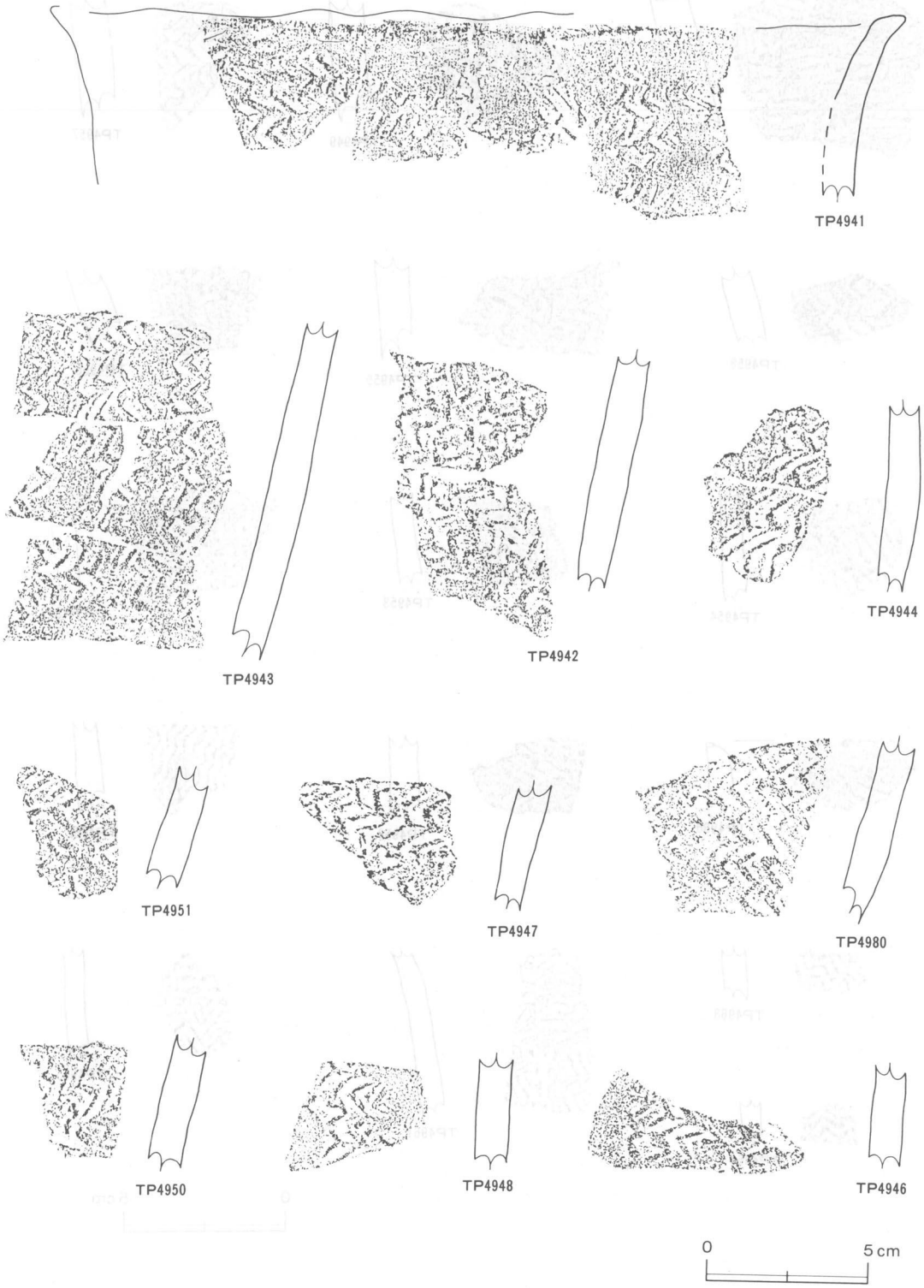
太目の短沈線が，斜位に施されるものである。沈線の長さは1～3cmである。TP2690は，緩やかに外反する口縁部で，口唇部にキザミ目が施されている。

4類a種（第61図 TP3340～2696，62図 TP466～3529）

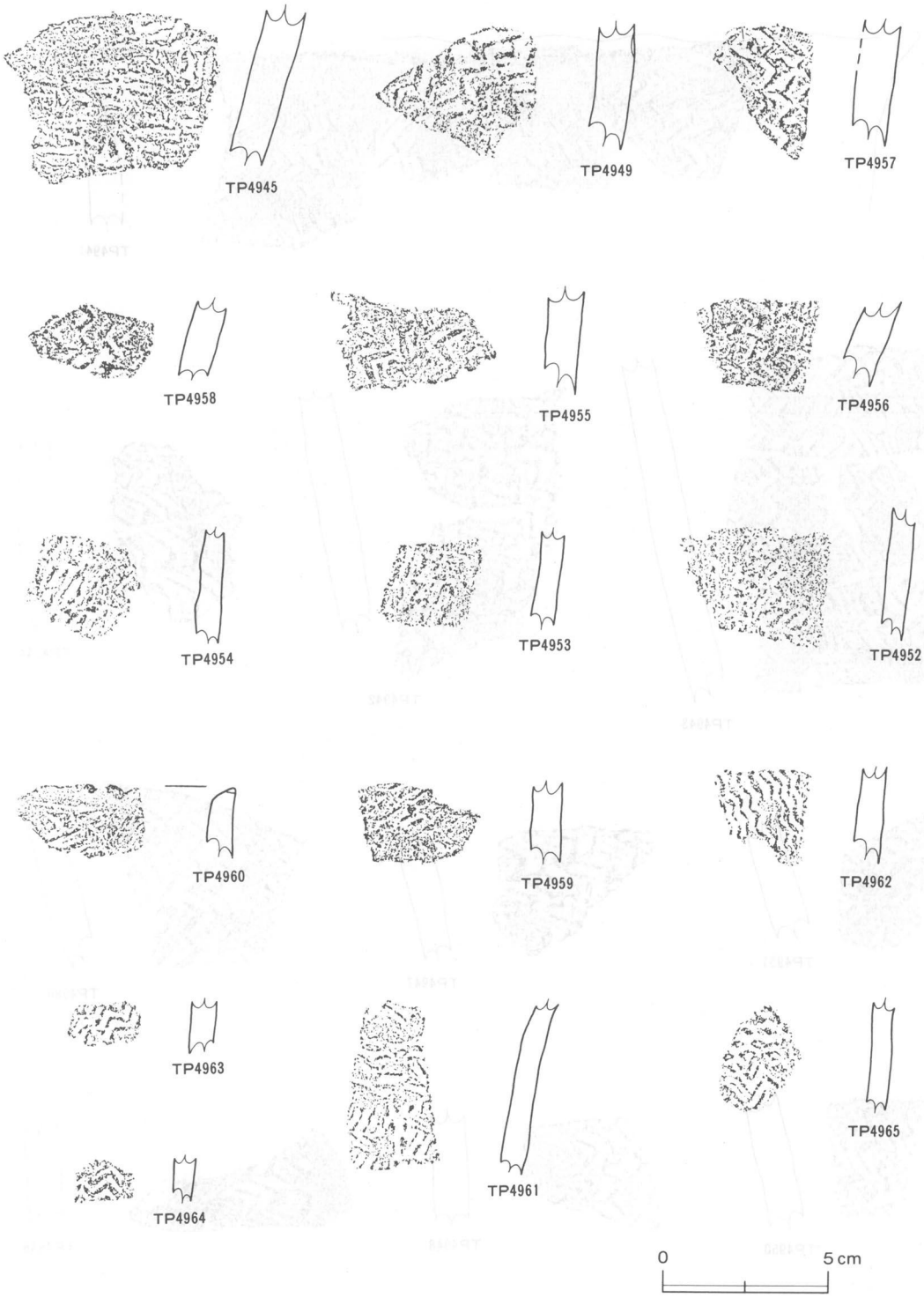
太目の平行沈線が，横位に施されるもので，口縁部は，内そぎ状を呈した平縁のものが多い。TP1841は，波状口縁である。平行沈線は，浅くはっきりした痕跡が残ることから，器面の乾燥がある程度進んだ段階で施文されたものと思われる。

4類b種（第62図 TP2203～1923，63図）

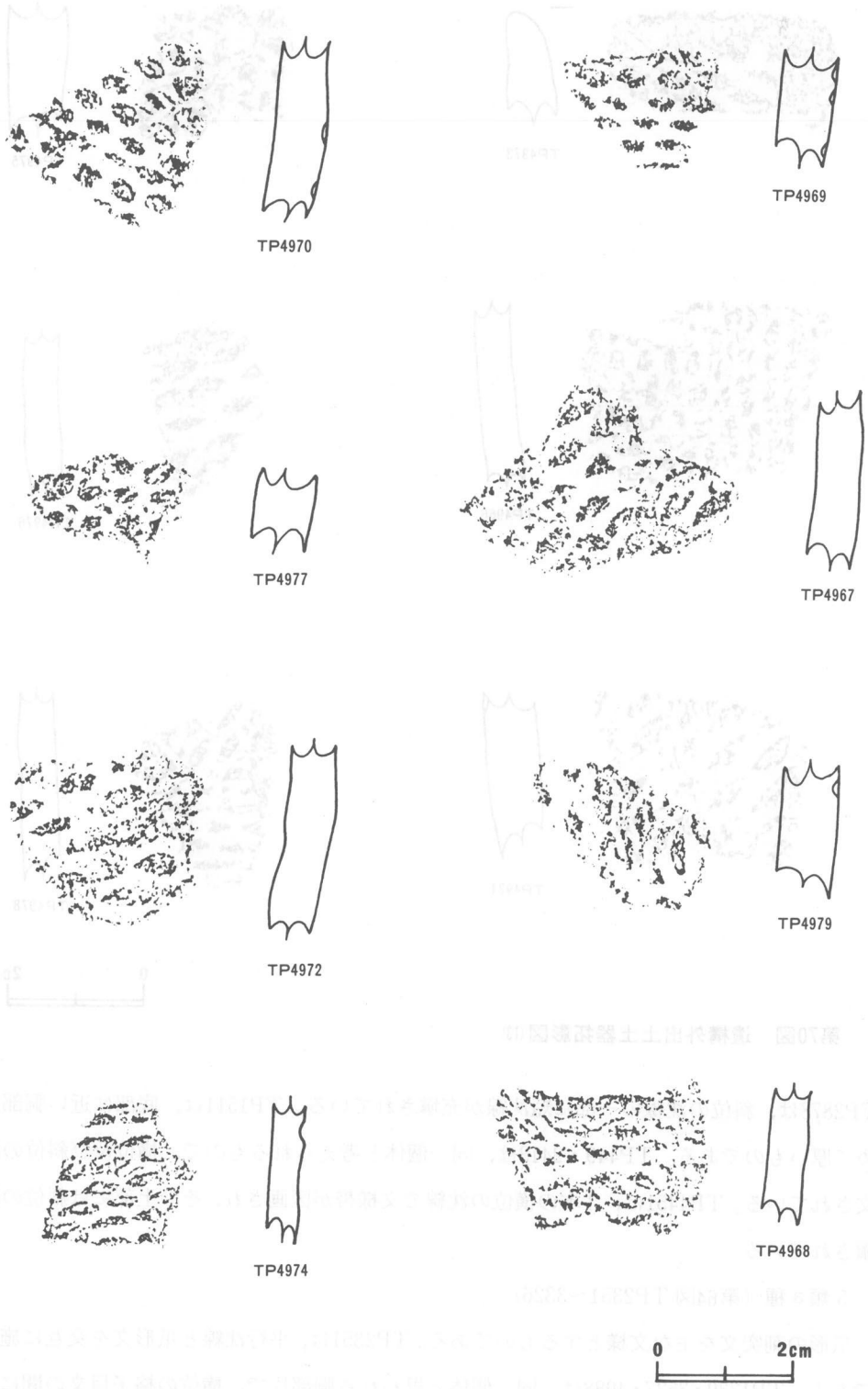
太目の平行沈線が，斜位に施されるものである。TP2808は，「八」の字状に施文されている。



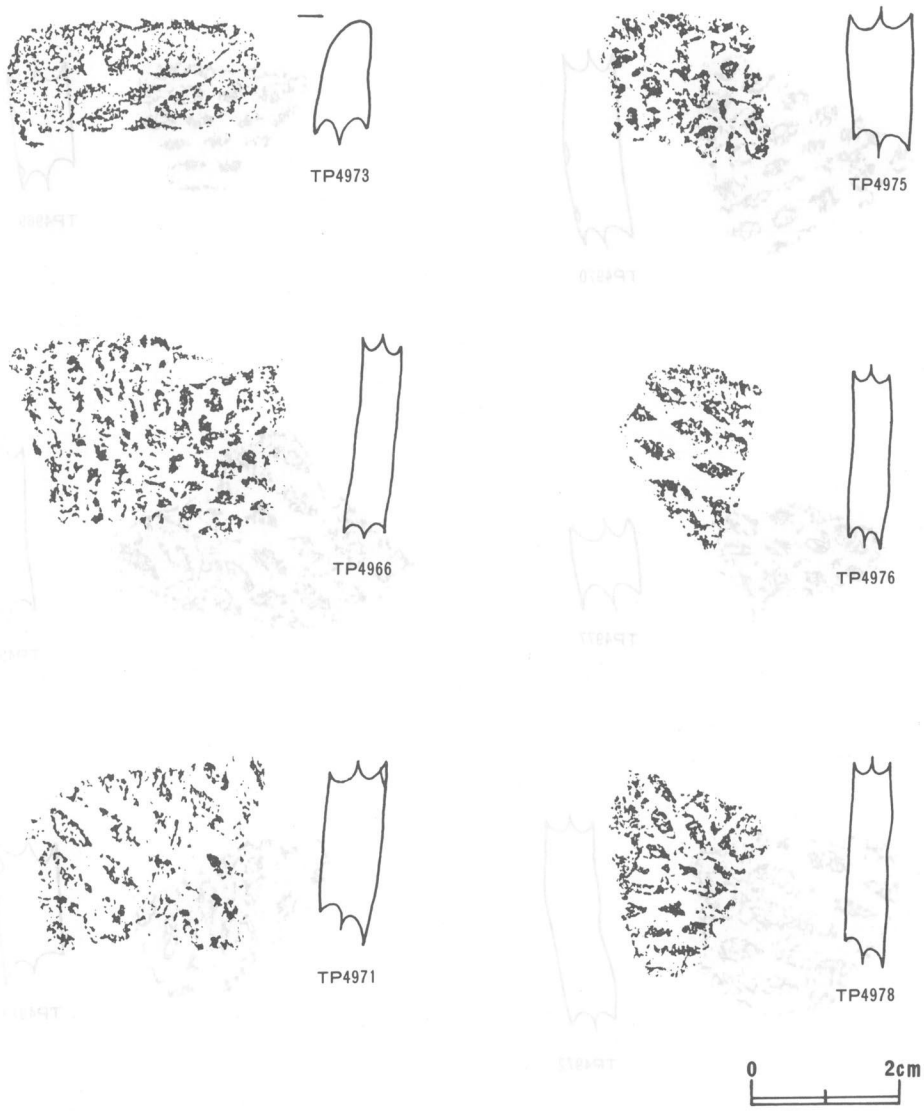
第67図　遺構外出土土器拓影図(10)



第68図　遺構外出土土器拓影図(11)



第69図　遺構外出土土器拓影図(12)



第70図　遺構外出土土器拓影図(13)

TP2878は，斜位の沈線の一部に短沈線が充塡されている。TP1511は，底部に近い胴部片で，極めて厚いものである。TP449・2413は，同一個体と考えられるもので，横位及び斜位の沈線が施文されている。TP4451は，3本の横位の沈線で文様帯が区画され，その上部には斜位の沈線が充塡されている。

5類a種（第64図 TP2351～3326）

爪形の刺突文を主な文様とするものである。TP2351は，平行沈線と爪形文を交互に施したものである。TP1730・3527・4088は，同一個体と思われる胴部片で，横位の格子目文の間に，爪形文

が充塡されている。TP3455・2932も同一個体で，平行沈線と爪形文が施されている。

5類b種（第64図 TP2248～2647，65図 TP3096～4078）

棒状工具による刺突文を主な文様とする土器で，沈線で区画された中に刺突文が充塡されている例が多い。TP2739・2948は，同一個体と思われ，横位の沈線間に刺突文が加えられている。TP2647は，直線及び弧状の沈線間に刺突文が充塡されている。TP2482は，胎土に繊維を含む。

6類（第65図 TP2834～1710，66図 TP2609～2463）

貝殻文が多用されている土器である。細い沈線で区画された間に，貝殻腹縁文が施されていることが多い。TP2523・3237・1977・1844・828などは，それぞれ同一個体であると考えられる。TP4686は，弧状の沈線で区画された中に貝殻腹縁文が施文されている。

7類（第66図 TP2002～1680）

II群に属する底部で，いずれも尖底である。文様は，斜位又は縦位の沈線が施文されている。

III群の土器

1類（第67図，68図 TP4945～4964）

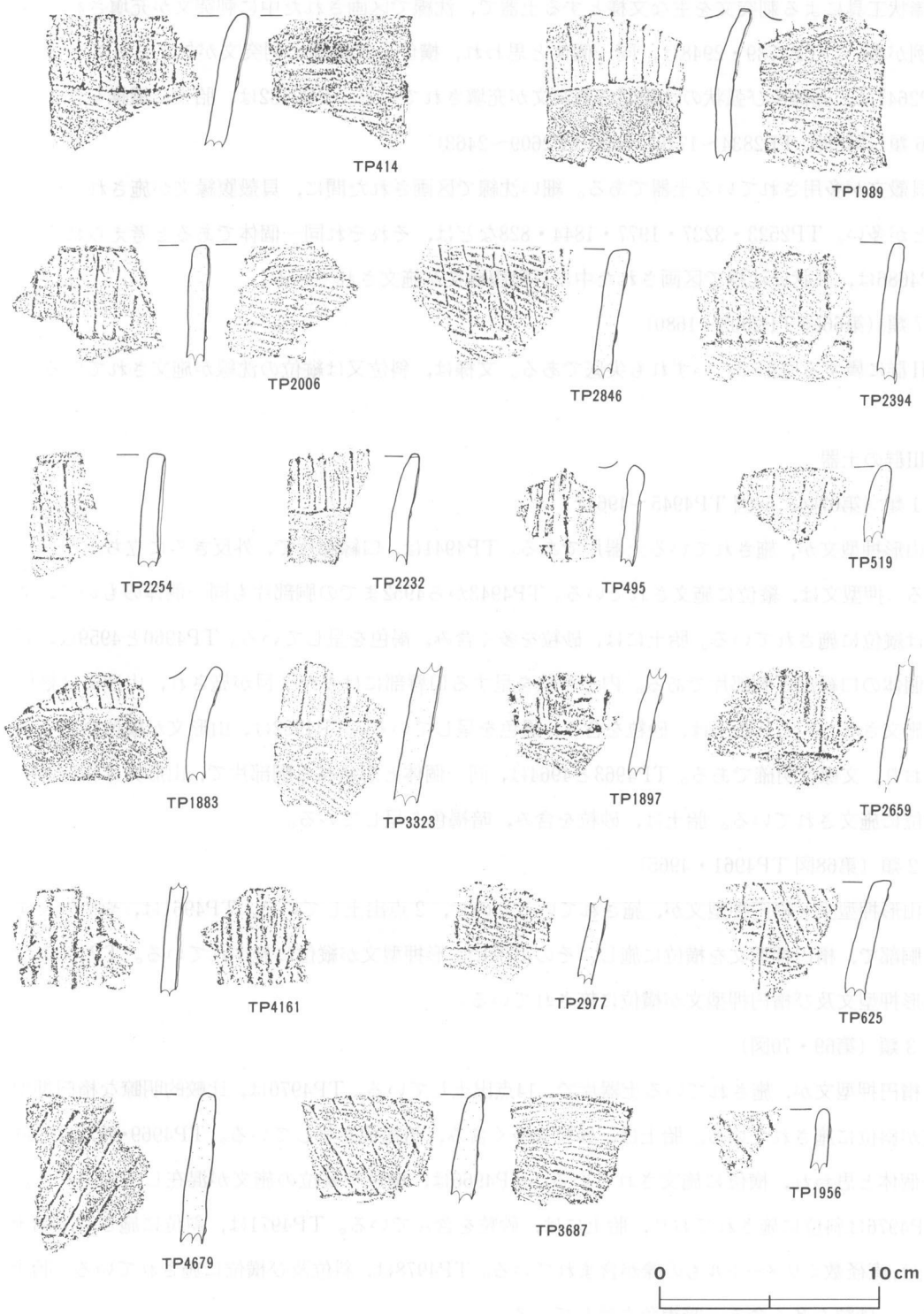
山形押型文が，施されている土器片である。TP4941は，口縁部片で，外反ぎみに立ち上がっている。押型文は，縦位に施文されている。TP4943から4952までの胴部片も同一個体のもので，文様は縦位に施されている。胎土には，砂粒を多く含み，褐色を呈している。TP4960と4959は，同一個体の口縁部と胴部片である。内そぎ状を呈する口唇部にはキザミ目が施され，山形文は縦位に施文されている。胎土は，砂粒を含み，黒色を呈している。TP4962は，山形文が縦位に施されており，文様は明確である。TP4963と4964は，同一個体と思われる胴部片で，山形文は斜位から縦位に施文されている。胎土は，砂粒を含み，暗褐色を呈している。

2類（第68図 TP4961・4965）

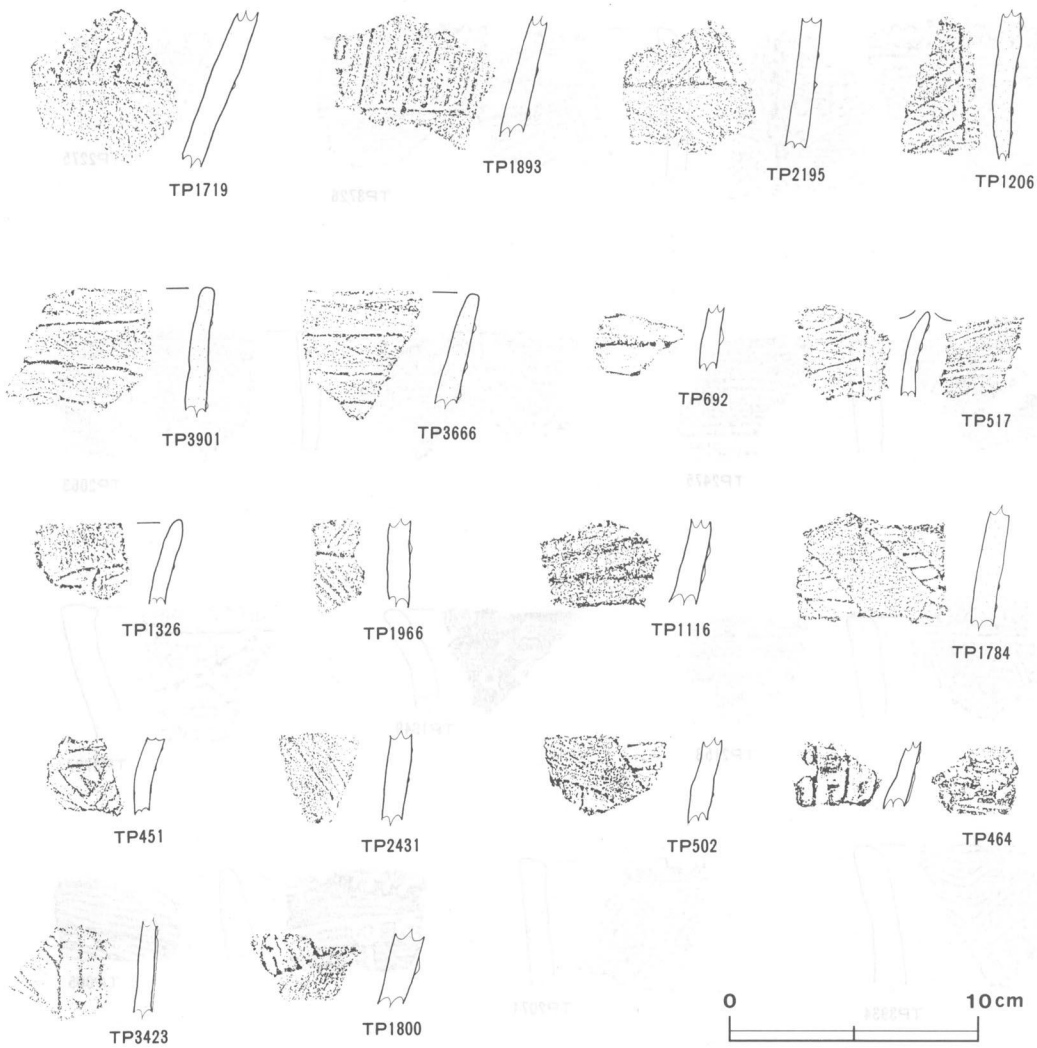
山形押型文と楕円押型文が，施されているもので，2点出土している。TP4961は，やや外反する胴部で，楕円押型文を横位に施し，その下部に山形押型文が縦位に施されている。TP4965は，山形押型文及び楕円押型文が横位に施されている。

3類（第69・70図）

楕円押型文が，施されている土器片で，14点出土している。TP4970は，比較的明瞭な楕円押型文が斜位に施されている。胎土は，砂粒を多く含み，暗褐色を呈している。TP4969・4977は，同一個体と思われ，横位に施文されている。TP4966は，横位や縦位の施文が混在してみられる。TP4976は斜位に施されており，胎土には，砂粒を含んでいる。TP4971は，斜位に施され，胎土には，直径数ミリメートルもの礫が含まれている。TP4978は，斜位及び横位に施されている。胎土には，砂粒を多く含み，暗褐色を呈している。



第71図　遺構外出土土器拓影図(14)

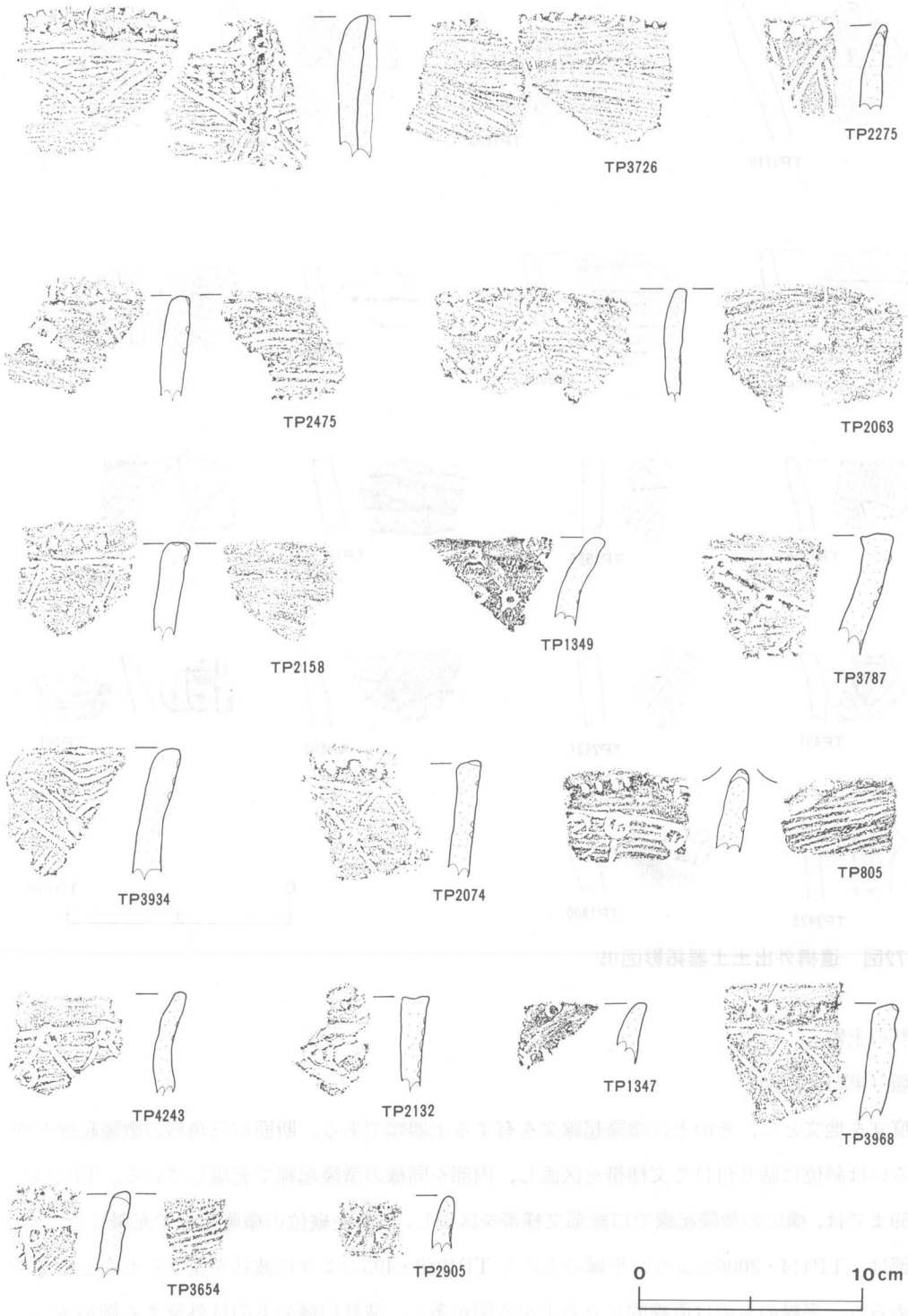


第72図　遺構外出土土器拓影図(15)

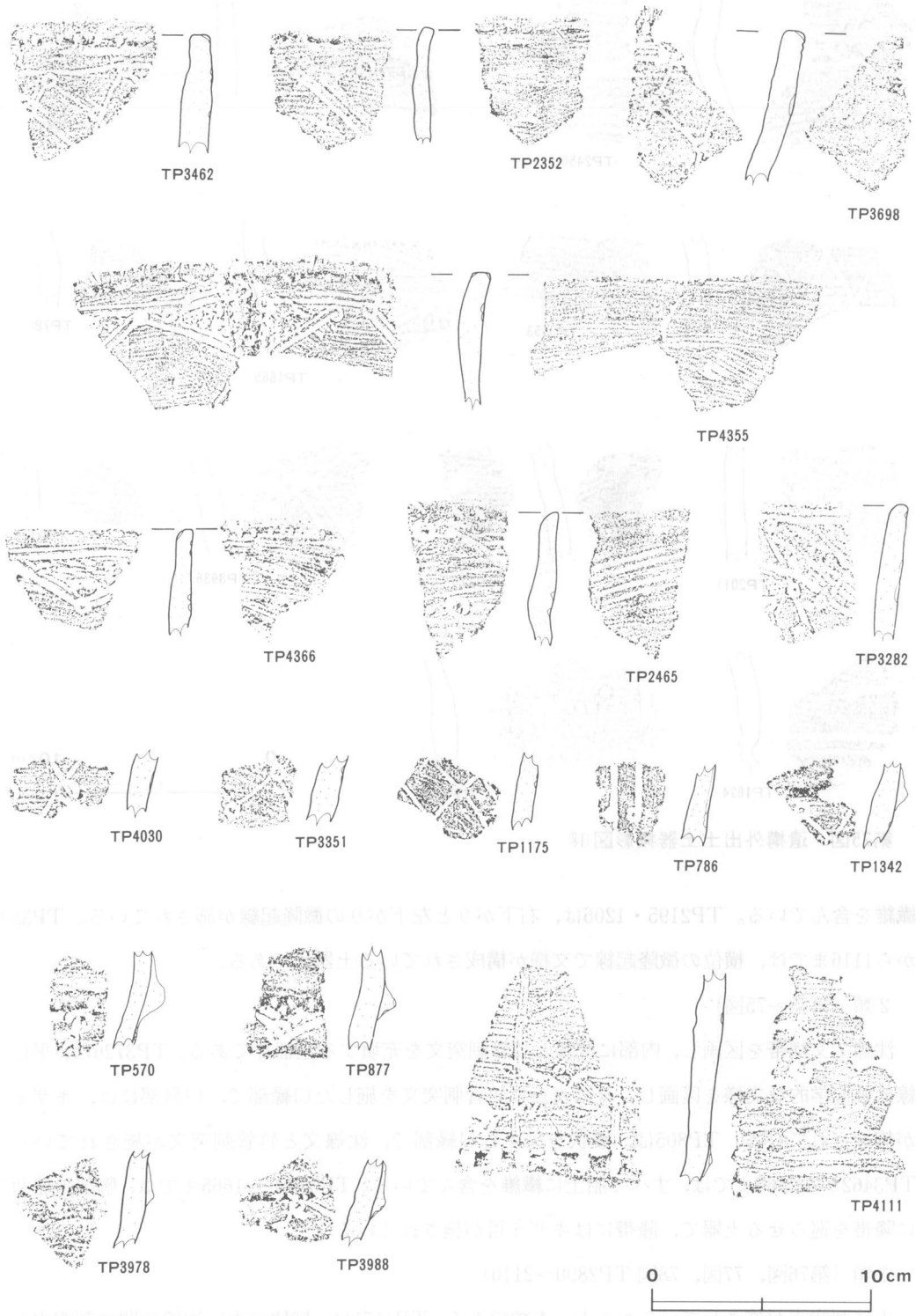
IV群の土器

1類（第71・72図）

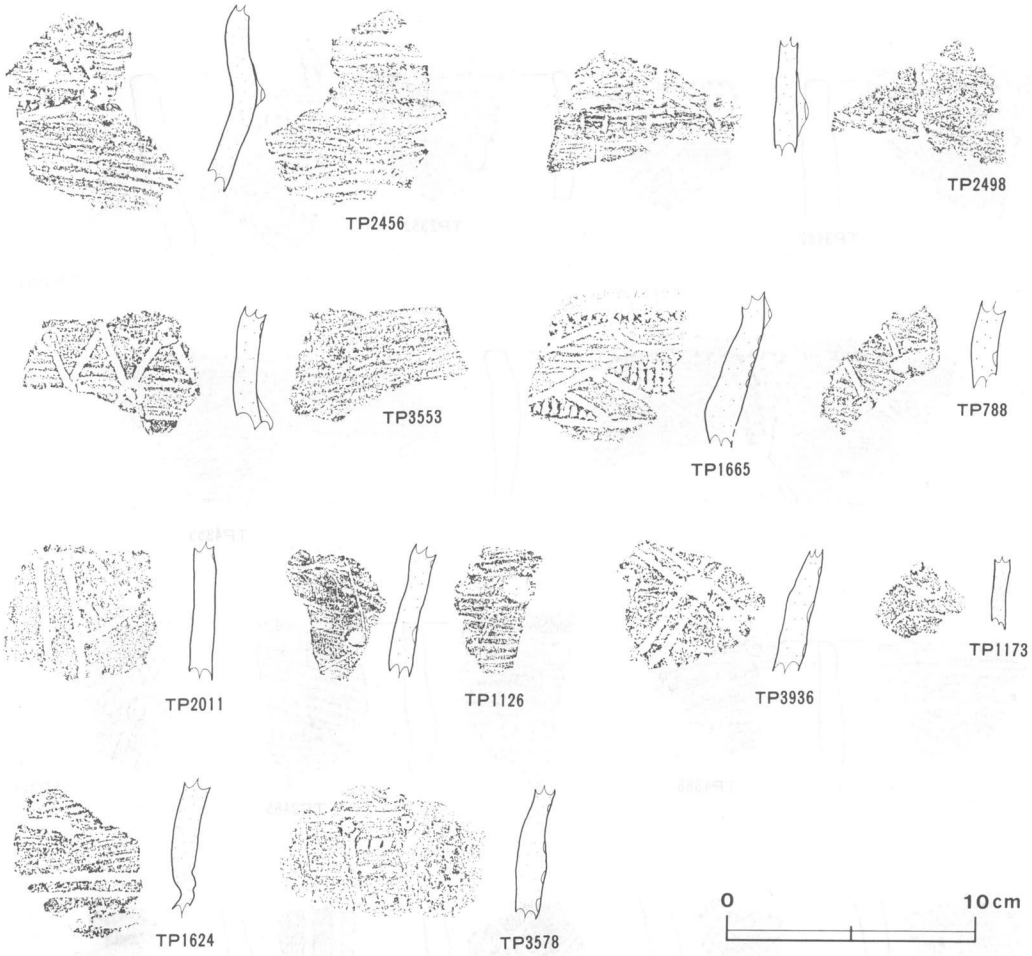
条痕文を地文とし，その上に微隆起線文を有する土器類である。断面が三角形の微隆起線を横位あるいは斜位に貼り付けて文様帯を区画し，内部を同様の微隆起線で充塡している。TP414から2659までは，横位の微隆起線で口縁部文様帯を区画し，内部を縦位の微隆起線で充塡している。口縁部は，TP414・2006のように平縁のものとTP1989・495のように波状を呈するものとの2種が認められ，平縁のものは直線的に立ち上がる例が多く，波状口縁のものは外反する例が多い。TP625から1893は，文様帯を斜位の微隆起線で充塡する土器片である。TP4679・3787は，胎土に



第73図　遺構外出土土器拓影図(16)



第74図　遺構外出土土器拓影図(17)



第75図　遺構外出土土器拓影図(18)

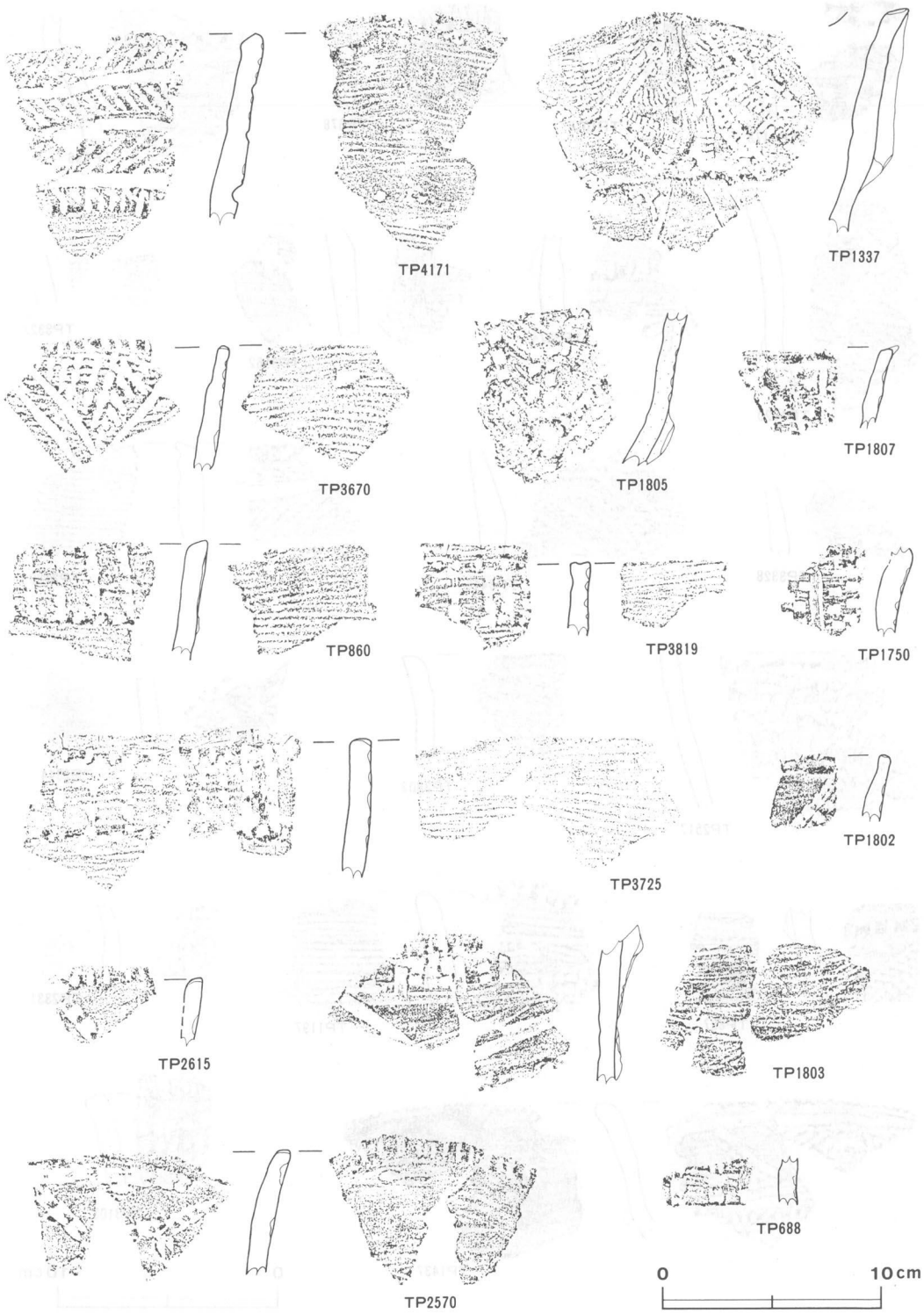
繊維を含んでいる。TP2195・1206は，右下がりと左下がりの微隆起線が施されている。TP3901から1116までは，横位の微隆起線で文様が構成されている土器片である。

2類（第73～75図）

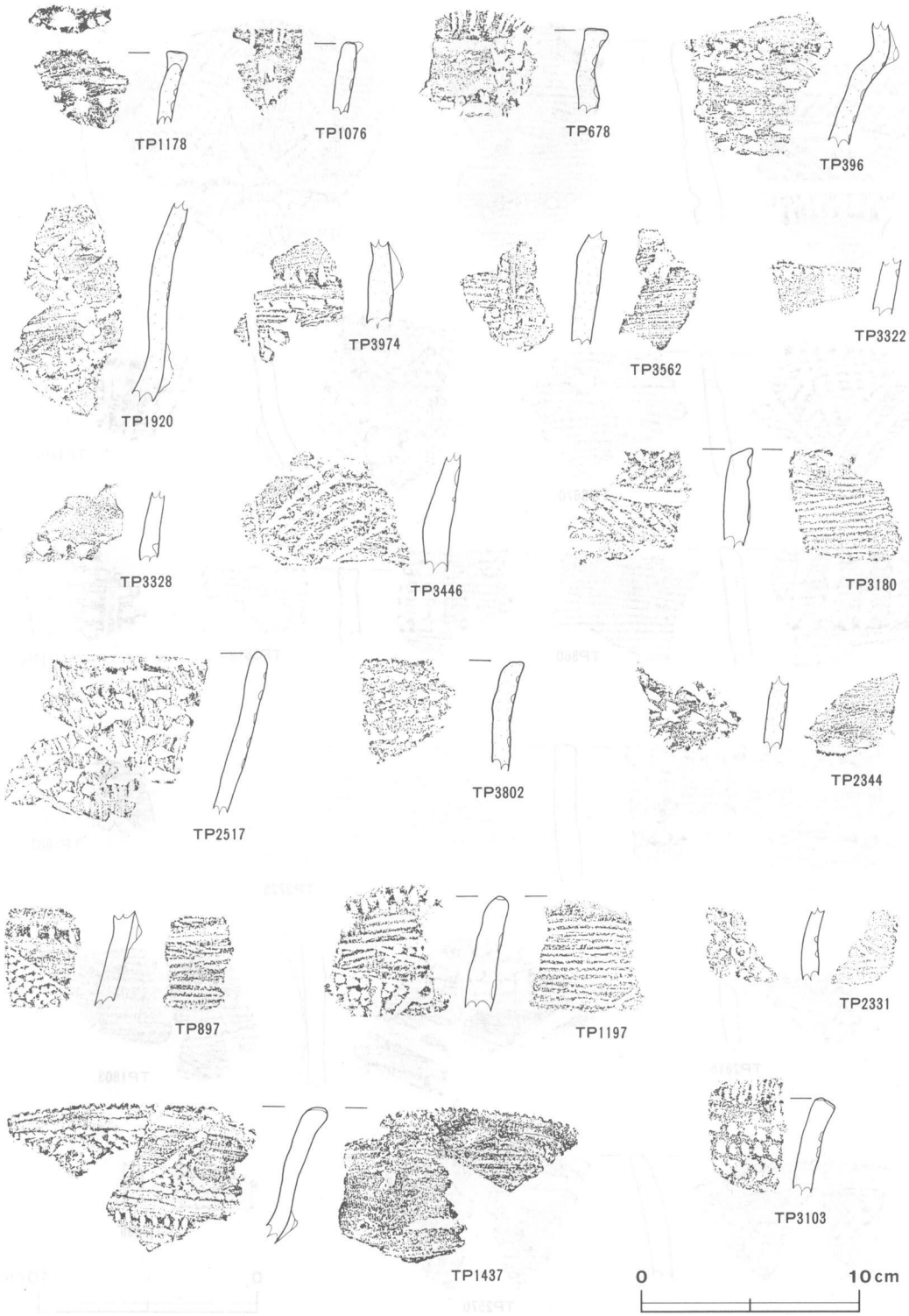
沈線で文様帯を区画し，内部に沈線と竹管刺突文を充填する土器片である。TP3726は，平行沈線で幾何学的な文様を区画し，その交点に竹管刺突文を施した口縁部で，口唇部には，キザミ目が施文されている。TP805は，波状を呈する口縁部で，沈線文と竹管刺突文が施されている。TP3462から2465までは，すべて胎土に繊維を含んでいる。TP570から1665までは，胴部の屈曲部に隆帯を巡らせる土器で，隆帯にはキザミ目が施されている。

3類（第76図，77図，78図 TP2890～2110）

主に刺突文が施されているものが，本類である。TP4171は，横位の太い沈線の間に刺突文が充

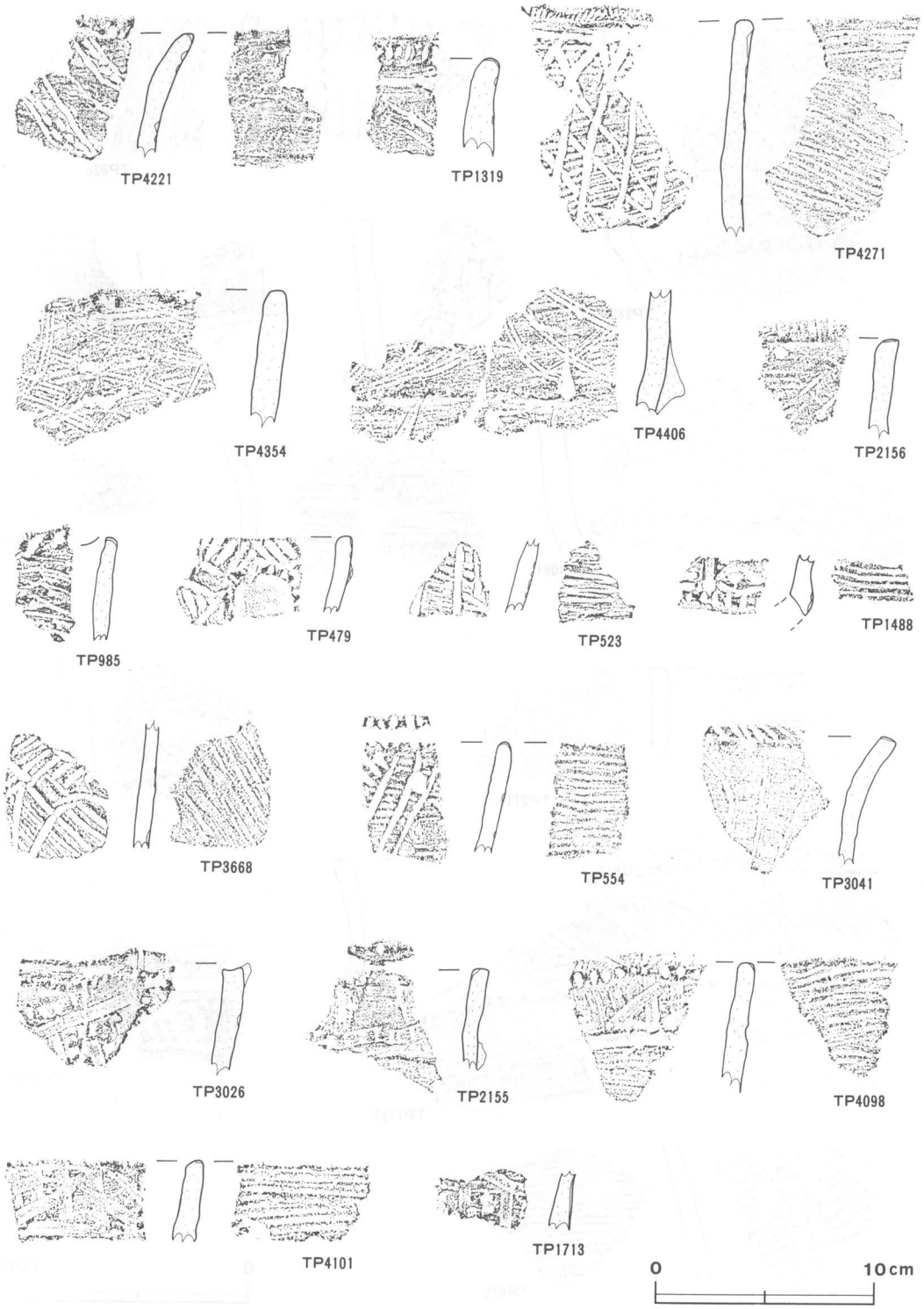


第76図　遺構外出土土器拓影図(19)

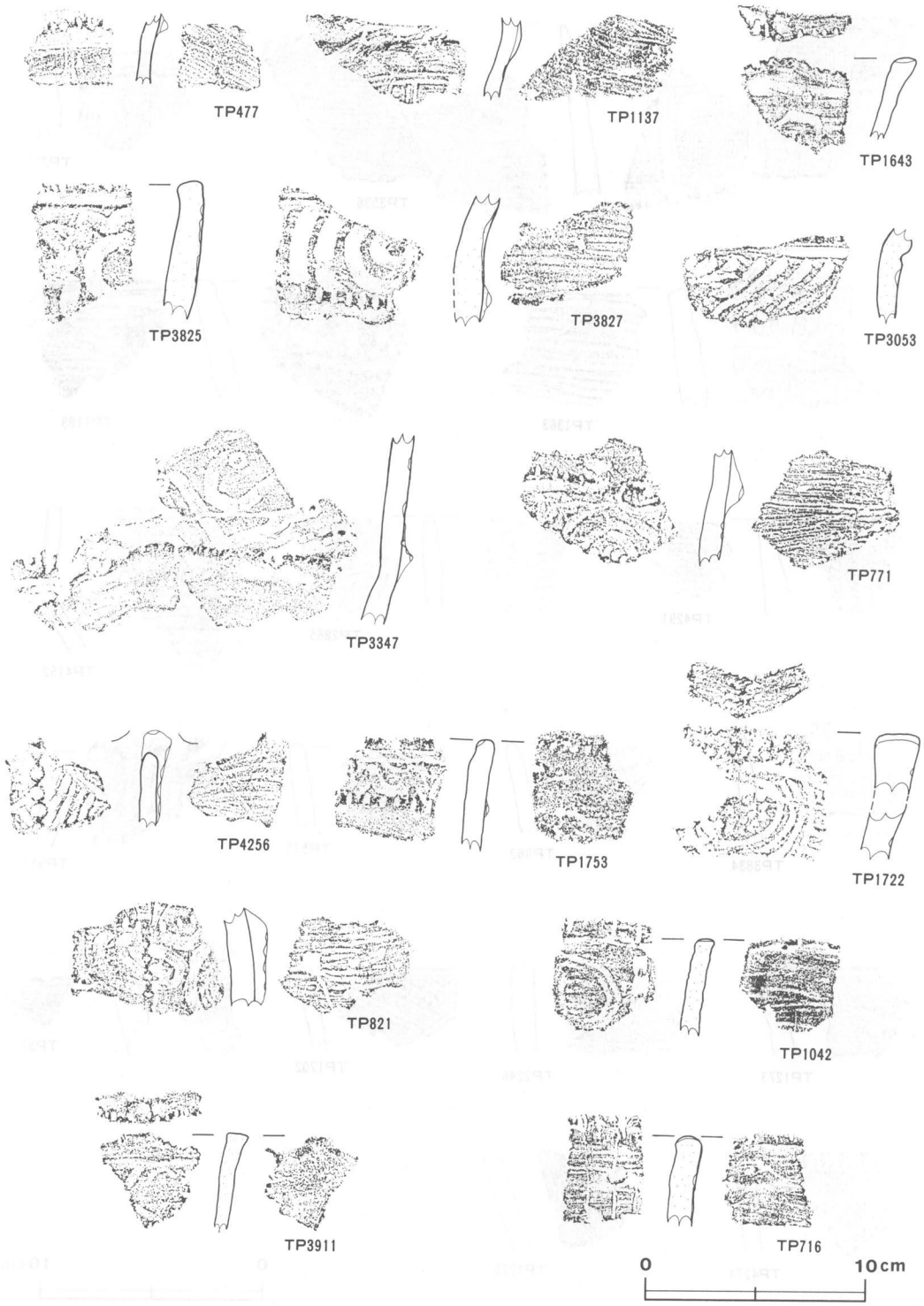


第77図　遺構外出土土器拓影図(20)

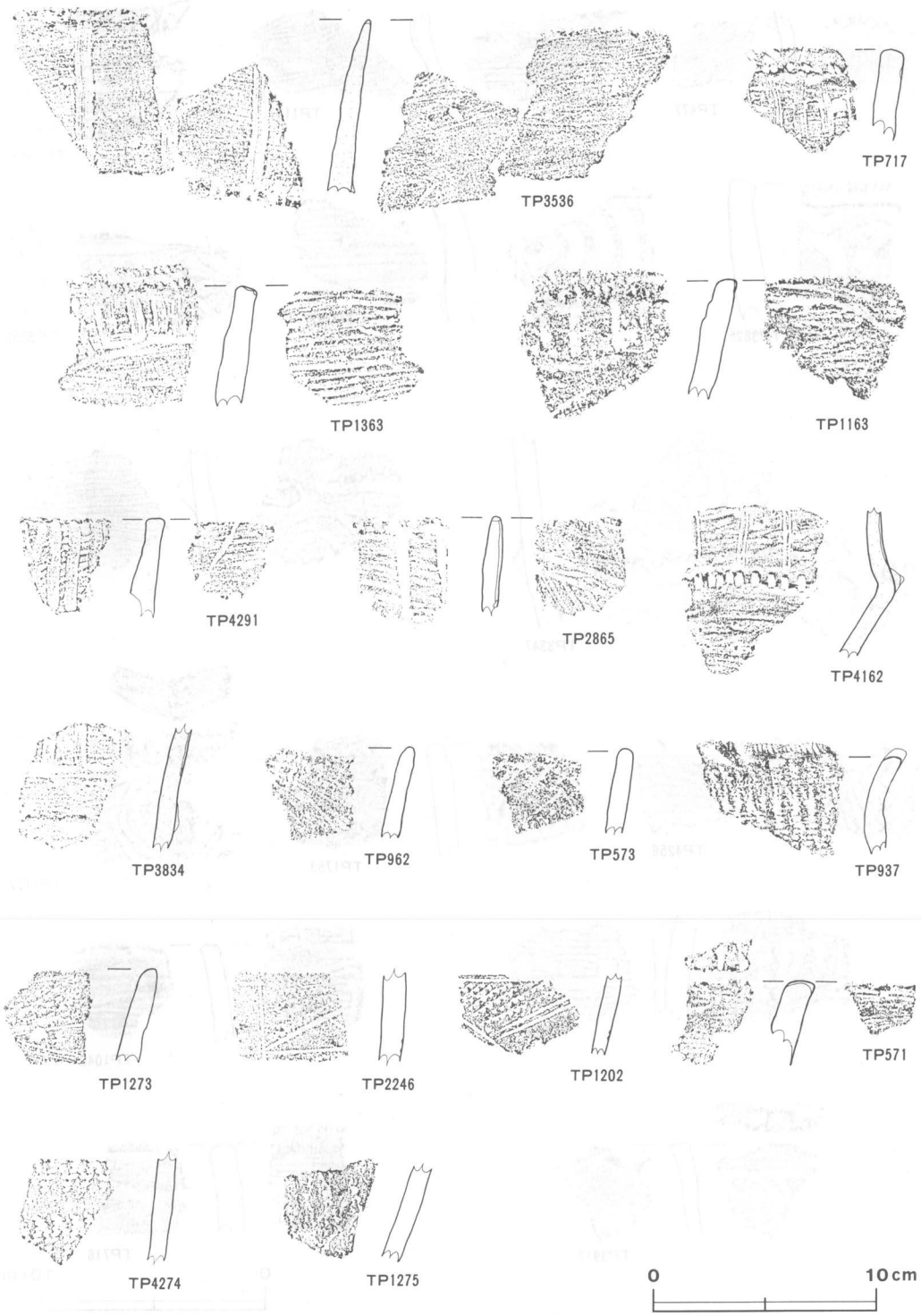
第78図　遺構外出土土器拓影図(21)



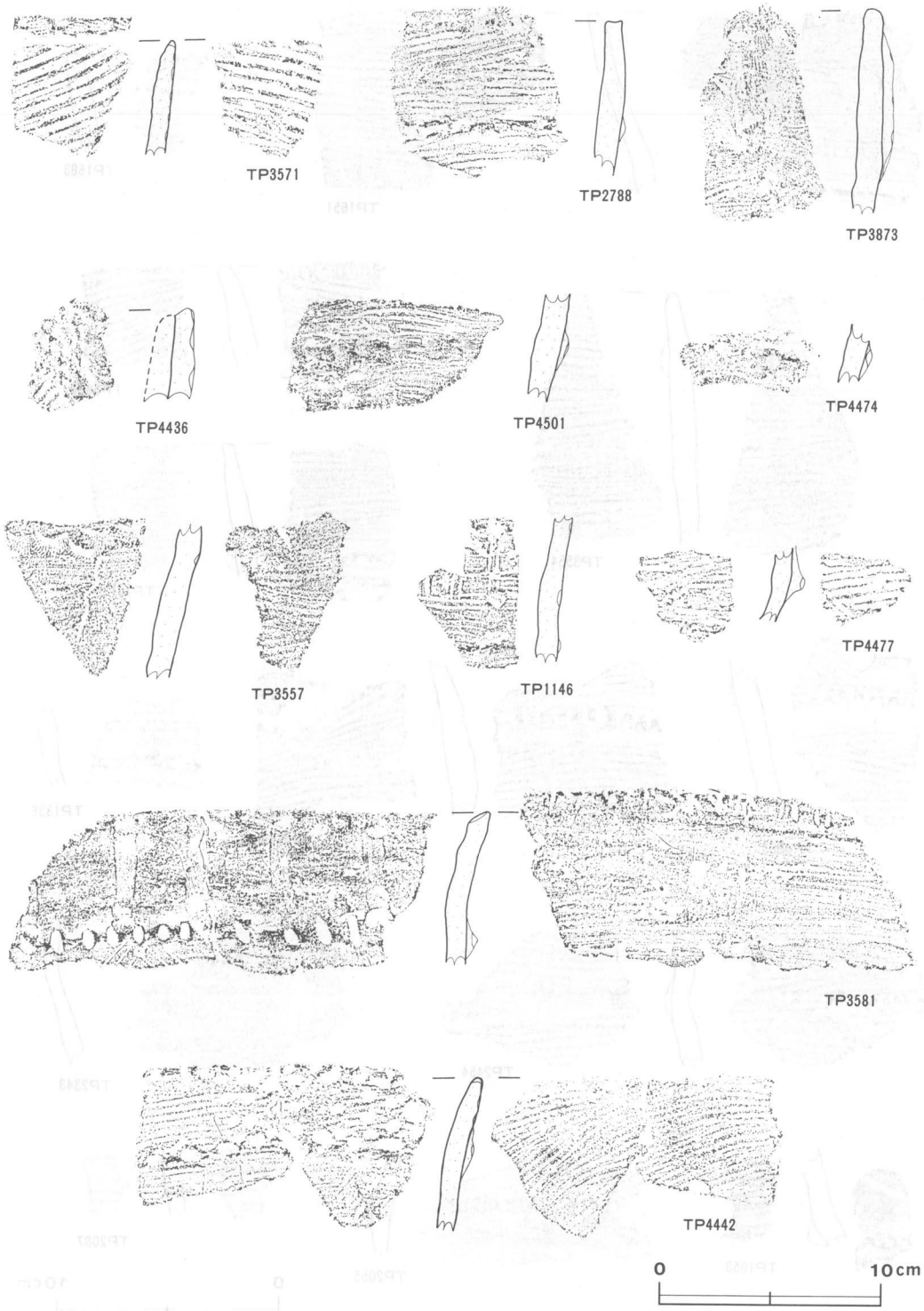
第79図　遺構外出土土器拓影図(22)



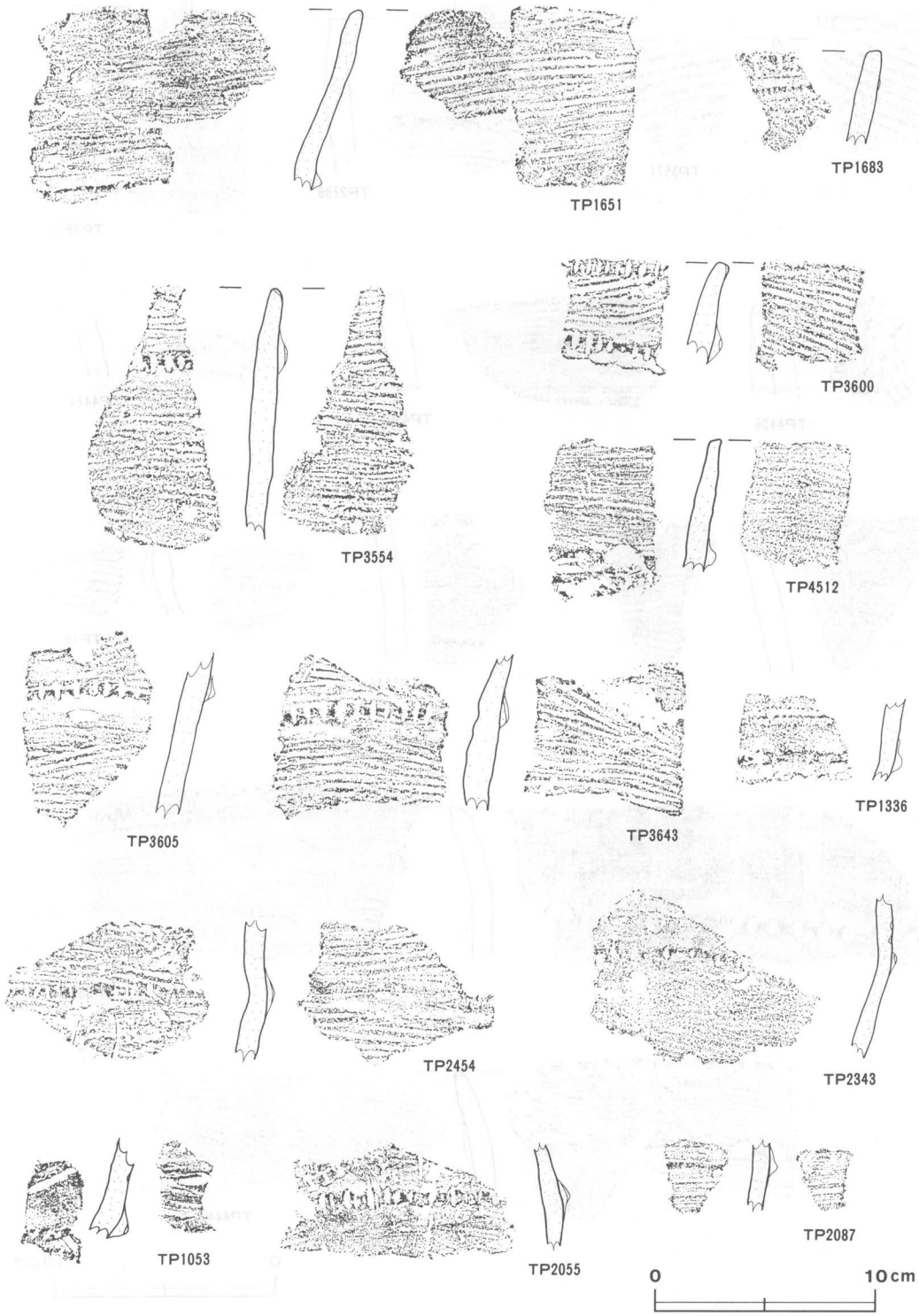
第80図　遺構外出土土器拓影図(23)



第81図　遺構外出土土器拓影図(24)



第82図　遺構外出土土器拓影図(25)



第83図　遺構外出土土器拓影図(26)

塡されている。TP3670は，斜位の沈線で区画した間に，刺突文が充塡されている。TP1805から688は，角棒状の工具による連続刺突文が縦位，あるいは斜位に施されている土器片である。TP1178から678も，角棒状の工具による刺突文が施され，口唇部には，キザミ目が施文されている。TP396は，屈曲する胴部片である。TP2517は，斜位の沈線と菱形の刺突文が施されている。TP897・1197は，沈線で区画した内部に刺突文が充塡されている。TP1437は，緩やかな波状を呈する口縁部で，ヘラ状工具による浅い沈線に沿って刺突文が充塡されている。TP2890は，屈曲部に隆帯を持つ口縁部で，沈線で区画した中に連続した刺突文が施されている。TP2110は，口唇部にキザミ目が，口縁部には，円形刺突文が施文されている。

4類a種（第78図 TP1731～675，79図 TP4221～3041）

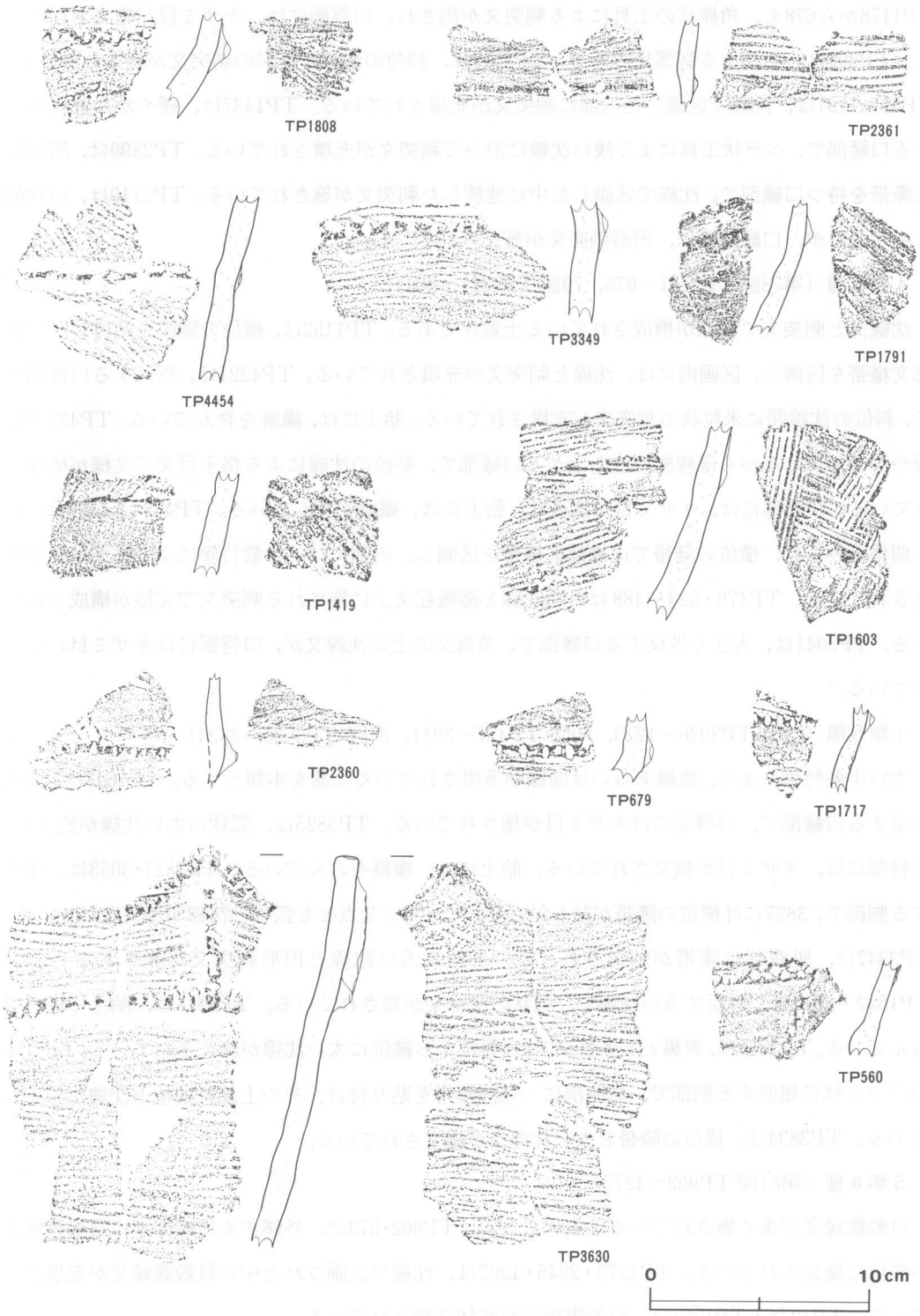
沈線文と刺突文で文様が構成されている土器片である。TP1152は，横位の隆帯を貼付して口縁部文様帯を区画し，区画内には，沈線と刺突文が充塡されている。TP4221は，外反する口縁部片で，斜位の沈線間に米粒状の刺突文が充塡されている。胎土には，繊維を含んでいる。TP4271は，緩やかに外反しながら直線的に立ち上がる口縁部で，斜位の沈線による格子目文で文様が構成されている。口唇部には，キザミ目が施され，胎土には，繊維を含んでいる。TP4354と4406は，同一個体とみられ，横位の隆帯で口縁部文様帯を区画し，内部には，半截竹管による格子目文が施文されている。TP479・523・1488は，短沈線と微隆起文上に施される刺突文で文様が構成されている。TP3041は，大きく外反する口縁部で，条痕文の上に沈線文が，口唇部にはキザミ目が施されている。

4類b種（79図 TP3026～1713，80図 TP477～3911，81図 TP3536～3834）

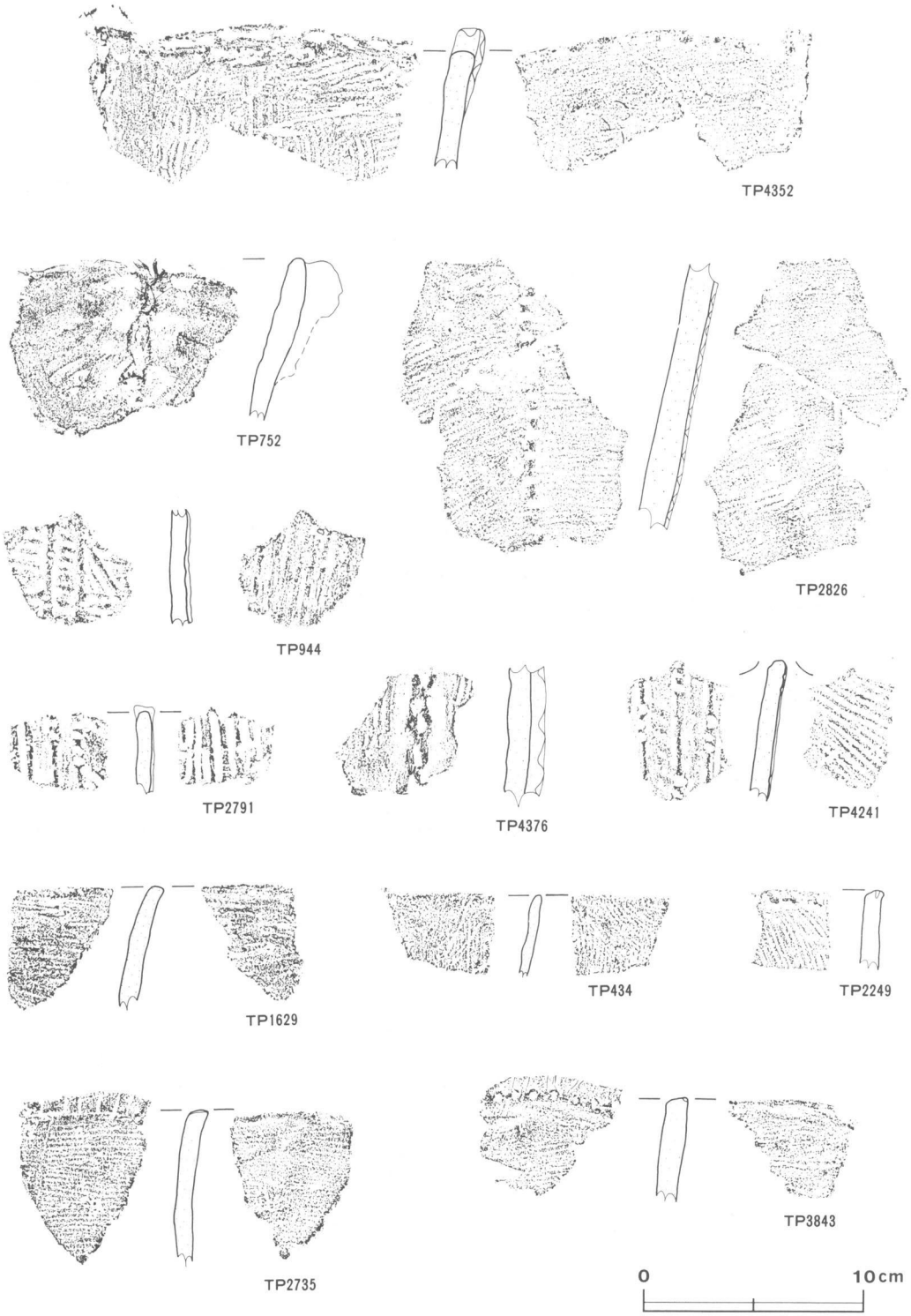
太い半截竹管により，直線あるいは曲線が多用されている土器を本類とする。TP1643は，波状を呈する口縁部で，口唇部にはキザミ目が施されている。TP3825は，弧状の太い沈線が施され，口唇部には，キザミ目が施文されている。胎土には，繊維を含んでいる。TP3827・3053は，屈曲する胴部で，3827には横位の隆帯が貼り付けられている。2点とも弧状の沈線が施文されている。TP3347は，屈曲部に隆帯が貼付され，その上部に太い沈線と円形刺突文が施されている。TP1042・3911は，外反する口縁部で，弧状の沈線文が施されている。TP3911は，胎土に繊維を含んでいる。TP3536は，表裏とも条痕文で，口唇部から縦位に太い沈線が施文されている。TP4162は「＞」状に屈曲する胴部で，屈曲部に一条の隆帯を貼り付け，その上部に縦位の沈線が施されている。TP3834は，横位の隆帯と太い沈線文が施文されている。

5類a種（第81図 TP962～1275）

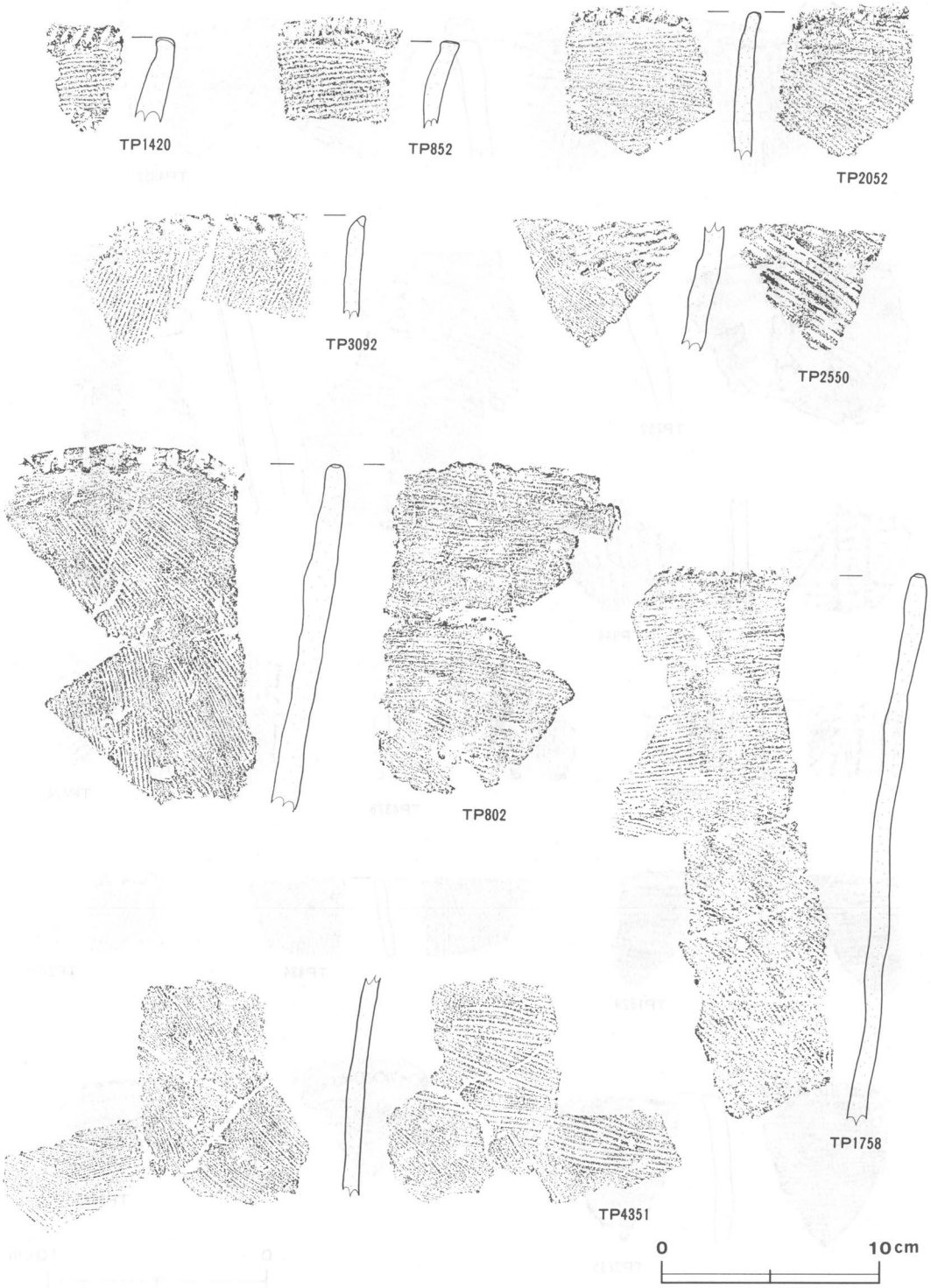
貝殻腹縁文が多く施されている土器片である。TP962・573は，外傾する口縁部で，貝殻腹縁文が斜位に施文されている。TP1273・2246・1202は，沈線で区画された中に貝殻腹縁文が充塡されている。TP4274・TP1275は，貝殻腹縁文が波状に施されている。



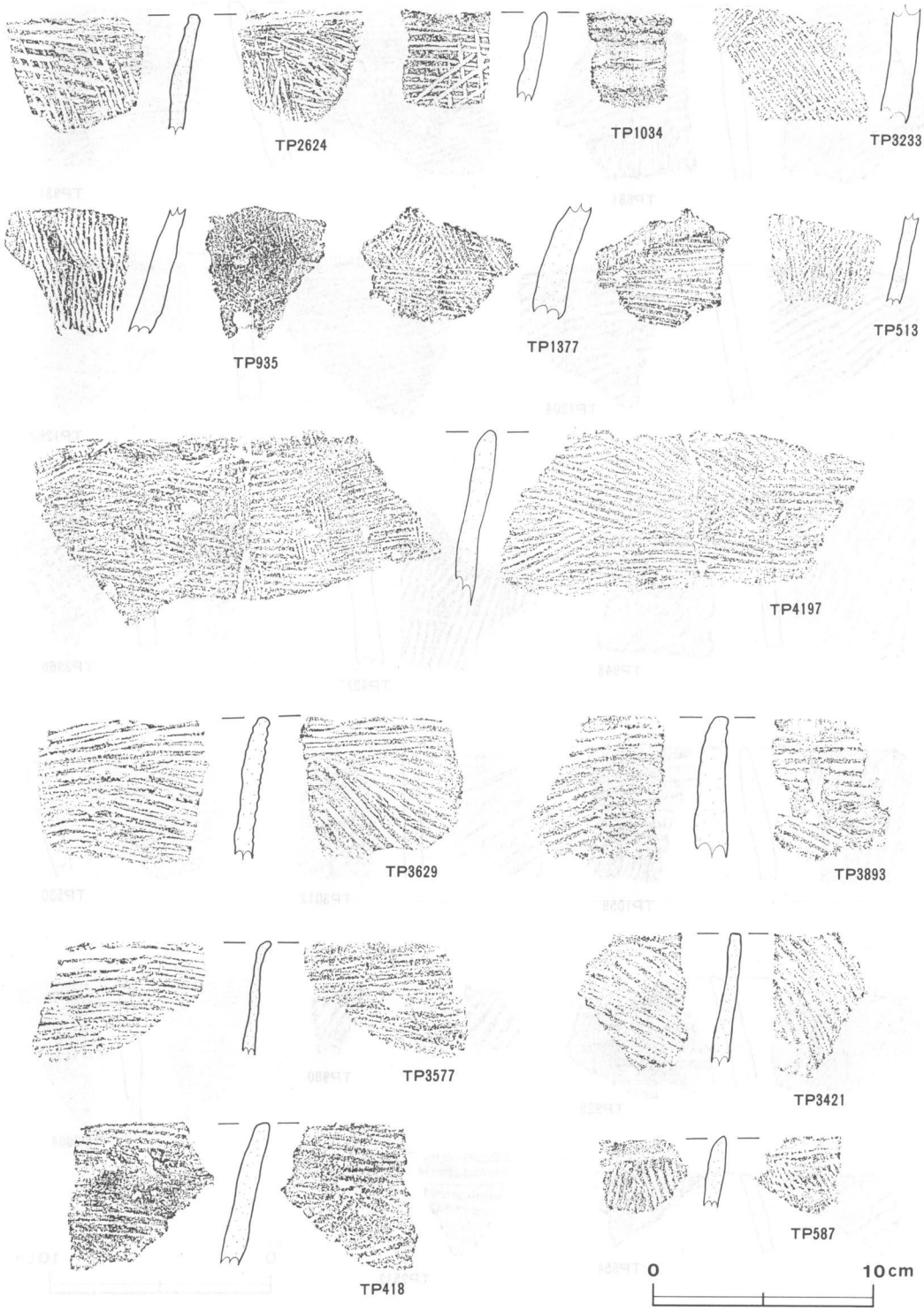
第84図　遺構外出土土器拓影図(27)



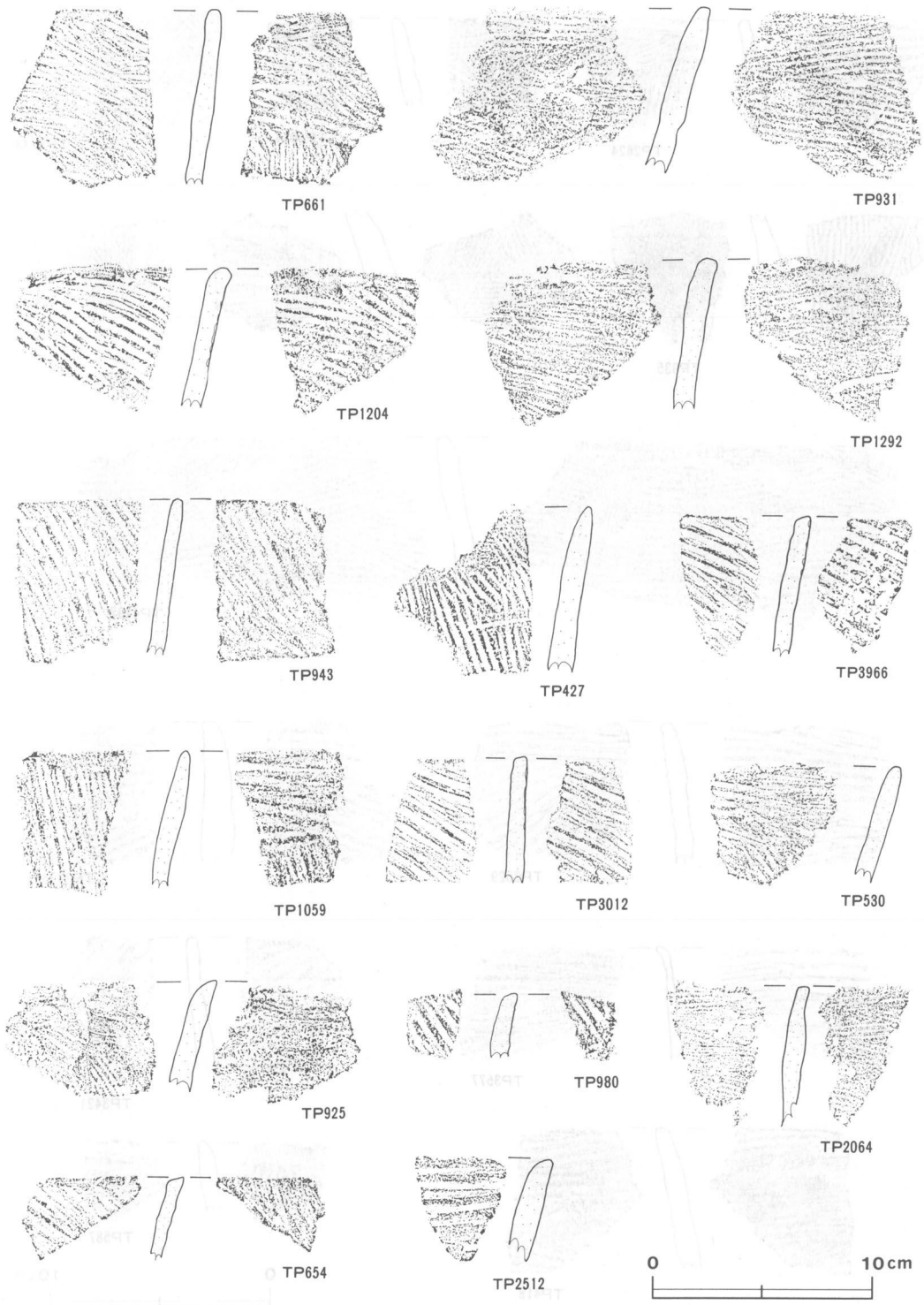
第85図　遺構外出土土器拓影図(28)



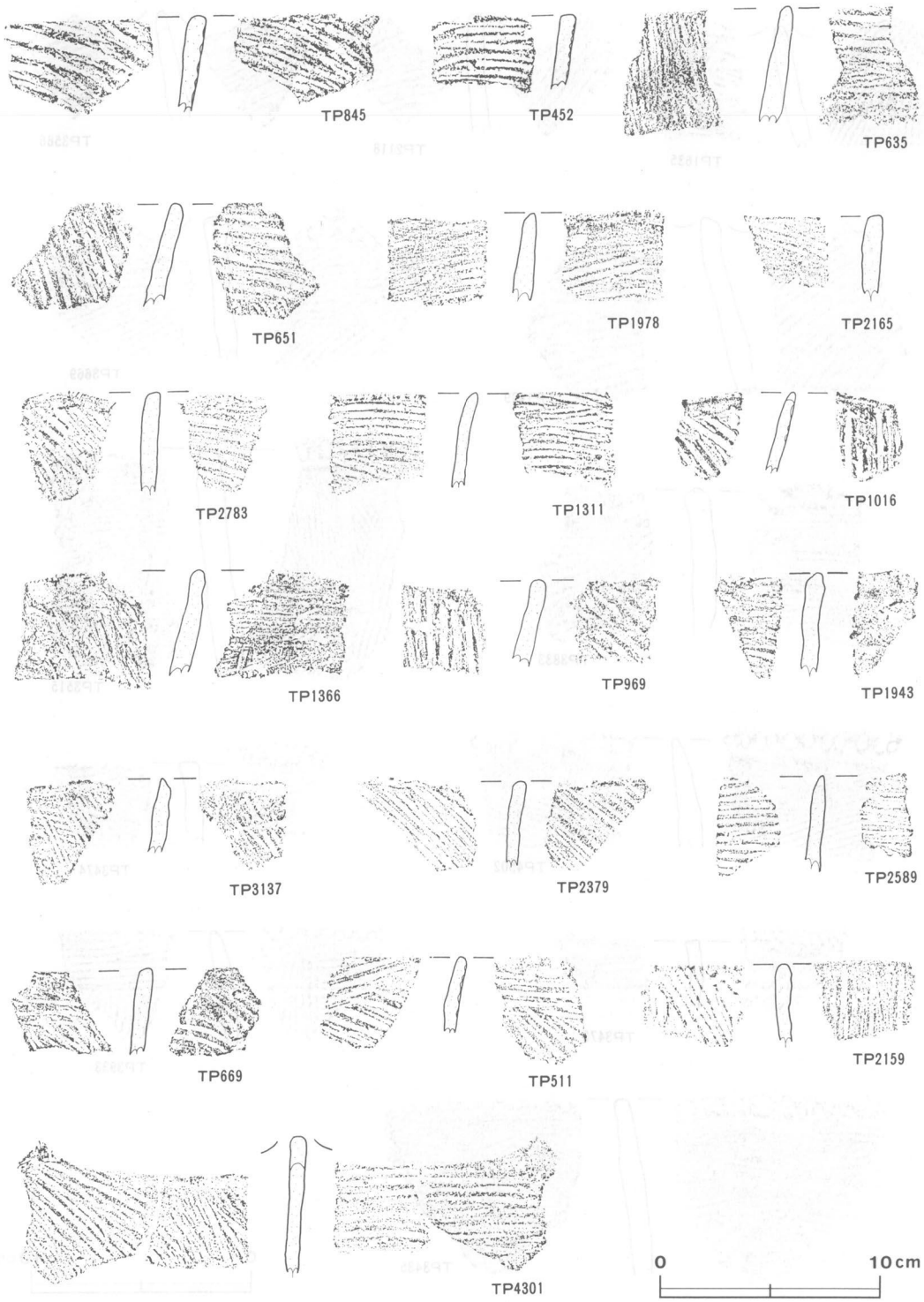
第86図　遺構外出土土器拓影図(29)



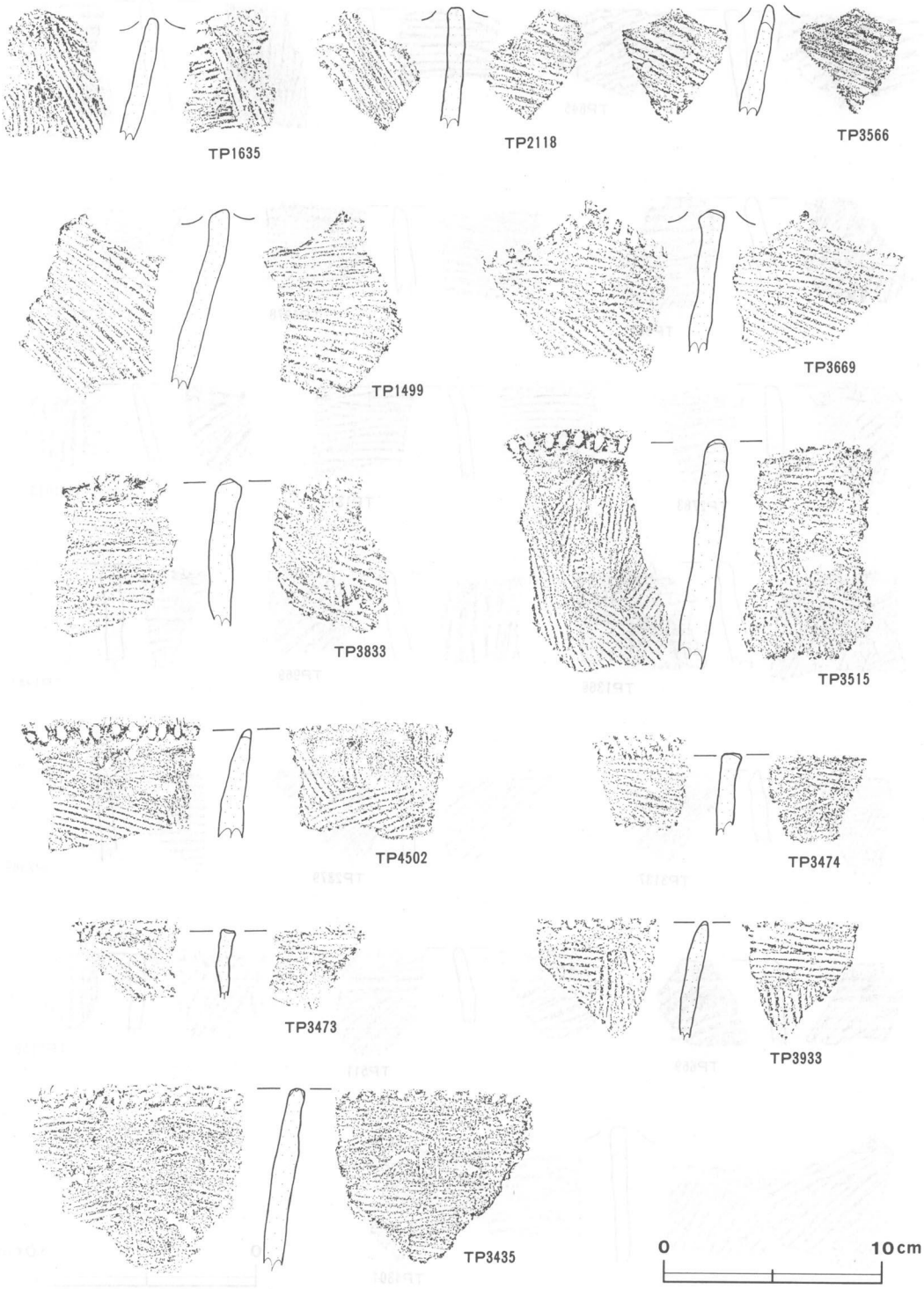
第87図　遺構外出土土器拓影図(30)



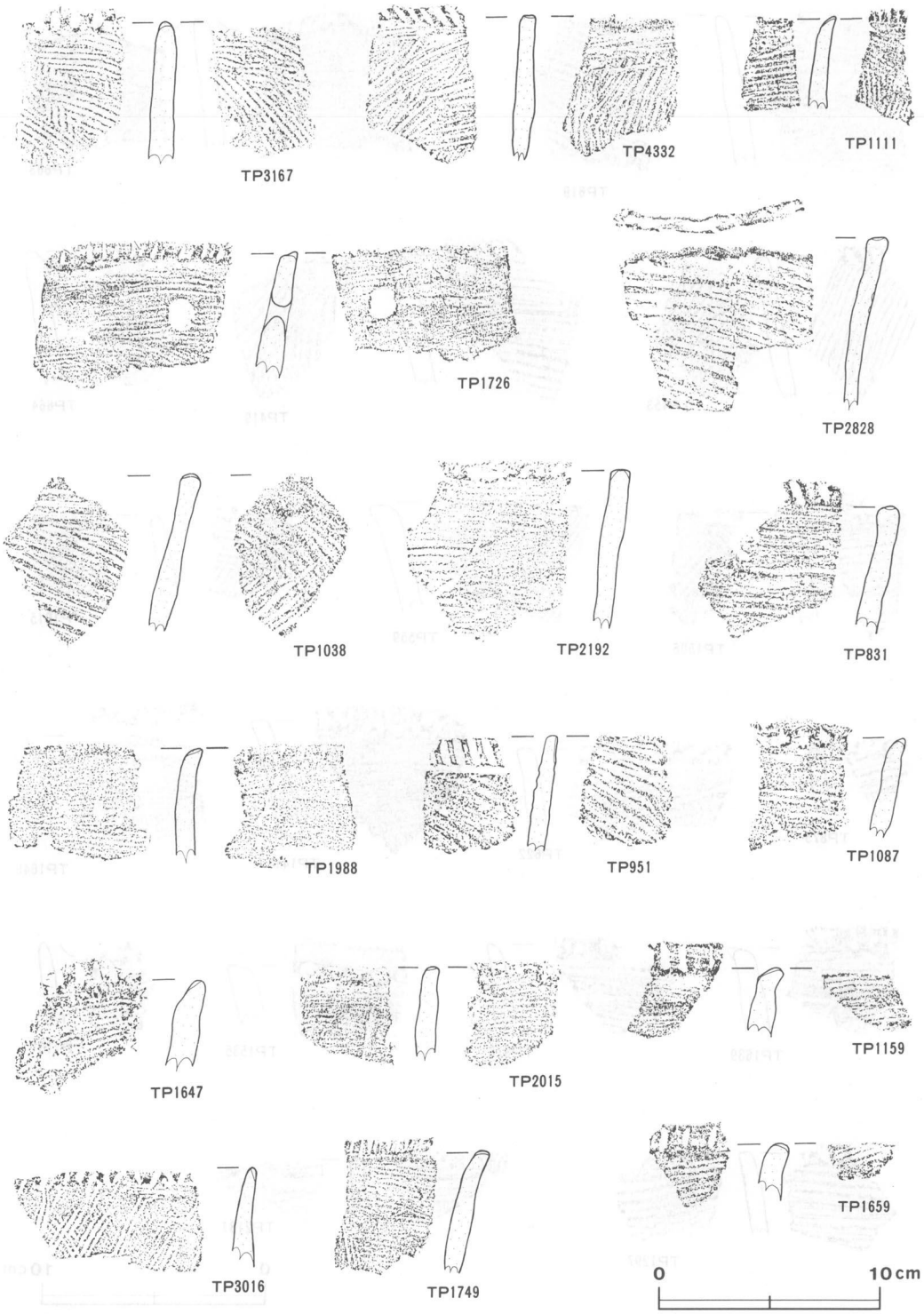
第88図　遺構外出土土器拓影図(31)



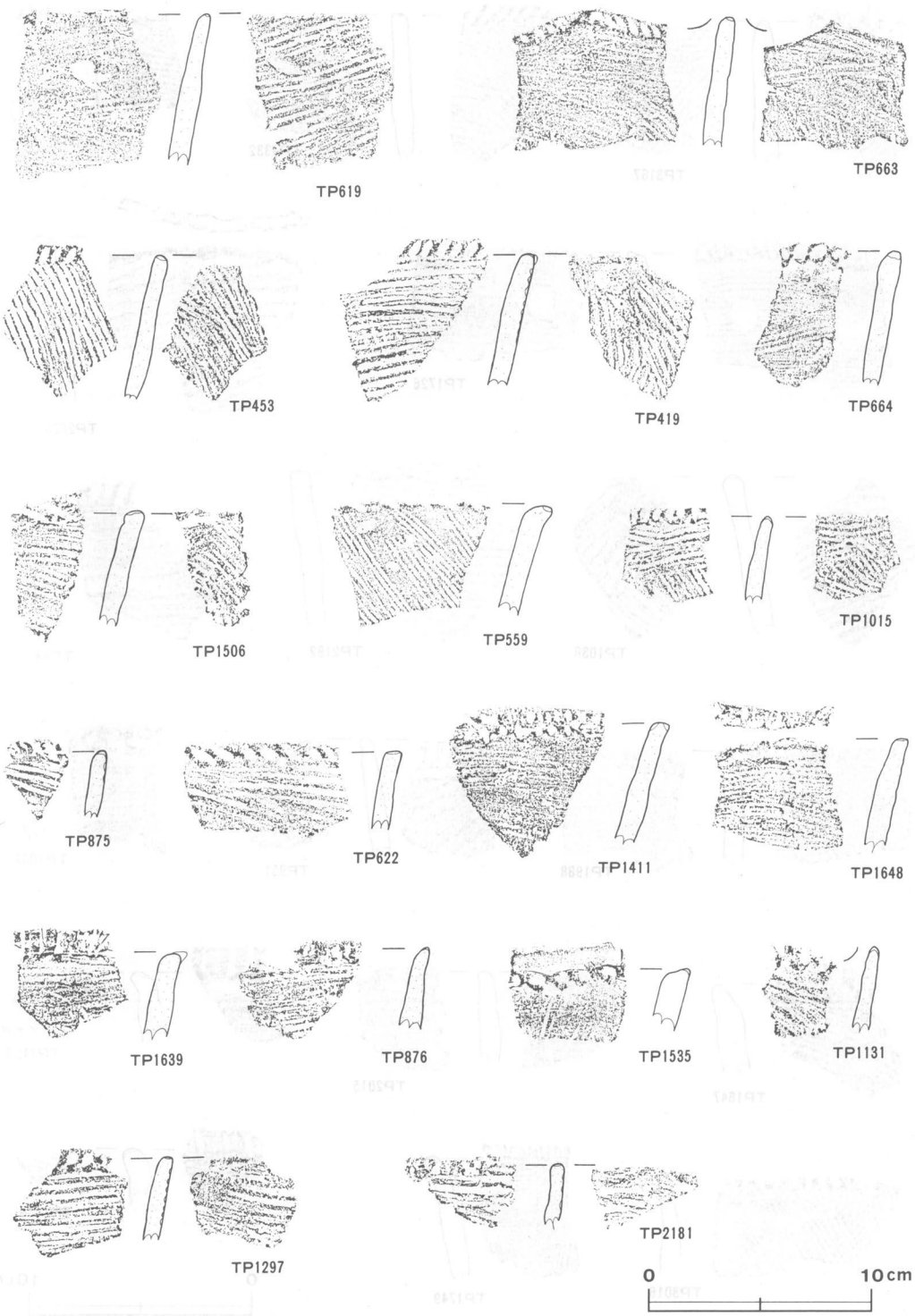
第89図　遺構外出土土器拓影図(32)



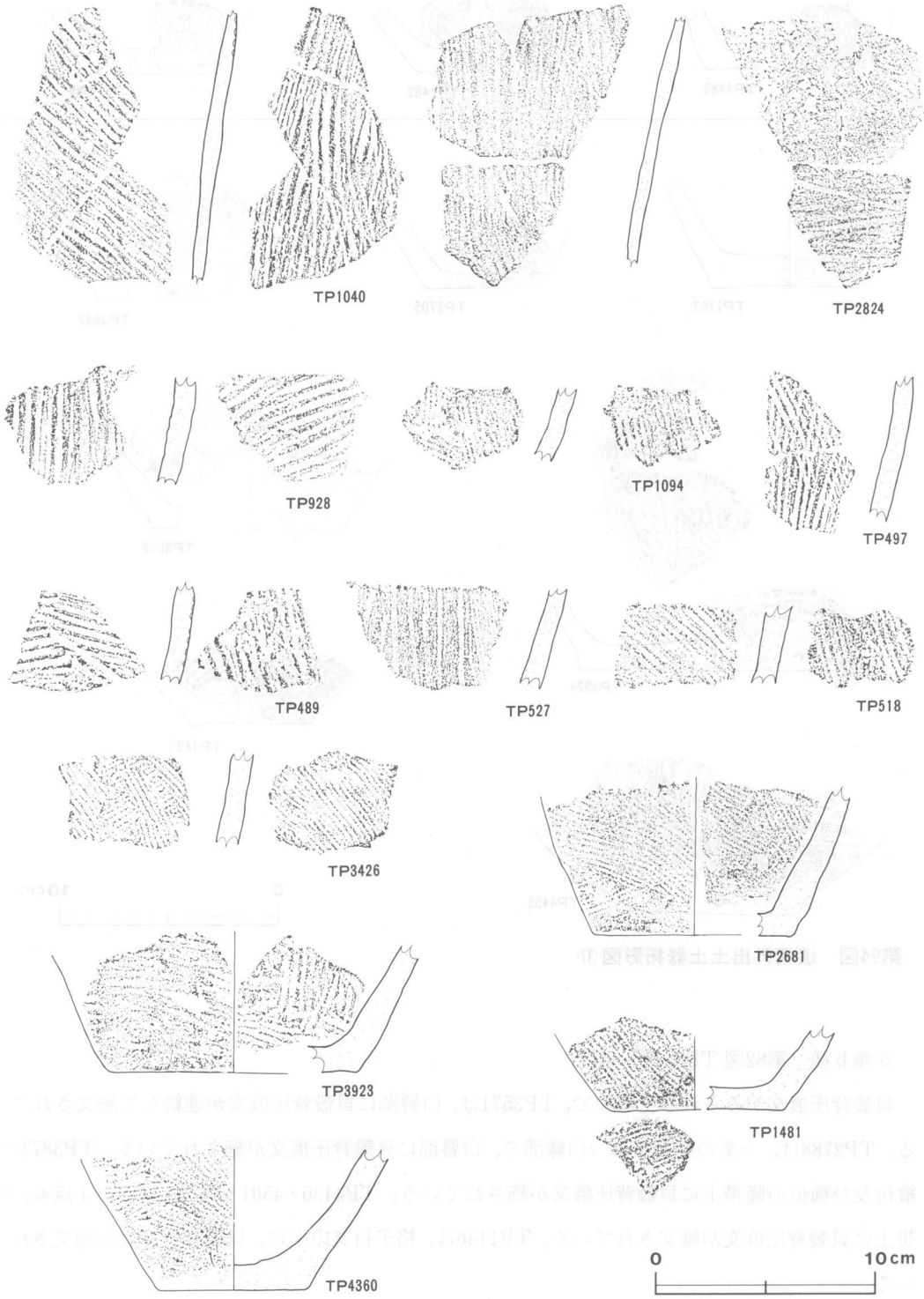
第90図　遺構外出土土器拓影図(33)



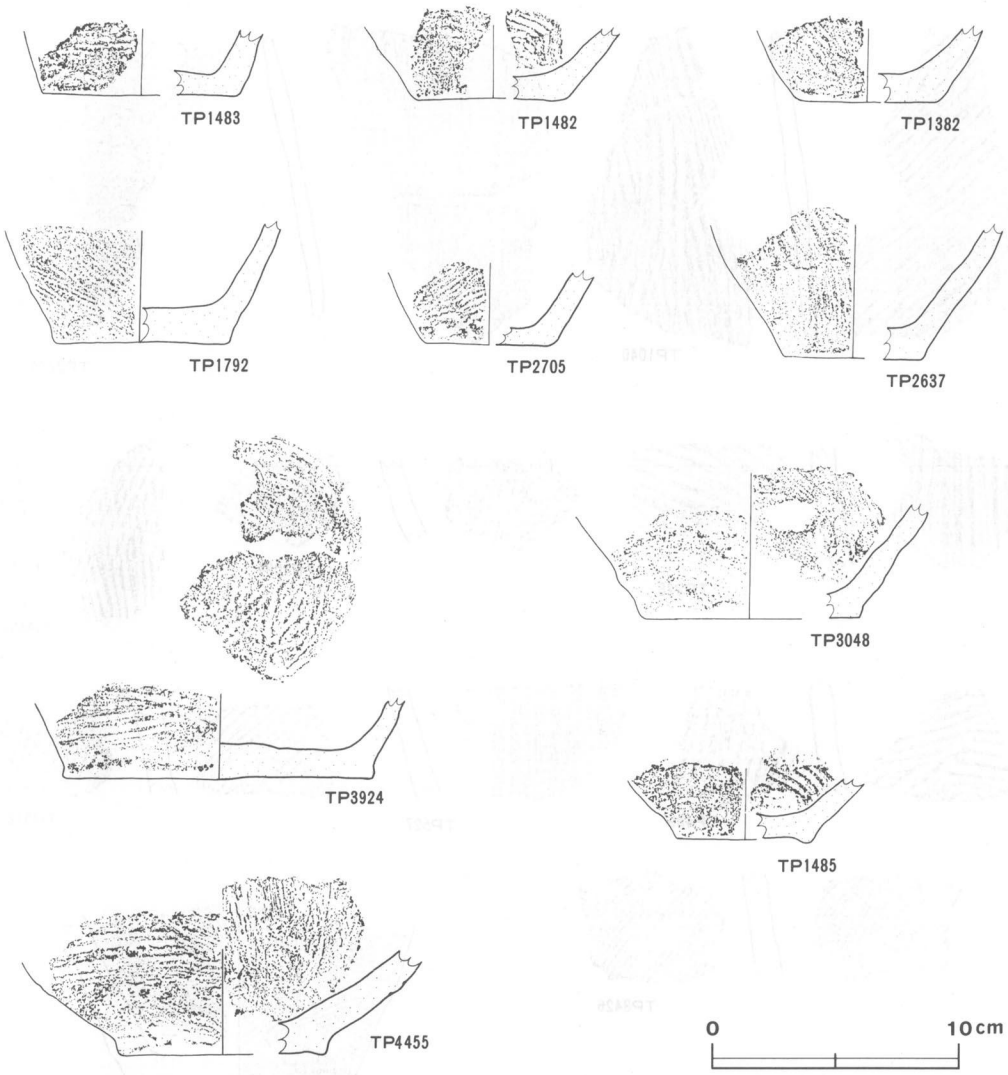
第91図　遺構外出土土器拓影図(34)



第92図　遺構外出土土器拓影図(35)



第93図　遺構外出土土器拓影図(36)



第94図　遺構外出土土器拓影図(37)

5類b種（第82図 TP3571～4477）

貝殻背圧痕文がみられる土器片で，TP3571は，口唇部に貝殻背圧痕文が連続して施文されている。TP2788は，一条の隆帯をもつ口縁部で，口唇部に貝殻背圧痕文が施されている。TP3873は，縦位及び横位の隆帯上に貝殻背圧痕文が施されている。TP4436・4501・4474・4477の4点も，隆帯上に貝殻背圧痕文が施文されている。TP1146は，格子目文の上に，貝殻背圧痕文が施文されている。

6類a種（第82図 TP3581～4442，83図，84図 TP1808～1717）

横位の隆帯を主な文様とする土器片である。隆帯には，キザミ目が施されているものが多い。TP3581は，一条の隆帯を横位に貼り付け，その上部にヘラ状工具による沈線を縦位に施文した土器片である。胎土には，繊維を含んでいる。第83図は，すべて一条の隆帯をもつ土器片である。隆帯は口縁部直下，あるいは胴部の屈曲部に貼付されるものがほとんどである。また，大部分の土器には，繊維が含まれている。TP1603は，隆帯を貼り付けたあと，条痕文が施されている。

6類b種（第84図 TP3630～560，85図 TP4352～4241）

縦位の隆帯が目立つものを本類とした。TP3630は，波状口縁で，横位及び波頂部から垂下する縦位の隆帯が巡り，それぞれの隆帯上と口唇部には，キザミ目が施されている。TP4352・752は，ともに口縁部で，口唇部から隆帯が垂下している。TP944・2791・4376・4241は，比較的細い隆帯に刺突文が施されている。

7類a種（第85図 TP1629～3843，86図）

細い条痕文が施されている土器片である。条痕文は，表裏二面に施文されているものが多い。胎土には，繊維が含まれている。口縁部片については，そのほとんどが口唇部にキザミ目や押圧痕が施されている。条痕文は，斜位あるいは横位に施文されているが，規則性はみられない。TP2550・4351は，表裏の文様が異なっている。

7類b種（第87～92図，93図 TP1040～3426）

太い条痕文が施されているもので，当遺跡から最も多く出土している土器片である。7類a種と同様に条痕文は，表裏二面に施されている。胎土には，繊維を含んでいるものが多い。口縁は平縁が多く，また，口唇部にキザミ目が施されないものが多い。TP4301・1635～3669は，波状を呈する口縁部である。TP1726には，補修孔がみられる。TP951は，口縁部と平行な一条の沈線を巡らしている。その上部には，口唇部より垂下する短沈線が充塡されている。

8類（第93図 TP2681～4360，94図）

Ⅳ群に属する底部を一括して本類とする。すべて平底である。胎土には，繊維を含んでいる。TP4445は，高台状に整形されている。内外面，及び底面にも条痕文が施されている。

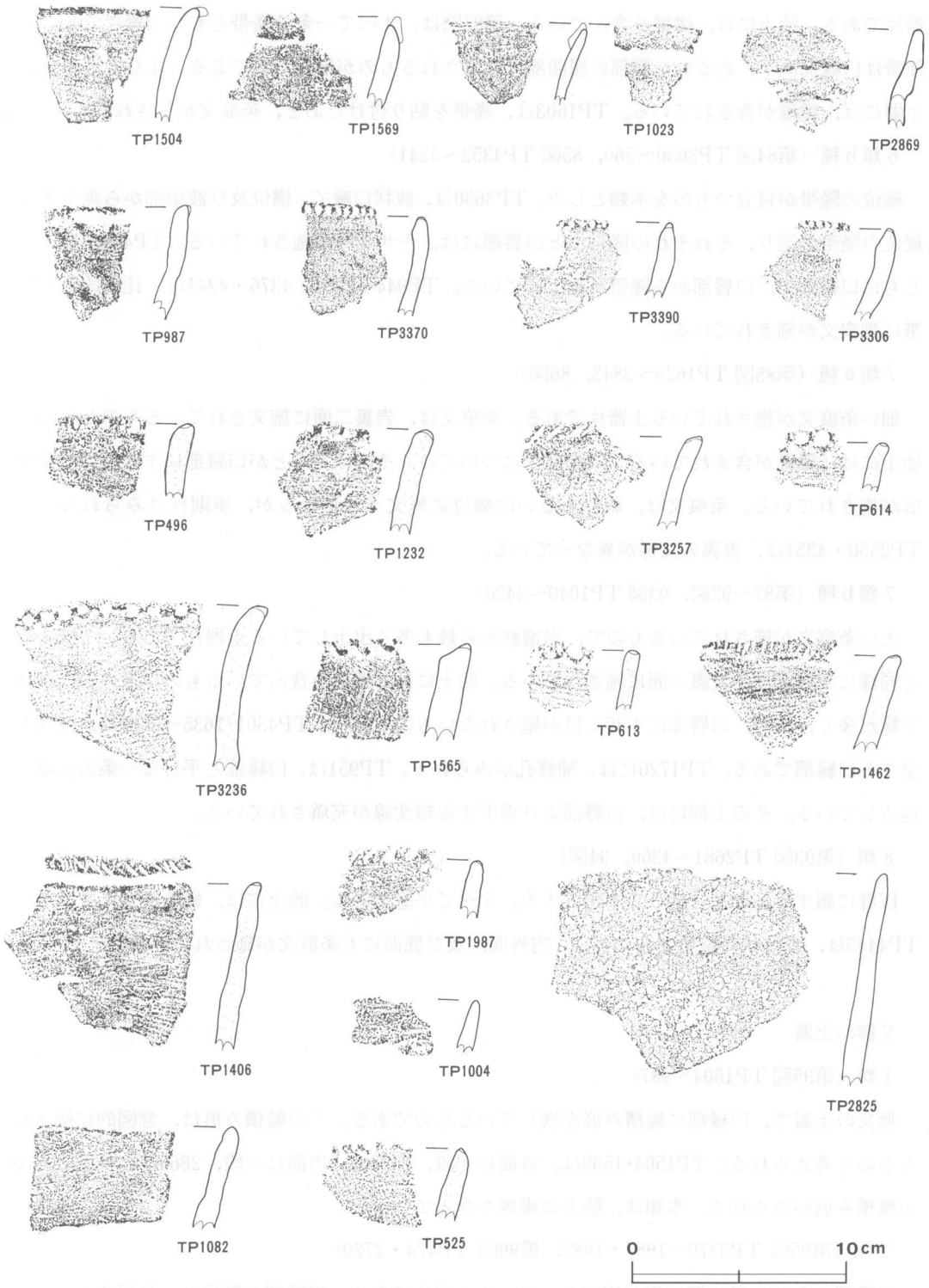
Ⅴ群の土器

1類（第95図 TP1504～987）

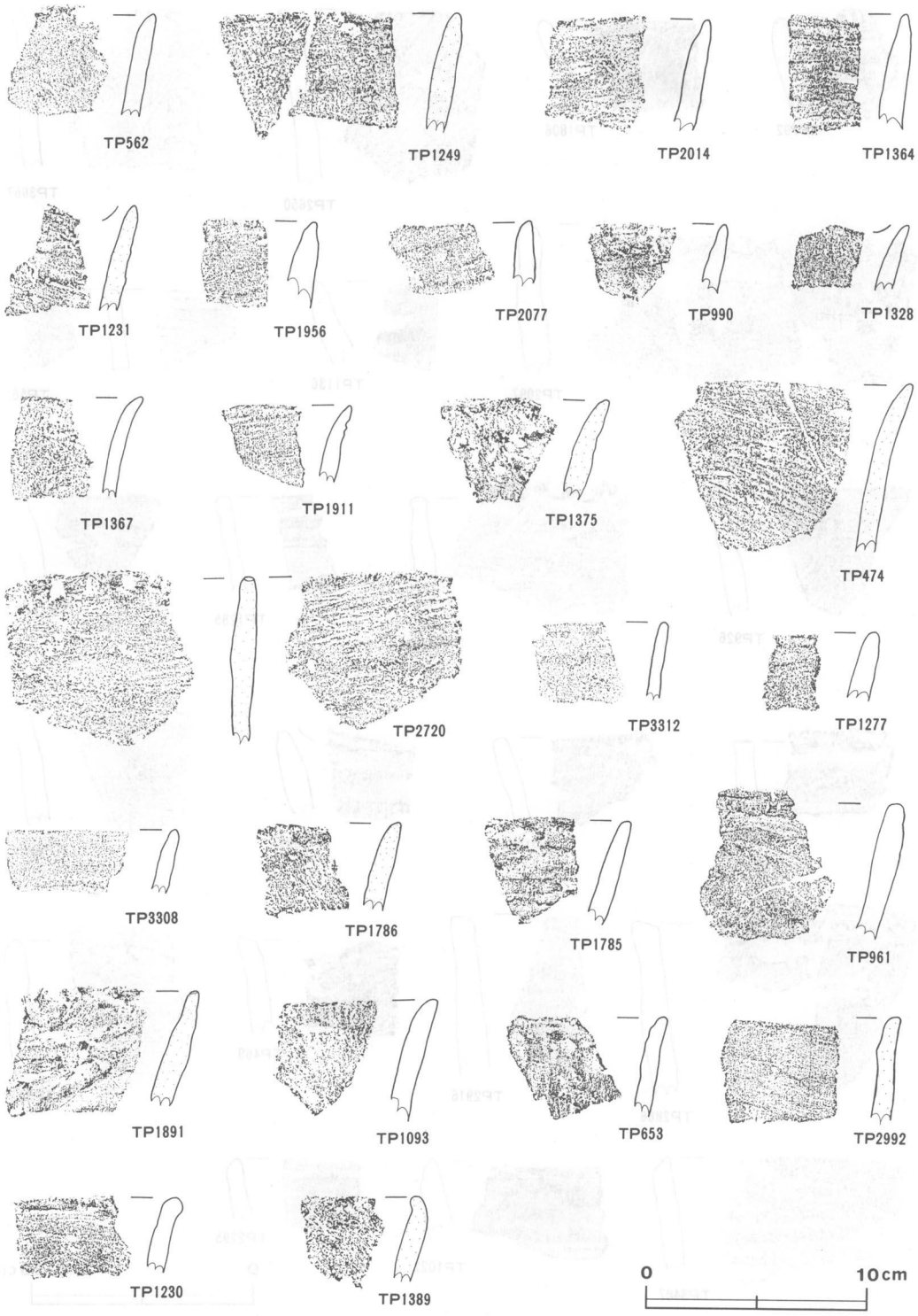
無文の土器で，口縁部に輪積み痕を残しているものである。この輪積み痕は，意図的に残されたものと考えられる。TP1504・1569は，外面に一段，1023は，内面に一段，2869は，外面に二段の輪積み痕がみられる。本類は，胎土に繊維を含んでいない。

2類（第95図 TP3370～1987・1082，第96図 TP474・2720）

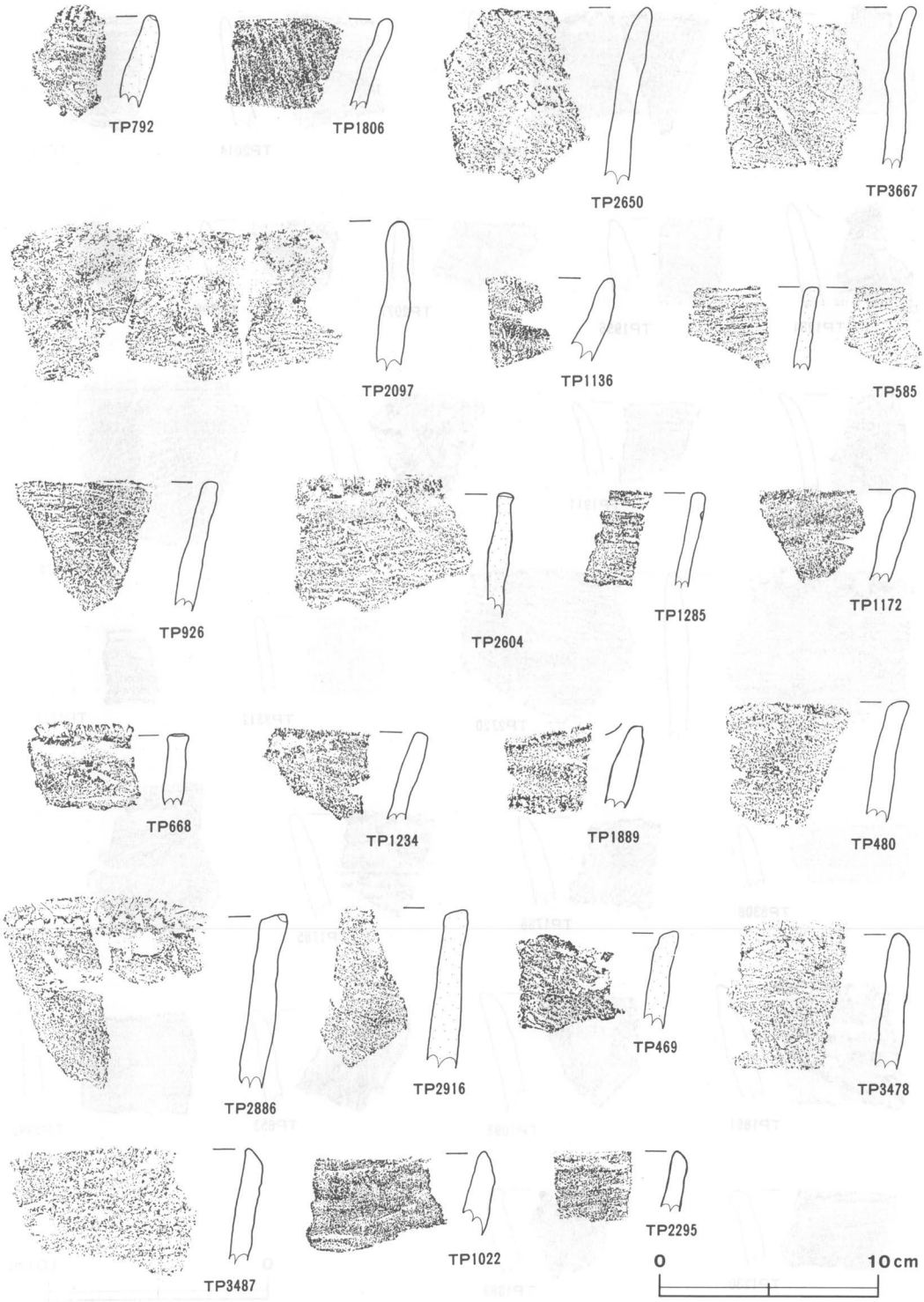
口唇部にキザミ目や押圧痕が施文されている土器片である。口縁部の形状も，外反するもの，



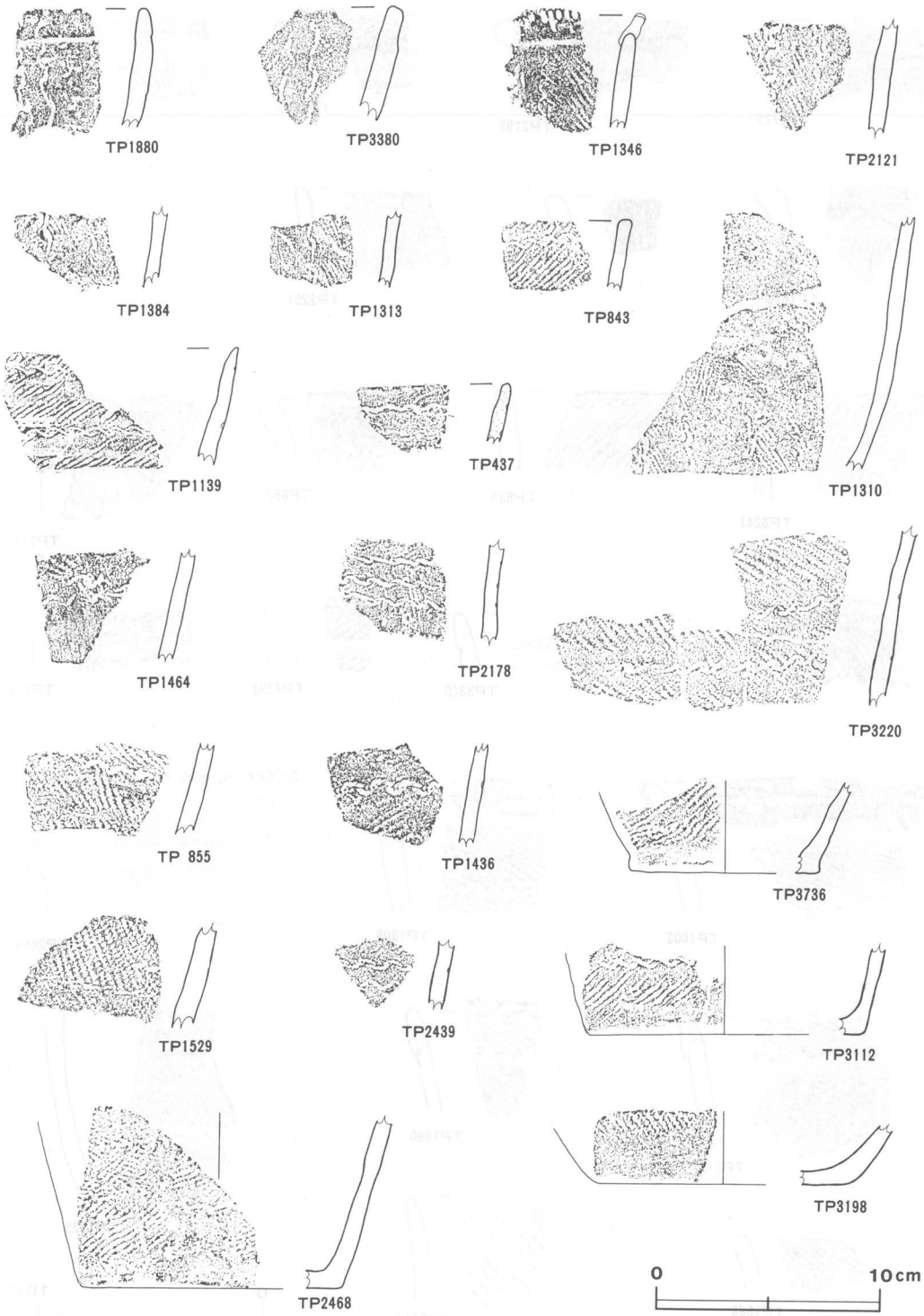
第95図　遺構外出土土器拓影図(38)



第96図　遺構外出土土器拓影図(39)

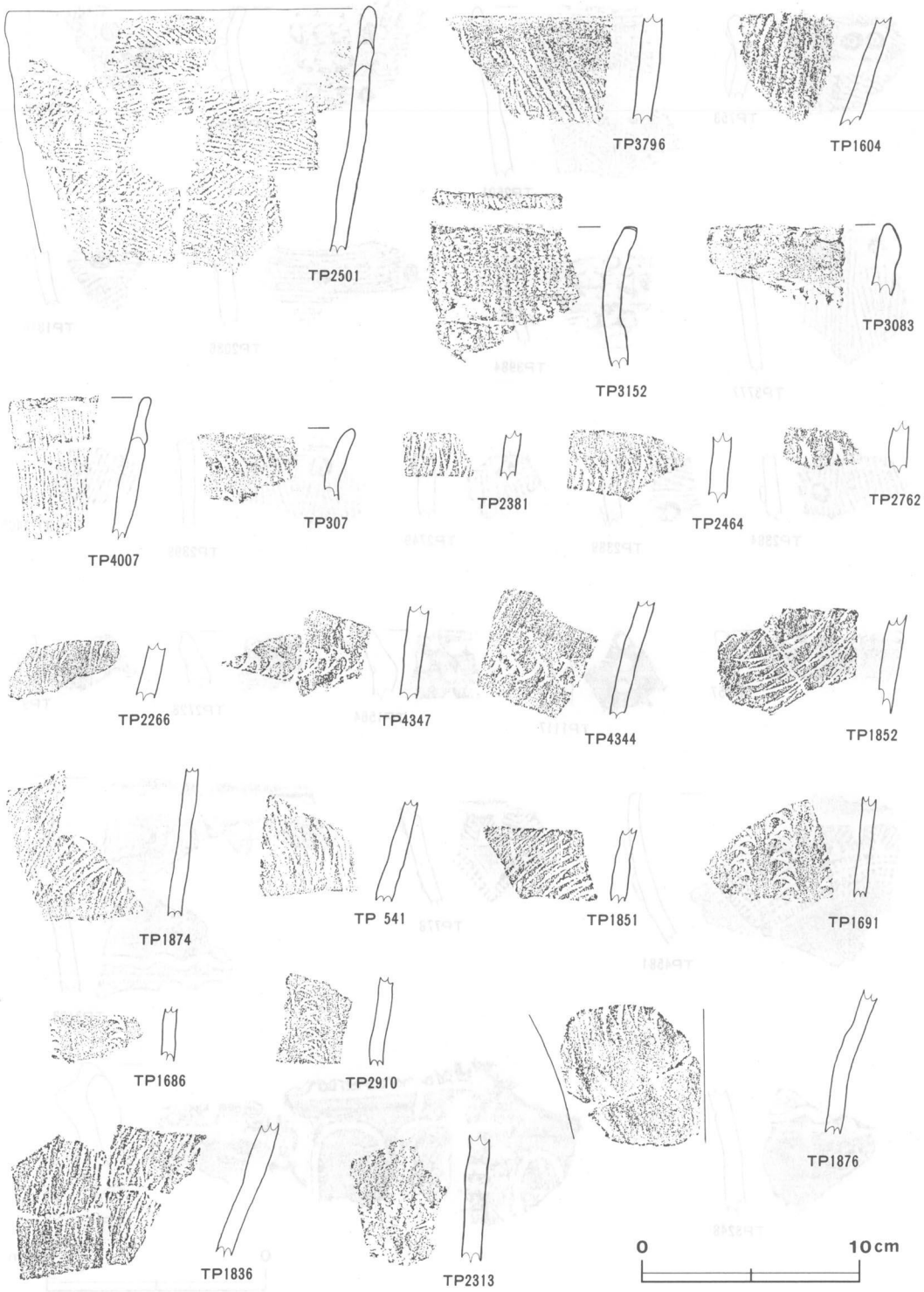


第97図　遺構外出土土器拓影図(40)

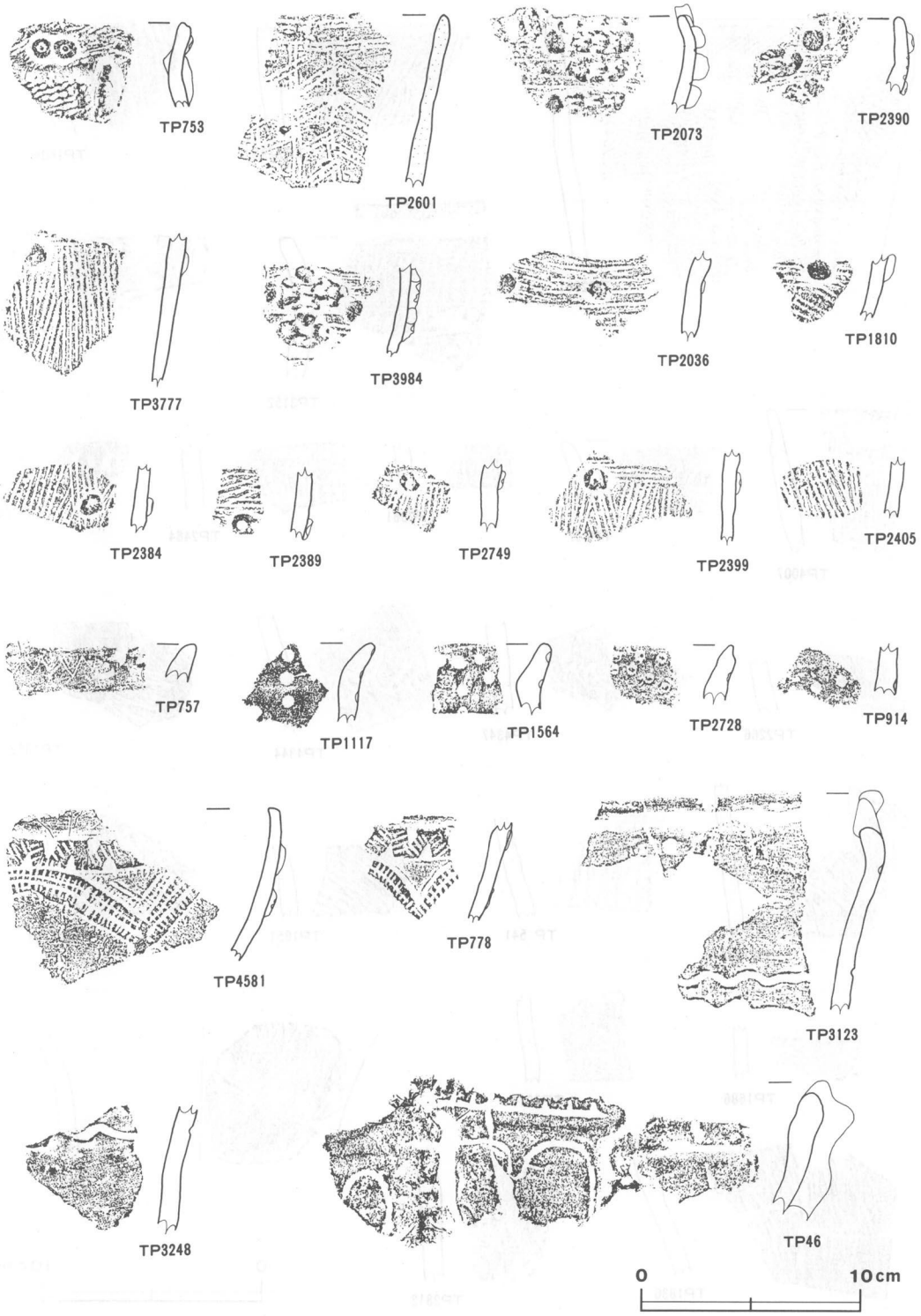


第98図　遺構外出土土器拓影図(41)

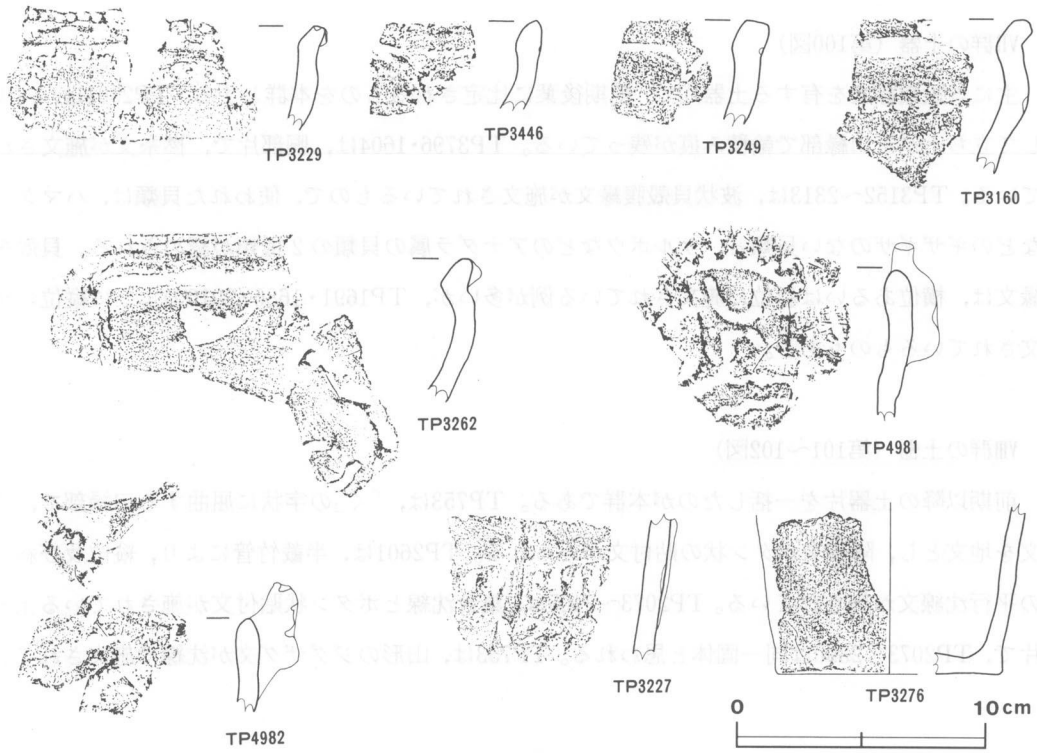
第99図　遺構外出土土器拓影図(42)



第100図　遺構外出土土器拓影図(43)



第101図　遺構外出土土器拓影図(44)



第102図　遺構外出土土器拓影図(45)

内反するもの，直線的に立ち上がるものなどさまざまである。胎土は，繊維を含んでいるものが多い。本群は，基本的に胴部文様をもたない土器片であるが，TP1406・1082・474・2720は，擦痕状の文様が施されている。

3類（第95図 TP1004～525，96～97図）

無文土器を一括したものが本類である。しかし，擦痕状の文様が認められる土器も含まれている。また，胎土に繊維を含んでいるものもみられる。口唇部は，角頭状や内そぎ状を呈する土器が主体であるが，TP3478～2295の4点は外そぎ状を呈するものである。

VI群の土器（第98図・99図 TP3247～1525）

縄文を有する土器を一括したものである。TP1880～3112は，S字状結節文が施文されており，S字状結節文は，TP1880のように縦位に施されているものと，TP843・1139のように横位に施されているものの2種類がみられる。TP3247～428は，外反する口縁部で，縄文が斜位に施されている。TP3320・4293は，輪積み痕を残す口縁部で、TP4293は，口唇部にも縄文が施文されている。TP1602・1309は，口縁部に縄文原体の圧痕が施されている。TP1727・1660も口縁部に輪積

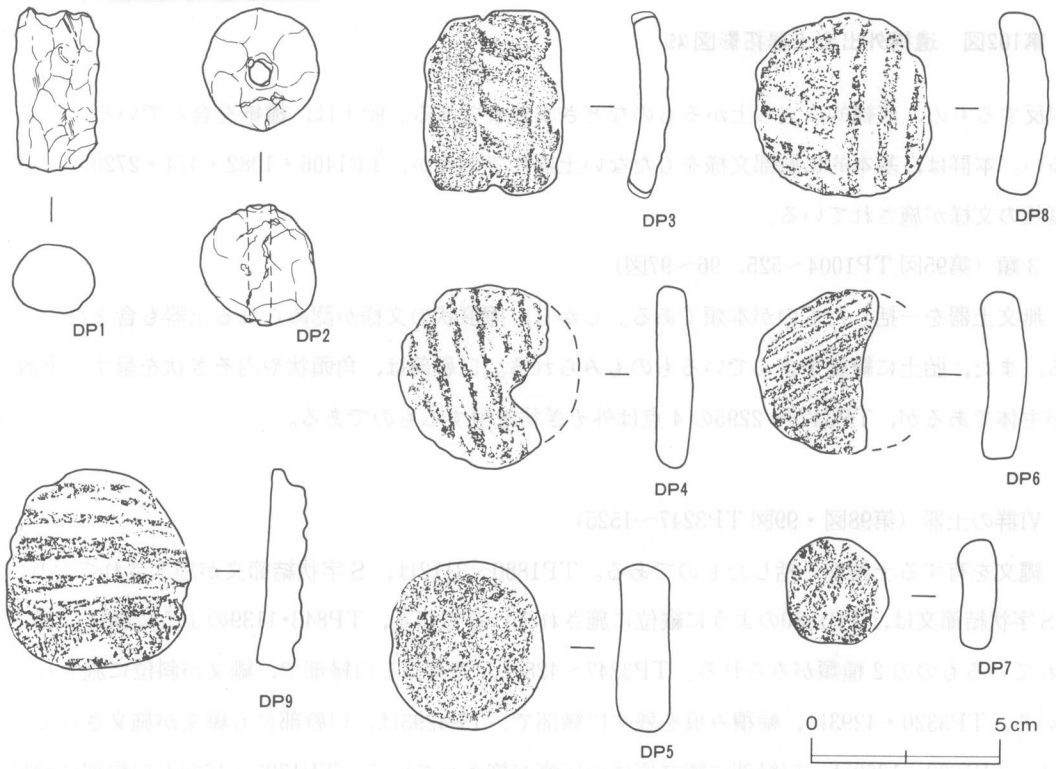
み痕が残されている。

VII群の土器（第100図）

主に貝殻腹縁文を有する土器片で，前期後葉に比定されるものを本群とする。TP2501は，外傾して立ち上がる口縁部で輪積み痕が残っている。TP3796・1604は，胴部片で，撚糸文が施文されている。TP3152～2313は，波状貝殻腹縁文が施文されているもので，使われた貝類は，ハマグリなどのギザギザのない貝類と，サルボウなどのアナダラ属の貝類の2種類が認められる。貝殻腹縁文は，横位あるいは斜位に施文されている例が多いが，TP1691・1686・2910のように縦位に施文されているものもある。

VIII群の土器（第101～102図）

前期以降の土器片を一括したのが本群である。TP753は，「く」の字状に屈曲する口縁部で，縄文を地文とし，隆帯やボタン状の貼付文がみられる。TP2601は，半截竹管により，縦位及び斜位の平行沈線文が施されている。TP2073～2405は，集合沈線とボタン状貼付文が施されている土器片で，TP2073と2390は同一固体と思われる。TP753は，山形のジグザグ文が沈線で施文されてい



第103図　土製品・土器片錘・土製円板実測図

る。TP1117・1564・914は円形刺突文，2728は竹管文が施文されている。TP4581と778は，同一固体と思われ，口縁部に沿って横位及び弧状の隆帯を貼り付け，隆帯上が短沈線で充塡されている。横位の隆帯には，三角形の刺突文が施文されている。TP3123・3248は，同一固体とみられる土器で，内彎したのち外反する口縁部である。横位の波状沈線が施文されている。TP46は，沈線文と隆帯で文様が構成されている。TP3229は，口唇部から胴部にかけて刺突文が施されている。TP3246・3249・3160・3262は，屈曲する口縁部で，沈線あるいは刺突文が施文されている。TP4981・4982は，突起を有する口縁部で，文様は沈線と刺突文が施文されている。TP3227は，爪形の刺突文が横位に施されている。TP3276は，底部片で，平底である。

土製品・土器片錘・土製円板（第103図）

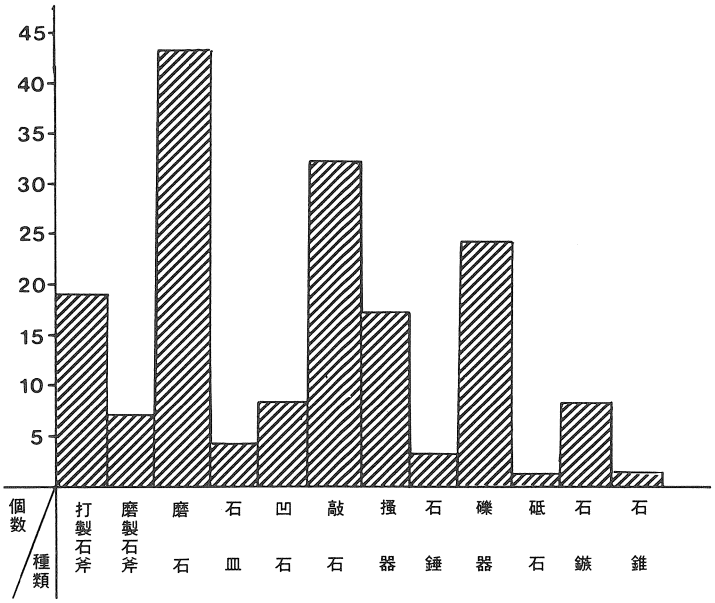
DP 1は，棒状に粘土をかためたもので，表面に整形は施されていない。DP 2は，直径3～3.2cmで，重さは25ｇである。DP 3は，土器片錘で，キザミは2か所認められる。重さは20ｇである。DP 8・4・6・9・5・7は，土製円板で，合計6点出土している。すべて深鉢の胴部片を利用しており，DP 4・6は一部欠損している。

土製品等一覧表

番号	類別	出土地点	大きさ (cm)			重(ｇ)	土器片利用部位	備考
			たて	よこ	厚さ			
DP1	棒状土製品	B2a$_9$	(4.4)	2.3	1.35	(19)		
DP2	土玉	B2f$_3$	3.2	3.0		25		孔径0.6cm
DP3	土器片錘	Z	4.95	3.7	0.8	20		抉り数2,抉り間の長さ4.3cm
DP8	土製円板	B2a$_8$	4.6	4.8	1.05	27	胴部	
DP4	〃	B2j$_7$	3.4	4.85	1.0	17	〃	一部欠損
DP6	〃	Z	2.75	4.35	1.0	20	〃	一部欠損
DP9	〃	A2j$_6$	4.9	5.25	0.9	31	〃	
DP5	〃	B2h$_5$	4.05	4.4	1.4	32	〃	
DP7	〃	B2e$_3$	2.7	2.8	0.9	10	〃	

(2) 石器類について

当遺跡からは，12種類，167点の石器が出土している。各種類ごとの点数は，第104図に示したとおりで，打製石斧19点，磨製石斧７点，磨石43点，石皿４点，凹石８点，敲石32点，掻器17点，石錘３点，礫器24点，砥石１点，石鏃８点，石錐１点である。それぞれの石器の出土地点や大きさ等は石器一覧表にまとめてあるので，ここでは，特徴について説明する。



第104図　石器の個数

①打製石斧（第105～106図，107図Q29）

本種は，19点出土している。すべて自然礫を利用した，礫石斧である。刃部は，礫の一部を加撃して刃を付けた，片刃が主である。これらの石斧は，その形態からいくつかに分類できる。

撥形（Q102・６・59・91・63・81・29）

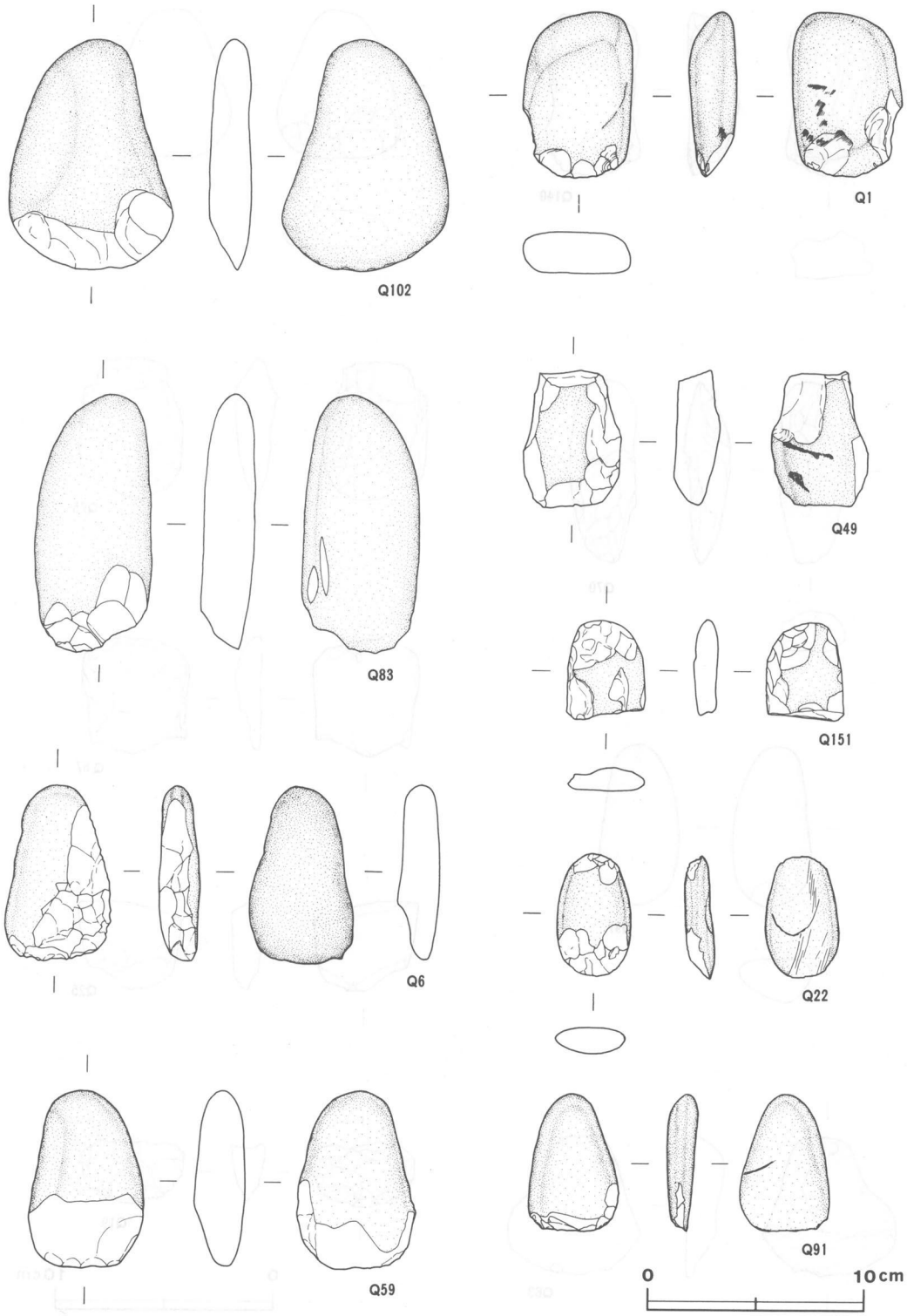
三味線の撥に似た形をしており，刃部が基部より広がるものである。Q102・63・81などは，その典型的なものである。Q29は，基部上半が欠損していて明確ではないが，刃部の形状等から撥形になると考えられる。

短冊形（Q140・67）

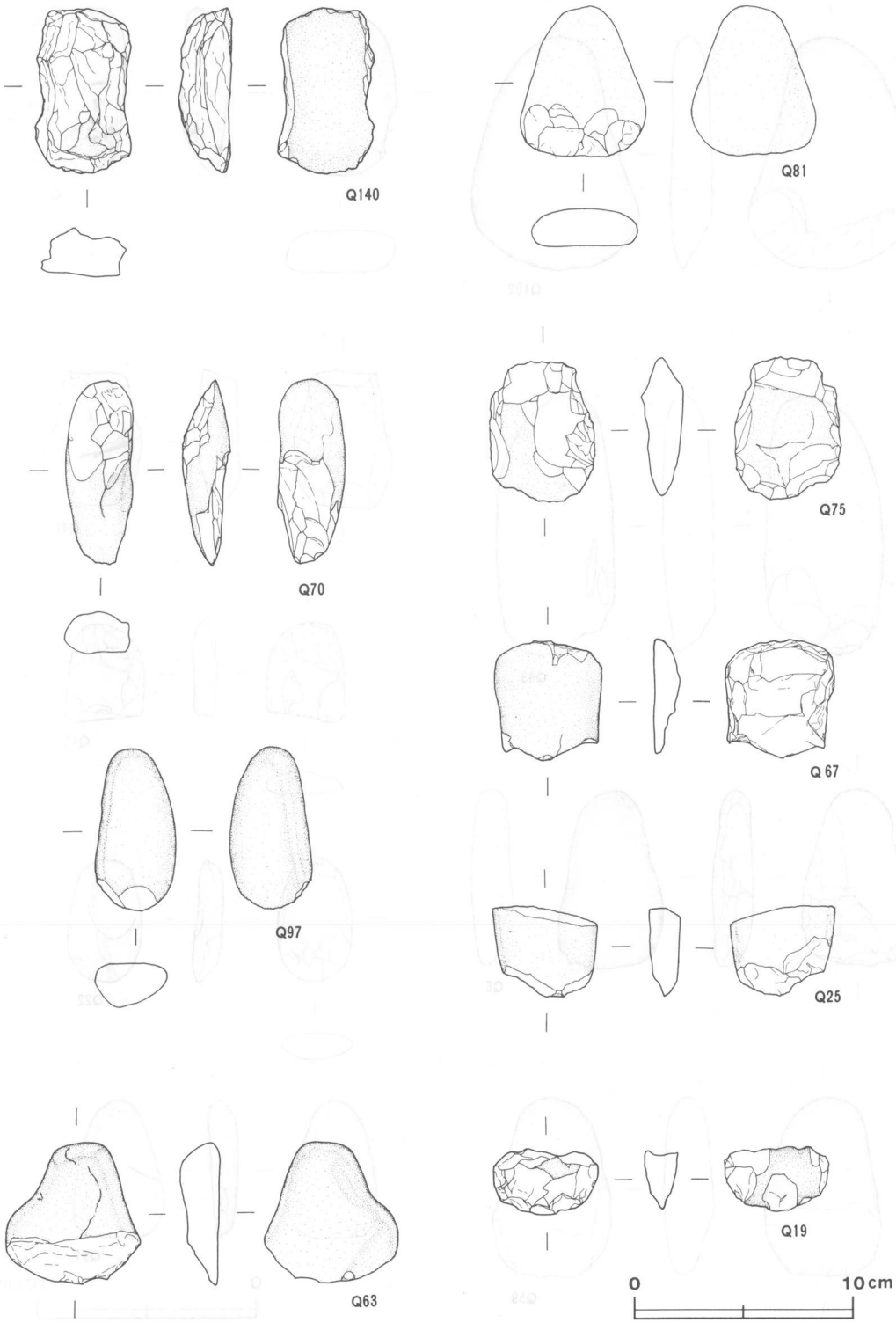
長方形状を呈するものである。Q67は二分の一を欠損しているが，短冊形になるものと考えられる。礫の片面だけに剥離調整痕がみられる。Q140は，中央部がややくびれ，断面はかまぼこ形である。片面だけに調整が加えられている。本種は上下両端の使用が可能で，両端に使用時に生じた小さな剥離痕が残っている。

乳棒状（Q83・70・97・25）

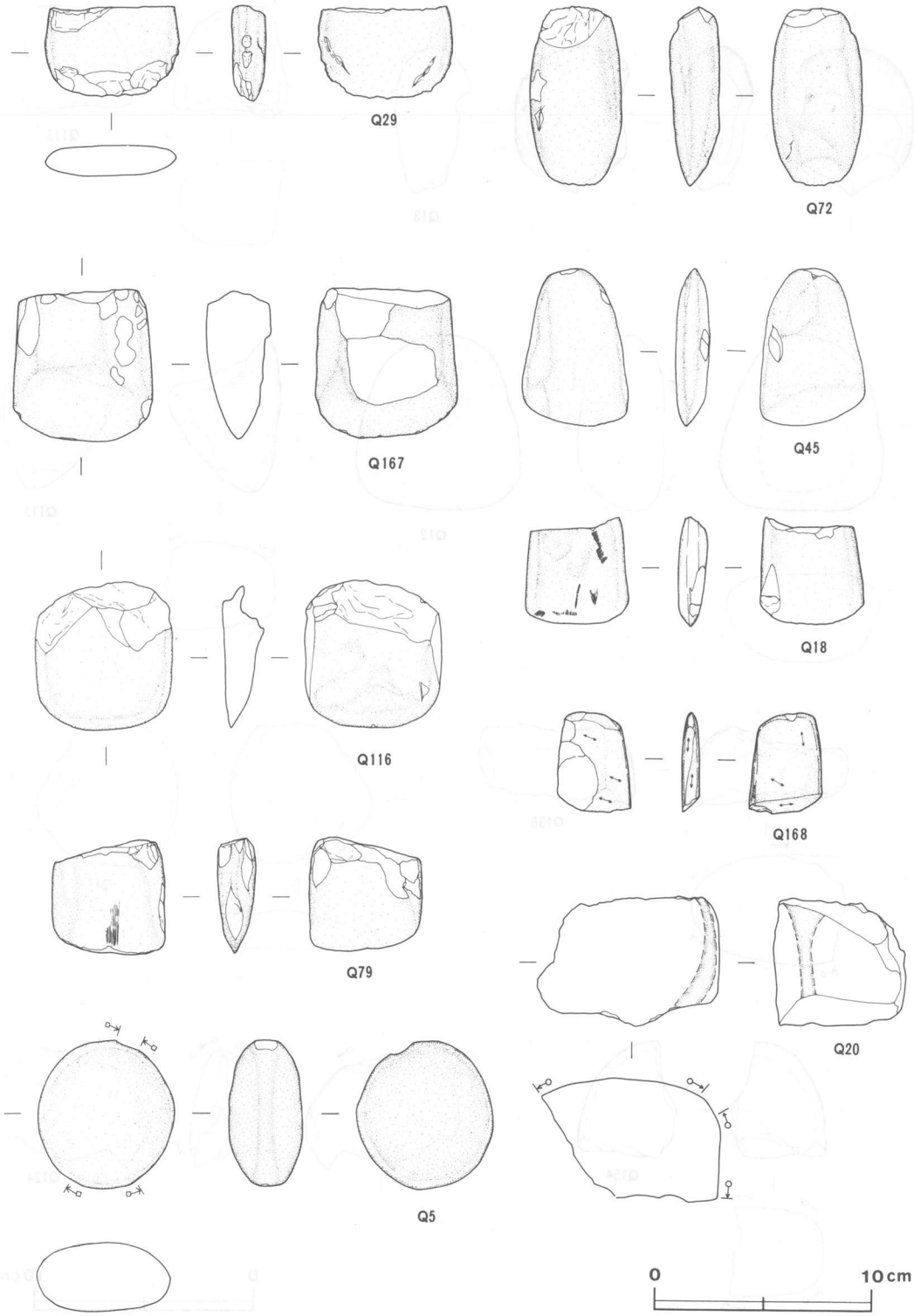
乳棒に似た形状を呈する石斧である。Q25は，基部の大半を欠損している。刃部に使用時に生じた剥離痕が残っている。Q70は，表裏それぞれの面から剥離を加えて，両端に刃部が作られている。Q97は，２か所の剥離だけで刃部が調整されている。



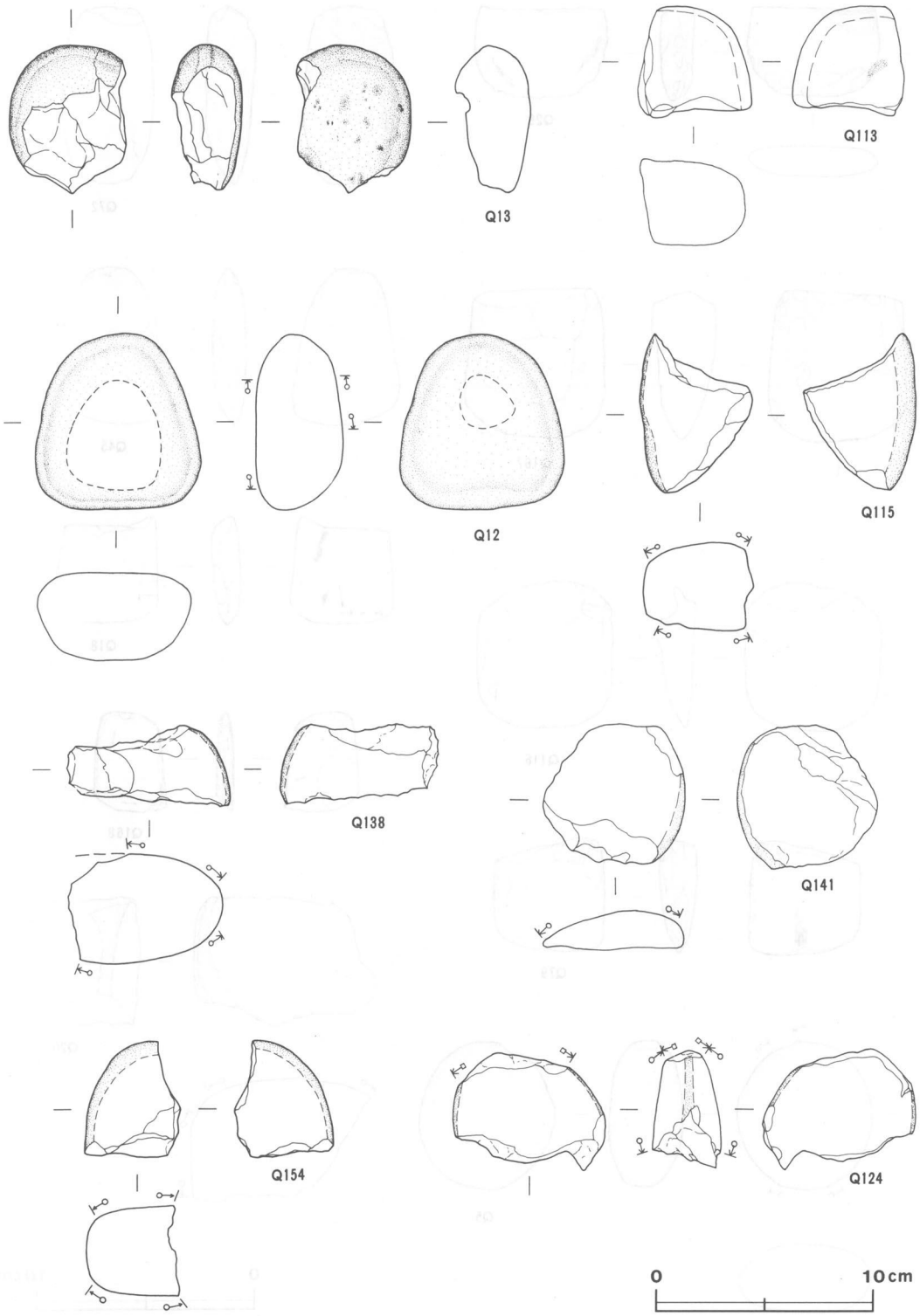
第105図　石器実測図(1)



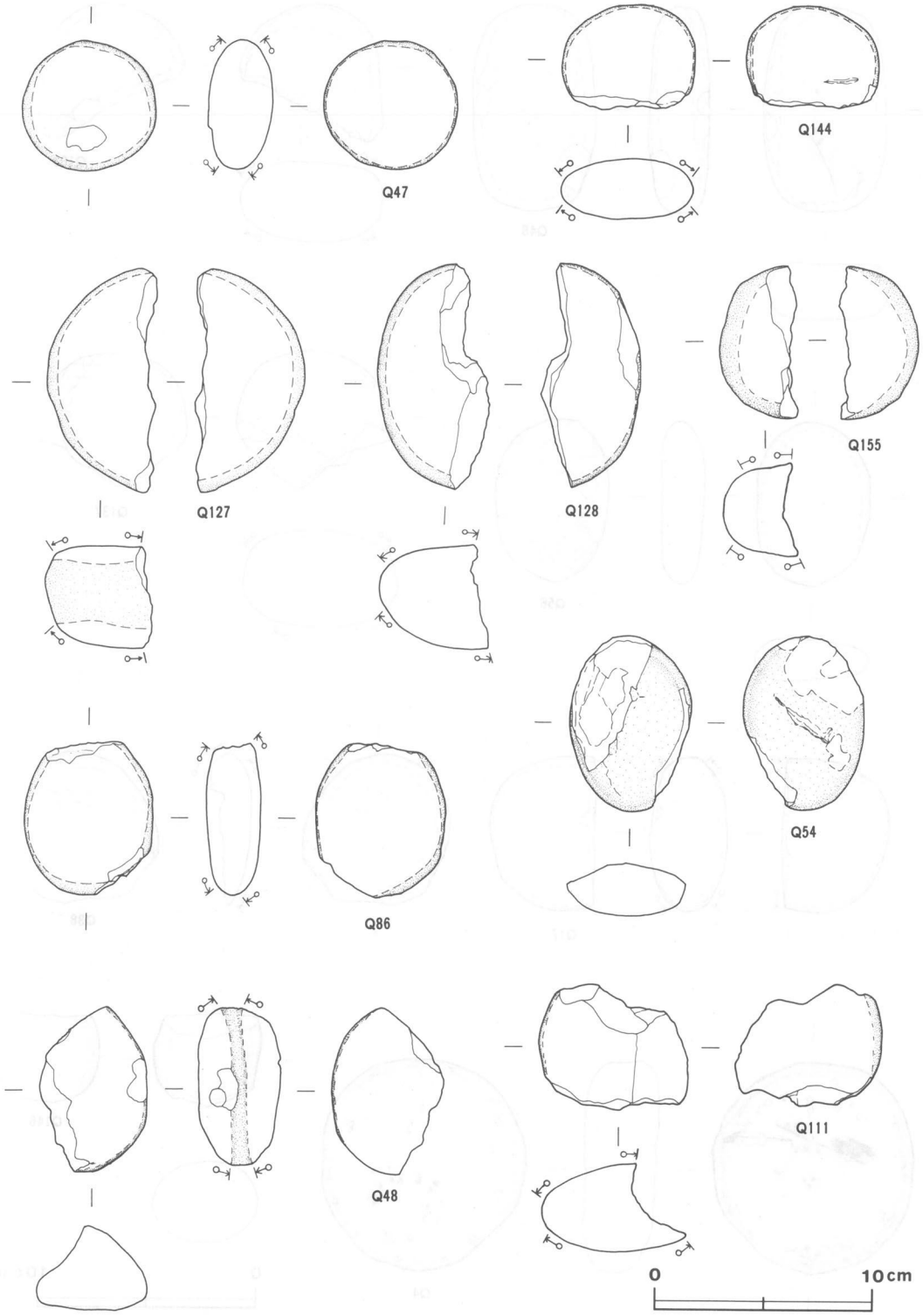
第106図　石器実測図(2)



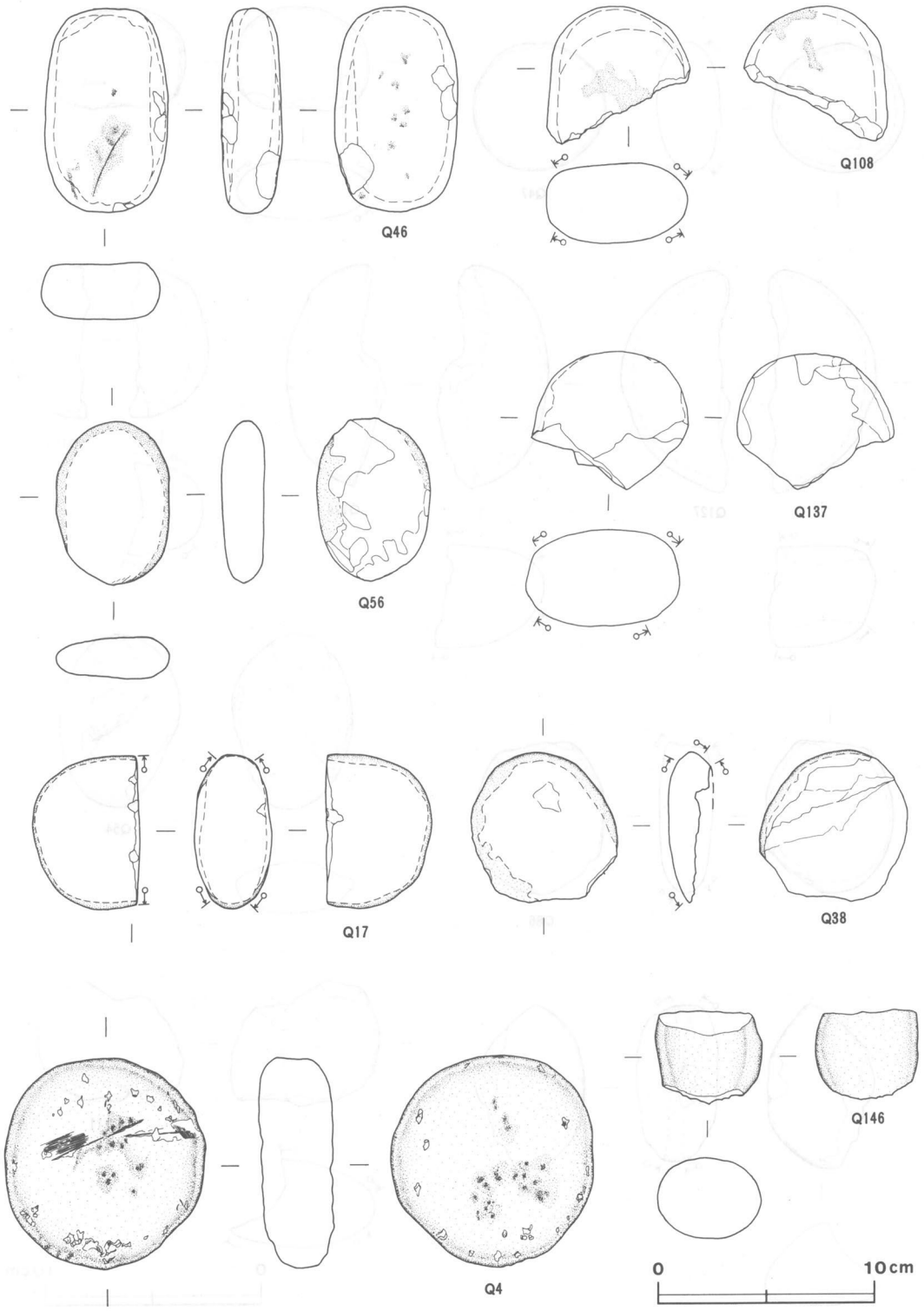
第107図　石器実測図(3)



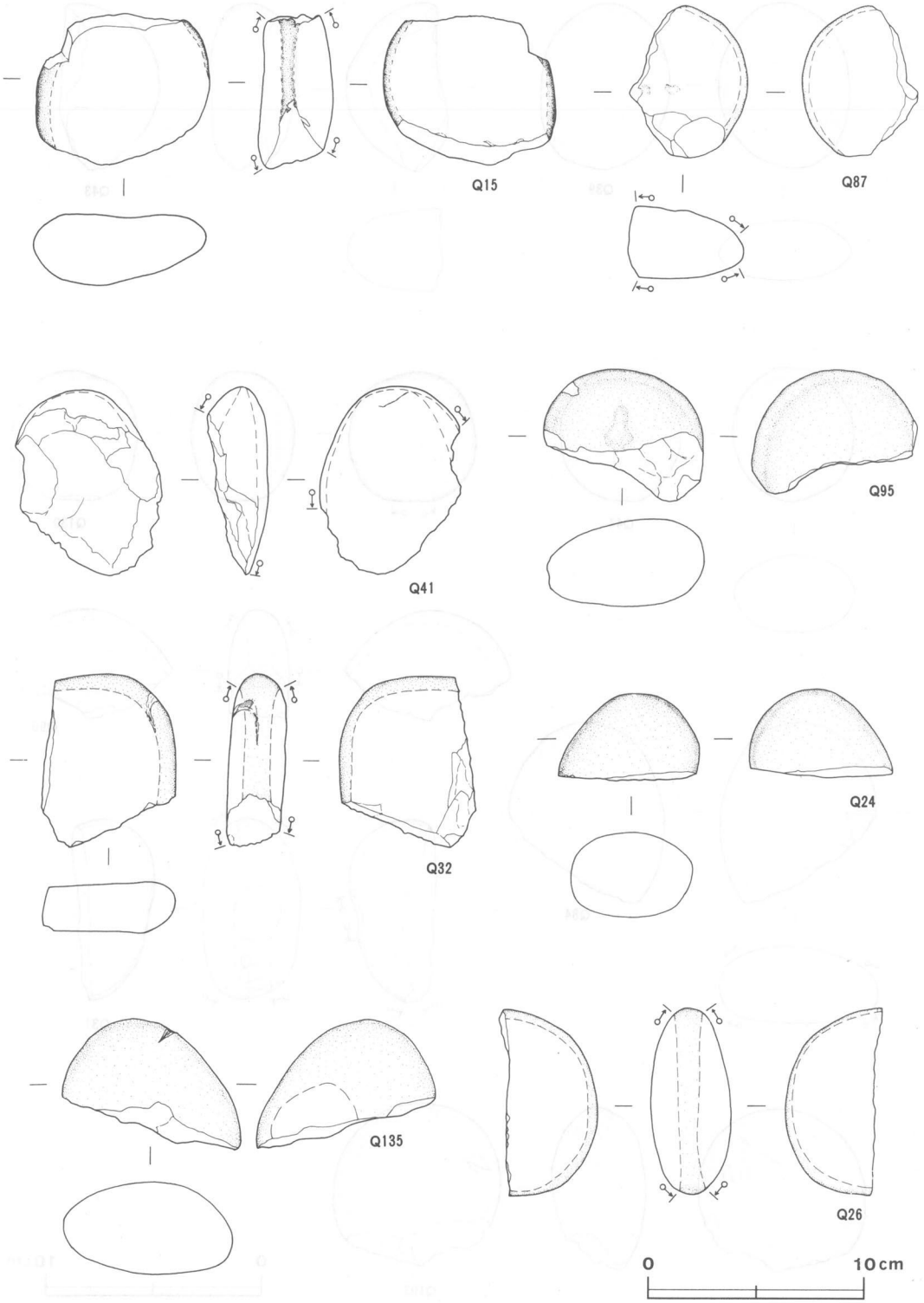
第108図　石器実測図(4)



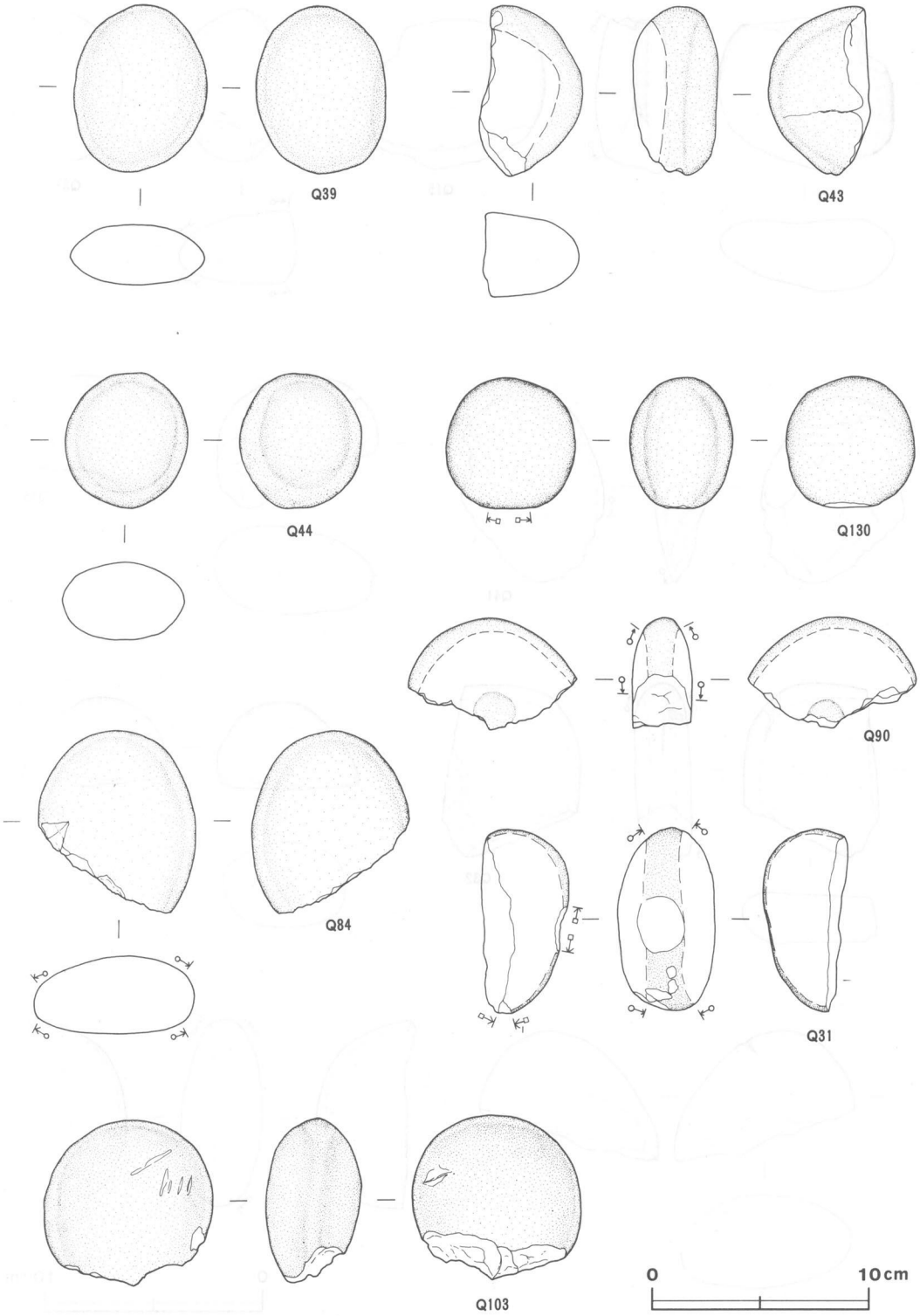
第109図　石器実測図(5)



第110図　石器実測図(6)



第111図　石器実測図(7)



第112図　石器実測図(8)

楕円形（Q151・22・19）

平面形が楕円形を呈し，比較的小型のものである。刃部の形状はすべて片刃で，両端に付けられたと考えられる。Q151・19は，刃部の表裏二面に剝離痕がみられるが，使用時に生じた剝離痕が含まれており，基本的には片刃であると思われる。

その他（Q１・49・75）

短冊形に近いが，長さが短いものである。本類は，製作技法から，さらに細分できるが，ここにまとめて掲載した。Q１は，自然礫の一部に加撃しただけのものである。使用痕は，ほとんど認められない。Q49・75は，表裏二面に剝離痕がみられるが，刃は片刃と考えられる。

②磨製石斧（第107図）

総数７点が出土している。いずれも，自然礫をていねいに研磨して整形が加えられている。刃部をみると，片刃のもの（Q72・45・116・168），両刃のもの（Q167・18・79）の二種がみられ，偏刃が多い。Q72・167・79には，使用時に生じた小剝離痕が残されている。Q168は，いわゆるミニチュア石斧で，非常にていねいに磨かれている。側面には，擦切（すりきり）技法によって製作された時に生じた稜線が認められる。

③磨石（第107～112図）

当遺跡で最も多く認められた石器で，43点出土している。磨石の形状は，円形，楕円形，方形を示すものが多い。使用痕は，表裏二面に認められるものが主であり，側面が多用されたとみられるのはQ４・41ぐらいである。Q17は，使用中に欠損し，その欠損面を再利用した珍らしい例である。磨石の機能以外に，敲石としても使用された痕跡を有するものが３点（Q５・24・31）認められる。なお，Q113・46・４・90などは，凹石として使われた形跡が認められる。いずれにしても，磨石や凹石などは複数の機能を有しているものが多く，使用時の状況によって，ある時は磨石，ある時は凹石として使用されたと考えられる。

④石皿（第113図）

４点出土している。比較的へん平な石材を使用しており，明瞭な縁をもつものはQ107だけである。Q92は裏面に一か所，Q107は表面に一か所のくぼみがみられる。磨石とセットとなり，主に製粉などに使用されたものと考えられる。

⑤凹石（第113～114図）

本種は８点出土しているが，欠損していないものは２点で，６点は中央部から破損している。

凹石の使われ方からみて，どうしても中央部付近で欠損しやすいものとみられる。凹石の用途については，堅果類の殻割り用とか，発火具の一種であろうなどと言われているが，明確にされてはいない。当遺跡出土の凹石の平面形は，方形を基調にしたものと，円形，あるいは楕円形を基調にしたものの２種類である。断面は，長方形を呈しているものが多い。くぼみは，表裏面及び両側面のそれぞれ中央部に残されている例が多い。本種の中にも，複数の機能をもっていたとみられるものが数点含まれている。Q98・94は敲石として，Q110は磨石として，Q112・117は磨石，敲石として，それぞれ使用された痕跡が認められる。

⑥敲石（第114～117図）

総数32点出土している。敲くことによって生じた使用痕をもつ石器類を，敲石として分類した。すべて自然礫を利用しており，特別な調整痕は認められない。当遺跡出土の敲石は，４種類に分けることができる。

○円形の自然礫を利用したもの……A類（17点）

○棒状の自然礫を利用し，比較的大形のもの……B類（８点）

○棒状の自然礫を利用し，比較的小形のもの……C類（５点）

○スタンプ形を呈するもの……D類（２点）

A類は，側縁部に使用痕を残すものが多く，数か所に認められる。B類とC類は，両端部に使用痕が残るものが多くみられる。これらの使用痕を観察すると，硬い物に打ち当てたような状況がみられることから，石器類の製作時に使用したとも考えられる。D類は，基本的に底面を使用したと思われるが，Q126は先端部にも使用痕が残されている。各種類ごとの使用目的は明確ではないが，敲くあるいは打ち当てる作業に使用されたことが推定される。A・D類は比較的やわらかいもの，B・C類は硬いものと，その用途によって使い分けて使用されたものと思われる。

⑦掻器（第118図，119図Q166～74）

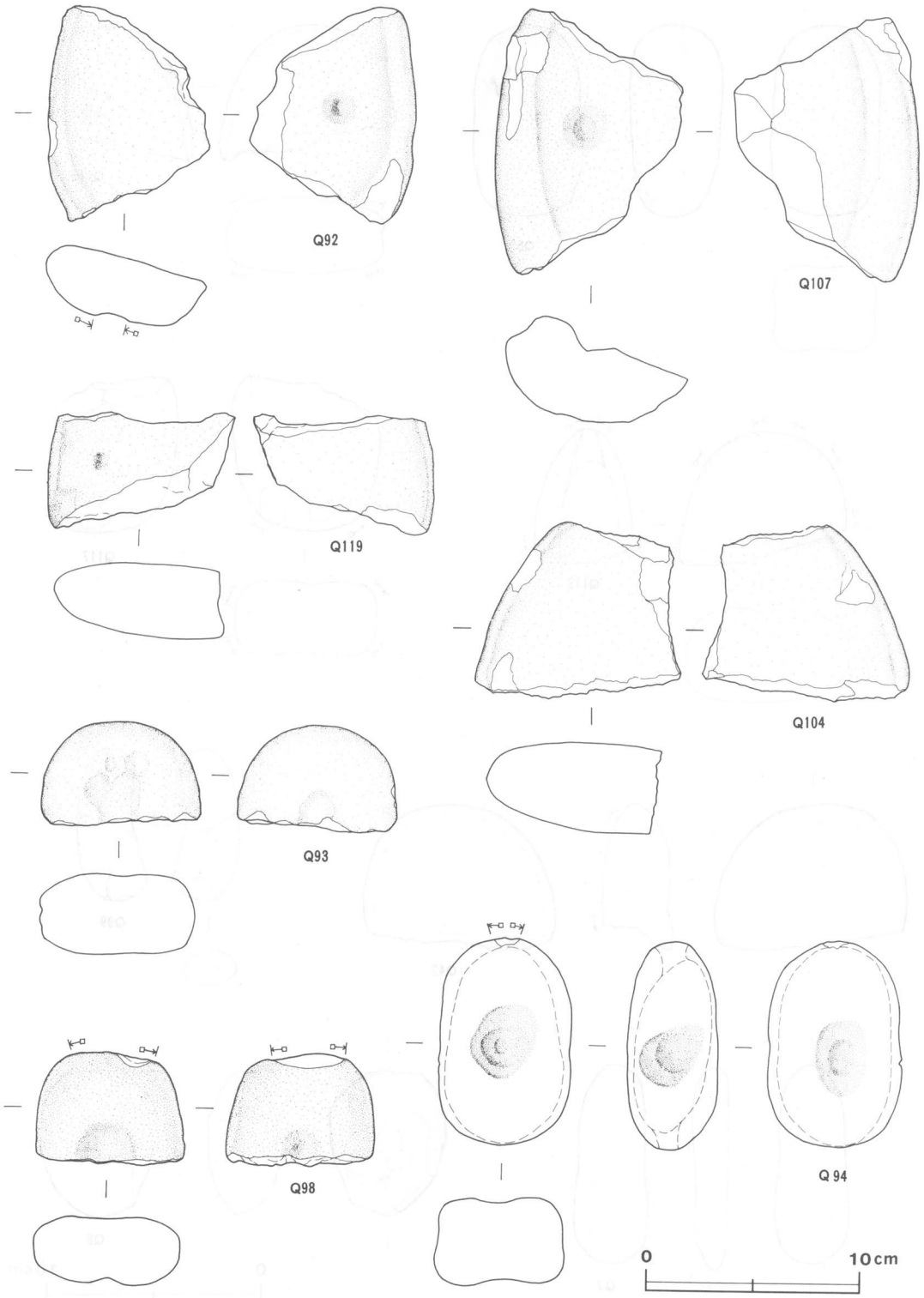
本種は17点出土しているが，打製石斧的あるいは削器的な様相を示すものも一括した。平面形から３種類に分けられる。

○方形のもの……Q60・129・148・121・166・74

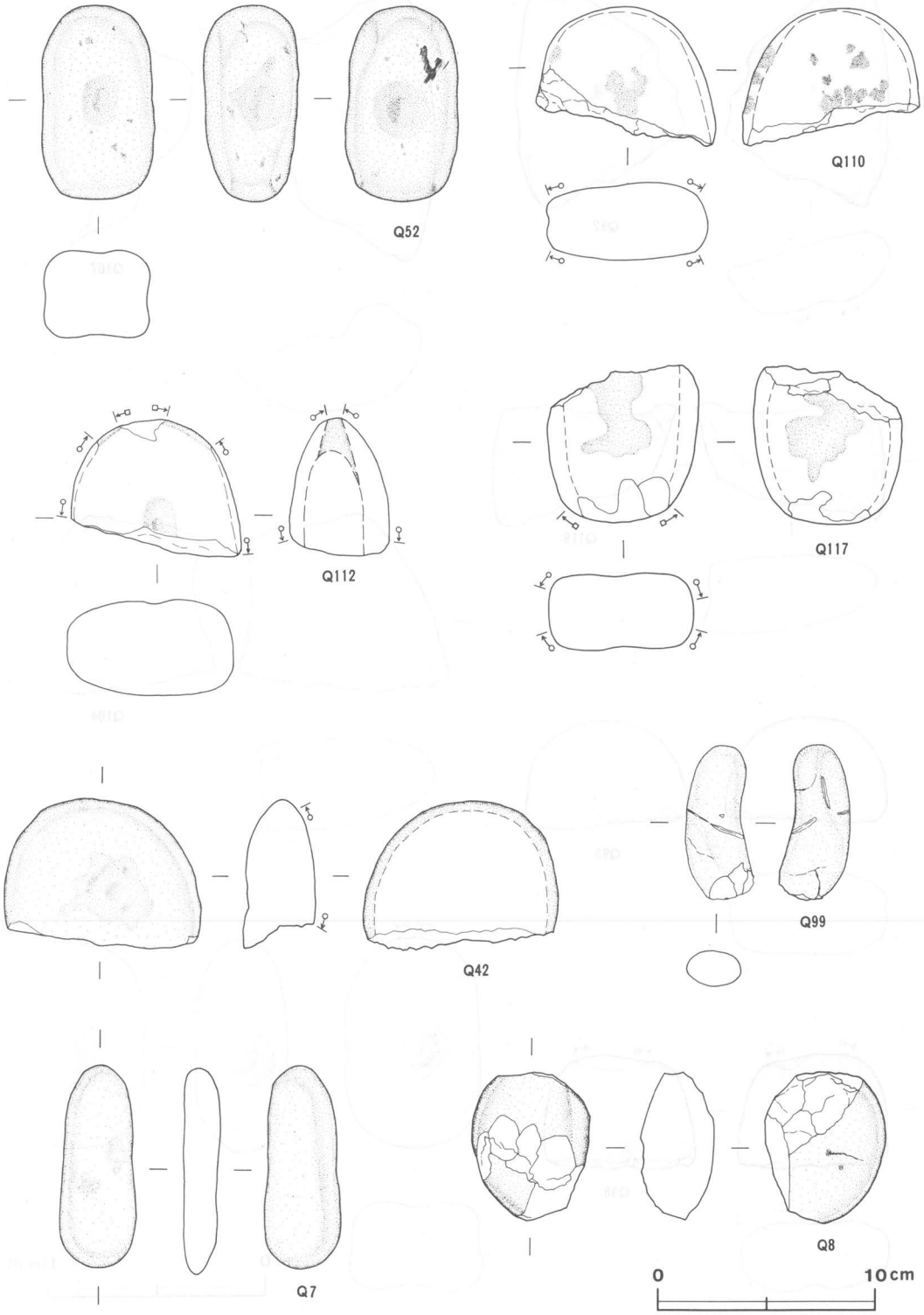
○楕円形のもの……Q139・77・58・150・73

○その他……Q88・61・134・66・147・64

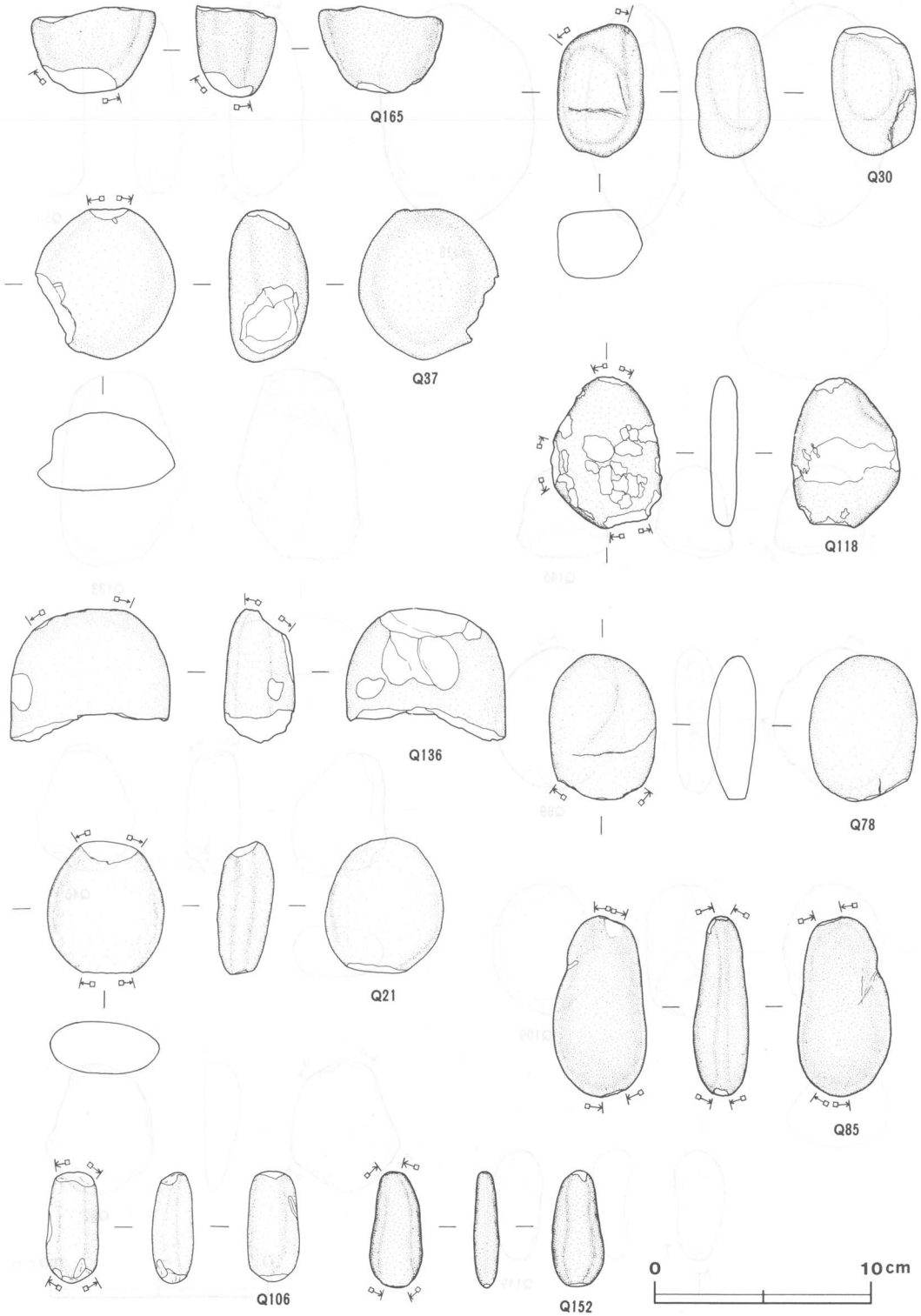
いずれも自然礫を利用し，調整されている。調整は礫の片面だけを打ち欠いて刃部を作り出したものと，両面に打撃を加えて刃部を作り出したものの２種類がみられる。なお，平面形状による調整の違いは認められない。Q58・121などは，片面だけの調整であり，Q61・148などは，



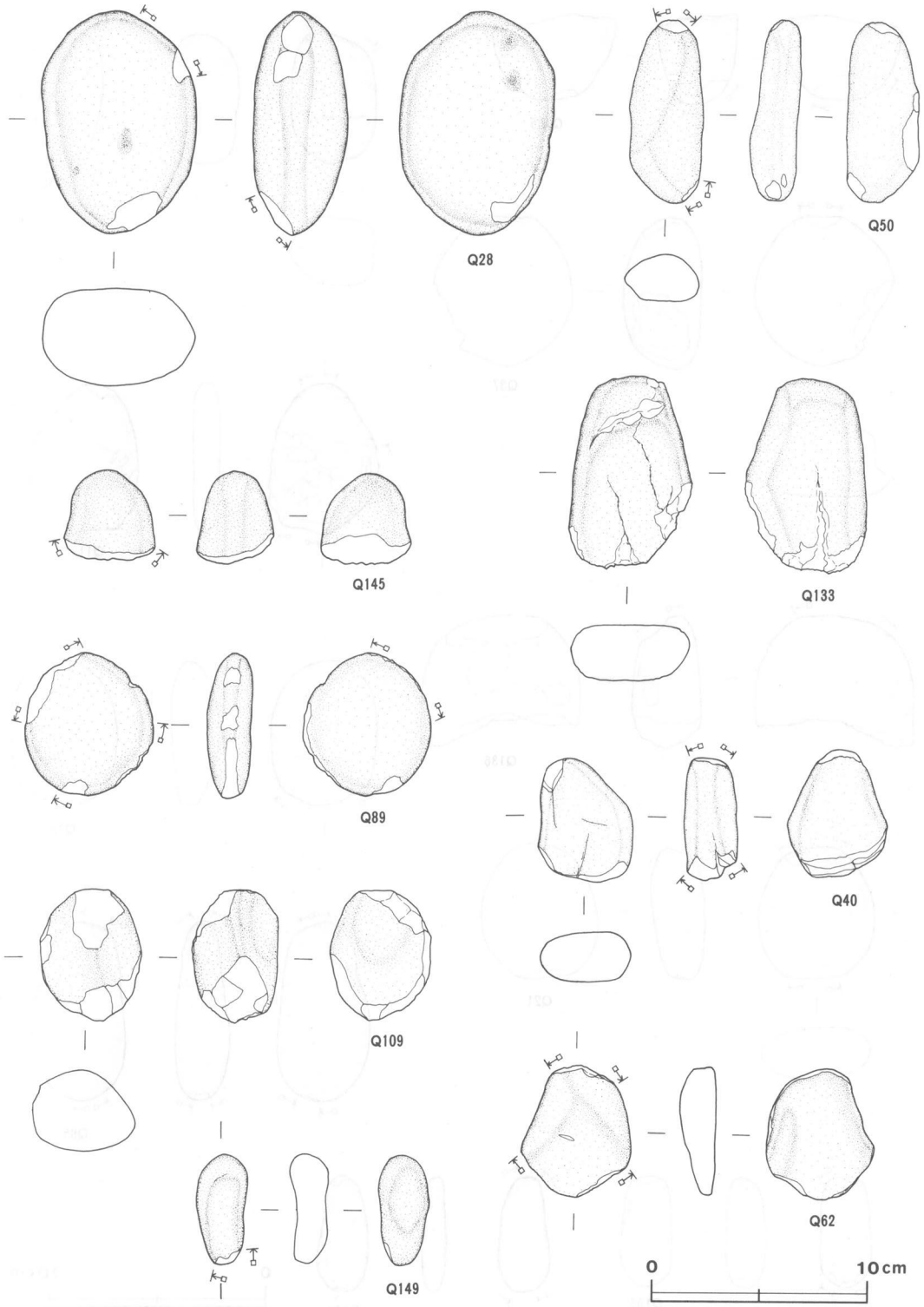
第113図　石器実測図(9)



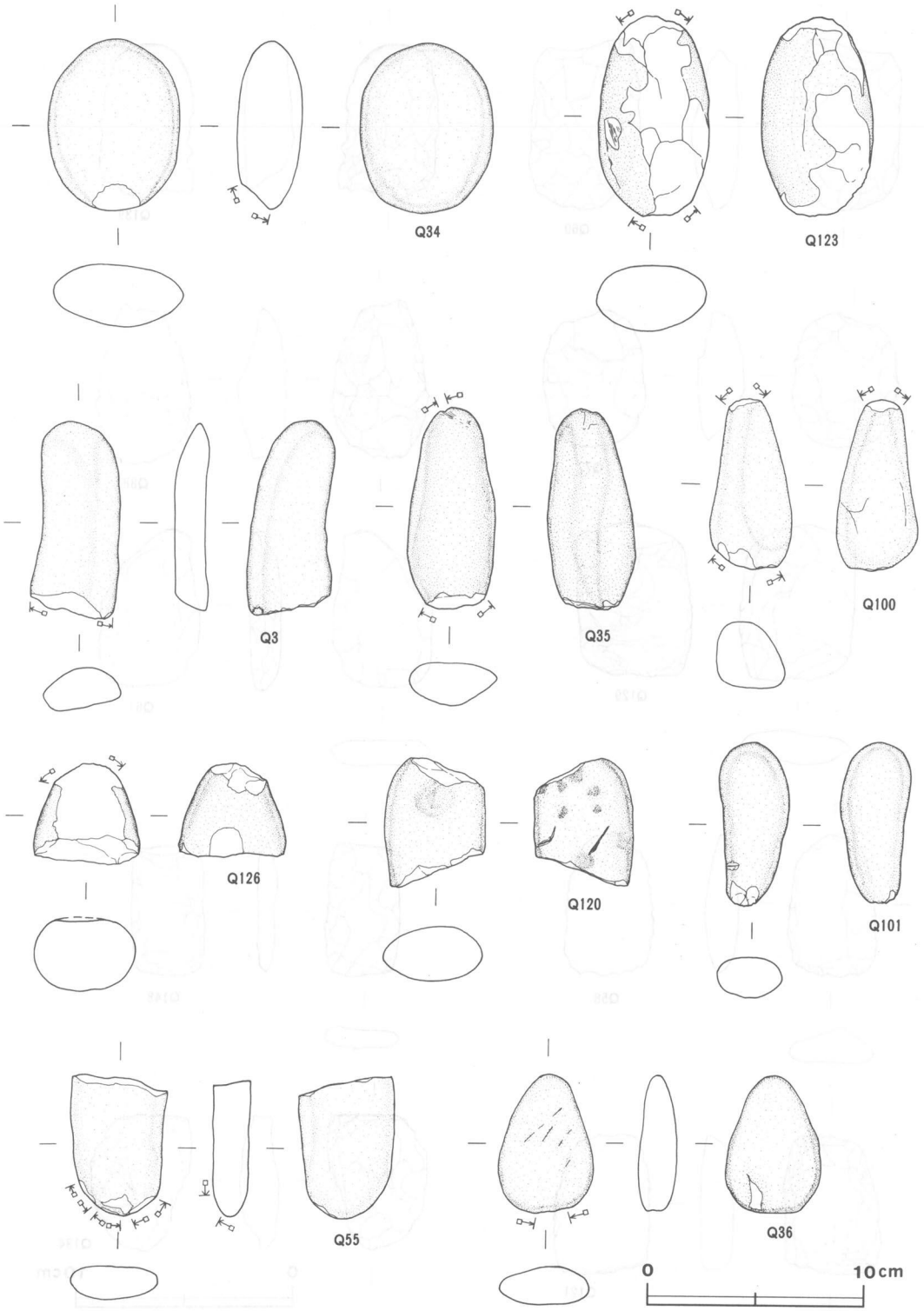
第114図　石器実測図(10)



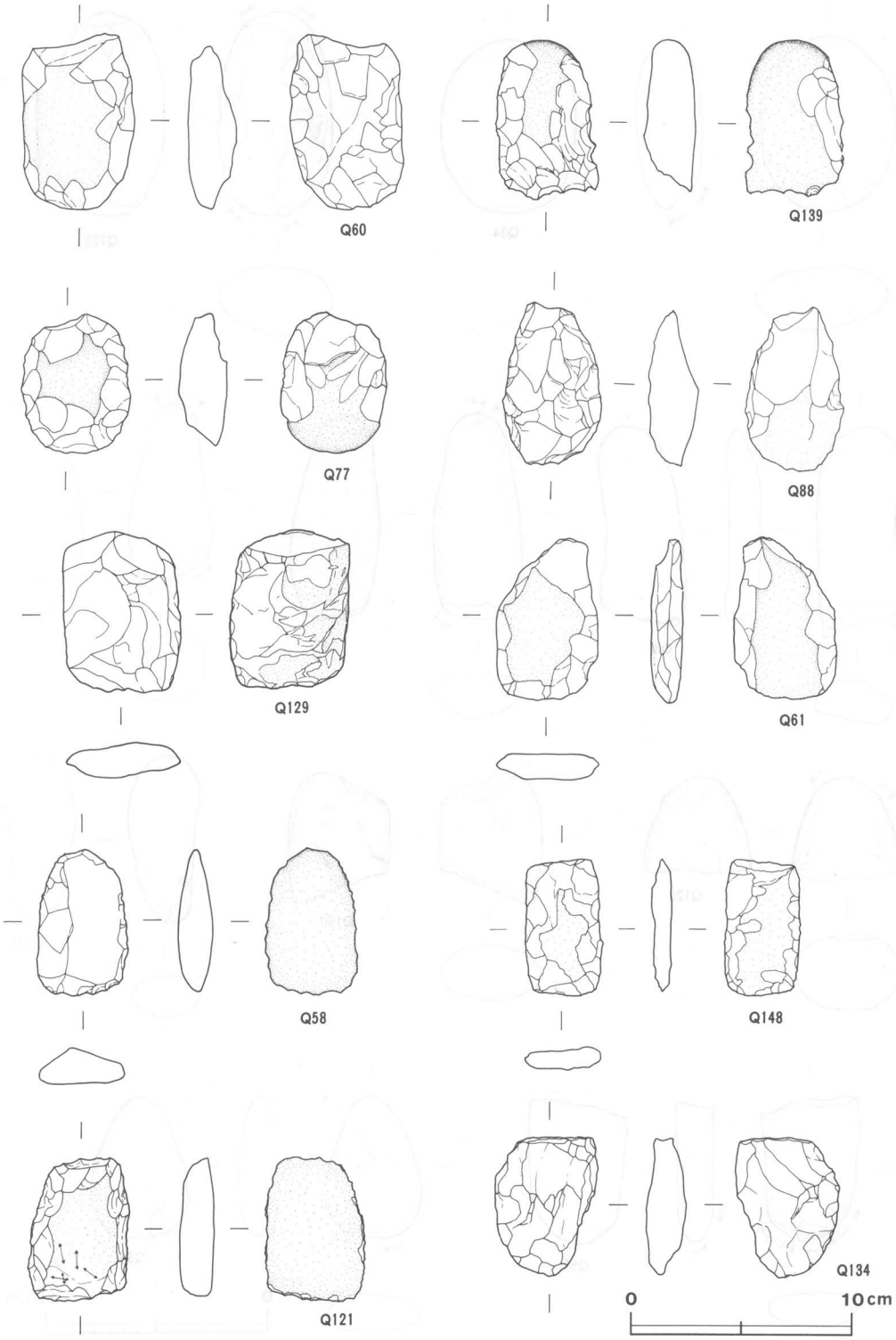
第115図　石器実測図(11)



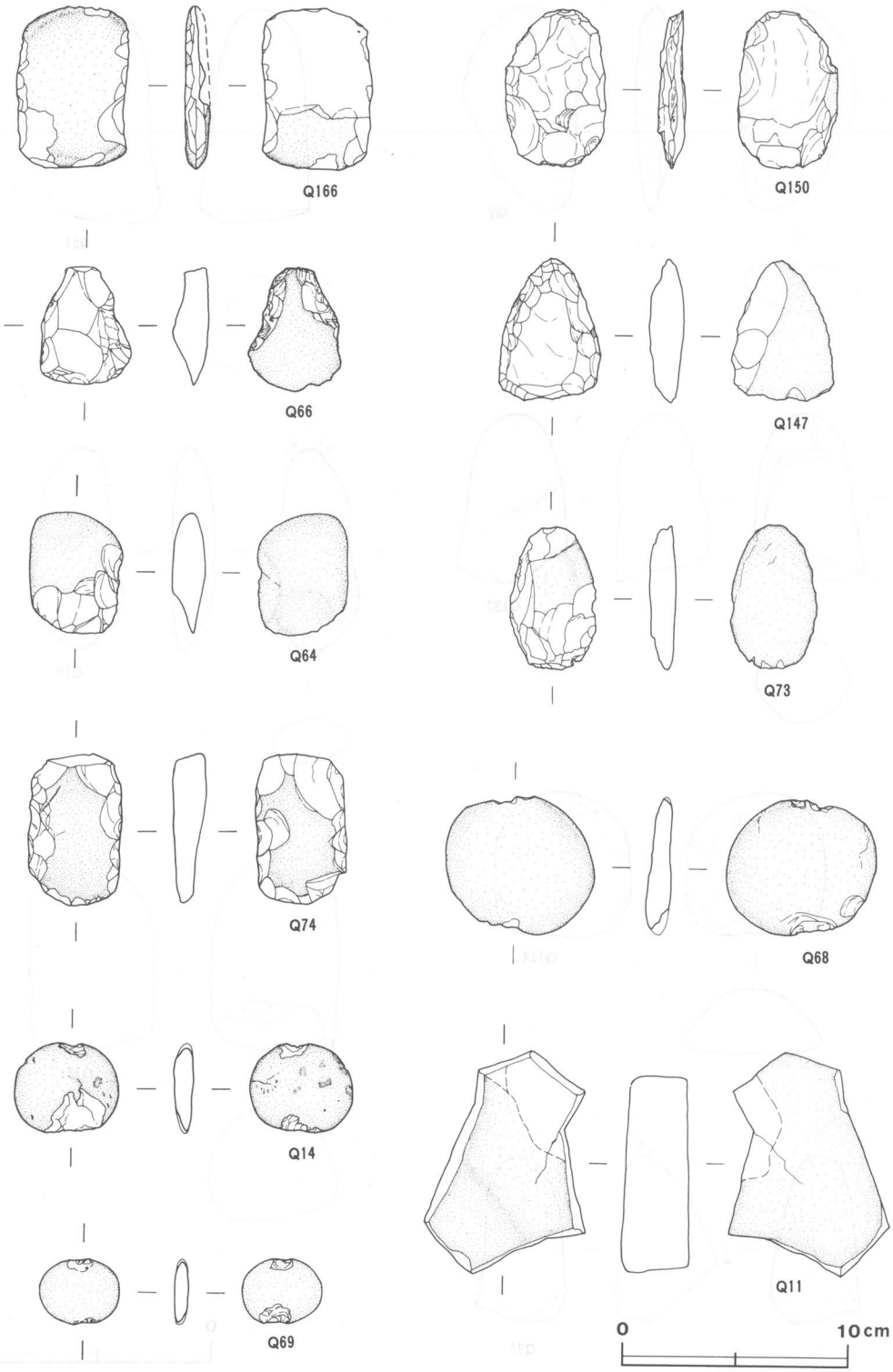
第116図　石器実測図(12)



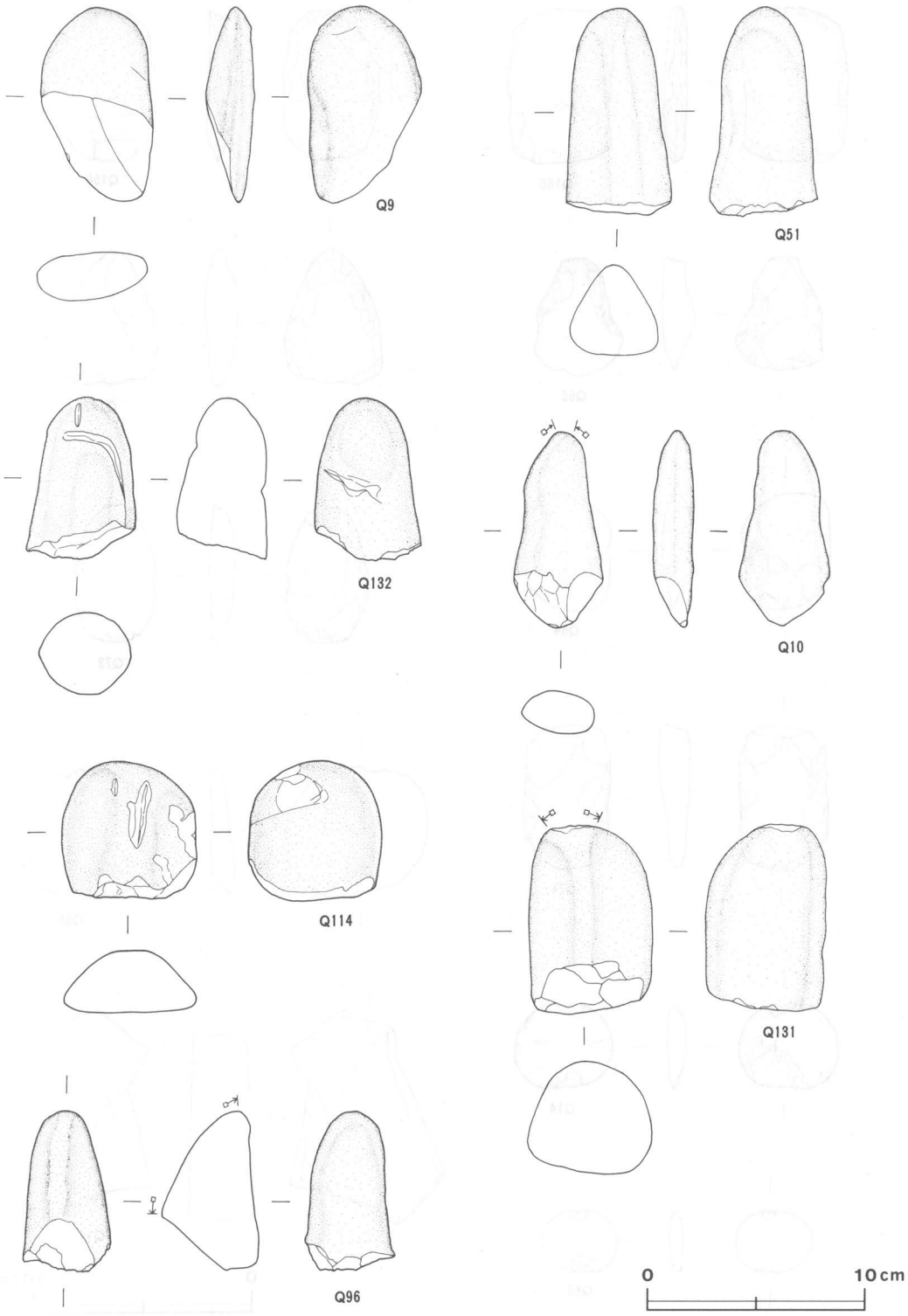
第117図　石器実測図(13)



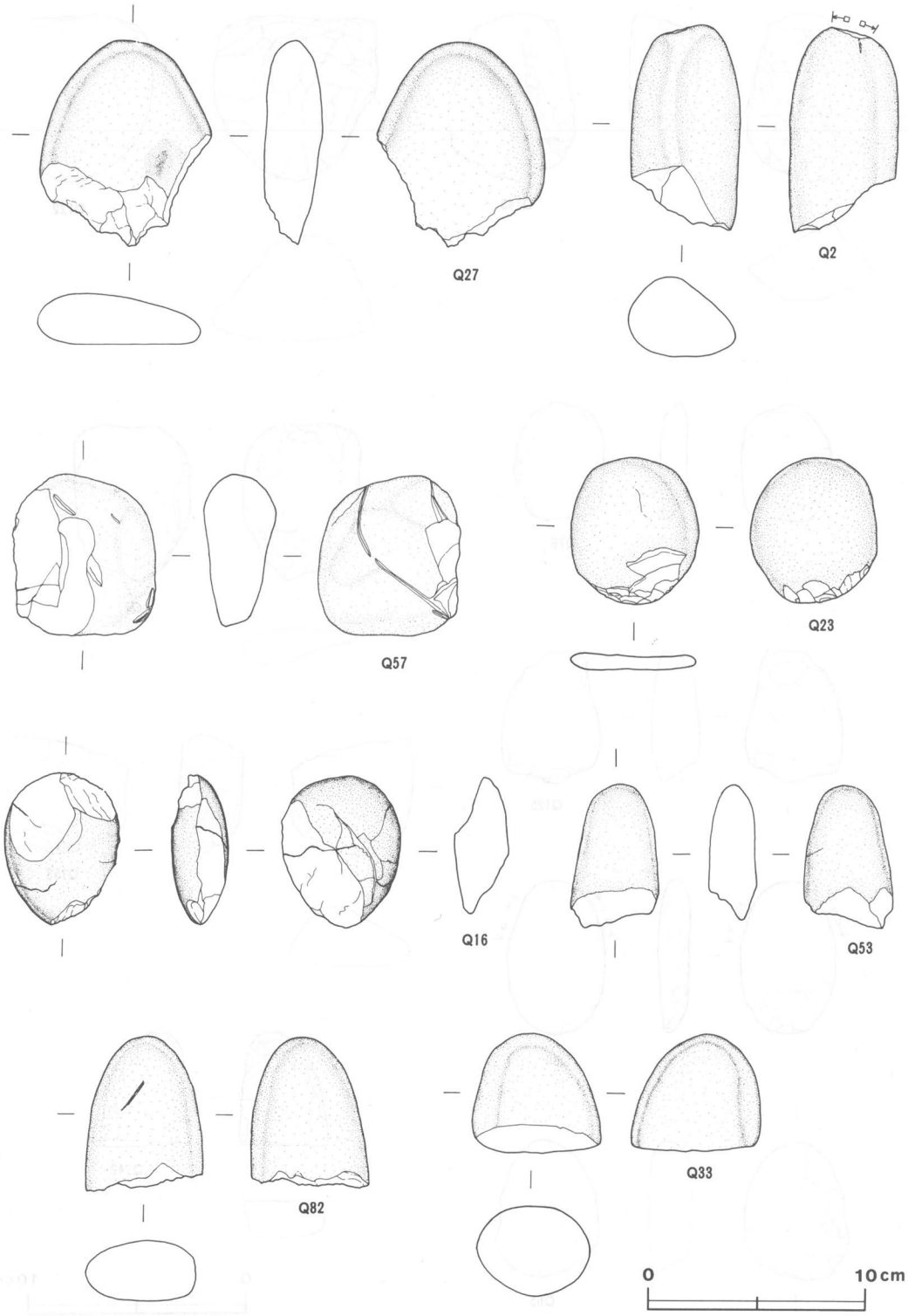
第118図　石器実測図(14)



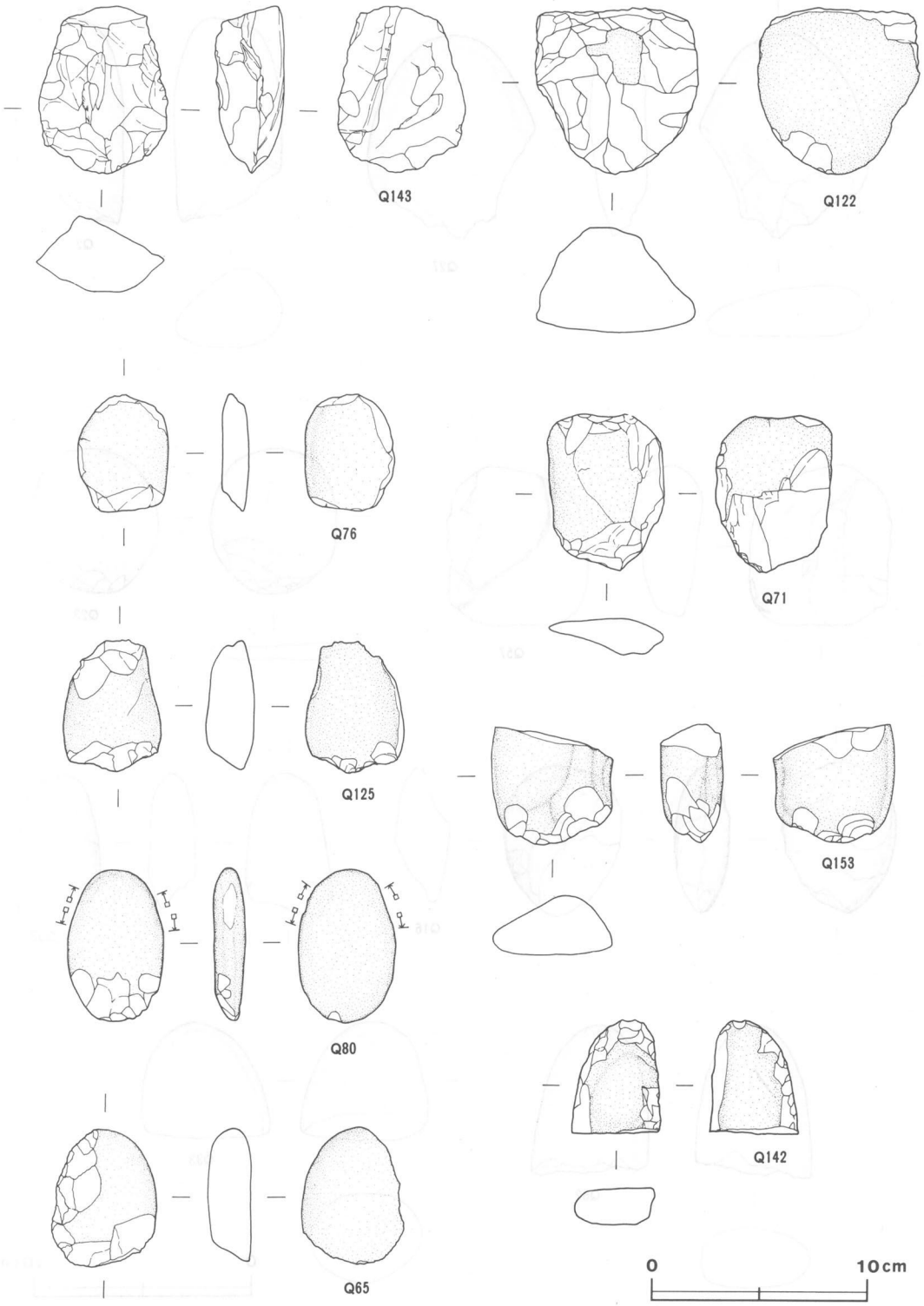
第119図　石器実測図(15)



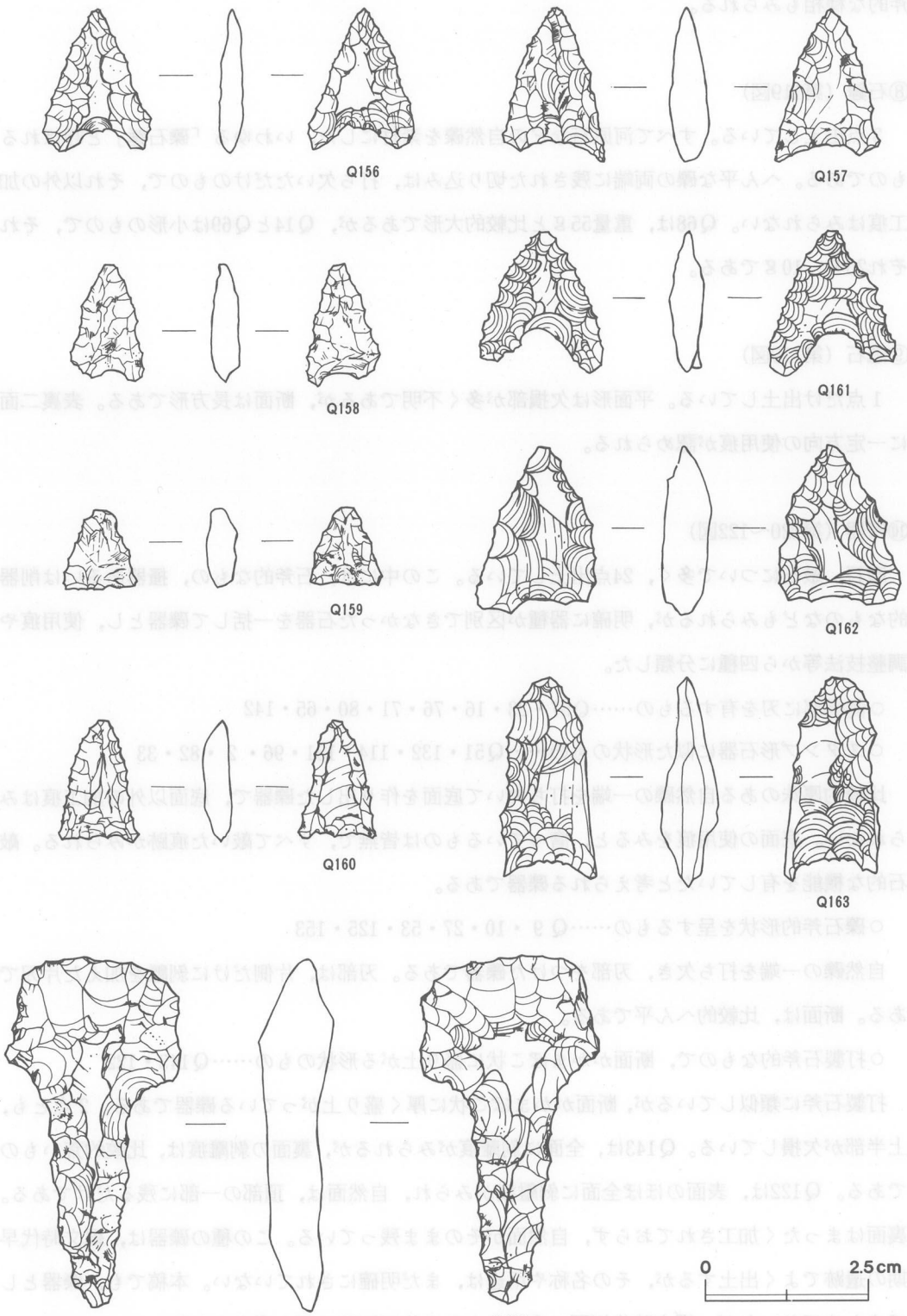
第120図　石器実測図(16)



第121図　石器実測図(17)



第122図　石器実測図(18)



第123図　石器実測図(19)

両面に調整痕がみられる。Q64は，端部の一端に片側から調整して刃部を付けたもので，打製石斧的な様相もみられる。

⑧石錘（第119図）

3点出土している。すべて河原石などの自然礫を素材にした，いわゆる「礫石錘」と呼ばれるものである。へん平な礫の両端に残された切り込みは，打ち欠いただけのもので，それ以外の加工痕はみられない。Q68は，重量55ｇと比較的大形であるが，Q14とQ69は小形のもので，それぞれ20ｇ，10ｇである。

⑨砥石（第119図）

1点だけ出土している。平面形は欠損部が多く不明であるが，断面は長方形である。表裏二面に一定方向の使用痕が認められる。

⑩礫器（第120～122図）

磨石，敲石についで多く，24点出土している。この中には，石斧的なもの，掻器あるいは削器的なものなどもみられるが，明確に器種が区別できなかった石器を一括して礫器とし，使用痕や調整技法等から四種に分類した。

○側縁部に刃を有するもの……Q57・23・16・76・71・80・65・142

○スタンプ形石器に似た形状のもの……Q51・132・114・131・96・2・82・33

比較的厚味のある自然礫の一端を打ち欠いて底面を作り出した礫器で，底面以外の加工痕はみられない。底面の使用痕をみると，磨っているものは皆無で，すべて敲いた痕跡がみられる。敲石的な機能を有していたと考えられる礫器である。

○礫石斧的形状を呈するもの……Q 9・10・27・53・125・153

自然礫の一端を打ち欠き，刃部をつけた礫器である。刃部は，片側だけに剝離を加えた片刃である。断面は，比較的へん平である。

○打製石斧的なもので，断面がかまぼこ状に盛り上がる形状のもの……Q143・122

打製石斧に類似しているが，断面がかまぼこ状に厚く盛り上がっている礫器である。2点とも，上半部が欠損している。Q143は，全面に剝離痕がみられるが，裏面の剝離痕は，比較的荒いものである。Q122は，表面のほぼ全面に剝離痕がみられ，自然面は，頂部の一部に残るだけである。裏面はまったく加工されておらず，自然面がそのまま残っている。この種の礫器は，縄文時代早期の遺跡でよく出土するが，その名称や用途は，まだ明確にされていない。本稿でも，礫器としてまとめておいたが，縄文時代初頭に多くみられる片刃石斧の類と考えられる。

⑪石鏃（第123図Q156～163）

当遺跡では8点出土しているが，形状をみると，すべて無茎石鏃である。欠損部もあるが，基部にえぐりのある凹基無茎鏃とえぐりのない平基無茎鏃に分類できる。

○凹基無茎鏃……Q156・157・158・161・162・163

○平基無茎鏃……Q159・160

ほとんどが基部にえぐりのある凹基無茎鏃である。Q161は，特にえぐりの深いものである。Q157・162のえぐりは非常に浅いものである。Q159は，先端部が欠損している。平基無茎鏃は，凹基無茎鏃よりも小形である。

⑫石錐（第123図Q164）

1点だけ出土している。細長い石材を利用し，整形したもので，表裏ともつまみから先端部にかけて一部に自然面を残している。つまみは方形を呈し，中央部が厚くなっている。錐部は，現存長3.2cmで，徐々に細くなり，断面は菱形である。つまみ，錐部とも表裏から交互に剝離調整を加えている。錐部側縁には，使用中に生じた剝離痕がみられる。

石　器　一　覧　表

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q102	打製石斧	A2g$_8$	10.7	7.5	1.9	210	砂岩	第105図
Q 1	〃	A2h$_0$	7.6	5.1	2.25	144	硬砂岩	〃
Q 83	〃	A2i$_7$	11.6	5.4	2.5	255	花崗岩	〃
Q 49	〃	C2a$_6$	6.2	4.5	1.9	80	砂岩	〃
Q151	〃	B2d$_2$	(4.3)	3.6	1.1	(26)	流紋岩	〃
Q 6	〃	Z	8.0	4.2	1.9	80	安山岩	〃
Q 22	〃	B2h$_3$	5.6	3.4	1.3	30	粘板岩	
Q 59	〃	B2e$_5$	8.3	5.4	2.3	110	砂岩	〃
Q 91	〃	A3h$_2$	6.4	4.2	1.3	50	〃	〃
Q140	〃	A2b$_9$	7.6	4.2	2.3	93	粘板岩	第106図
Q 81	〃	Z	7.0	5.8	1.7	100	流紋岩	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 70	打製石斧	B2f$_0$	8.35	3.0	2.2	64	頁岩	第106図
Q 75	〃	B2a$_5$	6.35	4.75	1.9	75	〃	〃
Q 97	〃	C2a$_0$	7.4	3.8	2.0	70	花崗岩	〃
Q 67	〃	B2e$_6$	(5.4)	4.8	1.0	(40)	頁岩	〃
Q 25	〃	B2e$_4$	(4.1)	4.7	1.1	(29)	石英斑岩	〃
Q 63	〃	A6j$_4$	6.5	6.1	1.7	75	砂岩	〃
Q 19	〃	Z	(2.9)	4.9	1.5	(20)	粘板岩	〃
Q 29	〃	B2h$_5$	(4.1)	6.2	1.6	(64)	砂岩	第107図
Q 72	磨製石斧	A2j$_8$	8.2	4.3	2.3	115	流紋岩	〃
Q167	〃	A3h$_3$	(6.9)	6.4	3.1	(210)	砂岩	〃
Q 45	〃	B2i$_5$	7.2	4.9	1.4	80	〃	〃
Q116	〃	B2e$_3$	(6.8)	6.3	1.9	(117)	頁岩	〃
Q 18	〃	B2f$_4$	(4.4)	4.85	1.3	(42)	安山岩	〃
Q168	〃	A3h$_3$	4.5	3.3	0.8	16	チャート	〃
Q 79	〃	B2f$_5$	(5.3)	5.1	1.8	(73)	頁岩	〃
Q 5	磨石	SI-01	6.8	6.3	3.4	190	硬砂岩	〃
Q 20	〃	SI-02	(5.2)	(8.7)	(6.0)	(385)	安山岩	〃
Q 13	〃	SK-5	(6.25)	(5.4)	3.4	(137)	〃	第108図
Q113	〃	B2b$_9$	(5.0)	(5.15)	3.7	(140)	〃	〃
Q 12	〃	SK-20	8.2	7.3	4.5	346	花崗斑岩	〃
Q115	〃	A2g$_6$	(7.3)	(5.2)	4.0	(140)	安山岩	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q138	磨石	SK-34	(3.6)	(7.5)	5.1	(185)	花崗岩	第108図
Q141	〃	C2b$_7$	(6.3)	(6.5)	(1.7)	(90)	砂岩	〃
Q154	〃	A3i$_1$	(5.4)	(4.2)	4.1	(121)	安山岩	〃
Q124	〃	B2g$_4$	(4.9)	7.0	3.2	(150)	〃	〃
Q 47	〃	A2j$_7$	6.0	6.2	3.0	190	砂岩	第109図
Q144	〃	B2f$_7$	(4.7)	6.1	2.7	(116)	流紋岩	〃
Q127	〃	A2i$_2$	(4.7)	10.3	4.7	(292)	安山岩	〃
Q128	〃	A2f$_7$	10.3	(5.2)	5.2	(325)	花崗岩	〃
Q155	〃	B2c$_0$	(3.3)	7.0	4.2	(106)	安山岩	〃
Q86	〃	A2h$_7$	(7.0)	5.9	2.5	(155)	〃	〃
Q 54	〃	C2a$_6$	8.1	5.6	(2.4)	149	砂岩	〃
Q 48	〃	B2f$_9$	(7.2)	(5.0)	4.7	(155)	安山岩	〃
Q111	〃	B2h$_4$	(5.6)	(6.7)	4.0	(165)	〃	〃
Q 46	〃	B2h$_4$	9.4	5.7	2.8	236	〃	第110図
Q108	〃	B2b$_8$	(5.0)	6.5	3.7	(182)	〃	〃
Q 56	〃	A2h$_8$	7.5	5.2	2.0	130	砂岩	〃
Q137	〃	SK-54	(6.4)	7.2	4.5	(252)	安山岩	〃
Q 17	〃	B2a$_7$	7.1	(4.85)	3.3	(180)	砂岩	〃
Q 38	〃	B2a$_3$	(7.0)	(6.9)	(1.0)	(95)	〃	〃
Q 4	〃	A2g$_8$	9.8	9.3	3.2	485	安山岩	〃
Q146	〃	C2b$_7$	(4.2)	5.0	3.7	(105)	砂岩	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 15	磨石	C2b$_7$	(6.8)	8.2	2.7	(260)	花崗片麻岩	第111図
Q 87	〃	B2g$_8$	(7.0)	(5.4)	3.2	(140)	安山岩	〃
Q 41	〃	B2i$_8$	(8.6)	(6.5)	(2.6)	(117)	〃	〃
Q 95	〃	A3h$_4$	(4.7)	7.5	4.05	(185)	〃	〃
Q 32	〃	B2i$_9$	(7.9)	(6.2)	2.8	(194)	砂岩	〃
Q 24	〃	B2j$_8$	(4.0)	6.4	3.9	(141)	〃	〃
Q135	〃	A2b$_9$	(4.9)	(7.9)	4.3	(195)	安山岩	〃
Q 26	〃	B2c$_2$	8.45	(4.3)	3.7	(170)	砂岩	〃
Q 39	〃	B2c$_8$	7.7	6.2	3.2	175	〃	第112図
Q 43	〃	B2d$_6$	7.8	(4.6)	3.9	(170)	アプライト	〃
Q 44	〃	B2f$_9$	6.2	5.6	3.5	170	石英斑岩	〃
Q130	〃	B2d$_0$	6.0	5.9	4.8	230	砂岩	〃
Q 90	〃	A3i$_2$	(5.1)	(7.7)	2.8	(150)	安山岩	〃
Q 84	〃	B2b$_3$	(7.5)	7.3	3.5	(300)	〃	〃
Q 31	〃	B2e$_4$	8.5	(4.0)	4.4	(180)	砂岩	〃
Q103	〃	B2b$_2$	(7.6)	7.8	4.4	(286)	安山岩	〃
Q 92	石皿	B2d$_4$			3.0	(245)	〃	第113図
Q107	〃	B2h$_6$			4.4	(420)	〃	〃
Q119	〃	B2g$_6$			3.4	(176)	〃	〃
Q104	〃	B2i$_6$			4.15	(456)	〃	〃
Q 93	凹石	B3h$_4$	(4.7)	7.5	3.9	(190)	〃	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 98	凹石	A2i$_9$	(5.7)	7.0	3.3	(190)	安山岩	第113図
Q 94	〃	B2d$_3$, c$_6$	9.7	6.1	4.2	390	〃	〃
Q 52	〃	A3g$_3$	8.9	5.2	4.2	325	〃	第114図
Q110	〃	B2f$_0$	(5.6)	8.2	3.1	(225)	〃	〃
Q112	〃	B3f$_3$	(5.8)	7.8	4.3	(300)	花崗岩	〃
Q117	〃	B2g$_5$	(7.0)	6.9	3.5	(290)	石英粗面岩	〃
Q 42	〃	SK-34	(6.7)	9.1	3.1	(260)	安山岩	〃
Q 99	敲石	A3g$_4$	7.2	2.7	1.7	48	砂岩	〃
Q 7	〃	SI-02	9.3	3.2	1.4	70	〃	〃
Q 8	〃	SI-01	6.8	5.4	3.5	163	〃	〃
Q165	〃	SK-54	(3.8)	5.7	3.7	(102)	〃	第115図
Q 30	〃	B2a$_8$	6.0	4.0	3.1	110	〃	〃
Q 37	〃	B2c$_7$	6.9	6.5	3.6	210	石英斑岩	〃
Q118	〃	B2b$_3$	7.0	5.1	1.25	50	アプライト	〃
Q136	〃	B2b$_0$	(4.9)	7.3	3.2	163	流紋岩	〃
Q 78	〃	B2i$_8$	6.7	4.95	2.2	97	砂岩	〃
Q 21	〃	B2b$_3$	6.1	5.4	2.4	110	〃	〃
Q 85	〃	B3a$_1$	8.3	4.3	2.5	124	石英斑岩	〃
Q106	〃	B2d$_6$	5.1	2.4	1.9	34	砂岩	〃
Q152	〃	B2c$_6$	5.3	2.4	1.2	23	〃	〃
Q 28	〃	C2a$_9$	10.4	7.1	4.4	435	〃	第116図

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 50	敲石	B3b$_{1}$	8.5	3.4	2.2	80	流紋岩	第116図
Q145	〃	B2c$_{6}$	4.2	4.2	3.4	74	〃	〃
Q133	〃	A3j$_{2}$	9.0	5.6	2.7	205	玢岩	〃
Q 89	〃	B2d$_{8}$	6.6	6.0	2.1	118	石英斑岩	〃
Q 40	〃	B2d$_{6}$	5.5	4.3	2.3	90	砂岩	〃
Q109	〃	B2f$_{4}$	6.0	4.7	4.0	126	〃	〃
Q149	〃	B2d$_{8}$	5.1	2.3	1.8	23	流紋岩	〃
Q 62	〃	B2e$_{8}$	6.1	5.1	1.7	60	砂岩	〃
Q 34	〃	B2c$_{7}$	7.9	6.1	2.9	210	石英斑岩	第117図
Q123	〃	A3h$_{4}$	9.3	5.2	3.0	190	砂岩	〃
Q 3	〃	SI-1	8.9	3.6	1.5	105	花崗岩	〃
Q 35	〃	B2i$_{9}$	9.3	4.1	2.0	100	砂岩	〃
Q100	〃	A2g$_{7}$	8.0	3.8	3.1	130	〃	〃
Q126	〃	B2c$_{2}$	4.8	5.05	3.2	85	〃	〃
Q120	〃	B2f$_{8}$	4.8	4.6	2.0	92	流紋岩	〃
Q101	〃	B2d$_{9}$	7.6	3.3	1.9	62	砂岩	〃
Q 55	〃	C2a$_{6}$	(6.4)	4.5	1.6	(72)	〃	〃
Q 36	〃	C2c$_{8}$	6.4	4.5	1.8	72	閃緑岩	〃
Q 60	掻器	B2c$_{5}$	7.4	5.1	2.3	120	流紋岩	第118図
Q139	〃	Z	7.2	4.8	2.3	86	砂岩	〃
Q 77	〃	A2j$_{8}$	6.0	4.3	2.1	82	〃	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 88	掻器	B2b$_9$	6.9	4.1	2.25	80	頁岩	第118図
Q129	〃	B2b$_0$	7.3	5.2	1.5	90	砂岩	〃
Q 61	〃	C3b$_1$	6.8	4.6	1.15	60	流紋岩	〃
Q 58	〃	B2d$_2$	6.5	4.1	1.6	50	頁岩	〃
Q148	〃	B2c$_5$	6.25	3.5	0.9	26	流紋岩	〃
Q121	〃	A3h$_2$	6.3	4.3	1.5	70	粘板岩	〃
Q134	〃	A2j$_4$	6.5	4.5	1.8	76	頁岩	〃
Q166	〃	B2e$_5$	7.0	4.8	1.1	49	流紋岩	第119図
Q150	〃	A2i$_9$	6.9	4.4	1.2	52	頁岩	〃
Q 66	〃	B2e$_6$	5.3	3.9	1.5	30	チャート	〃
Q147	〃	B2c$_0$	6.2	4.5	1.65	51	頁岩	〃
Q 64	〃	B2a$_9$	5.3	3.9	1.4	40	〃	〃
Q 73	〃	B2d$_5$	6.3	3.8	1.1	35	〃	〃
Q 74	〃	A3j$_2$	6.7	4.0	1.5	45	流紋岩	〃
Q 68	石錘	B2h$_4$	5.7	6.6	0.8	55	砂岩	〃
Q 14	〃	A2i$_5$	4.0	4.7	0.75	20	安山岩	〃
Q 69	〃	B2e$_8$	2.75	3.5	0.6	10	〃	〃
Q 11	砥石	SK-34	(9.9)	(7.2)	2.8	(265)	砂岩	〃
Q 9	礫器	SI-02	8.3	5.0	2.2	109	粘板岩	第120図
Q 51	〃	B2f$_0$	9.4	4.6	4.1	250	流紋岩	〃
Q132	〃	A3j$_2$	7.45	4.9	4.1	185	〃	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q 10	礫器	Z	9.0	3.3	1.9	80	砂岩	第120図
Q114	〃	B2i$_4$	6.5	6.2	2.9	163	〃	〃
Q 96	〃	B3j$_3$	7.2	3.9	4.1	160	〃	〃
Q131	〃	C2a$_8$	8.5	5.2	5.2	345	流紋岩	〃
Q 27	〃	B2i$_8$	9.5	7.6	2.6	217	〃	第121図
Q 2	〃	A2h$_7$	8.9	5.0	3.7	215	〃	〃
Q 57	〃	B2j$_8$	7.5	6.6	2.9	230	頁岩	〃
Q 23	〃	B2f$_4$	6.7	5.9	0.8	95	流紋岩	〃
Q 16	〃	B2h$_0$	7.1	5.4	2.7	100	砂岩	〃
Q 53	〃	B2g$_6$	5.2	4.0	2.2	65	〃	〃
Q 82	〃	A2j$_3$	7.0	5.3	2.8	155	流紋岩	〃
Q 33	〃	B2b$_7$	5.5	5.8	4.1	285	〃	〃
Q143	〃	A2i$_6$	7.7	5.9	3.2	150	頁岩	第122図
Q122	〃	A2j$_7$	7.7	7.6	4.9	300	石英斑岩	〃
Q 76	〃	Z	5.4	4.1	1.2	45	砂岩	〃
Q 71	〃	B2j$_6$	7.3	5.5	1.5	64	アプライト	〃
Q125	〃	A3h$_3$	6.1	4.5	2.2	87	粘板岩	〃
Q 80	〃	A2h$_5$	7.0	4.5	1.4	60	砂岩	〃
Q153	〃	A3h$_1$	4.9	5.7	2.9	123	安山岩	〃
Q 65	〃	B2j$_6$	6.4	4.9	1.9	85	流紋岩	〃
Q142	〃	B2e$_4$	5.3	4.2	1.7	60	頁岩	〃

番号	器種	出土地点	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
Q156	石鏃	B2a$_4$	2.2	1.65	0.35	1	チャート	第123図
Q157	〃	表採	2.4	1.55	0.7	1.5	〃	〃
Q158	〃	A2h$_8$	1.8	1.1	0.45	0.75	〃	〃
Q161	〃	B2b$_7$	2.2	1.85	0.55	1	〃	〃
Q159	〃	B2b$_8$	1.25	1.15	0.5	0.5	〃	〃
Q162	〃	B2a$_4$	2.6	1.85	0.8	2.5	黒曜石	〃
Q160	〃	B2b$_3$	1.85	1.25	0.5	1	〃	〃
Q163	〃	A2f$_8$	3.1	1.45	0.85	2.5	〃	〃
Q164	石錐	B2h$_7$	5.4	2.7	1.25	10.5	チャート	〃

第4節　まとめ

1　竪穴式住居跡について

当遺跡で検出された竪穴式住居跡は，古墳時代前期のものが2軒である。住居跡は遺跡の西側に寄って検出されたもので，ほぼ東西に並んで位置している。

第1号住居跡は，一辺約4.5mの方形を呈する住居跡である。第2号住居跡は，一辺約4.6mの方形を呈している。これをみると，平面プランはいずれも方形で，規模はほぼ同規模である。主柱穴はともに4か所である。ただ，第1号住居跡の柱穴は良好なものがなく，しかも，2か所ずつ接近して検出されたものが3か所ある。結局，合計7か所が検出され，P_2，P_3，P_5，P_7を主柱穴と考えたが，径・深さとも貧弱である。主柱穴間の距離は，主軸方向で測ると約2.8mであり，これは2軒とも同一である。

炉は，出入り口の反対側と考えられる方向に片寄って設置されている。すなわち，奥2か所の柱穴のほぼ中央部に位置している。2軒ともロームを掘り凹(くぼ)めた地床炉で，平面形は楕円形を呈している。壁溝は，第2号住居跡では一部を除いて周回しているが，第1号住居跡ではみられない。貯蔵穴は，2軒とも検出されていない。第2号住居跡南壁下部にある長方形の落ち込みは，

貯蔵穴ではなく，出入り口に関する施設の一部と思われる。

なお，この時期の住居跡では，焼失家屋とみられる遺構が多いが，当遺跡でも第2号住居跡の床面から，炭化材が数か所で検出され，火災に遭遇したのではないかと思われる。

出土遺物をみると，2軒とも非常に少ないという共通点がある。第1号住居跡からは，小形の壺形土器が出土したが，他には土師器片が数点出土しただけで，これは第2号住居跡も同じような状態である。この少量の遺物がすべて床面から出土したことは，住居跡の時期を決定する上で，好都合である。土師器以外の遺物は，数多く出土している。そのほとんどは縄文時代早期の土器片である。これらの遺物が覆土や床面から出土しているが，住居跡に伴う時期の遺物ではなく，住居跡が埋没する際に土砂と一緒に流入したものと考えられる。

奥山下根遺跡で検出された2軒の住居跡について，その規模や遺物等をみてきたが，時期については，古墳時代前期（五領期）と考えられる。五領期の集落構成をみると，数軒で1グループを構成する例もあり，当遺跡の2軒という数字には，それほど問題点がないと思われる。しかし，住居跡の配置状況をみると，当遺跡の西側の平坦地に向けて古墳時代の集落跡がのびている可能性が強く，今回の調査地域は，集落跡の末端部になると思われる。いずれにしても，今回の調査地域は台地の一部であり，検出された遺構，遺物も少なく，遺跡の性格等について十分検討するだけの資料が収集できなかった。

2　土壙について

当遺跡で検出された土壙は，37基である。これらの土壙は，台地平坦部から斜面部にかけて検出され，その形状は，平面形が楕円形を呈するものが多い。深さは，50cm以内のものがほとんどである。遺物を伴った土壙は多いが，ひとつの土壙からの出土量は少ないものが多く，しかもそのほとんどは埋没する過程で流入したものらしく，覆土から出土したものである。したがって，土壙の時期を決定する資料としては適切なものではないと思われる。ここでは，主に平面形状から分類を行い，類型化してみた。

(1)　土壙の分類とその結果について

土壙の分類は，平面形状と深さを基準にして，類型化した。

平面形
- 楕円形……Ⅰ類
- 円　形……Ⅱ類
- 不定形……Ⅲ類

深さ
- 30cm未満……A類
- 30cm～49cm……B類
- 50cm以上……C類

上記の基準により分類すると，次のとおりである。

Ⅰ類合計　26基

ⅠA…SK 1・2・4・6・10・13・15・17・18・29・32・37・53　（13基）

ＩB…SK３・７・25・27・28・30・31・33・35・38・46・49　(12基)

ＩC…SK47　(１基)

II類合計　10基

IIA…SK12・16・24・52　(４基)

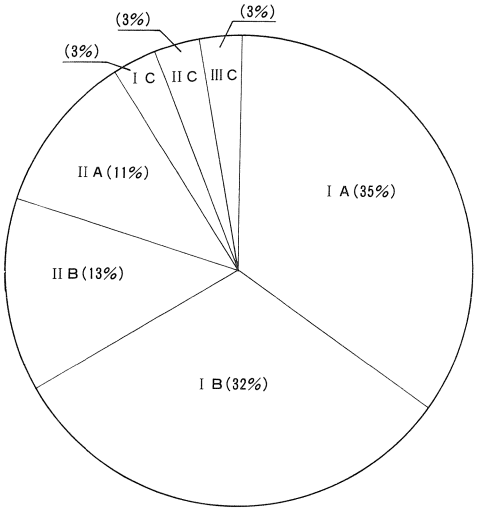
IIB…SK23・26・48・50・51　(５基)

IIC…SK19　(１基)

III類　１基

IIIC…SK34　(１基)

以上総計37基中，Ｉ類が最も多く26基を占めていることがわかる。その他は，II類が10基，III類は１基しか検出されなかったことになる。これらをパーセント表示でまとめると次のような結果になる。



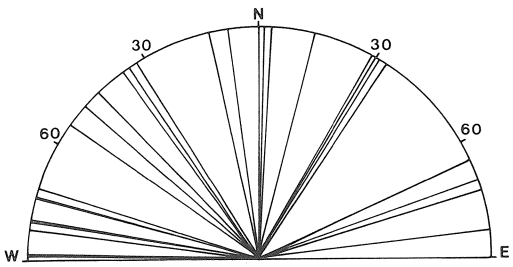
第124図　土壙の類別割合

類　型	ＩA	ＩB	ＩC	IIA	IIB	IIC	IIIC
土壙数	13	12	1	4	5	1	1
小　計	35%	32%	3%	11%	13%	3%	3%
合　計	70%			27%			3%

○Ｉ類の土壙

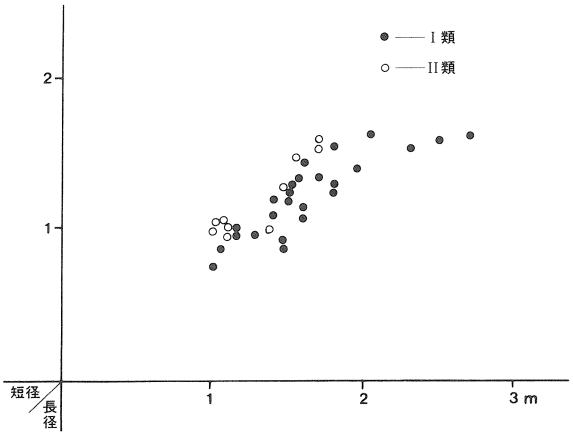
本類は全体の70%を占めており，当遺跡における主体的な土壙である。規模は，長径が１～２mの範囲のものが多い。深さはA，B類とも約半数ずつである。Ｉ類の中で最も深い土壙はＳＫ47で，54cmである。覆土は，全体的に焼土粒子を含んでいるものが多く，やや深くなるB類には特に多くみられる。長径方向に特別な規則性はみいだせないが，西側を向くものがやや多くみられる。遺物は，ＩA類で８基，ＩB類で９基から出土し，全体として７割ちかくの土壙から出土している。本類に属する土壙は，遺跡内の平坦部～傾斜部にかけて平均的に分布している。

○II類の土壙



第125図　土壙の長径方向

本類は，総数10基である。規模は直径１～1.7mまでのものであるが，IIA，IIB類とも１～1.1m前後のものと，1.5～1.7m前後のものの２グループに分けられる。直径が1.1～1.5mの土壙はほとんどみられない。深さは，Ｉ類と同じような傾向で，50cm未満の土壙がほとんどである。ただSK19の深さは59cmで，当遺跡で検出された土壙の中では，最も深いも



第126図　土壙の規模分類

のである。この土壙は直径1.1mの円形に掘り込まれたもので，壁，底面とも硬く締まり，内部には褐色土が堆積していた。遺物は，検出されていない。本類の壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦なものが多い。遺物は，6基から出土している。遺構の配置状況は，平坦部に少なく，傾斜部に位置するものが多い。

○III類の土壙

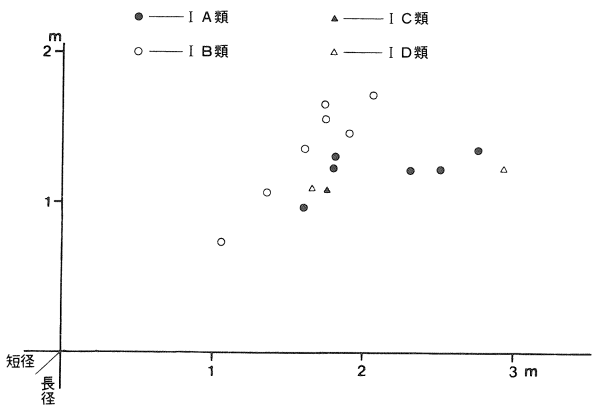
当遺跡から，1基だけ検出された土壙である。遺構を確認した段階では，大きな楕円形の落ち込みが確認されたのであったが，調査を進めていくと，楕円形の落ち込みは地下に向かって掘られた土壙の開口部であることが判明した。地下の部分は，確認面から1.7mの深さに，断面が円形のトンネル状に掘られていた。出土遺物は，開口部付近の覆土から縄文土器片と礫が合わせて数10点出土している。どのような目的のために掘られた土壙なのか，その用途や性格等を解明することはできなかった。

以上，各グループごとの特徴をみてきたが，平面プランは，楕円形を呈するI類の多いことが特徴である。II，III類は少なく，全体の3割である。深さはA～C類に細分したが，傾向としては50cm未満のA，B類が大部分である。C類は3基しか検出されず，9割以上が50cm未満の浅いものである。遺物は，24基の土壙から出土している。しかし，底面から出土したものはなく，すべて覆土中から出土したものである。この出土遺物は，縄文時代早期中葉～後葉に属するものであり，土壙の時期も同時期と思われるが，前述のように流入した遺物が多いとみられるため，断定はできない。

なお，土壙の分布状況は第15図のとおり，平坦部には少なく，傾斜部に多く分布している。この分布状況は炉穴にも同様の傾向がみられ，当遺跡が形成された縄文時代早期の時期においては，傾斜部が利用されていたことが遺構の分布状況からうかがえる。

3　炉穴について

当遺跡で検出されている炉穴は，19基である。このうち単独で検出されているものは9基，炉穴群として検出されているものは，2群である。平面形はすべて楕円形を呈しており，深さ，30～50cmぐらいのものが多い。分布状況をみると，台地突端部から斜面部にかけてすべて検出されている。炉穴を平面形と炉床の位置から分類し，この結果を次に記載する。



第127図　奥山下根遺跡炉穴の規模分類

(1)　炉穴の分類とその結果について

炉穴の分類は，平面形と炉床の位置の２点から，次のように分類した。

平面形
- 楕円形……Ｉ類
- 円　形……II類
- 不定形……III類
- 双円形……IV類

炉　床
- 片寄っている……Ａ類
- 中央部……Ｂ類
- ２ヶ所以上あるもの…Ｃ類
- ほぼ全面が焼土……Ｄ類

上記の基準により分類すると，次のようになる。

ＩＡ…SK21・22・39・42・43・44・45・56・57　（９基）

ＩＢ…SK８・９・11・14・20・36・55　（７基）

ＩＣ…SK58　（１基）

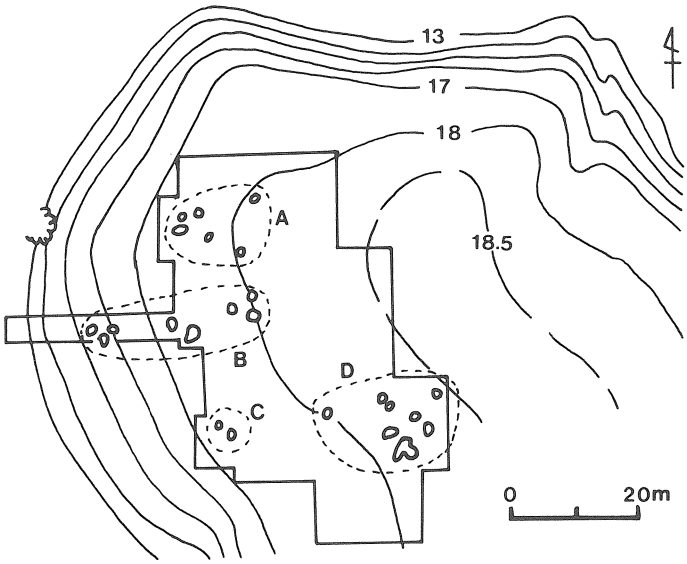
ＩＤ…SK40・41　（２基）

II～IV類は，当遺跡では検出されていない。

以上のように，奥山下根遺跡の炉穴を分類してみると，平面形が楕円形を呈するＩ類だけがみられ，II～IV類は１基も検出されていないことがわかる。Ｉ類の中でも，ＩＡ類とＩＢ類が極めて多くみられる。ＩＡ類は総数９基検出されている。このうちSK39・45は，単独の炉穴で，他は炉穴群を構成している炉穴である。炉穴群は，中央部を共通の炉穴底面として利用する関係上，それぞれの炉穴は炉穴底面の周囲に位置しているものと考えられる。ＩＢ類は，７基検出されている。本類は炉穴群に含まれるものはなく，すべて単独で検出されている炉穴という点が大きな特徴である。炉床が中央部に位置しているため，炉穴底面は炉床を囲むように構築されている。ＩＣ類は，第２炉穴群中のSK58だけである。本跡は２か所の炉床を持っているが，その断面をみると，片方は長期間使用されたものではないと考えられる。炉穴底面として利用できる部分は，より少なくなっている。ＩＤ類は，２基検出されている。２基とも，第１炉穴群に属しており，赤褐色の焼土が一面に検出されているものである。炉穴底面のスペースがみられないが，南側の広い空間を炉穴底面として使用したものと考えられる。

(2)　炉穴の分布状況や特徴等について

当遺跡の炉穴の分類結果については前述のとおりで，斜面部に主に検出されているものである。ここでは，他遺跡の例と比較し，検討してみたい。



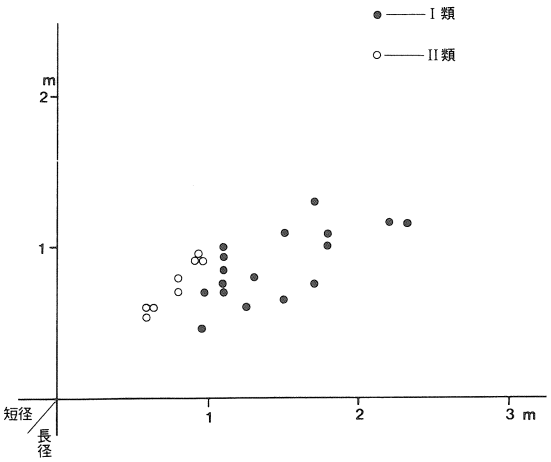
第128図　西下宿遺跡炉穴配置図

すでに記述したように，炉穴は，台地突端部から斜面部にかけて検出されている。炉穴群が2か所，単独の炉穴が9基である。これらの炉穴の分布状況をみると，数か所に集中して検出されている。すなわち，第1炉穴群とその周辺の炉穴，第2炉穴群とその周辺の炉穴，遺跡南側の5基の炉穴の3か所である。このうち，第1炉穴群の周辺の炉穴（SK20・39）を除くと，すべて斜面部に検出されている。

ここで，当遺跡と同時期と考えられる県内の例について概観してみよう。

水戸市飯富町に所在する馬場尻遺跡は，那珂川右岸の台地先端部に位置しており，標高は30m前後である。この遺跡からは，茅山期のものとみられる炉穴が1基検出されている。規模は，1.35×1.52mの円形に近い楕円形のもので，炉床は南側に寄って位置している。(1)

石岡市に所在する新池台遺跡は，標高24mの台地上に位置しており，茅山期から古墳時代にかけての集落跡である。茅山期の住居跡3軒，同炉穴1基が検出されている。炉穴は3.58×1.7mの長楕円形で，確認面からの深さは36cmである。炉床は西壁に寄った位置にあり，掘り込みは浅いものである。(2)



第129図　西下宿遺跡炉穴の規模分類

鉾田町安塚に所在する安塚遺跡は，標高27～28mの台地上にある。6基の炉穴が検出されている。遺構は台地上に2基，傾斜面に4基と2グループに分かれている。平面形は長径1m前後，短径0.6m前後の楕円形を呈している。深さも含めて個々のデー

タは記載がなく不明である。焼土堆積範囲（炉床と思われる）は，長径方向のどちらかに寄って位置しているようである。遺物は，条痕文系と縄文が施文されたものの２種類が出土している。(3)

竜ケ崎市では，打越Ａ遺跡と廻り地Ｂ遺跡から炉穴が検出されている。打越Ａ遺跡では24m前後の台地上から傾斜面にかけて，３基検出されている。第１号は，直径１mの円形を呈し，深さは15cmである。第２号は，1.5×0.9mの楕円形である。第３号は，平面プランは不明で，直径50cmの焼土の堆積として確認されたものである。３基とも明確な炉床がないことから，縄文早期の炉穴ではなく，他の土壙などと同時期の縄文中期に属するものと報告されている。(4) 廻り地Ｂ遺跡は，台地突端部にあり，炉穴は，北東方向に傾斜する地点から６基検出されている。平面プランをみると，双円形１基，円形２基，楕円形２基，炉穴群１か所（炉床は５か所あり）である。炉床は，長径方向のどちらかへ寄って検出されている。位置的な面から，３グループに分けられるものと考えられる。遺物は，茅山期のものが出土している。(5)

鹿島町に所在する伏見遺跡からは，74基の炉穴が検出されている。これらの炉穴は，標高40mの台地上平坦部から斜面部にかけて検出されており，立地面からみて３グループに分けられる。平面プランは，長径1.5m前後，短径0.8～１m前後の楕円形のものが多くみられる。遺物は，茅山期のものが出土している。(6)

谷和原村に所在する西下宿遺跡は，標高18mの台地上にある。この台地部から西側の傾斜地にかけて24基の炉穴が検出されている。出土遺物からみて，茅山期の炉穴と思われる。平面プランをみると，楕円形８基，同じく楕円形で炉床を２か所以上もつもの３基，円形２基，炉穴群２か所である。ここの炉穴も，４グループに分けて考えることができる。(7)（第128図）

県内で炉穴が調査された遺跡について述べてきたが，その立地条件や分布状況からいくつかの共通する点がうかがえる。遺跡の立地条件としては，台地の突端部に立地しているものが多くみられる。また，炉穴は台地の傾斜部に検出されるものがほとんどである。なお，各遺跡内での炉穴の分布状況は，いくつかの地点に集中して分布していることがうかがえる。安塚遺跡の２グループ，西下宿遺跡の４グループなどは，分布状況からグルーピングしたものである。このように各遺跡において，炉穴を設置する場所がある程度決まっていたことがうかがえる。炉穴は一年中使用するものであることを考えると，当時の人々は地形や気象条件等から，炉穴として機能を発揮できる場所として台地の突端部や斜面部を経験的に体得し，そこに炉穴を設置したものと考えられる。

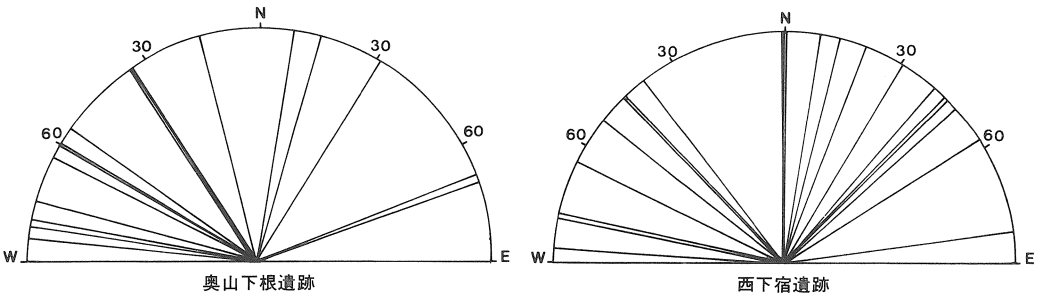
前述の西下宿遺跡は，当遺跡の南東約1.5kmの地点にあり，遺構，遺物ともよく似た遺跡であるので，当遺跡と西下宿遺跡を当遺跡で行った分類基準にしたがって比較，検討してみると次のようになる。

西下宿遺跡の炉穴分類

ＩA類… 3 基	Ⅰ類計13基	ⅡA類… 1 基	Ⅱ類計 6 基
ＩB類… 3 基		ⅡB類… 1 基	
ＩC類… 5 基		ⅡD類… 4 基	
ＩD類… 2 基			

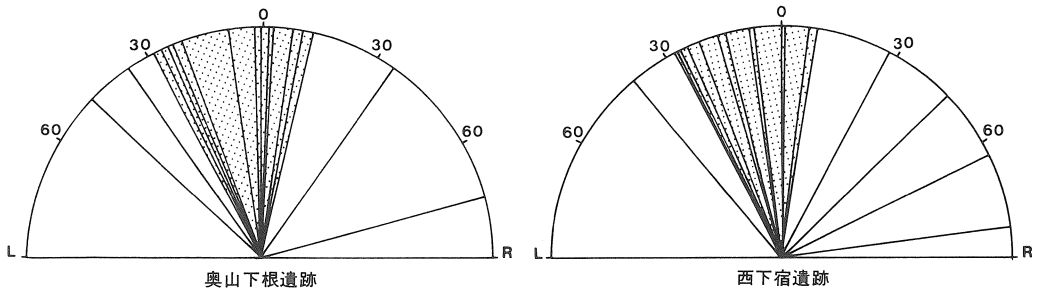
※総数24基の炉穴が検出されているが，分類可能なものは19基である。

これをみると，当遺跡よりややバラエティーに富んでいるようである。ただ，ⅡD類と分類した4基は，焼土だけを確認した遺構のため，平面プランは明確でない。ここでもⅠ類が中心であることがわかるが，当遺跡で1基しかなかったⅠC類が5基検出されているのが目立っている。2遺跡の長径方向をまとめたのが，第130図である。これによると，長径方向は2遺跡とも東西180°の間に散らばっており，いずれかの方向に片寄る傾向はほとんどみられない。この点は土壙の長径方向をみても同様である。結局，炉穴も土壙も設置する時に特別な条件等がなく，適当に掘り込まれたことになる。しかし，食料などの貯蔵が主目的と考えられる土壙はともかく，煮たきをする場所と考えられる炉穴で不都合は生じなかったのだろうか。



第130図　炉穴の長径方向

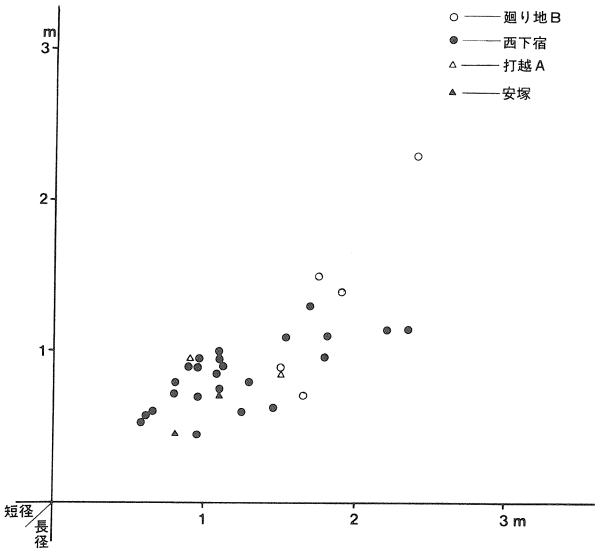
そこで，単なる長径方向の検討だけでなく，長径方向と等高線の関係を追及してみた。第131図は，炉穴の長径方向が等高線と直角に交わる時は0°，平行の時は90°，それ以外の時は，右（左）



第131図　炉穴の等高線に対する長径角度

x°という表示の仕方をした。

この図を第130図と比較すると，明確な特徴がよみとれる。長径方向だけをみたグラフではある角度に集中することはなかったが，今回のグラフではある角度域に集中する傾向がみられるのである。奥山下根遺跡では，左27°から右13°の範囲に14基（79％）の炉穴がはいっている。西下宿遺跡でも，左28°から右9°の範囲に14基（74％）の炉穴がはいっている。等高線に平行する炉穴は1基もなく，7割以上の炉穴は長径方向が等高線と直角に近い角度で交わるように掘り込まれているのである。このことは，炉穴が火熱を利用する遺構であるので，熱効率や風通しを考えると，非常に理にかなっている構造であると考えられる。すなわち，炉穴を傾斜地に設定し，しかも，炉穴の長径方向を等高線と直行ぎみに掘り込むことによって，火を焚くのにも便利で，熱利用上も都合の良いことを，縄文時代早期の人々は既に体験上習得し，炉穴を構築していたと考えられる。



第132図　各遺跡における炉穴の規模比較

各遺跡の炉穴について述べてきたが，最後に，当遺跡で検出された炉穴について，その特徴をまとめて記載しておく。

①遺構は傾斜地に多く，いくつかのグループの集合体として検出されている。

②平面プランは，楕円形だけが確認され，他の平面プランのものはない。

③炉床は，長径方向の一端に片寄るものと，中央部にあるものが主である。

④等高線に対して直交するかたちで掘り込まれるものが多い。

注

(1)茨城高校史学部『馬場尻遺跡』昭和54年

(2)茨城県教育財団「新池台遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第17集』）昭和57年

(3)茨城県教育財団「安塚遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第VI集』）昭和54年

(4)茨城県教育財団「打越A遺跡」「廻り地B遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第VII集』）

昭和55年
(5)茨城県教育財団「打越Ａ遺跡」「廻り地Ｂ遺跡」（『茨城県教育財団文化財調査報告書第Ⅶ集』）昭和55年
(6)伏見遺跡調査会『常陸伏見』昭和54年
(7)茨城県教育財団『年報１』昭和56年

4　出土遺物について

(1)土器類について

当遺跡からは，縄文時代早期の土器片が多量に出土している。その主なものは沈線文系，条痕文系の土器群である。これらの遺物を８群に分類し解説を加えてきたので，ここでは各群の特徴等をまとめておくことにする。

Ⅰ群の土器

Ⅰ群の土器は，撚糸文系の土器群で，当遺跡から少量出土している。縄文時代早期前葉に比定されるもので，出土した土器片は口縁部片が多く，口唇部が肥厚し，かつ外反している。胎土に砂粒を含むものが多い。

Ⅱ群の土器

Ⅱ群の土器は，沈線文系の土器群で，１類～７類に細分できる。本群の土器は，基本的に縄文時代早期中葉，三戸式に比定されるものである。比較的細い沈線により，格子目文やはしご状の文様が施文されるもの，太目の沈線文が施文されるもの，刺突文や貝殻文が主に施文される土器片等が出土している。口唇部の形状は，内そぎ状を呈するものが多い。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。器形は，尖底の深鉢が多く出土している。

Ⅲ群の土器

Ⅲ群の土器は，押型文の土器群で，３類に細分できる。本群の土器は，Ⅱ群と併行する時期と考えられ，縄文時代早期中葉，三戸式と同時期に考えられる。押型文は，山型押型文，楕円押型文，山型と，楕円が同時に施文されたものの３種である。山型押型文は，縦位に施文されるものが多いが，斜位に施文される土器片も少数ではあるが検出されている。楕円押型文は，山型押型文と違い，横位に施文されるものが主である。山形と楕円がひとつの土器に同時に施文されているものも，２点出土している。２点とも，楕円押型文は，山型押型文より上部に施文されている。口縁部は外反，あるいは外傾して立ち上がり，口唇部は内そぎ状を呈している。胴部は，直線的な形状が多い。底部は検出されていない。胎土には砂粒を含むものが多く，色調は明褐色～暗褐色である。当遺跡からは，押型文が施文された土器片が40点出土している。茨城県内でも押型文土器が出土した遺跡は少なく，その大部分は日計（ひばかり）型押型文が施文されている土器で，出土量も

少量である。当遺跡出土の押型文土器は，中部地方を中心に分布する山形，楕円押型文の土器であり，従来知られていた押型文土器とは系統を異にするものである。

IV群の土器

IV群の土器は，条痕文系の土器で，１類～８類に細分できる。本群は縄文時代早期後葉に位置づけられる土器で，野島式，鵜ヶ島台式，茅山下層・茅山上層式の土器が出土している。文様は，条痕文を地文とし，微隆起線を貼り付けるもの，沈線文と刺突文を組み合わせたもの，沈線文を主とするもの，貝殻腹縁文が施文されるものなど，さまざまな文様がみられる。本群の土器は，胎土に繊維を含む例が極めて多くみられ，当遺跡で最も多く出土した土器である。

Ｖ群の土器

Ｖ群の土器は，無文の土器類を一括したものである。本群は，縄文時代早期後葉に位置づけられる。明確な文様は施文されていないが，口唇部に残された輪積み痕，口縁部のキザミ目などが特徴になっている。胎土には繊維を含むものが多い。

VI群の土器

VI群の土器は，縄文を有する土器群を一括したもので，時期的には，VIII群と同様縄文時代前期以降と考えられる。土器片には，各種の縄文が施文されているが，Ｓ字状結節文が多くみられる。口縁部に輪積み痕の残る例も多い。

VII群の土器

VII群の土器は，貝殻腹縁文が施されている土器片で，縄文時代前期後葉，浮島式に比定されるものである。貝殻腹縁文は，すべて波状に施されるもので，アナダラ属によるギザギザのあるものと，ハマグリなどのギザギザのないものによる２種類が認められる。

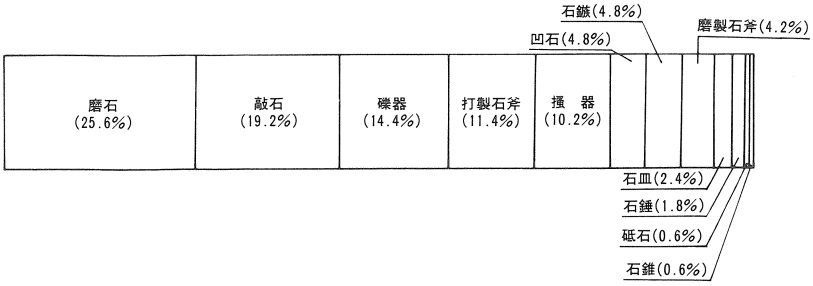
VIII群の土器

VIII群の土器は，前期以降，中期までの土器を一括したもので，諸磯Ａ・Ｃ式，阿玉台式（古）などが含まれている。本群の出土量は少量である。

当遺跡の出土土器を概観すると，以上のようにＩ～VIII群に分類することができる。この中で主体となる土器はII群とIV群の土器である。すなわち，沈線文系の土器と条痕文系の土器である。これは，縄文時代早期中葉から後葉の時期に比定されるものである。遺構出土の遺物も，II群あるいはIV群のいずれかに分類されるものが多く，奥山下根遺跡はこの時期を中心に形成されたものと考えられる。

(2)石器類について

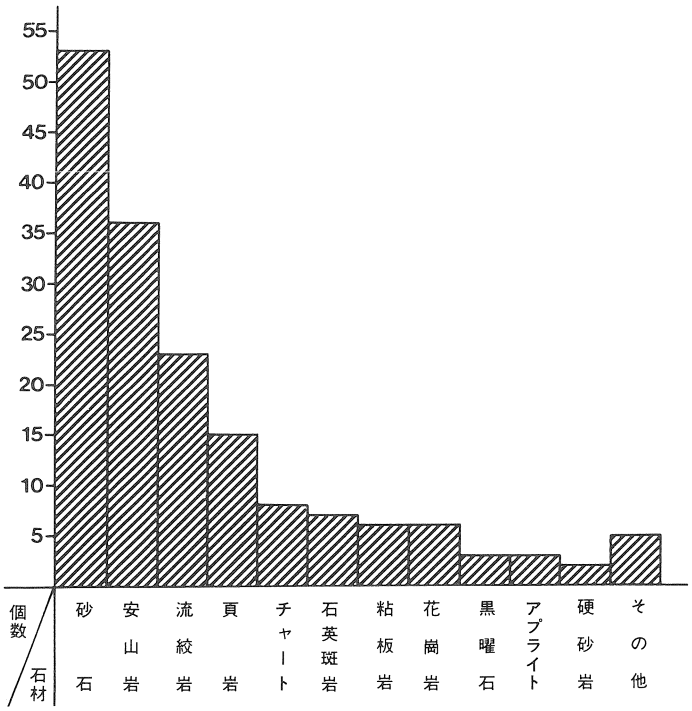
当遺跡で出土した石器は167点で，その大部分はグリットから出土したものである。この石器は，12種類に分類することができ，最も多い石器は磨石で43点が出土している。また，当遺跡は縄



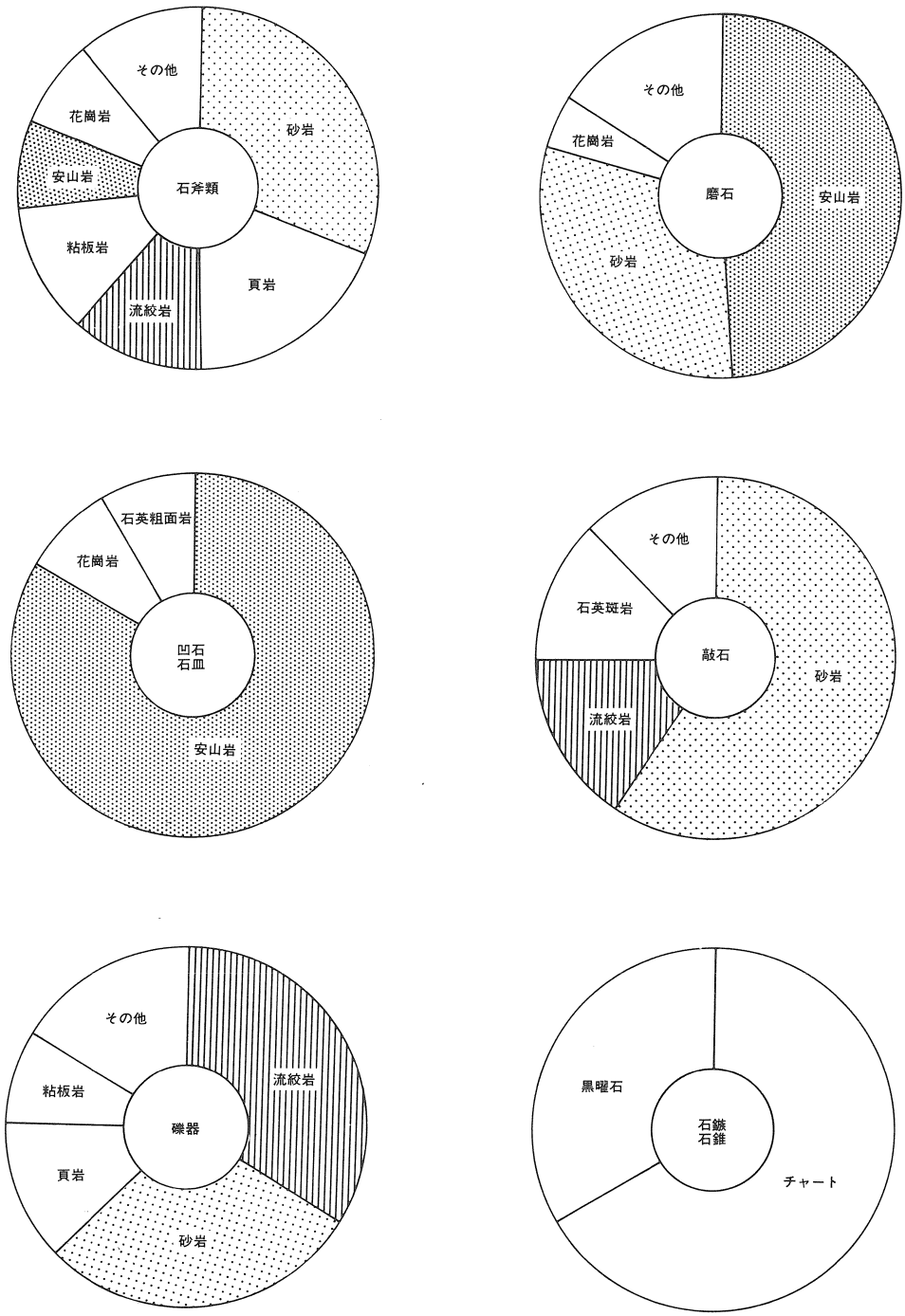
第133図　石器の類別割合

文時代早期の遺跡であるので，礫器の出土数が比較的多く，総数24点出土している。他に，出土数の多いものは，敲石32点，石斧類26点，掻器17点等がある。第133図は石器類の割合を表示したものである。これをみると，主に調理の道具と考えられる磨石や敲石の割合が高く，ついで，工具あるいは土掘り具と考えられる礫器や打製石斧が続いている。他に，石鏃や石錘など狩猟用具もみられることから，植物質の食料等を採集，調理するだけではなく，狩猟生活が営まれていたことがわかる。このように当遺跡出土の石器は，その多くが狩猟や採集，調理などの道具として使用されたものである。

次に，石器の石質についてみると，砂岩が最も多く53点の石器に用いられており，全体の31.6%を占めている。次いで安山岩36点・21.6%，流文岩23点・13.8%，頁岩15点・9.0%などである。この他に，チャート，石英班岩，花崗岩等が用いられている。石器の種類ごとに利用されている石質をみていくと，いくつかの特徴がみられる。石斧類は，特定の石質を用いるという傾向はなく，比較的硬い石質の石材が何種類も使われている。磨石は，安山岩と砂岩が多く使われ，石皿と凹石はそのほとんどが多孔質の安山岩である。これに対して，敲石は砂岩が最も多く，，掻器は頁岩，流紋岩，砂岩が主である。



第134図　石質による分類



第135図　石器類の石質分類

礫器は，流紋岩と砂岩が多く使われている。石鏃・石錐は，チャートと黒曜石だけが使われ，他の石質の石材が使われた形跡はみられない。石器によっては，用途に応じて，特定の石材が選択されて使われたことがうかがえる。

県内の縄文時代の遺跡から出土した石器と石質について比較，集計した結果をみると，当遺跡に隣接する大谷津B，筒戸A・B遺跡では，安山岩が最も多く使用され，次いで，チャート，砂岩，流紋岩の順となっている。また，竜ケ崎市に所在する赤松，廻り地A，南三島の各遺跡においては，安山岩，砂岩，流紋岩，チャートといった組合せである。[(1)] 当遺跡の砂岩，安山岩，流紋岩，頁岩という組合せとは，若干の相違がみられるが，これは，遺跡の時期や，立地条件等の違いによるものと考えられる。いずれにしても，石器に利用される石材は，各遺跡の周辺で採取されたものが多かったと考えられる。当遺跡の場合は鬼怒川，小貝川が近くを流れていることからこの河川の河原石を利用することが多かったと思われる。実際に当遺跡からは，石器以外の自然礫が，多数出土している。また，遺跡周辺で入手できない石材（黒曜石など）の中には，遠方から運ばれてきたものもあったのではないだろうか。

注

(1) 茨城県教育財団『年報３』昭和58年

終　章　む　す　び

水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は，2か年計画で現在も進められている。本書は，初年度に発掘調査を実施した，奥山B遺跡，奥山下根遺跡の調査結果をまとめたものである。この2遺跡からは，これまで述べてきたように，縄文時代，古墳時代の遺構・遺物が検出されている。

奥山B遺跡は，遺構の発見には至らなかったが，当遺跡の北側に所在する奥山下根遺跡で出土した遺物と同時期の土器片が出土している。この遺物は，縄文時代早期のものであり，当時の人々の生活の一端がうかがえた遺跡である。

また，奥山下根遺跡からは，縄文時代早期の土壙・炉穴が56基，古墳時代前期の住居跡2軒が検出されている。土壙・炉穴は，台地縁辺部から傾斜地にかけて多く検出され，住居跡は，遺跡の西側端部の平坦地に検出されている。また，遺跡からは，多量の土器片，石器等が出土し，縄文時代早期の遺構・遺物を解明するための資料を提供することができたと思われる。なお，押型文土器が40点出土したことは，特筆に値する。

なお，昭和59年度もこの2遺跡と同一台地上にある3遺跡の発掘調査を実施中であるが，現在までに，縄文時代早期の遺構・遺物が確認されている。これらの遺跡についても将来，整理・報告がなされると思うので，今回の2遺跡を含めて，今後，さらに広い視野で検討したいと考えている。

最後に，本報告書を作成する上で，関係各位の御指導，御協力をいただいたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写　真　図　版

奥山B遺跡

調査前全景

伐開作業

伐開後全景

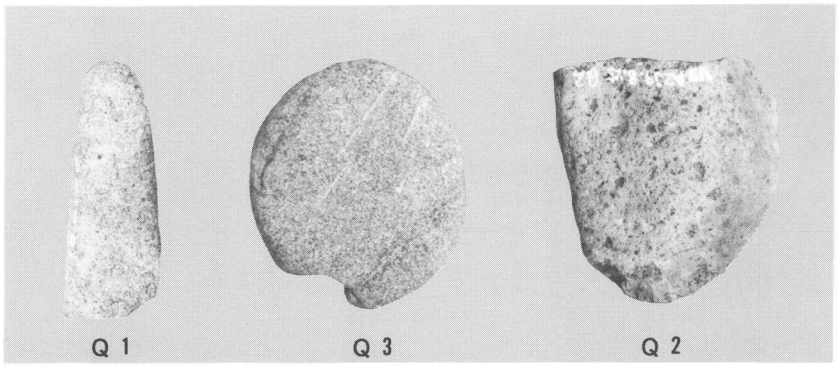
作業風景

作業風景

テストピット
土層断面
（B3b_3）

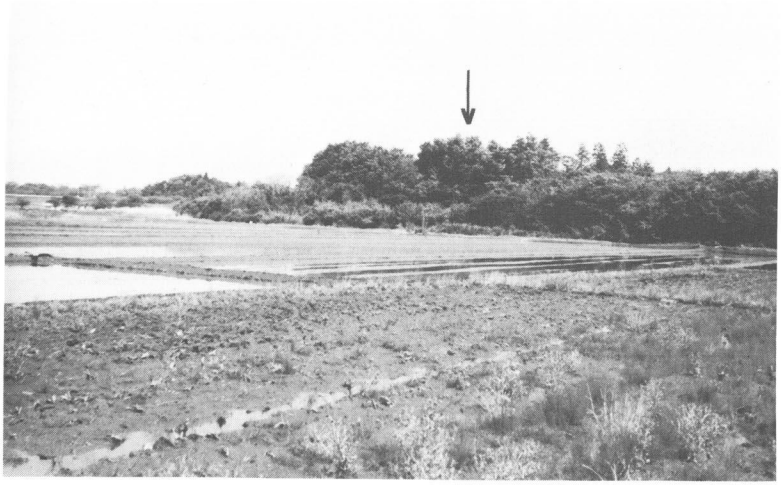
遺跡全景
（W→）

遺跡全景
（E→）



石　器　S＝1/2

奥山下根遺跡

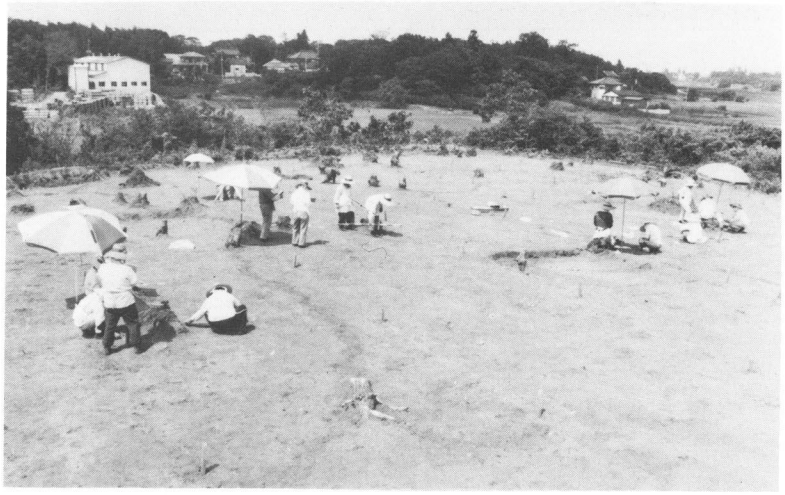


遺跡遠景
（NW→）

遺跡遠景
（NE →）

調査前全景

グリット発掘



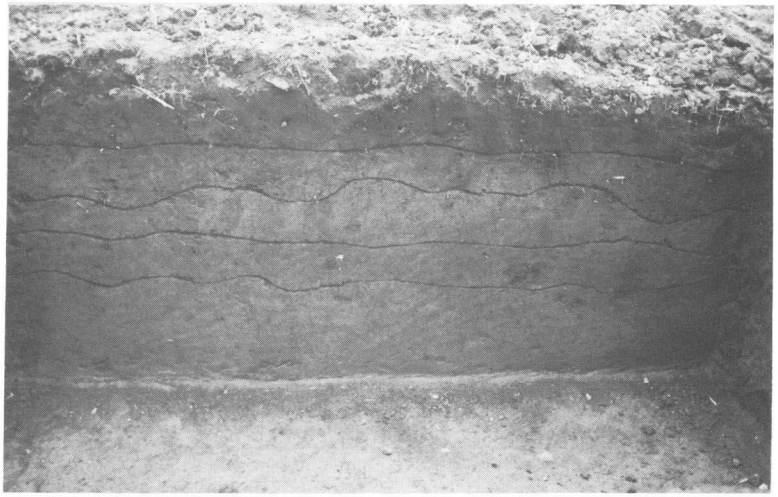
調査風景
（遺物取り上げ）

調査風景
（表土除去）

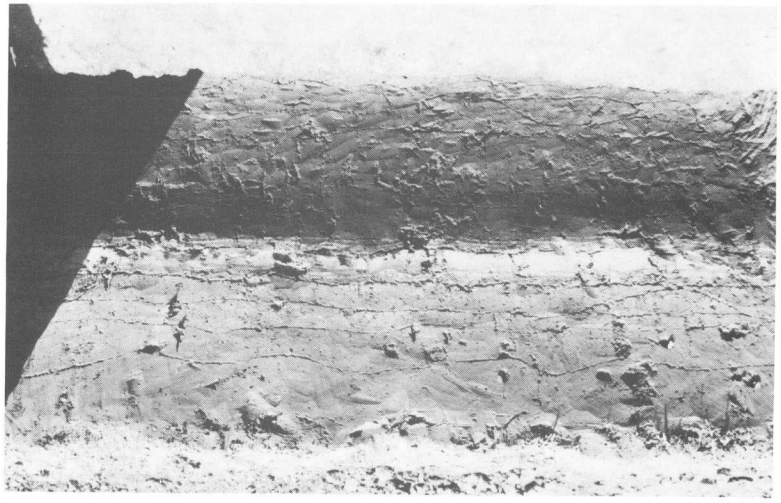
雪かき作業

遺跡全景

遺跡全景



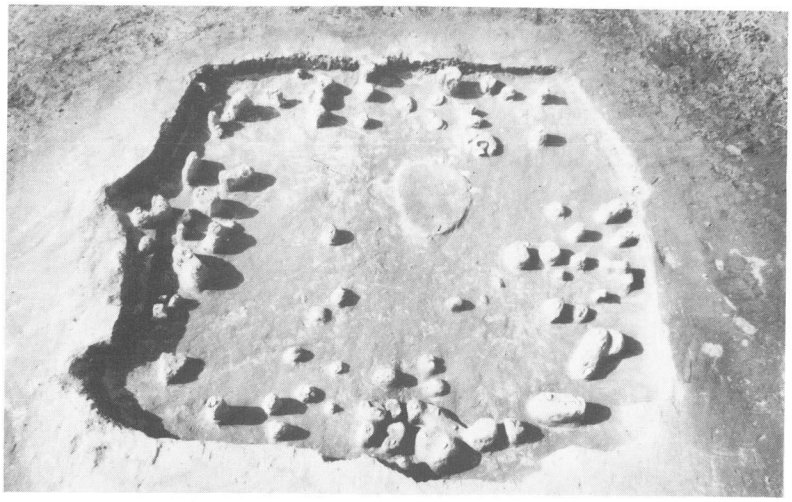
台地部テストピット
土層断面
（$C2b_7$）



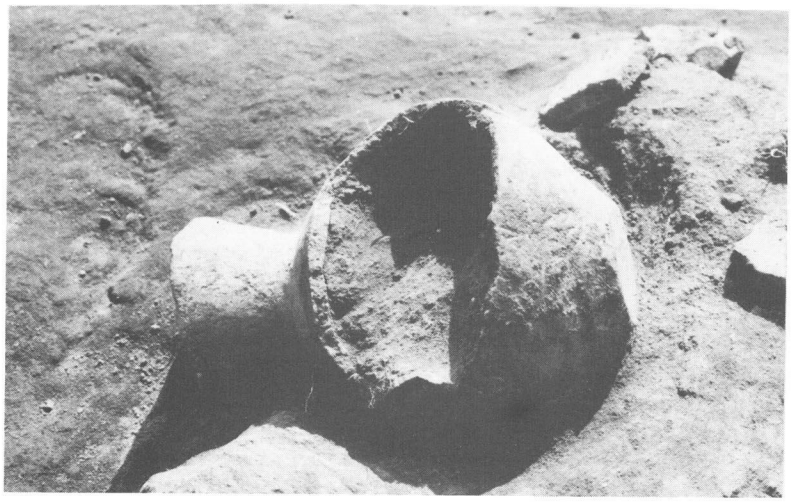
低地部テストピット
土層断面
（$B4d_3$）

低地部トレンチ
土層断面

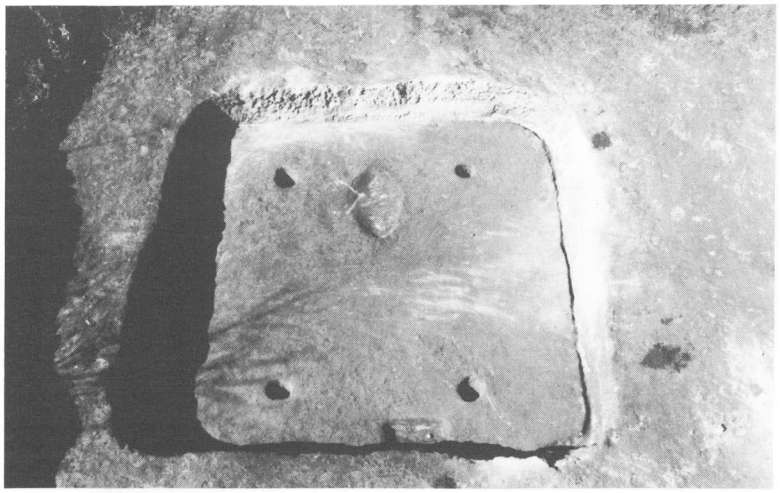
第１号住居跡



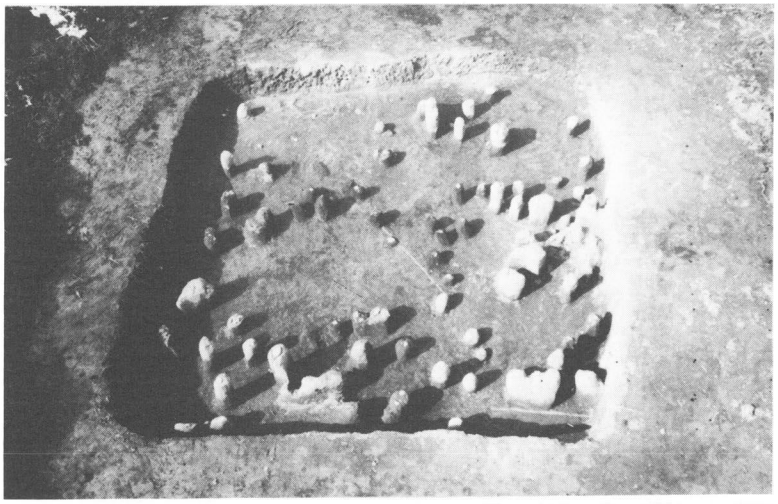
第１号住居跡
遺物出土状況



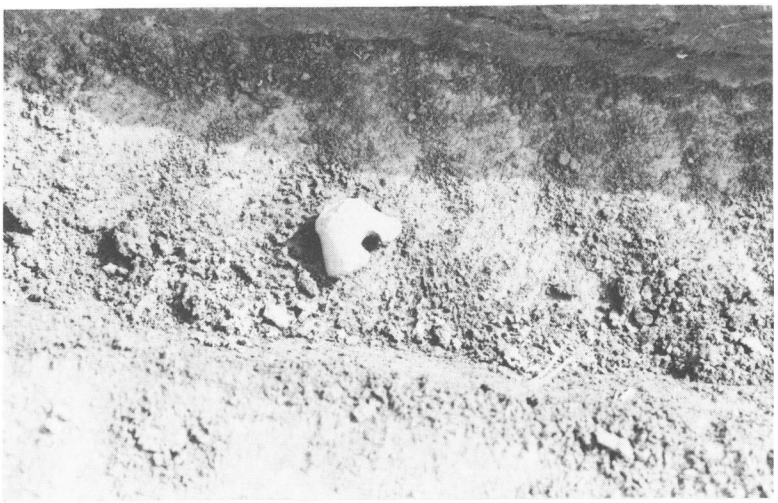
第１号住居跡
遺物出土状況



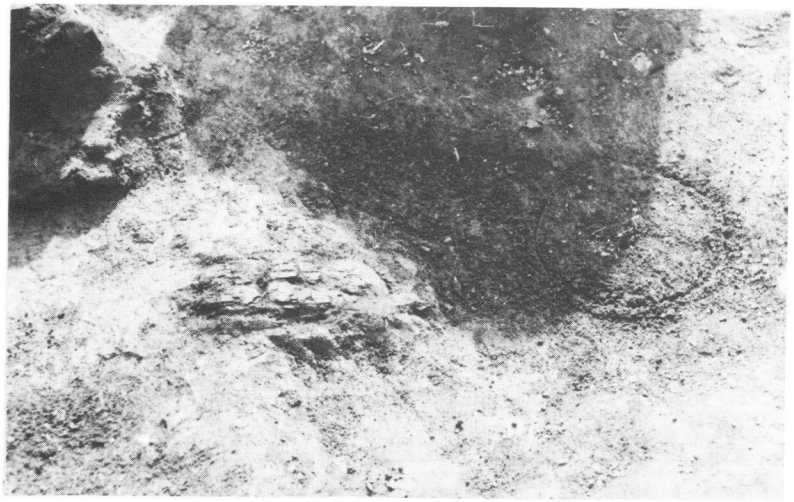
第 2 号住居跡



第 2 号住居跡
遺物出土状況

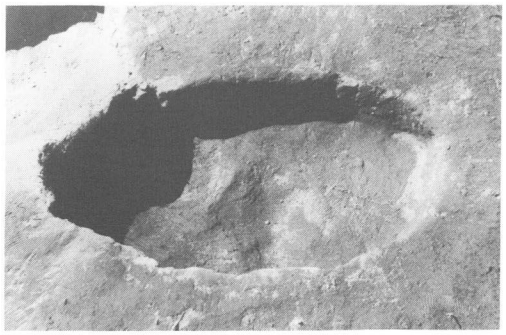


第 2 号住居跡
遺物出土状況

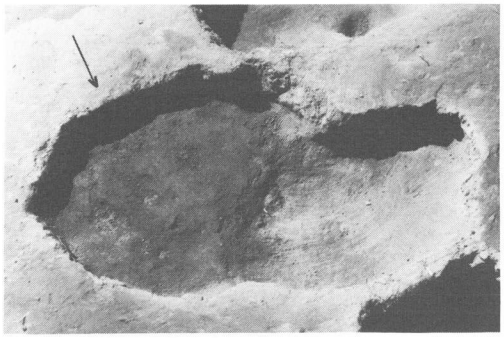


第 2 号住居跡
炭化材出土状況

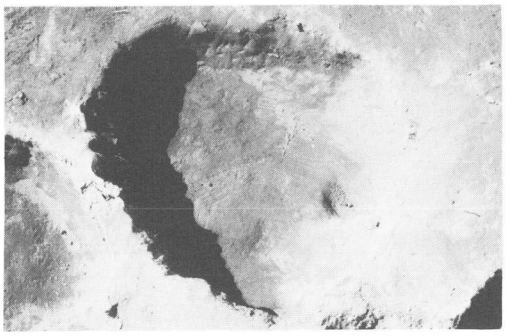
第 2 号住居跡
遺物出土状況



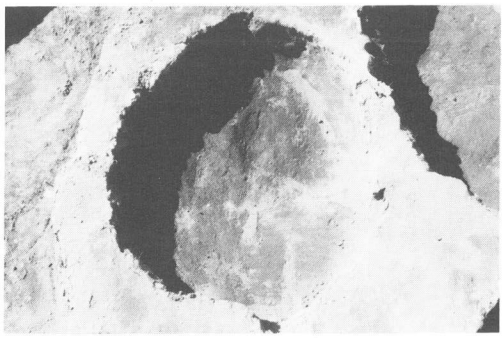
第 1 号土壙



第 2 号土壙

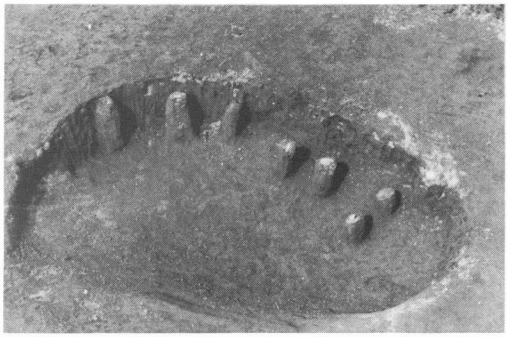


第 3 号土壙

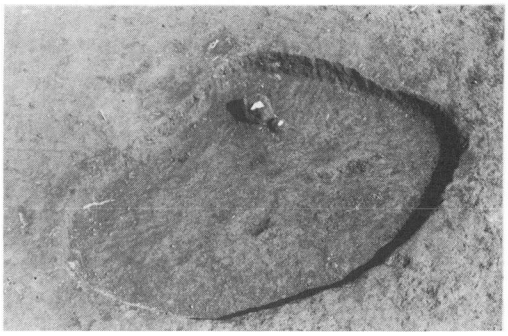


第 4 号土壙

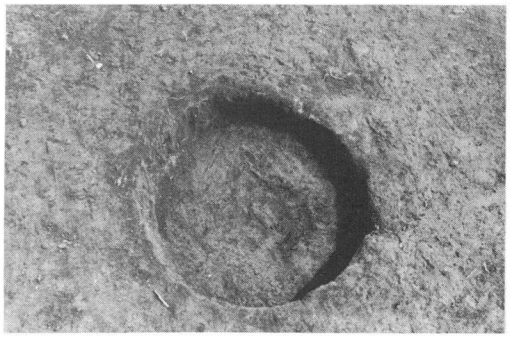
第 6 号土壙



第 7 号土壙



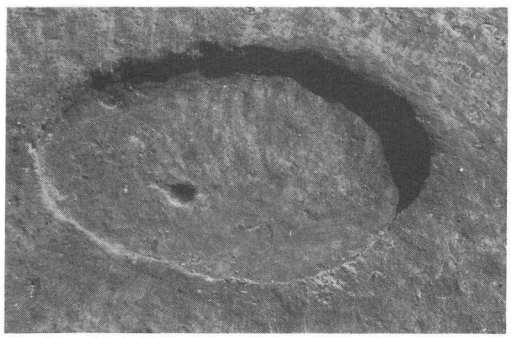
第10号土壙



第12号土壙

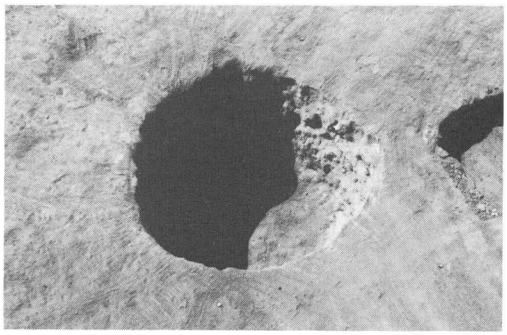
第15号土壙

第16号土壙

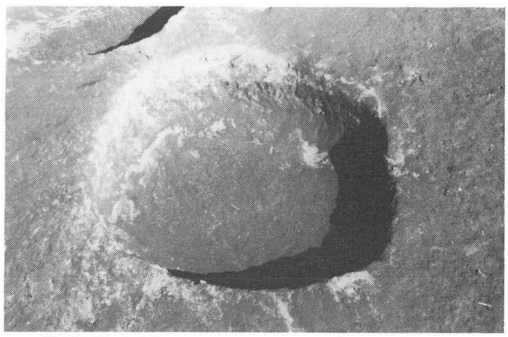


第17号土壙

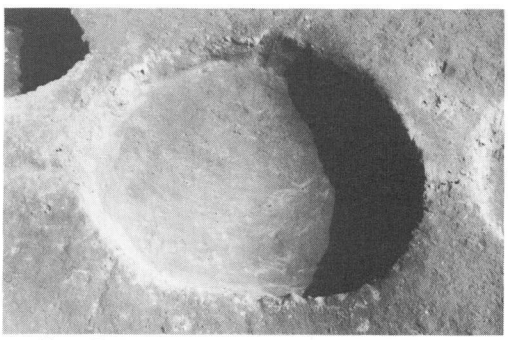
第18号土壙



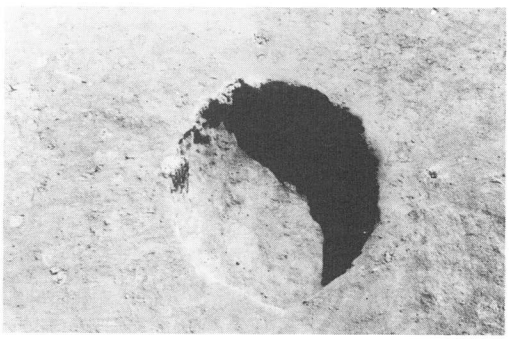
第19号土壙



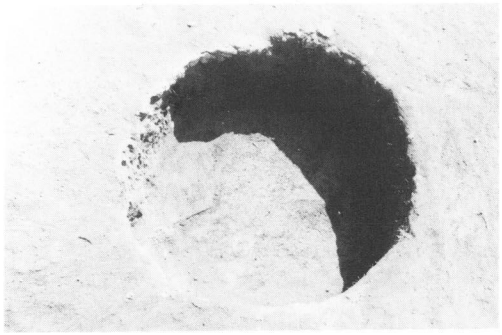
第23号土壙



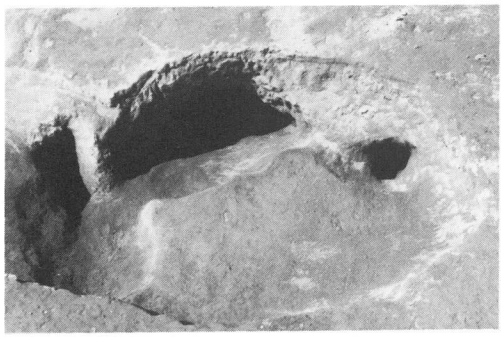
第24号土壙



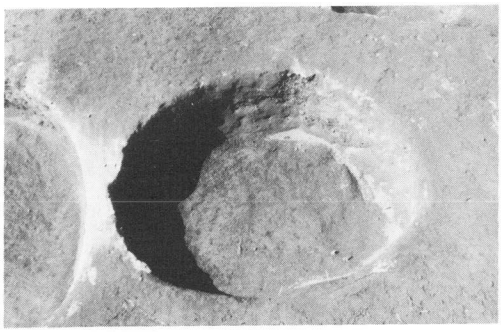
第25号土壙



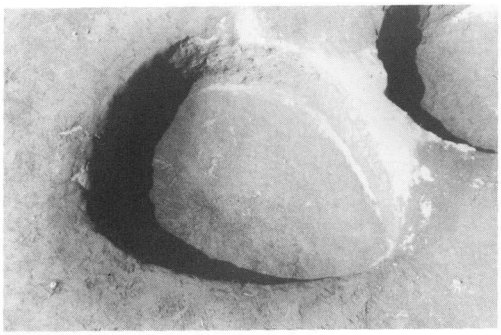
第26号土壙



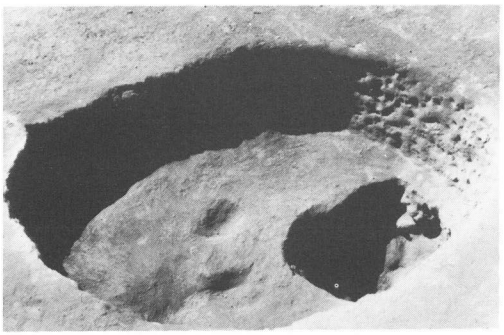
第27号土壙



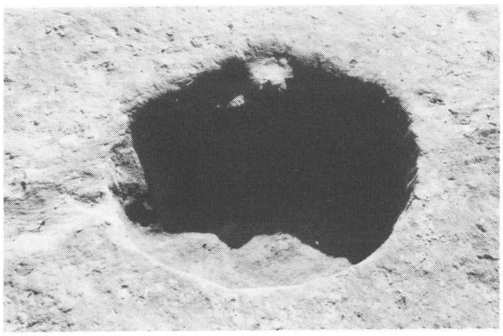
第28号土壙



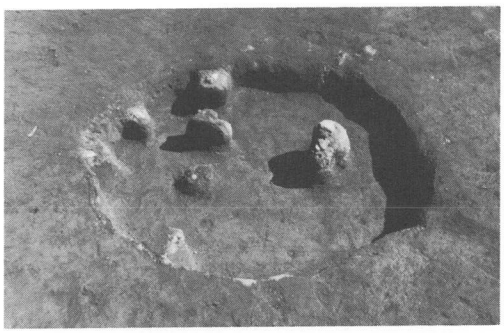
第29号土壙



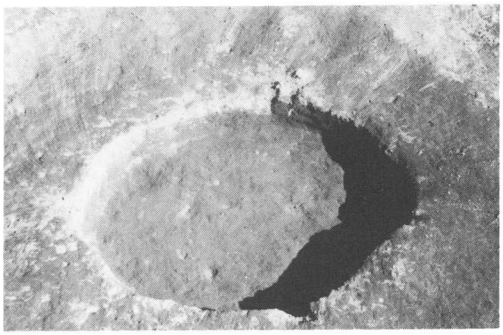
第30号土壙



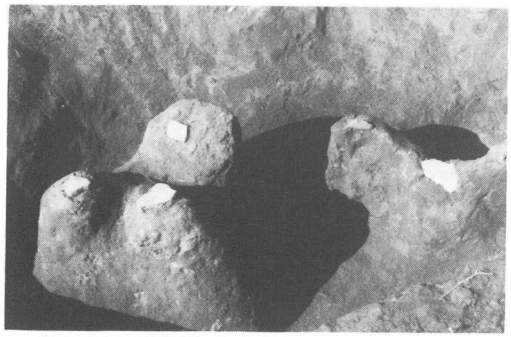
第31号土壙



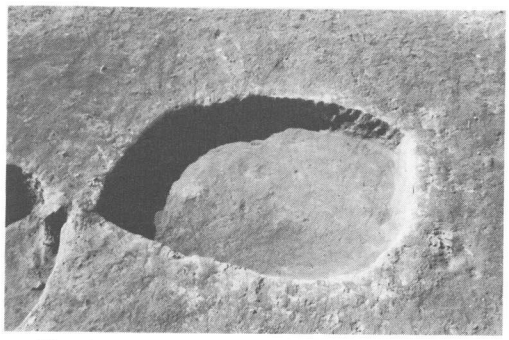
第32号土壙遺物出土状況



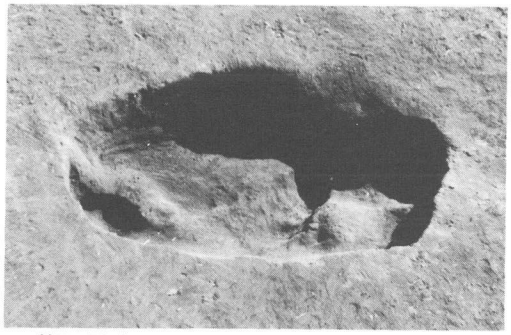
第32号土壙



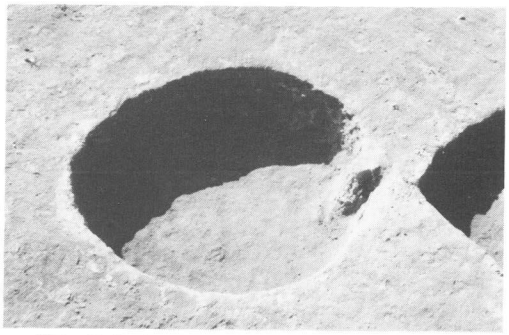
第33号土壙遺物出土状況



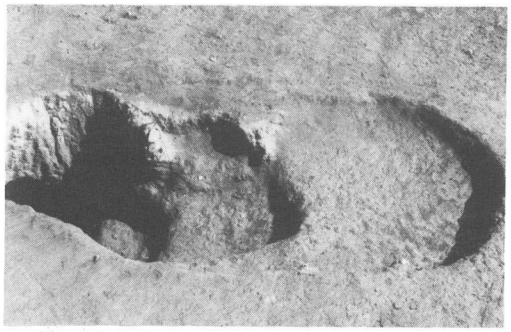
第37号土壙



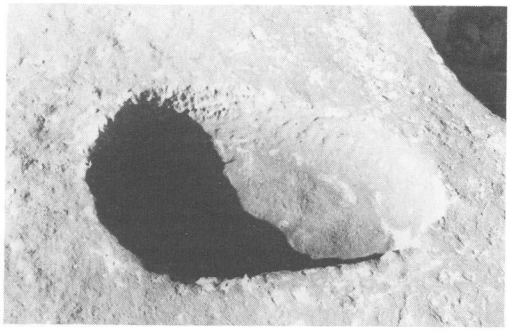
第33号土壙



第38号土壙

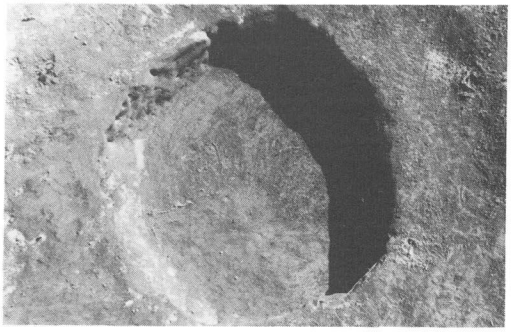


第34号土壙

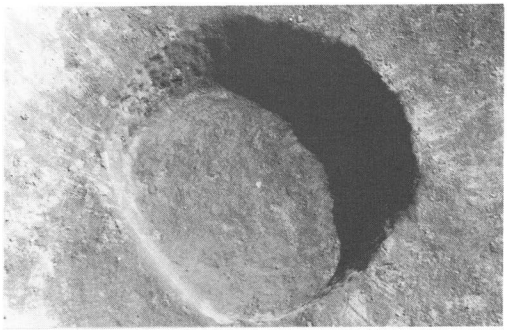


第46号土壙

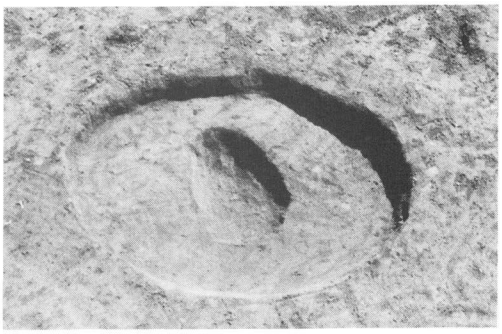
第34号土壙土層断面



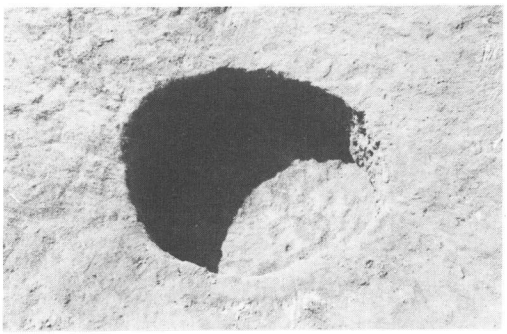
第48号土壙



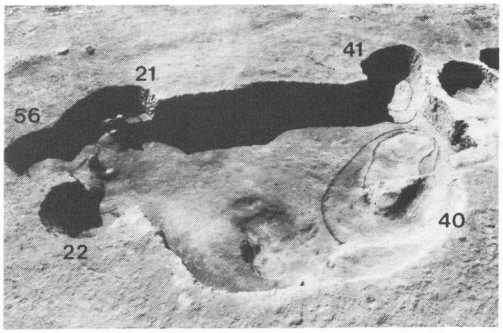
第49号土壙



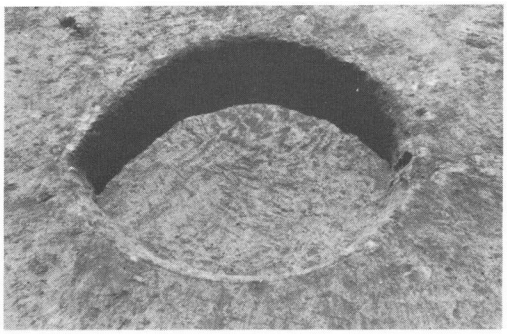
第53号土壙



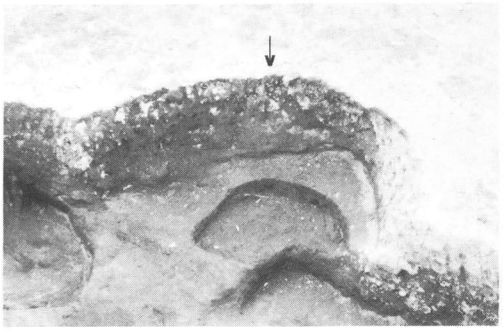
第50号土壙



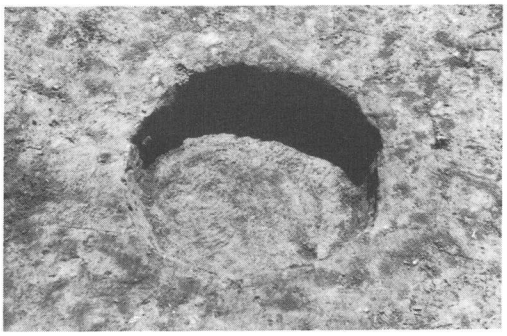
第1炉穴群（SK21・22・40・41・56）



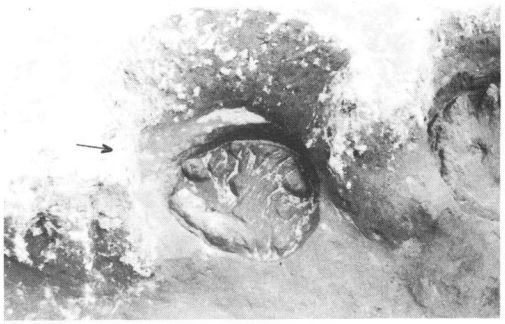
第51号土壙



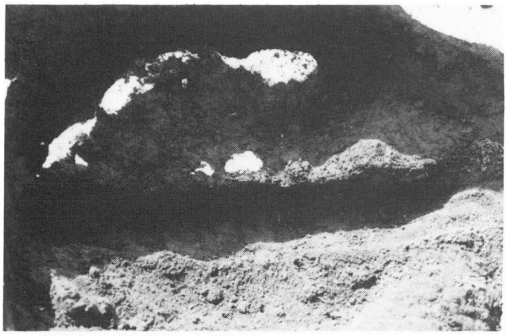
第21号炉穴



第52号土壙



第22号炉穴

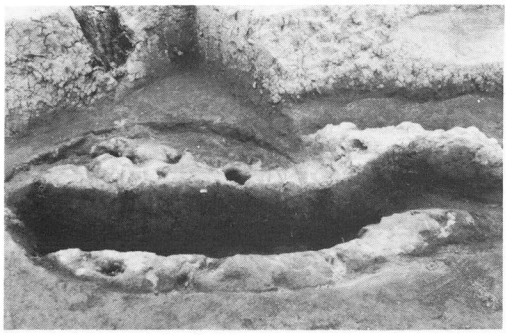


第22号炉穴炉床断面

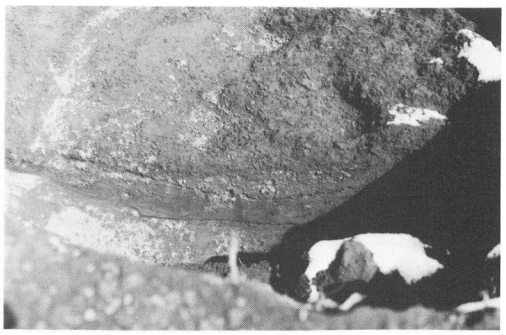
第41号炉穴炉床断面

第40号炉穴

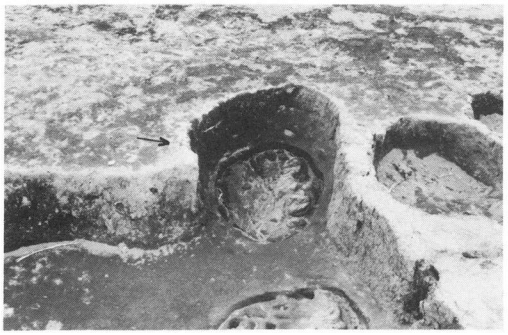
第56号炉穴



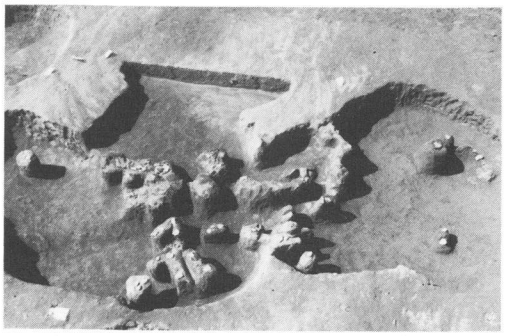
第40号炉穴炉床断面



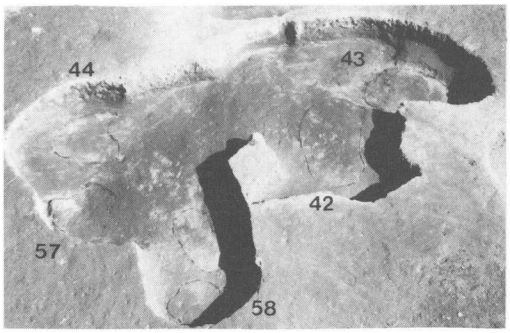
第56号炉穴炉床断面



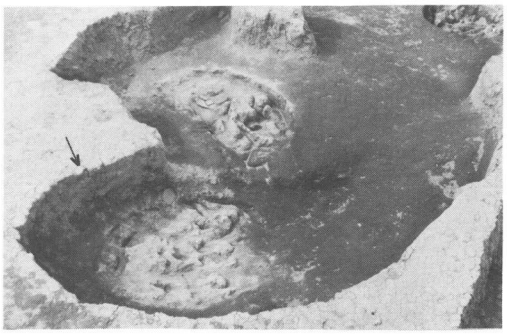
第41号炉穴



第 2 炉穴群遺物出土状況

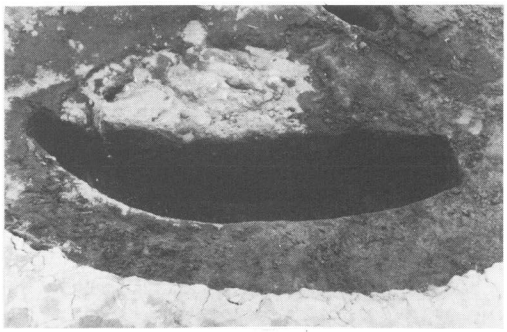


第2炉穴群（SK42・43・44・57・58）

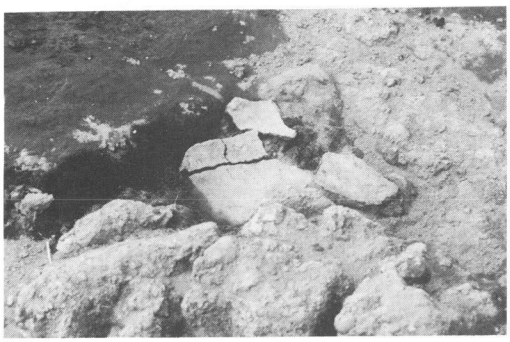


第43号炉穴

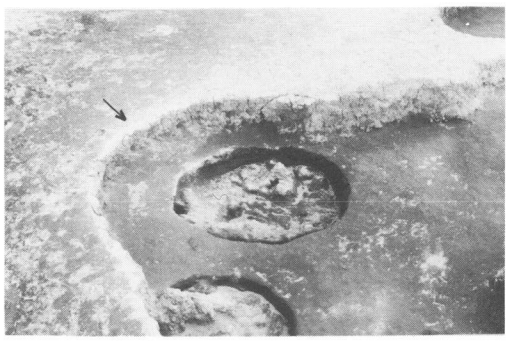
第42号炉穴



第43号炉穴炉床断面

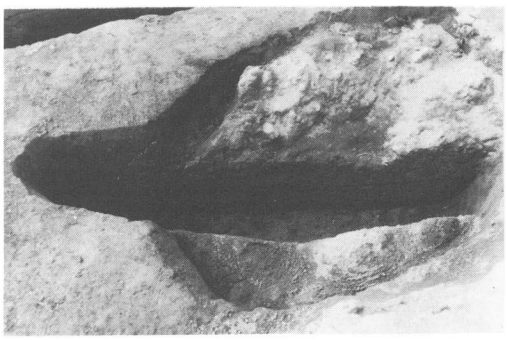


第42号炉穴遺物出土状況



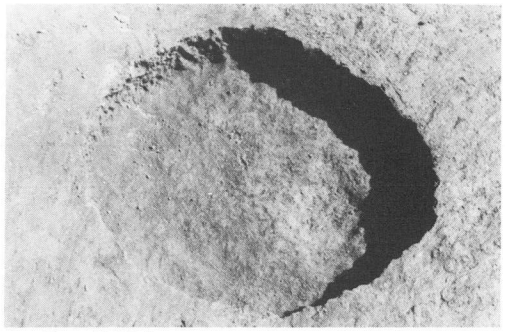
第44号炉穴

第42号炉穴炉床断面

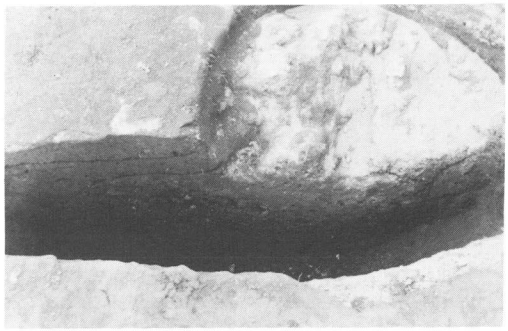


第44号炉穴炉床断面

第57号炉穴



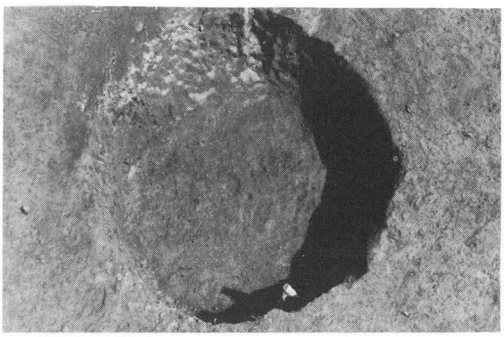
第 8 号炉穴



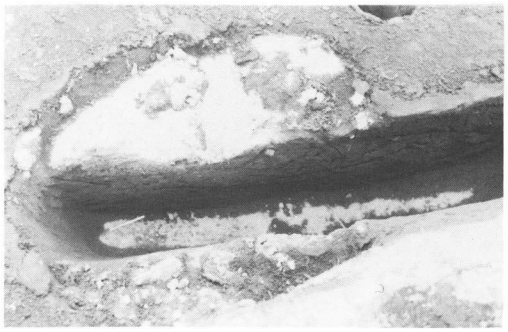
第57号炉穴炉床断面

第 8 号炉穴炉床断面

第58号炉穴

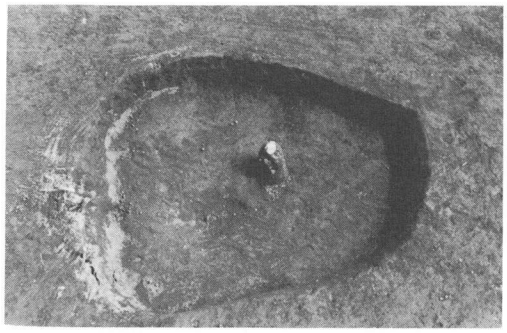


第 9 号炉穴

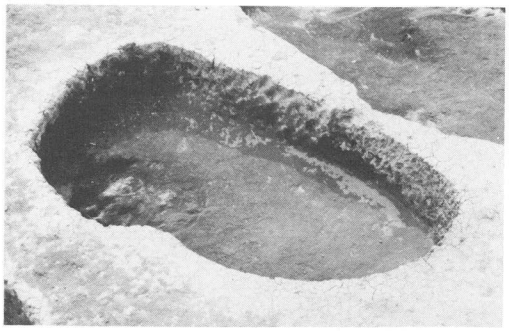


第58号炉穴炉床断面

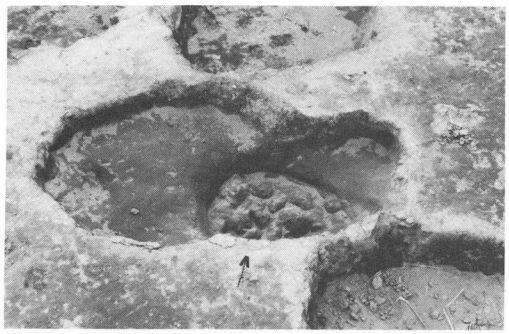
第 9 号炉穴炉床断面



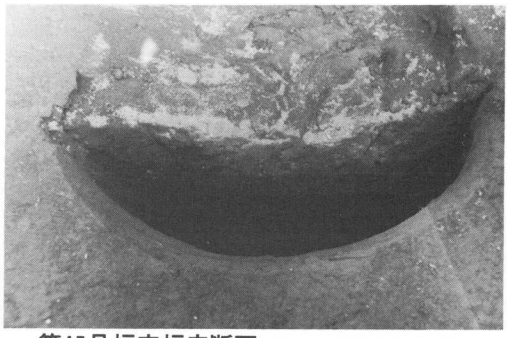
第11号炉穴



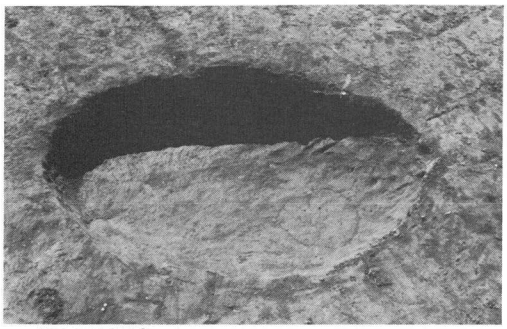
第45号炉穴



第36号炉穴



第45号炉穴炉床断面



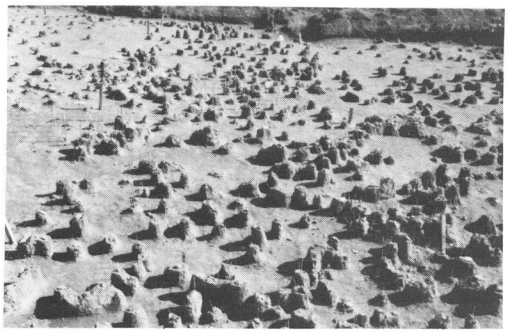
第39号炉穴

第55号炉穴

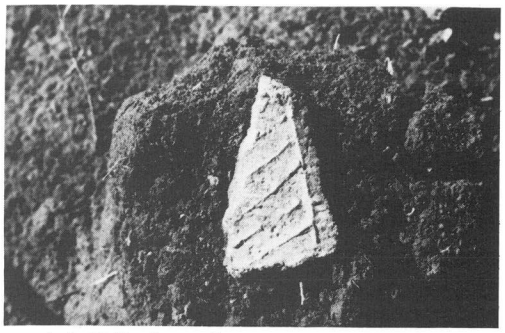
第39号炉穴炉床断面

遺物出土状況(B2j_7)

出土遺物 (B2f_3)

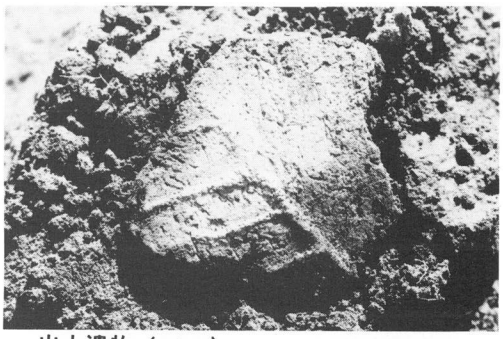


遺物出土状況(A2j_9)

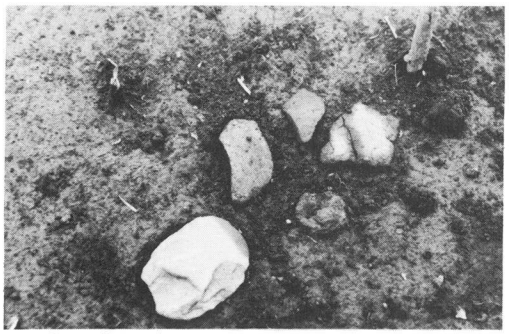


出土遺物 (C2a_8)

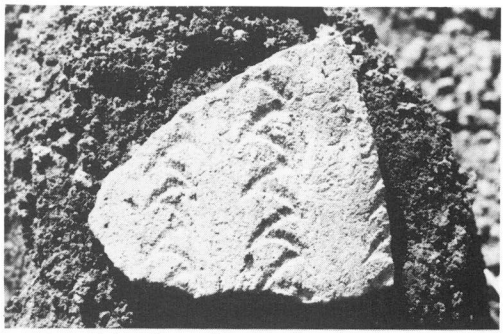
遺物出土状況(A3i_1)



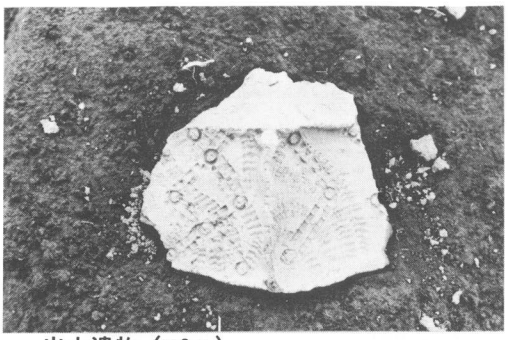
出土遺物 (B2d_8)



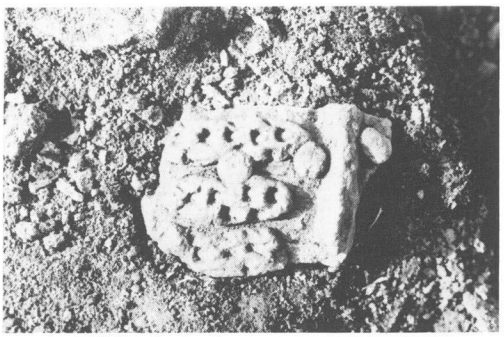
出土遺物 (A2j_8)



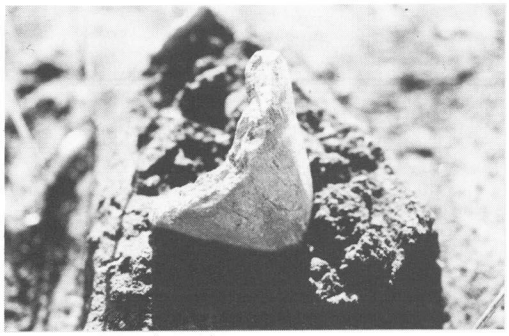
出土遺物 (B2d_8)



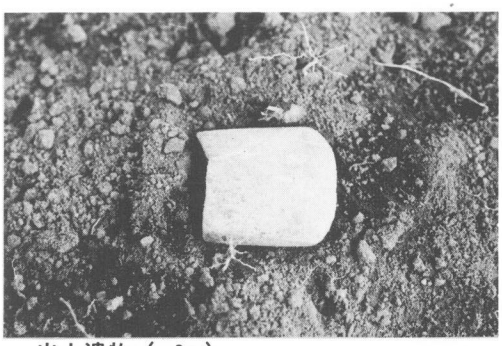
出土遺物（B2d_6）



出土遺物（B2e_7）

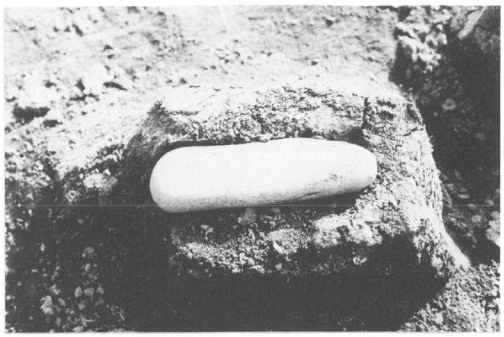


出土遺物（B2j_8）

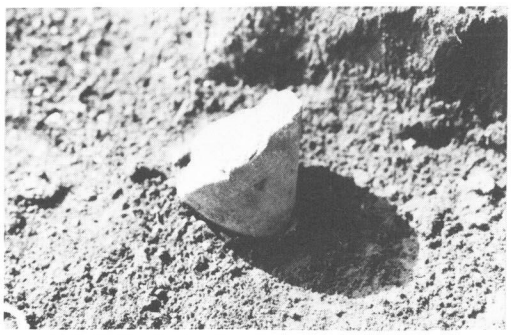


出土遺物（B2f_4）

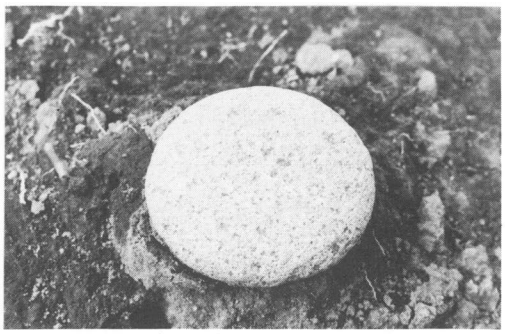
出土遺物（B2g_9）



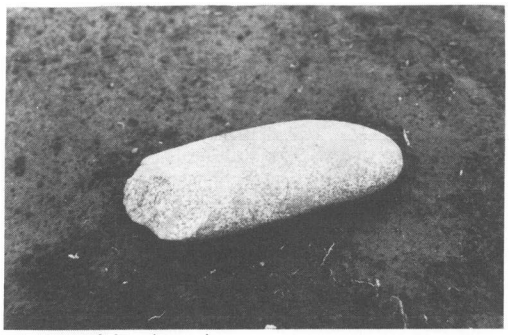
出土遺物（B2e_8）



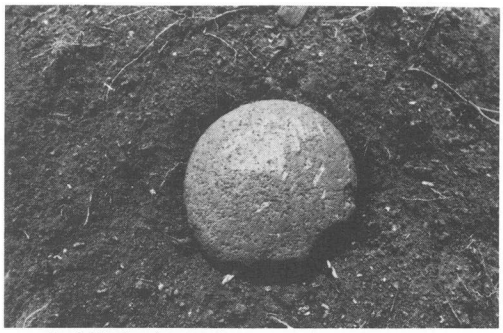
出土遺物（B2e_9）



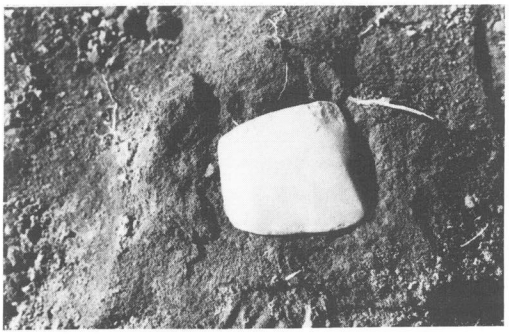
出土遺物（B2c_7）



出土遺物（A2i_7）

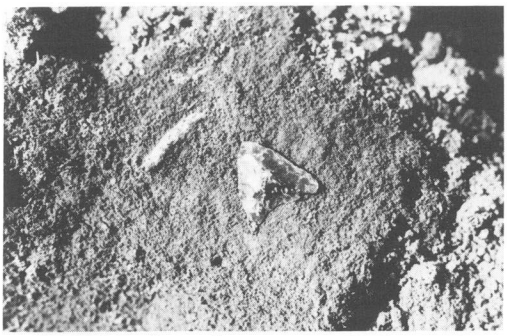


出土遺物（B2b_2）



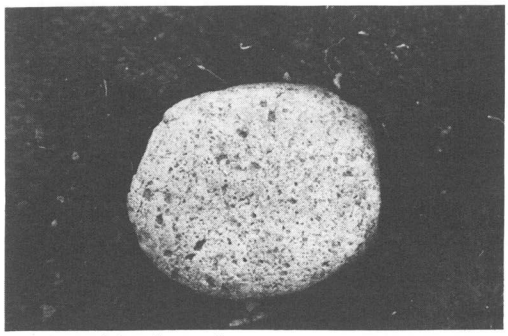
出土遺物（B2f_5）

出土遺物（B2e_0）



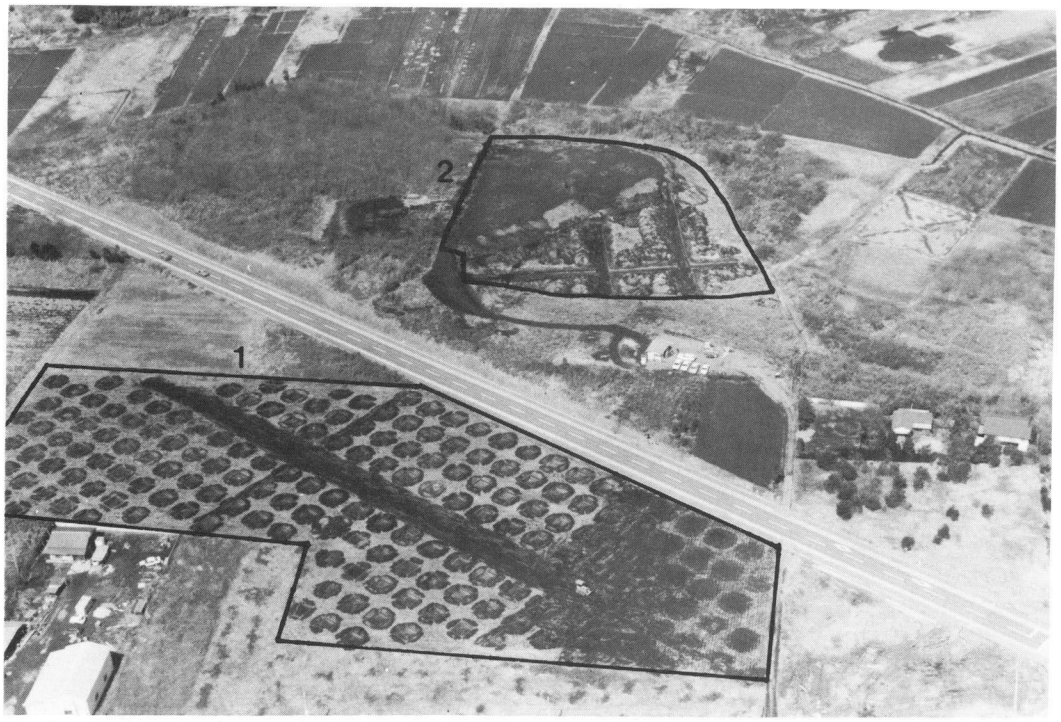
出土遺物（B2e_9）

出土遺物（B2e_5）

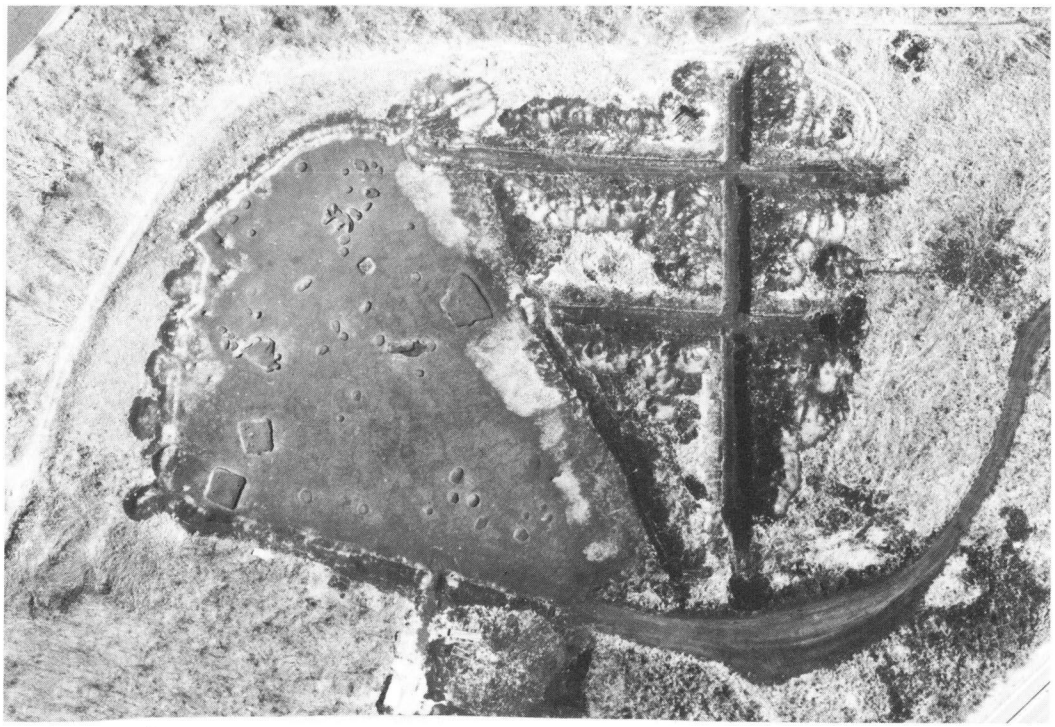


出土遺物（A2h_7）

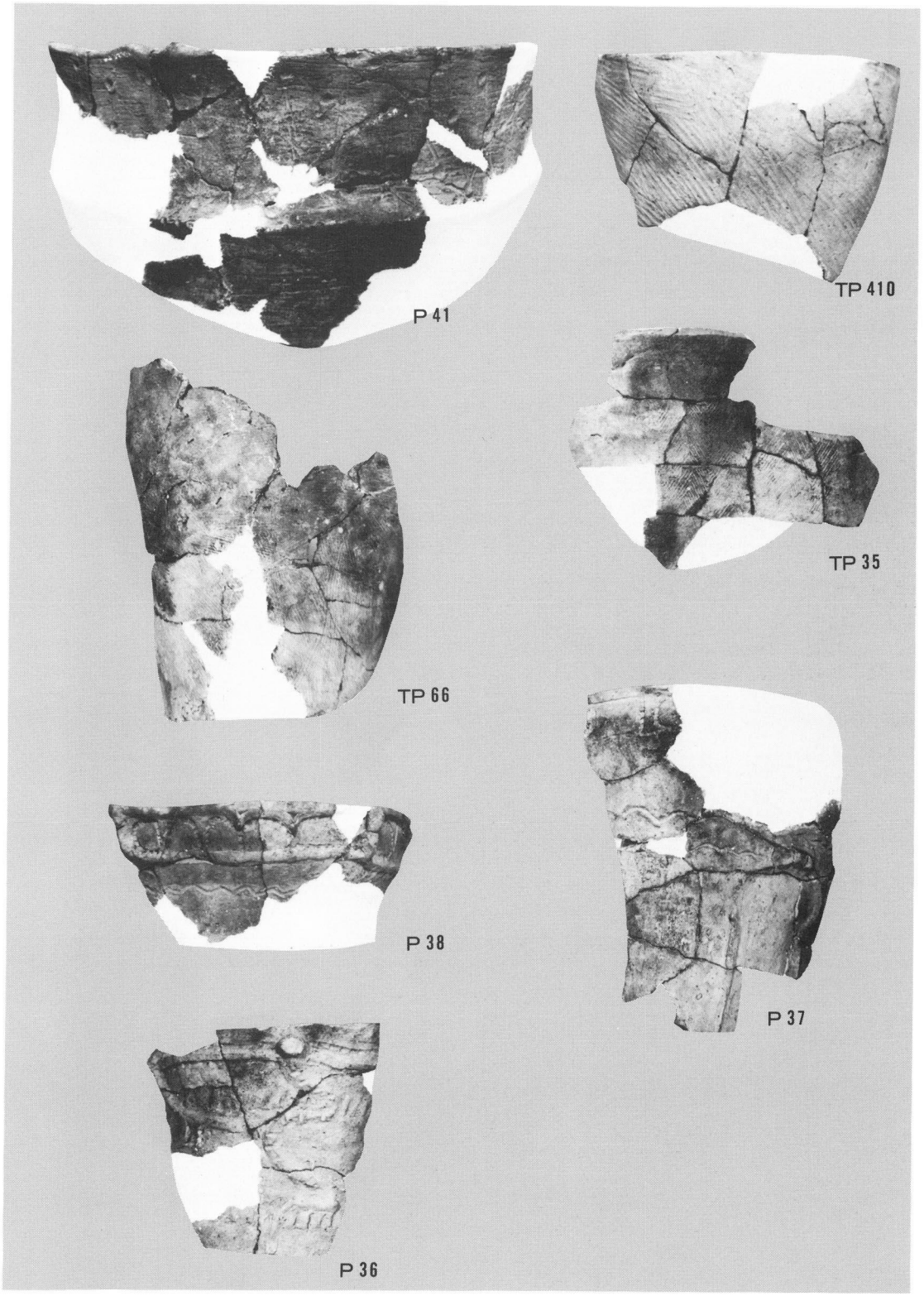
出土遺物（B2b_8）



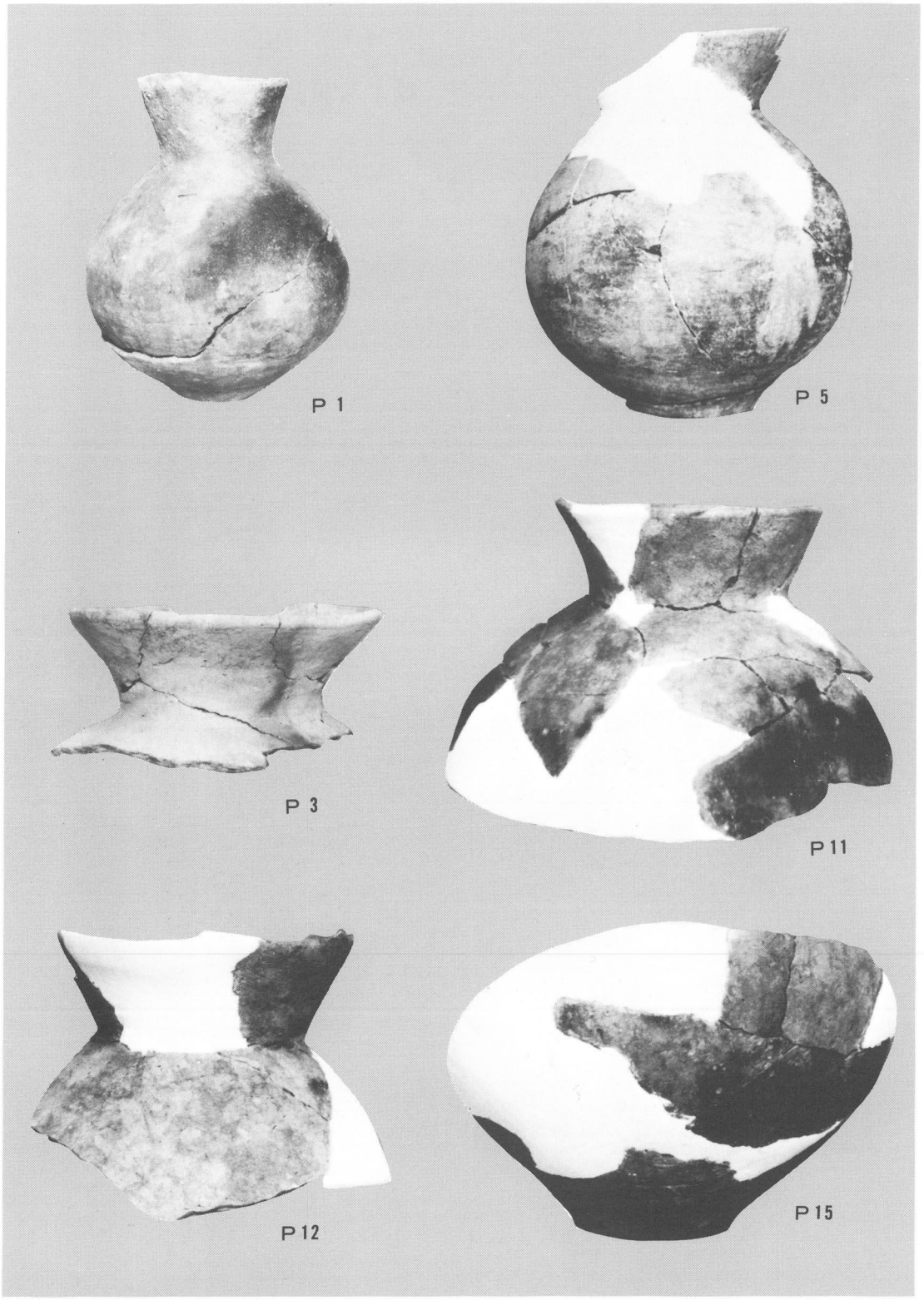
奥山Ｂ遺跡(1)，奥山下根遺跡(2)全景



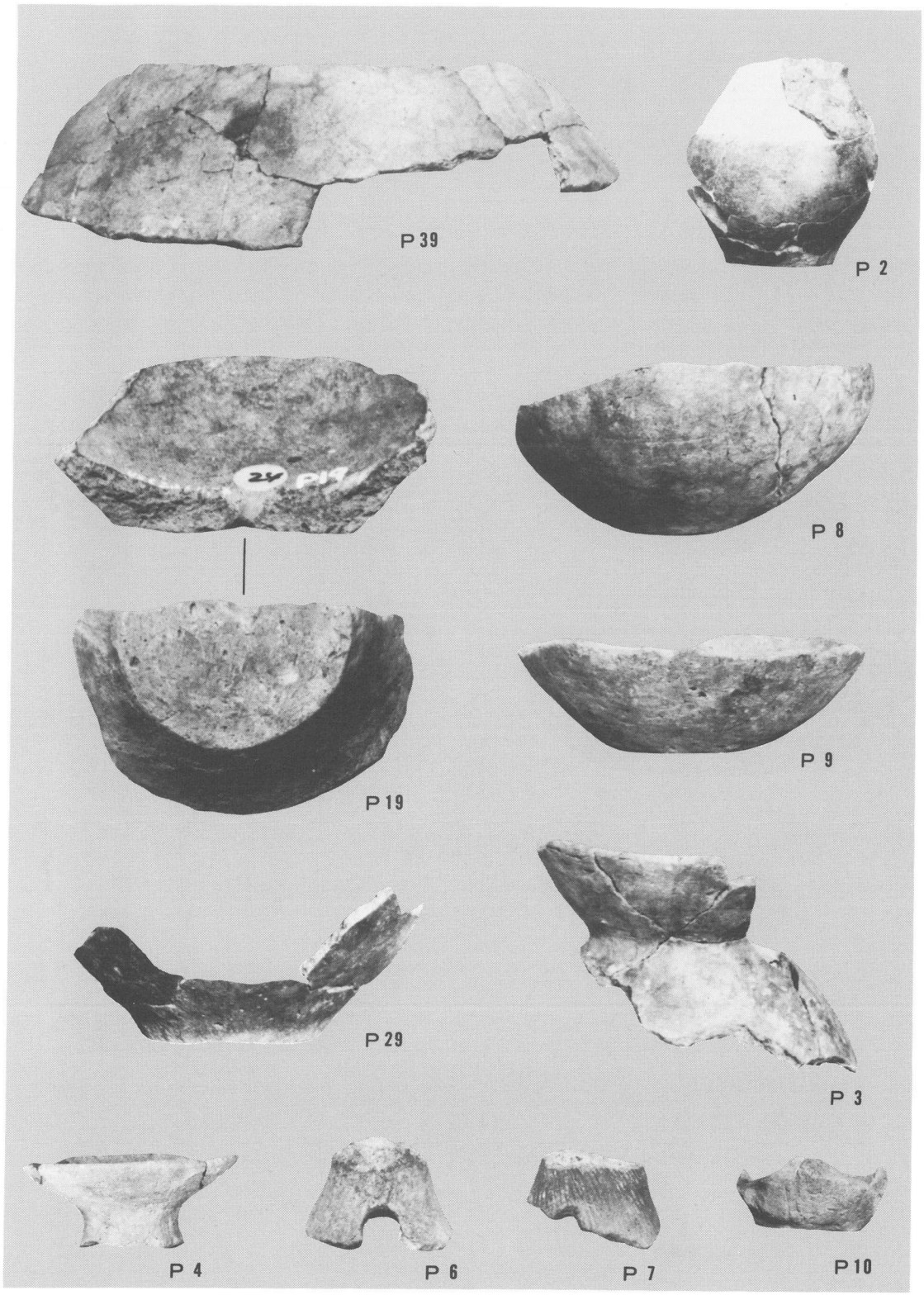
奥山下根遺跡全景



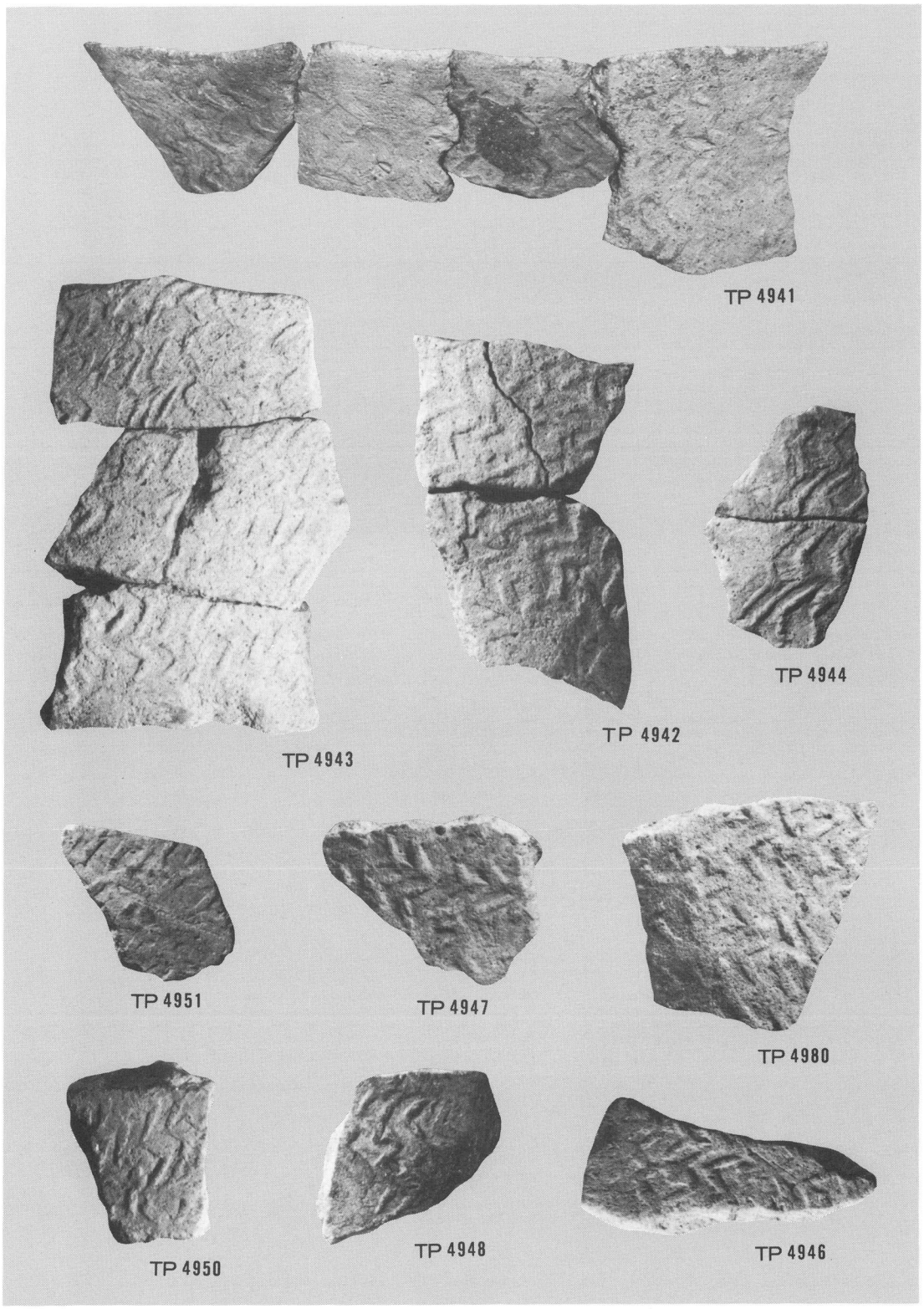
土　器(1)　S＝1/4.5



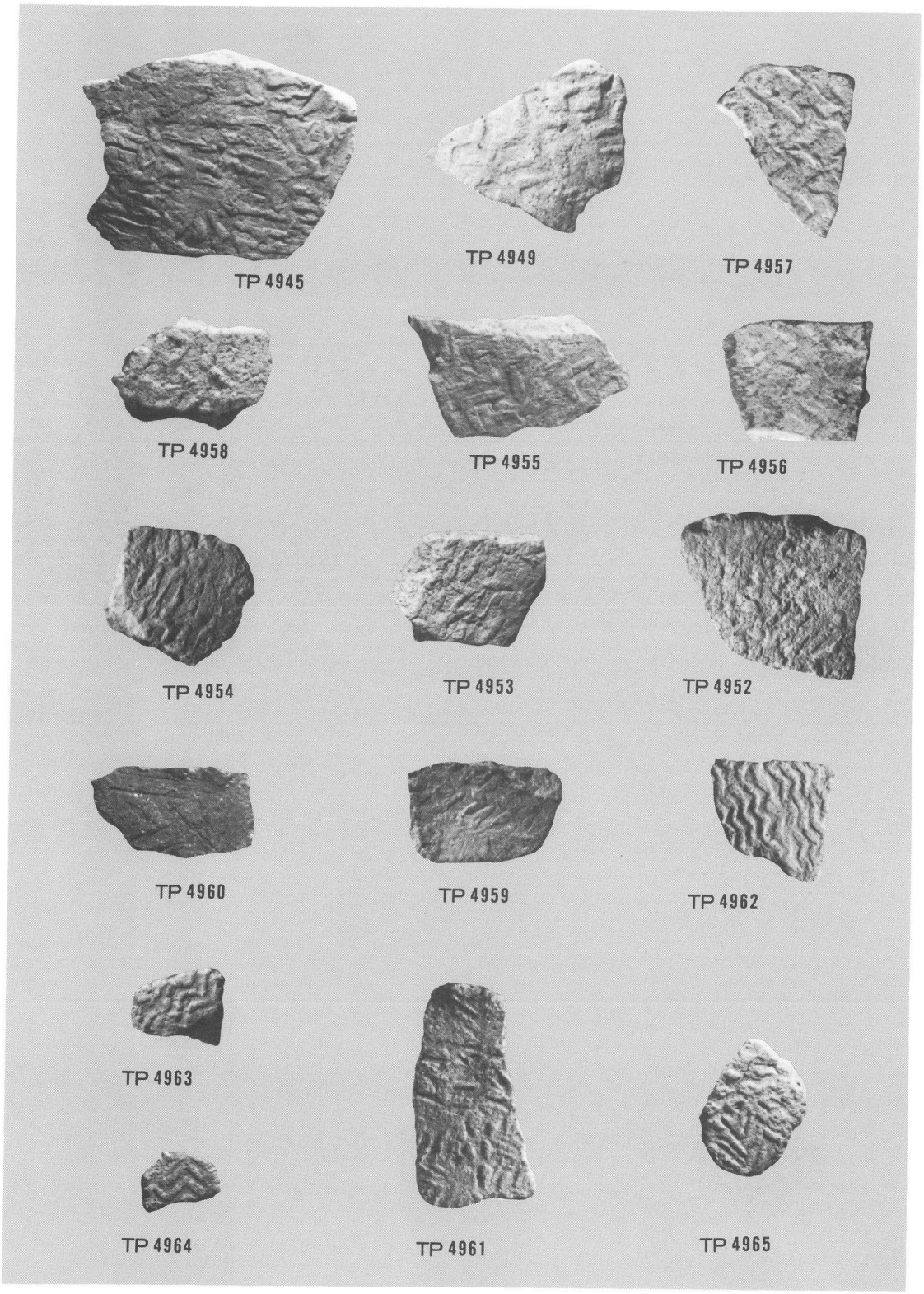
土　器(2)　S＝1/3



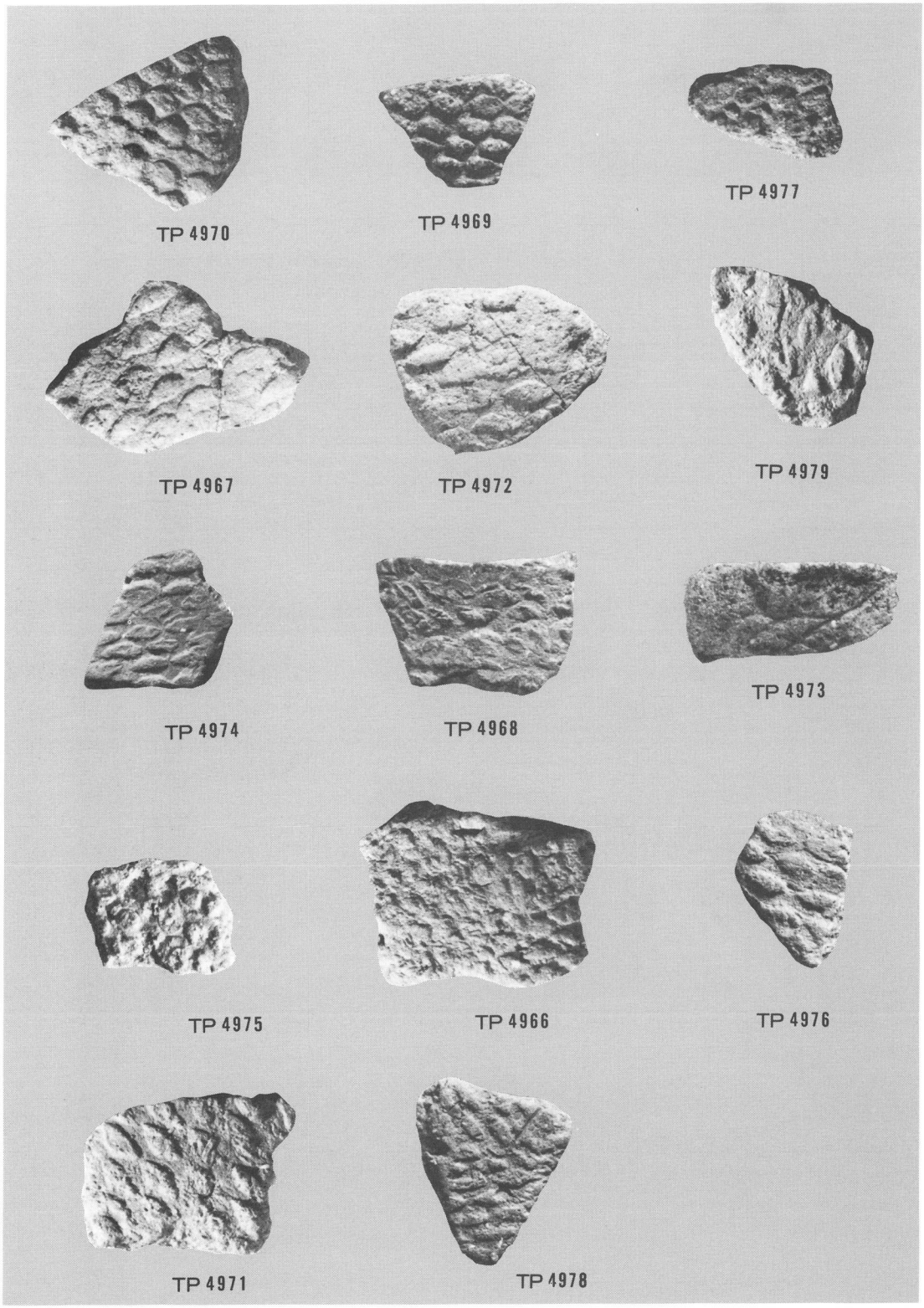
土　器(3)　S＝1/2


TP 4941
TP 4943
TP 4942
TP 4944
TP 4951
TP 4947
TP 4980
TP 4950
TP 4948
TP 4946

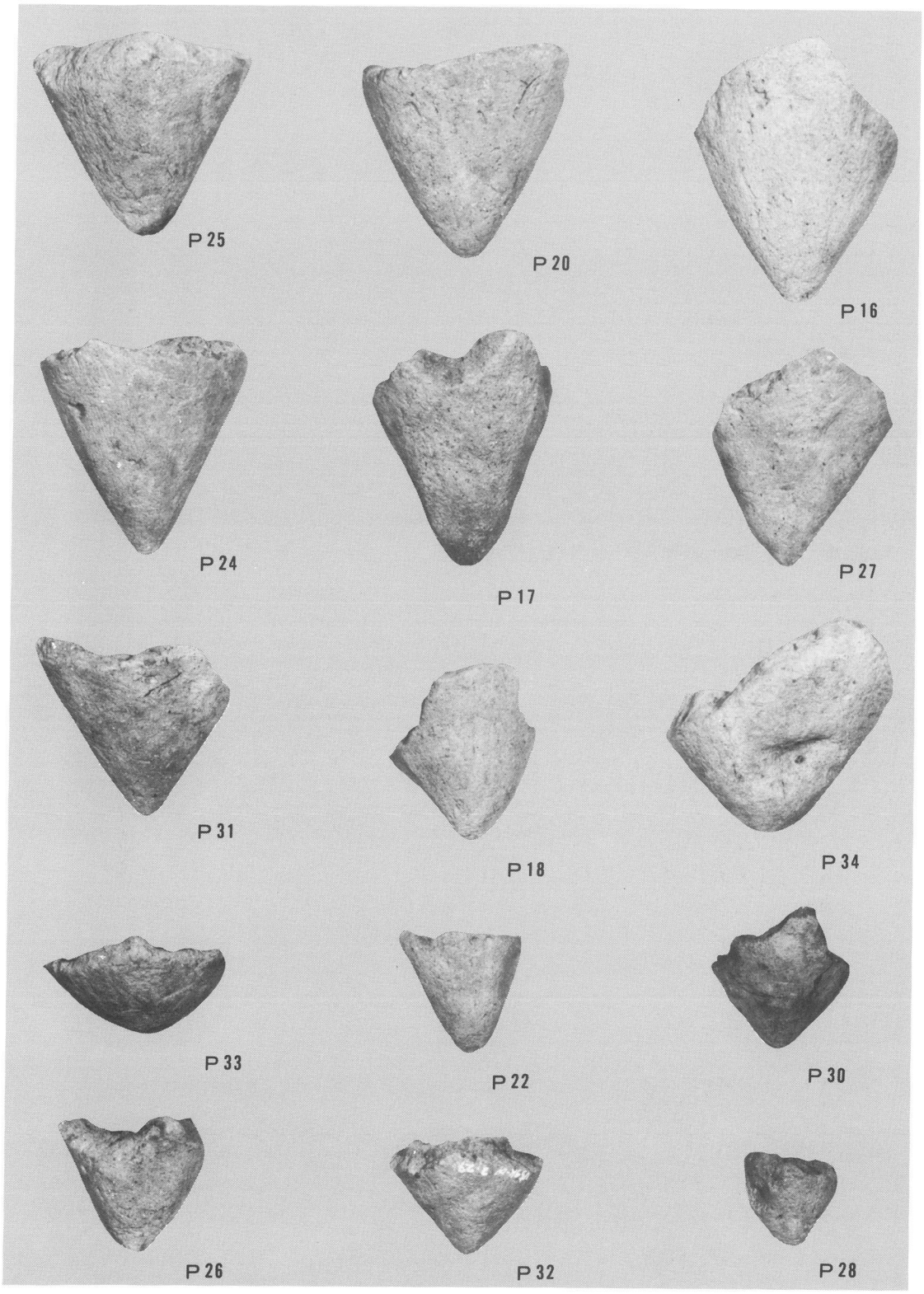
押型文土器(1)　S＝1/1.5


TP 4945
TP 4949
TP 4957
TP 4958
TP 4955
TP 4956
TP 4954
TP 4953
TP 4952
TP 4960
TP 4959
TP 4962
TP 4963
TP 4964
TP 4961
TP 4965

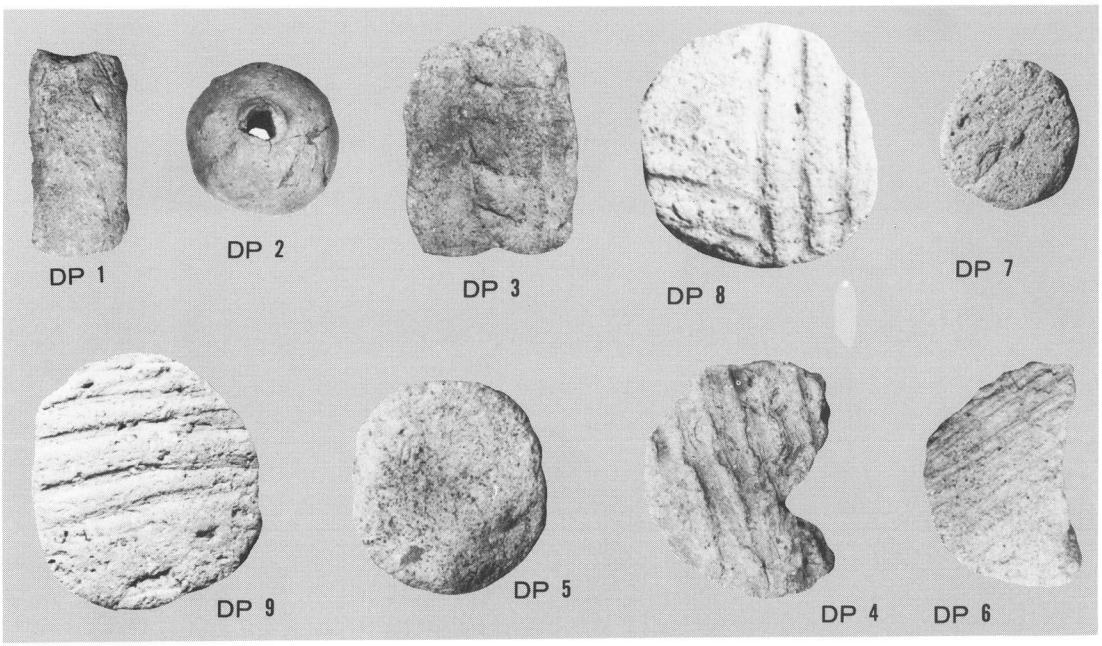
押型文土器(2)　S＝1/1.5


TP 4970
TP 4969
TP 4977
TP 4967
TP 4972
TP 4979
TP 4974
TP 4968
TP 4973
TP 4975
TP 4966
TP 4976
TP 4971
TP 4978

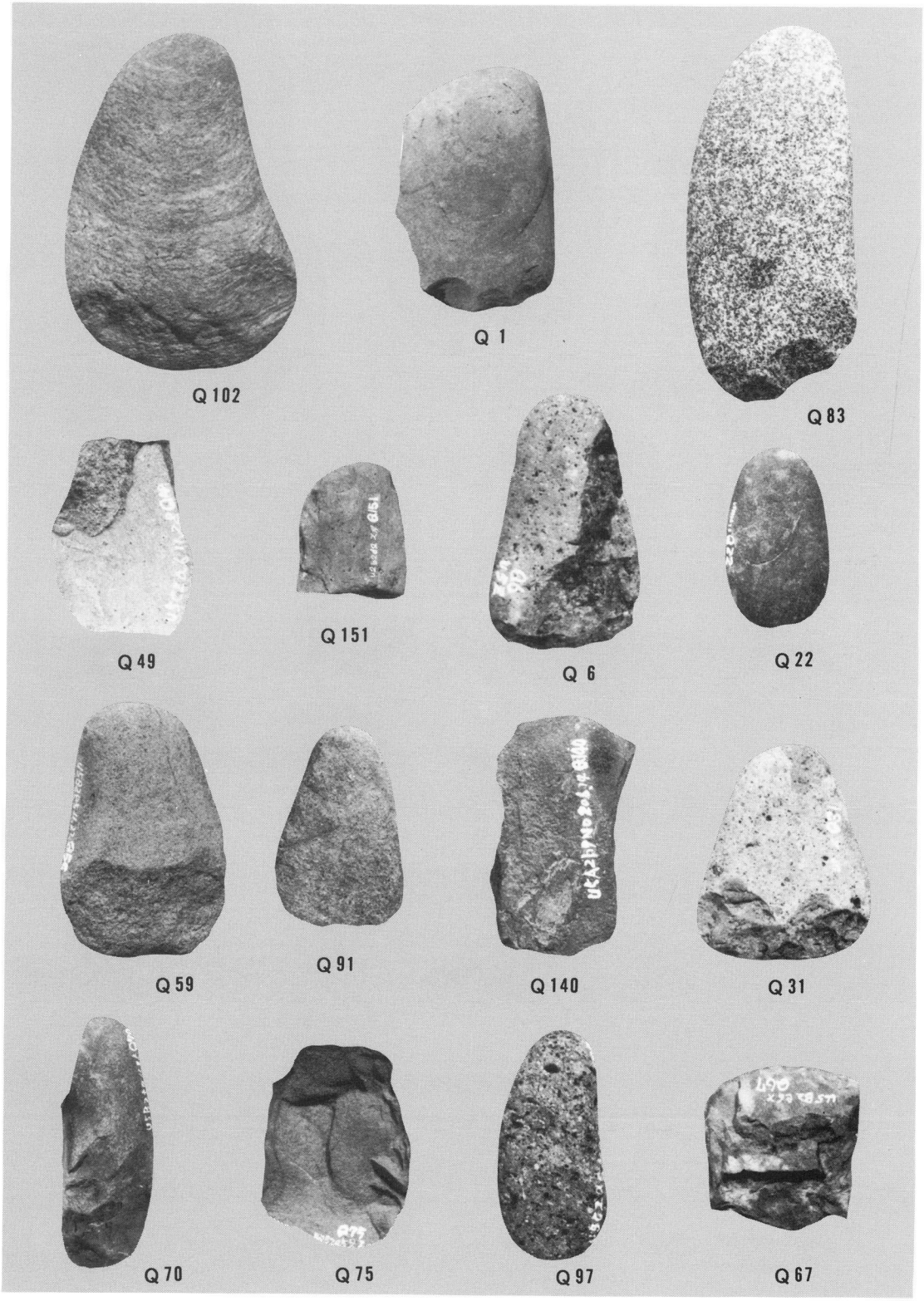
押型文土器(3)　S＝1/1



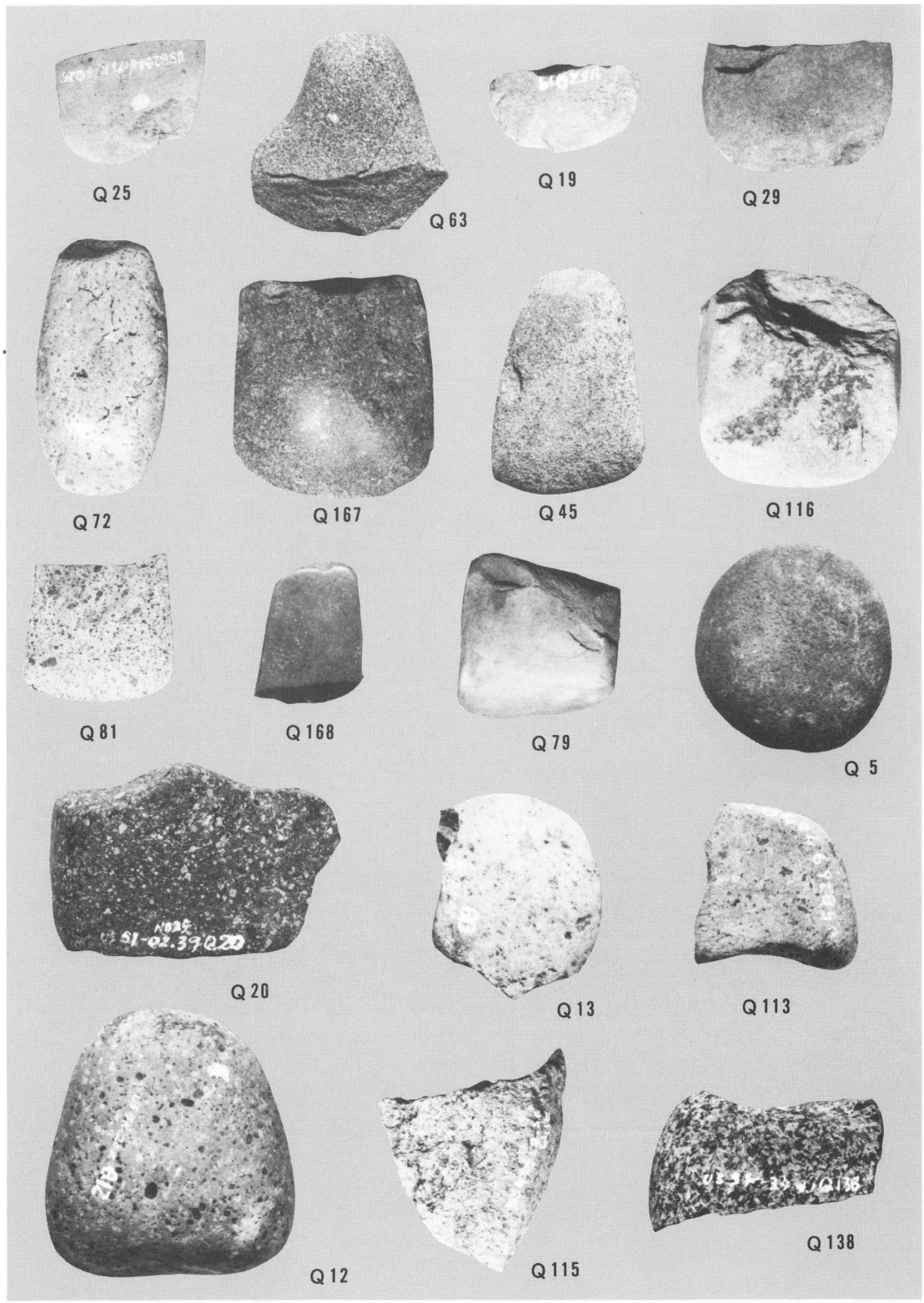
尖底土器　S＝1/2



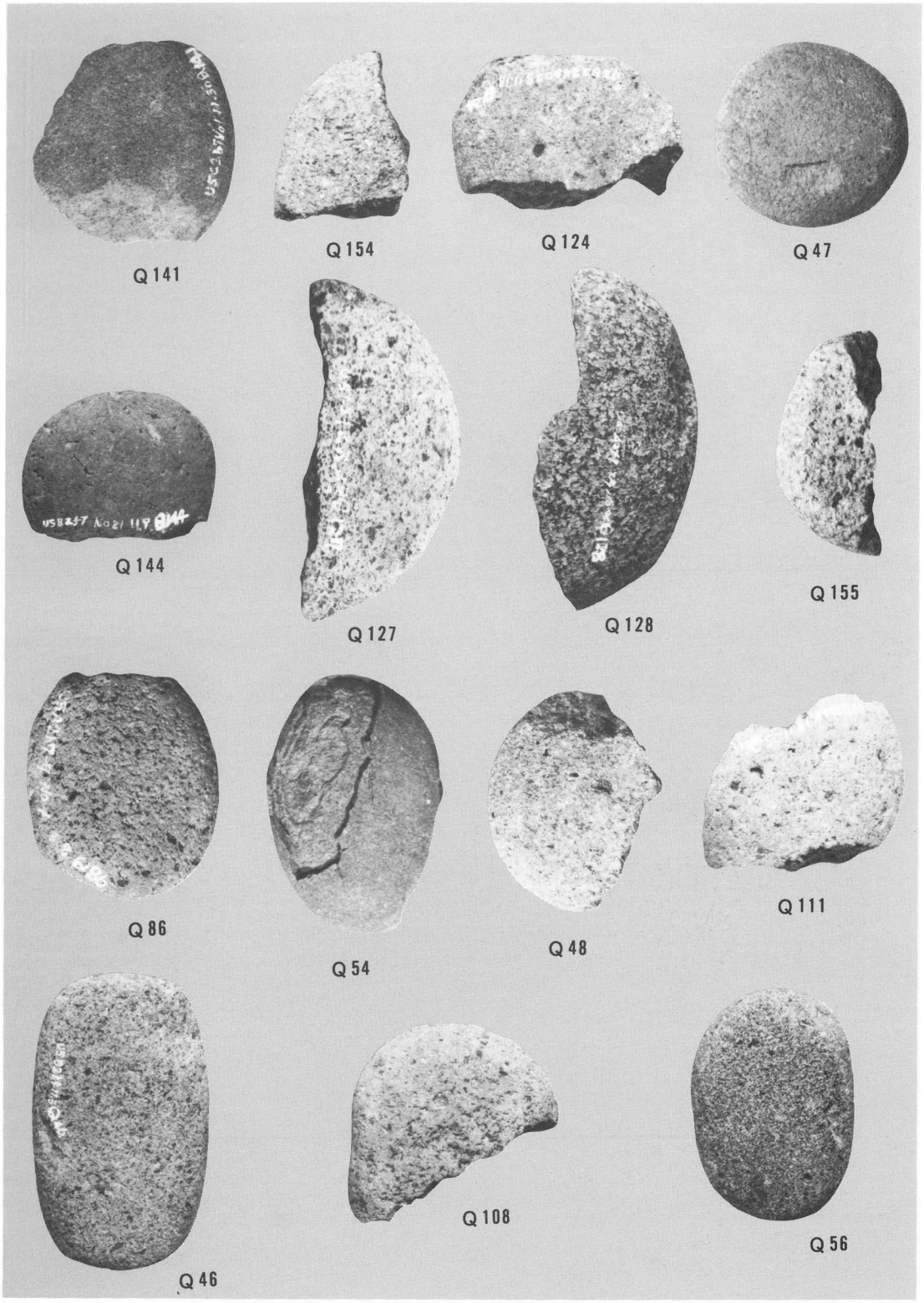
土製品・土器片錘・土製円板　S＝1/1.5



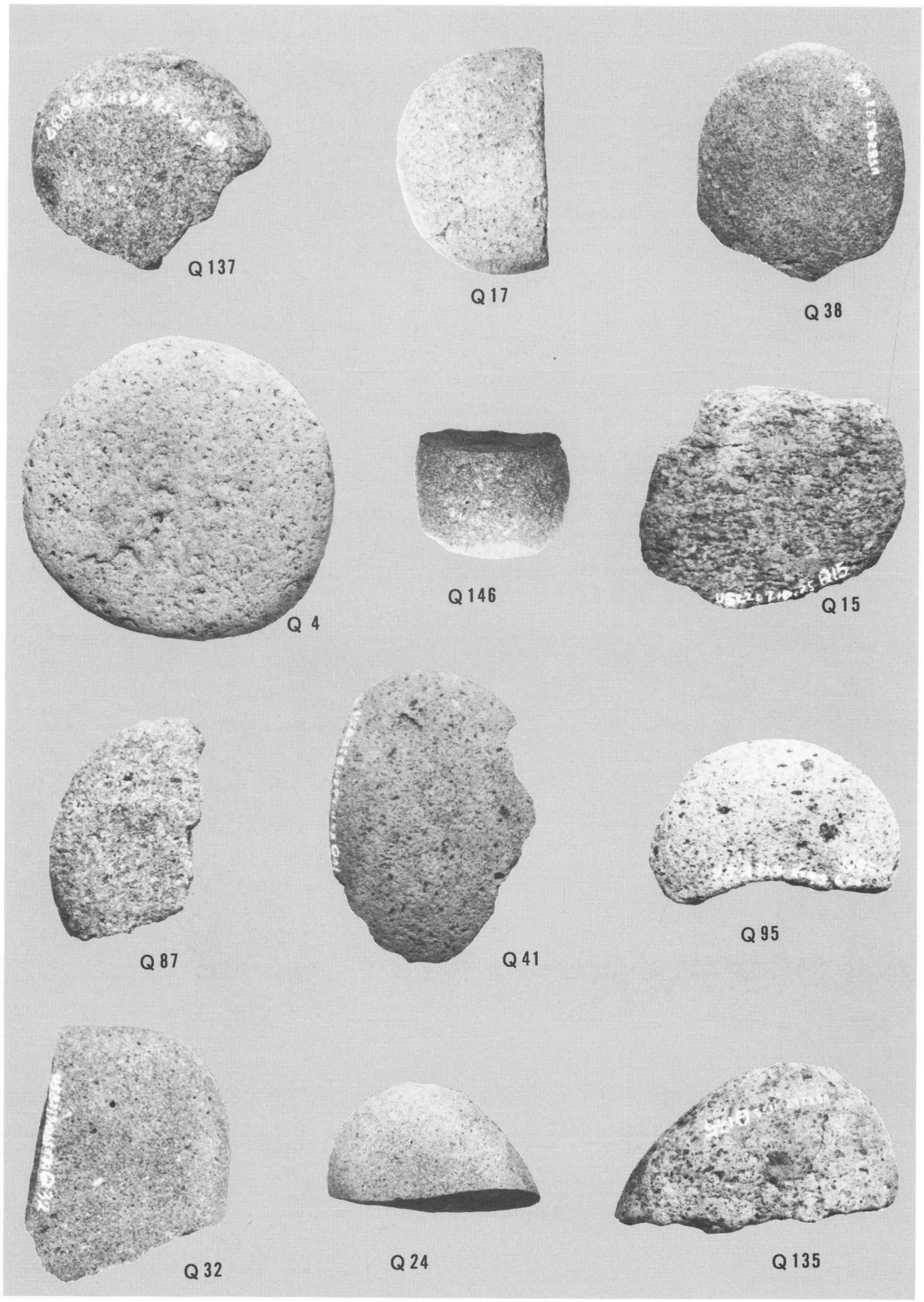
石　器(1)　S＝1/2


Q 25
Q 63
Q 19
Q 29
Q 72
Q 167
Q 45
Q 116
Q 81
Q 168
Q 79
Q 5
Q 20
Q 13
Q 113
Q 12
Q 115
Q 138

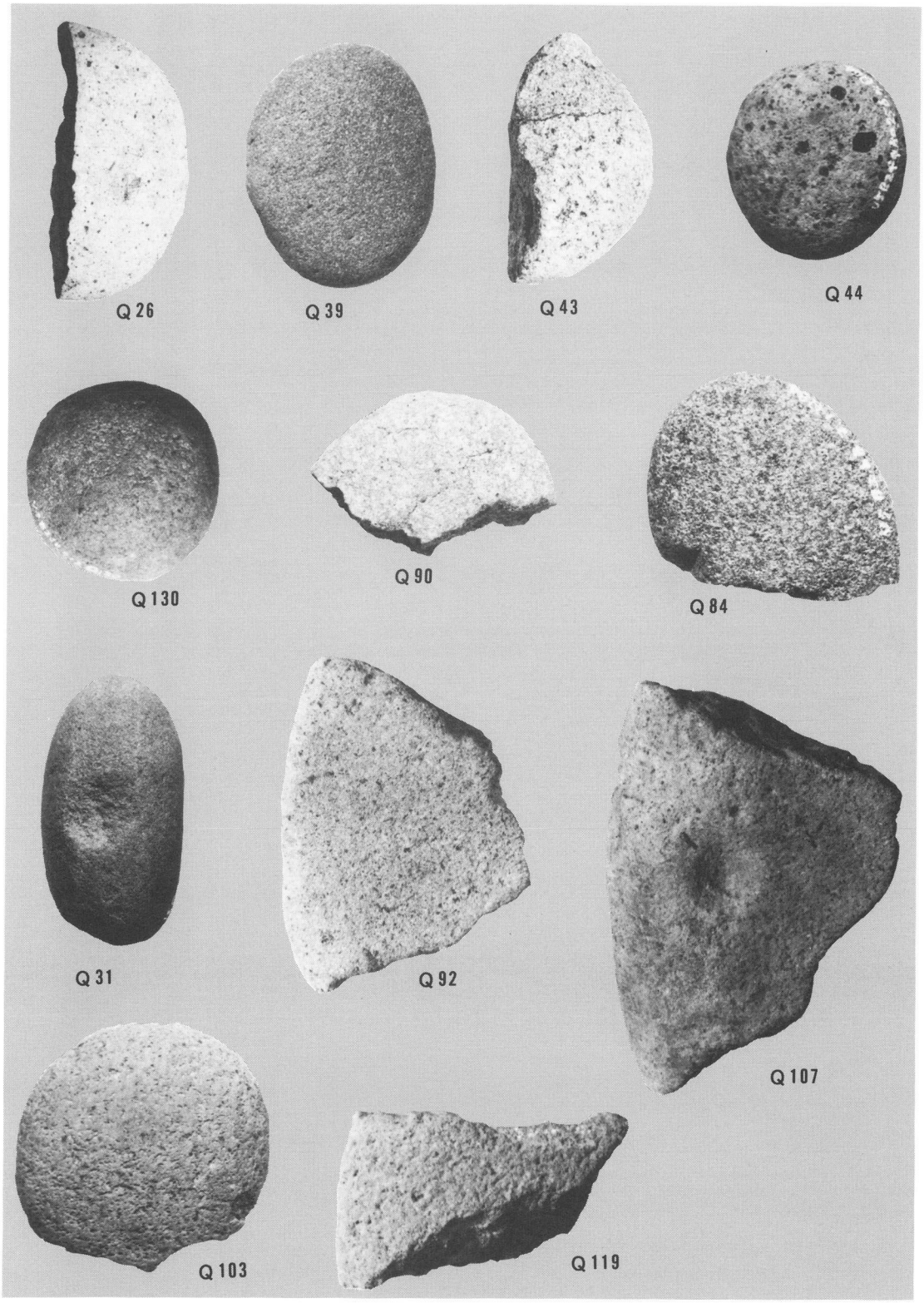
石　器(2)　S＝1/2


Q141
Q154
Q124
Q47
Q144
Q127
Q128
Q155
Q86
Q54
Q48
Q111
Q46
Q108
Q56

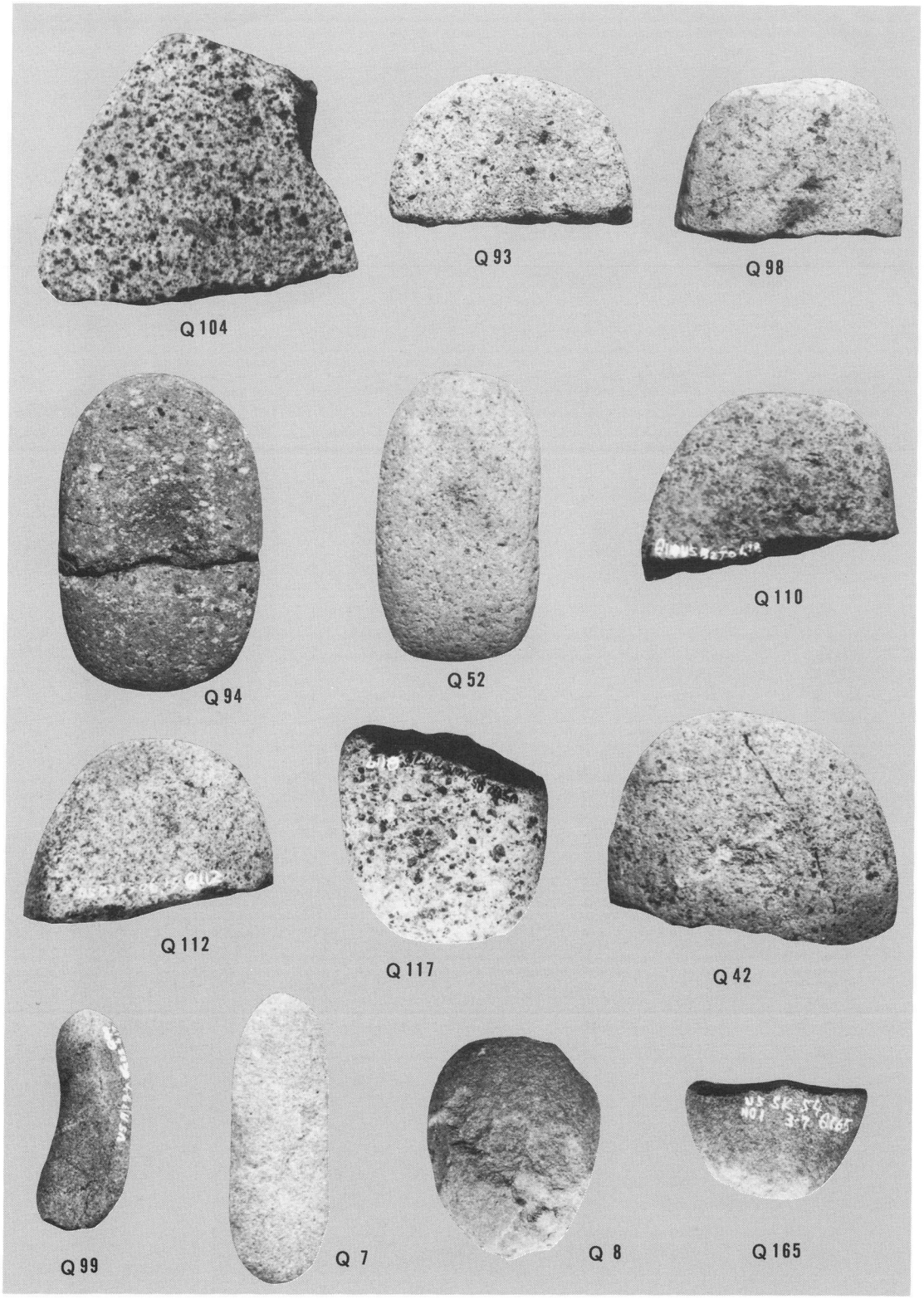
石　器(3)　S＝1/2



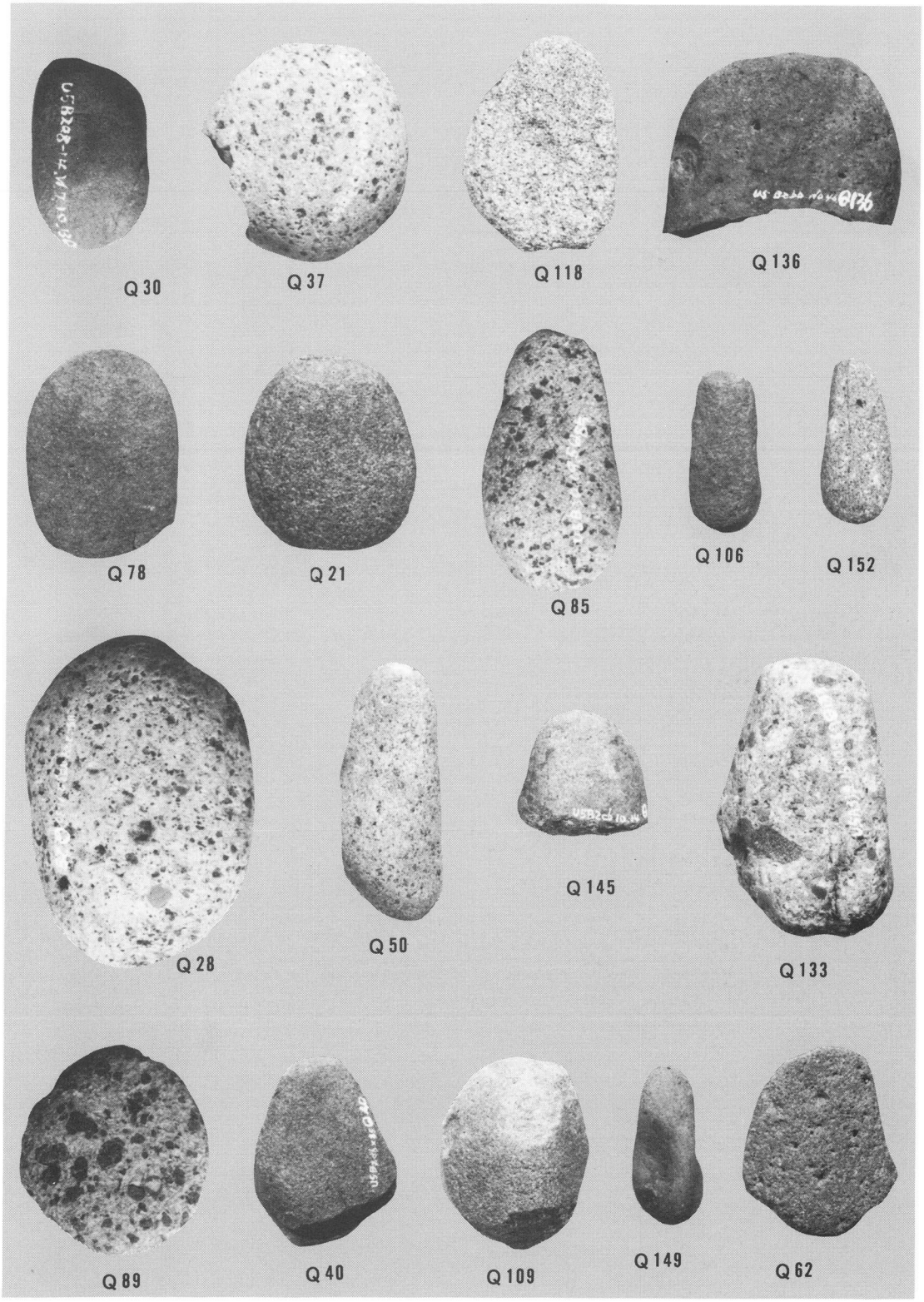
石　器(4)　S＝1/2



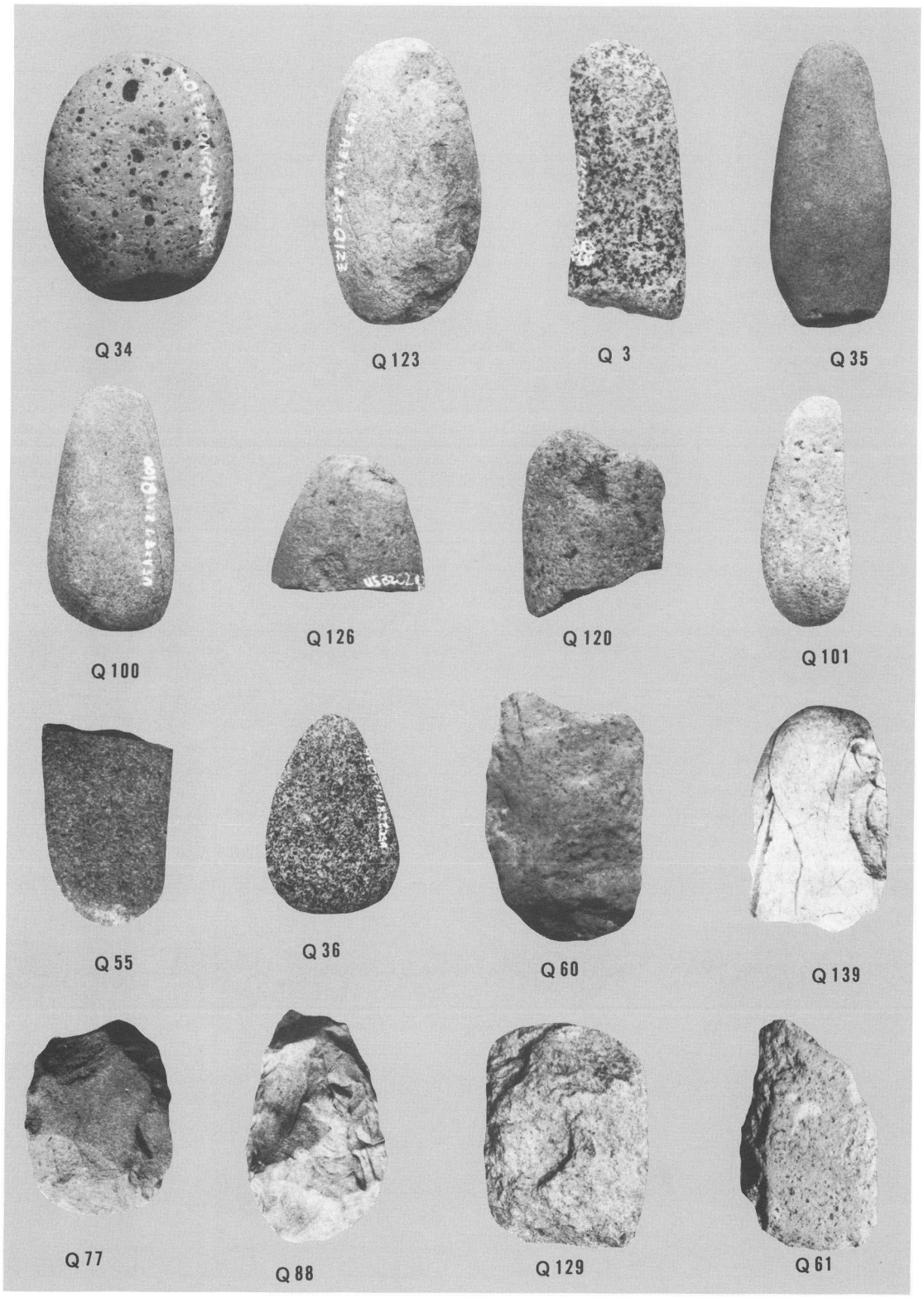
石　器(5)　S＝1/2



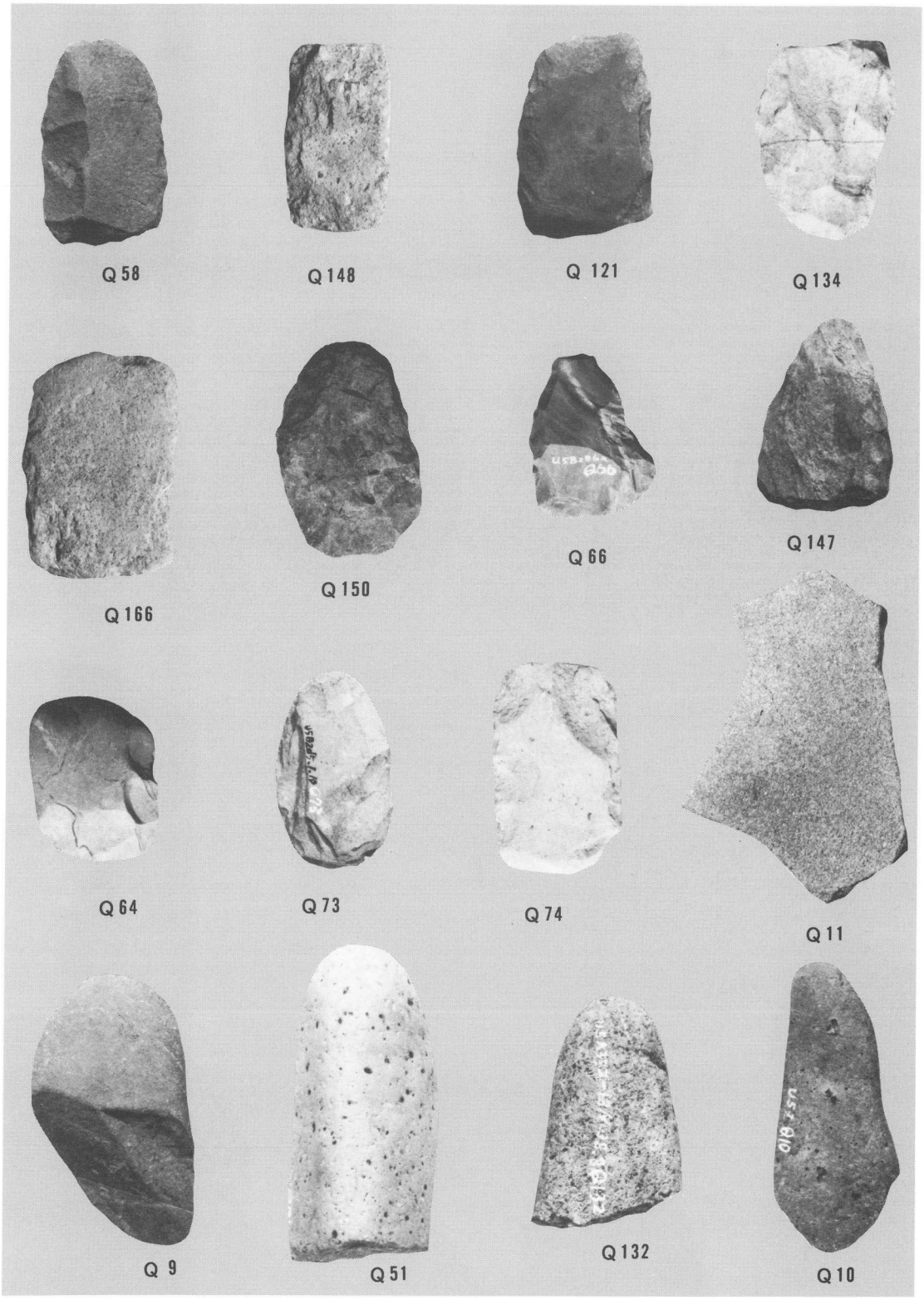
石　器(6)　S＝1/2


Q 30
Q 37
Q 118
Q 136
Q 78
Q 21
Q 85
Q 106
Q 152
Q 28
Q 50
Q 145
Q 133
Q 89
Q 40
Q 109
Q 149
Q 62

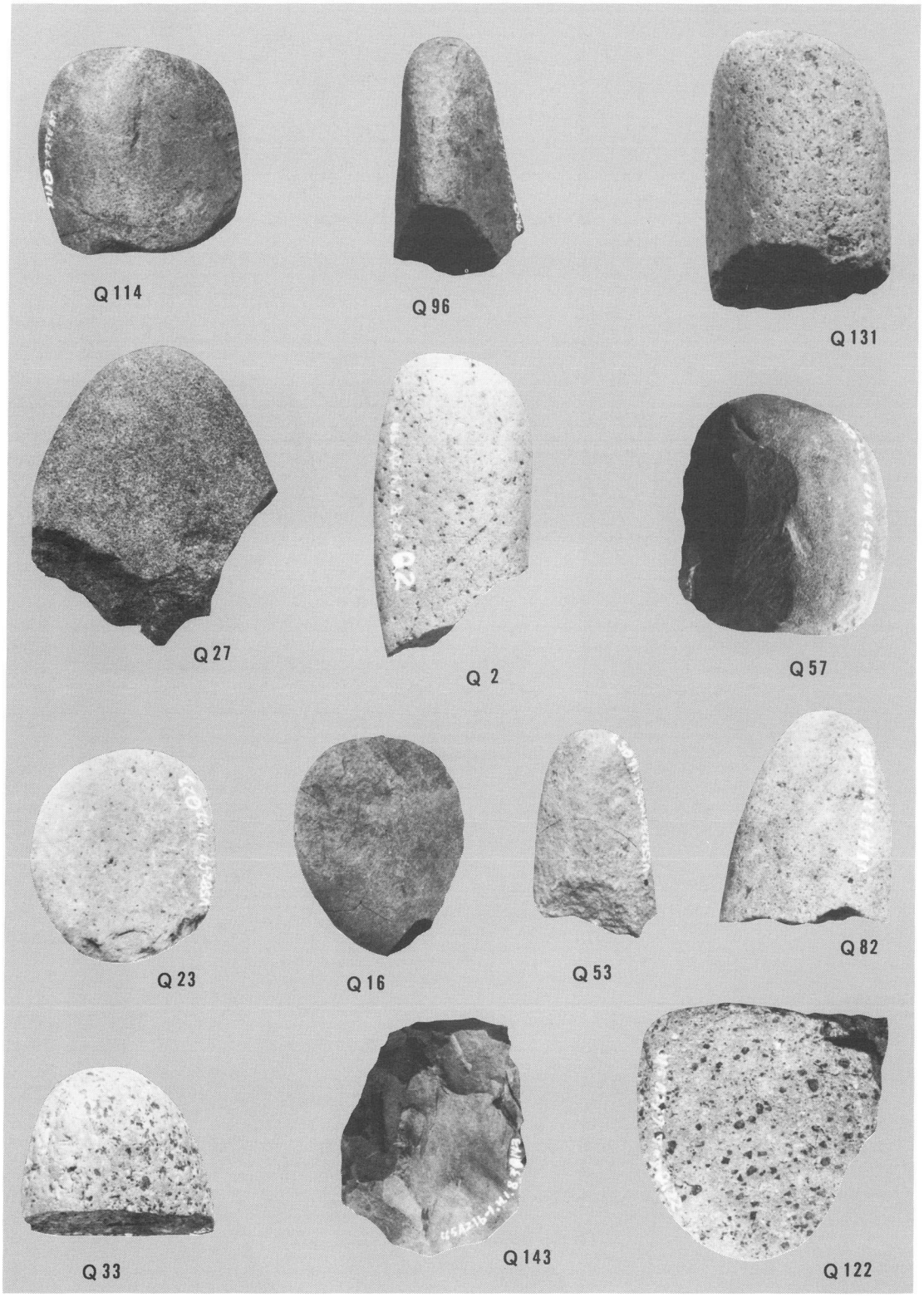
石　器(7)　S＝1/2


Q 34
Q 123
Q 3
Q 35
Q 100
Q 126
Q 120
Q 101
Q 55
Q 36
Q 60
Q 139
Q 77
Q 88
Q 129
Q 61

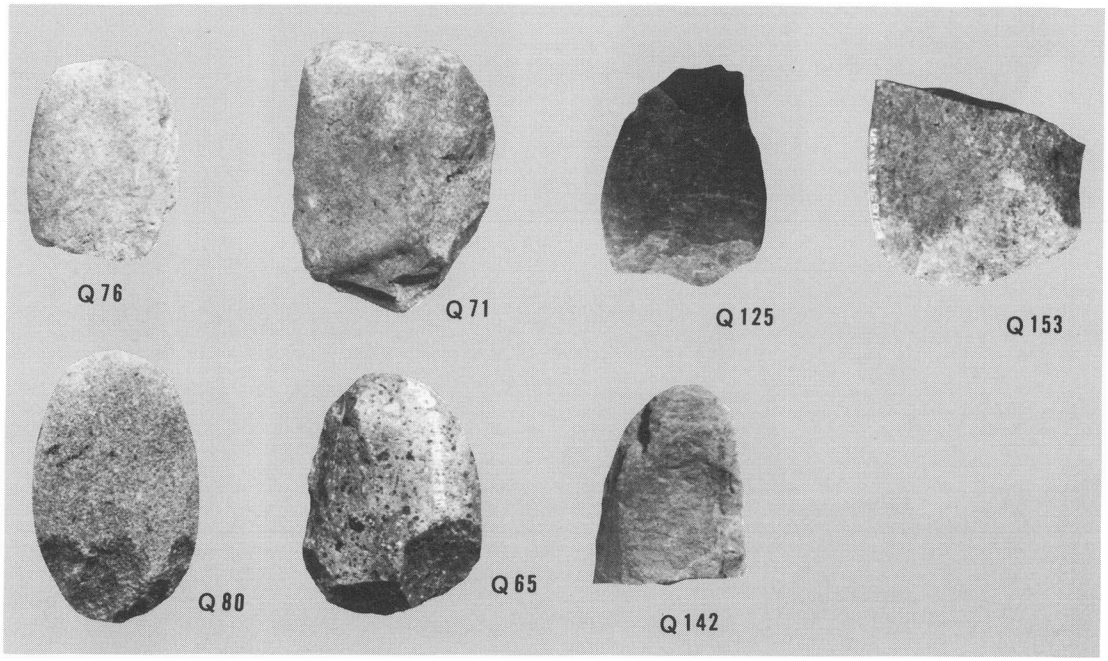
石　器(8)　S＝1/2


Q 58
Q 148
Q 121
Q 134
Q 166
Q 150
Q 66
Q 147
Q 64
Q 73
Q 74
Q 11
Q 9
Q 51
Q 132
Q 10

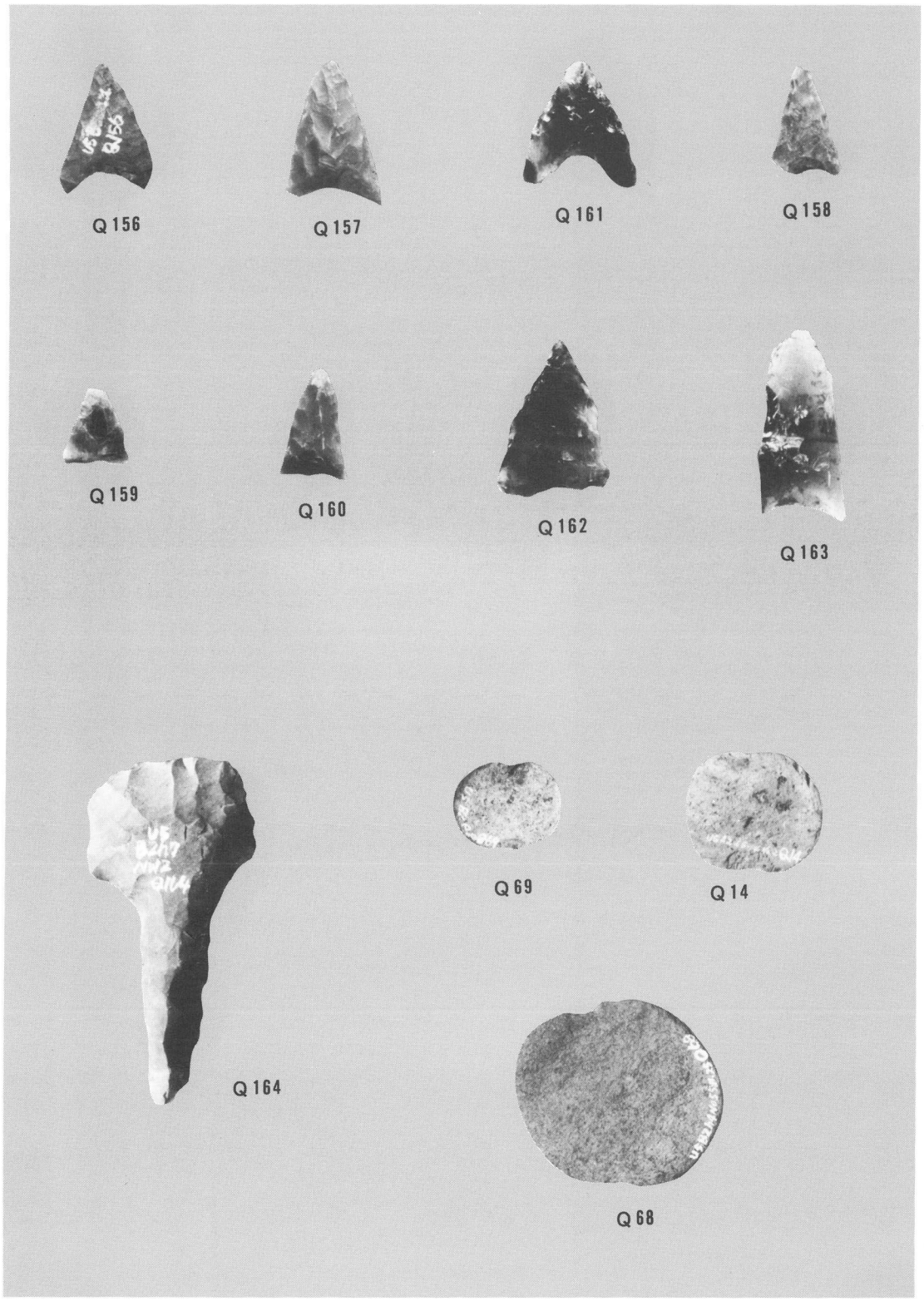
石　器(9)　S＝1/2



石　器(10)　S＝1/2



石　器(11)　S＝1/2



石　器(12)　S＝1/1

茨城県教育財団文化財調査報告第29集

水海道都市計画事業・内守谷土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1

奥山B遺跡
奥山下根遺跡

昭和60年3月25日印刷
昭和60年3月30日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　株式会社　あけぼの印刷社
水戸市松が丘2－6－24